

## 大衆文化と古典文化

ポリャコーヴァ・ヤロスラーヴァ

- 1 . 動機
- 2 . ディスカッション
- 3 . 結論
- 4 . 終わりに

### 動機

最近、よく考え始めたのはロシア社会における大衆文化と古典文化のバランスということである。このテーマはちょっと抽象的かも知れないが、私にとって多くの具体的なものより、興味があるテーマになった。

最初に大衆文化と古典文化という言葉の内容について説明する方がいいだろう。古典文化と言うのは人が全歴史をわたって、心を込めて創造したものである。この文化はよくクラシック文化と呼ばれる。古典文化の作品の中、社会の歴史、道徳、人の考え方のチェンジなどが反映する。言い換えれば、古典文化は前に住んでいた人の文化の全分野における成果もまとめである。それに対して、大衆文化は社会の生活における単純化の傾向の結果として現れた現象である。その傾向によって、教育のある人はもちろん、教育のない人も優しく分かる文化が創られた。大衆文化は前の世代の成果に基づかなくて、お金を稼ぐために作られた一日だけの文化である。

この二つの文化のバランスになぜ興味を持っているかと聞かれたら、すぐ答えられない。理由はもちろん色々あるけれども、すぐ頭に浮かぶのはテレビ番組に聞いた高校生達とのインタビューである。あの高校生は私の世代の人にとってありふれたものについて、例えばロシアの有名な作家の名前、ロシアの歴史的な大人物について何もいえなかったけれども、ブリュース・ウィリスの名前をみんなよく知っていた。あの時に「私の世代がどうだったかな」と考え始めた。

私の世代はソ連時代の1980代に育てたものだ。あの時、ほとんどみんなの趣味は読書だった。小学校の時冒険小説、高等学校にロシアと外国のクラシック小説を読んだりした。母国の歴史も人気のあるものだった。古典、クラシック文化は人の個人的意見を圧倒しなくて、逆に毎回、考えさせている。古典小説の中、作家は自分の意見を直接に言わずに、ストーリーを述べて、読者をストーリーに隠した意味について考えさせられる。従って、読者は知らずのうちに何の問題についても自分の個人的な意見を作るのを習っている。それに限らず、古典文化は新しく現れるものを評価するため基準となる。こういう基準を持った私の世代は1990年代に外国から大衆的文化がロシアに氾濫した時、何が良いか、何が悪いかのをちゃんと分けることが出来た。しかし、現在ロシアの若者は伝統的な文化を知らず、区別することが出来なくて、外国から来たものなら、楽しいものなら、良いだと思ふ。こういう風にクラシックの映画を知らない人は新しい映画を評価できないだろう。風論的に言えば、本当のバターの味が分からない人にとってマーガリンでもおいしいようだ。

それがロシアだけの問題であるか、他の国どうだろうかについて考え始めたとき、よく会社の日本人スタッフと話した。日本でも同じ問題があるだと分かった。あの時からなぜそんな豊富な文化のある国の 15・16 歳若者の世代は自分の国の古典文化に対して興味を持っていないということについてよく考えている。もちろん、新しい大衆文化は伝統文化より楽しくて分かりやすいものだ。言い換えれば、原始的なものである。その文化は良い気晴らしであっても、伝統文化と違って人に個人的な思考力を発展させなくて、集団的思考様式を形成している。だから、今自分、個人的な意見のない人が数多くなっていく。みんなテレビで聞いた事件の評価を繰り返しているだけだ。この状態で世論の操作がやさしくなっていくから、政権は便利な世論を作って、何の行動でも正当化できるようになる。だから、現在の社会における原始的な大衆文化の優先は私に不安感を起こさせている。

私にとって、古典文化は教育の基礎であるはずものだ。その基礎を持たずに人は新しい大衆文化を評価できなくて、意識的に大衆文化の短所をさておいて、長所を楽しむこともできるまい。その基礎なしで、人は自由に考えること、自分の個人的な意見を作ることが出来なくて、偏見のない、心の広い人間になるまい。

### < ディスカッション >

ディスカッションのとき、私の相手は蛇抜先生と中国のテイさんになった。テイさんと蛇抜先生はもう一回ディスカッションしたけれども、テーマは私のテーマと関連があって、私もそのディスカッションに参加した。私の動機を見て、蛇抜先生は文化の問題をさておいて、先ず教育そのものの必要性についてディスカッションを始めた。

**蛇抜先生：**ヤーシャさんにとってなぜ教育が重要だと思いますか？

**私：**教育を受けた人は多くの分野で知識を得て、何の事件についても自分の個人的な意見を作ることが出来るようになります。自由に考える能力も取得します。

**蛇抜先生：**なぜ個人的な意見そんなに重要な物ですか？

**私：**マスコミが人の生活に主な役割を果たしている現在、人はラジオ・テレビから流れているある事件に対しての公式的な見方を何回も聞いて、それを自分の物としています。自分で事件の意味について普通考えなくて、客観的な意見を作るまい。教育のある人だけ、事件の本当の理由が分かって、結果を予測して、事件を客観的に見る事が出来るでしょう。

**蛇抜先生：**それはなぜ必要ですか？

**私：**マスコミの圧倒的な影響を利用して、政府は人気のない決議を採択するように人の望ましい意見を創造できるでしょう。その決議の本当の意味がわからない

人は反対運動を起こさないでしょう。結果として、政権を掌握している人は人民の意見を構わず何の決議でも採択できるようになるでしょう。

**蛇抜先生**：でも人の個人的な生活、例えばヤーシャさんの生活との何かの関連はありますか？

**私**：必ずあると思います。例を挙げれば、一番分かりやすいものはロシアのチェチェン共和国に今でも続いている戦争であると思います。一方で、10年間ぐらいチェチェンのテロリストは全国にマフィアとしてさまざまな犯罪をしたり、チェチェン共和国との隣の町に侵入したりしたので、戦争はもう不可避的なものであったでしょう。他方、戦争の結果について言えば、多くの人々が犠牲になったテロ事件、罪のない一般のチェチェンの人に対して憎しみ、難民の問題、全国家の危ない状態などが発生しました。従って皆は今幸せに生きることができません。もし人民が10年以上前チェチェン共和国に出てきた危ないテロ傾向に注意して、政府を適切な対策を講じさせられたら、今はこういう問題がなかったかも知れません。それで、個人的な意見を作って、危ない傾向を見たら、みんなに知らせ、周りの人々を考えさせて見るのが重要だとも思います。そうすれば、人の生活は今よりもっと幸せに生きられるかも知れない。

あの時私はもう一度マスコミが最近発展したことのプラスとマイナスについて考えた。一方では、マスコミがなかったら、一般の人はインフォメーションをもらえなかっただろう。毎日のニュース情報なしで人が生活を想像できなくなった現在、マスコミは日常生活に重要な役割を果たしている。他方から見ると、人は客観的なインフォメーションそのものだけでなく、インフォメーションとともにある見方が押し付けられている。そのインフォメーションの流れから客観的な事実を取り出して、自分の見方を作るためには教育が欠かせない意義をもっていると思う。教育と幸せの生活とも関連があると思うので、テイさんのテーマについての話を入れることにした。

**蛇抜先生**：ヤーシャさんは良い教育と幸せの生活との間に関連があるという予想についてどう思いますか？両親は子供に幸せの生活を望んだら、どうするほうがいいですか？

**私**：こういう関連が間違いなくあると思います。子供の幸せのこと考えれば、できるだけ子供を良い学校、良い大学におくる意味があると思います。良い教育を受けた人に生活に出世するチャンスが教育のない人より多く与えるからです。

**蛇抜先生**：出世するのは幸せですか？

**私**：出世した人の生活水準は高くなるから、豊かに暮らせるから、幸せだと思います。

**蛇抜先生**：テイさんはどう？

**テイさん**：私にとって幸せというのは先ず健康、そのあとももちろん豊かである。豊かがあっても、健康を保っていなかった人は幸せに暮らすことが出来ないでしょう。

**蛇抜先生**：前の話に戻れば、どこの教育方がいいですか？有名な大学とか普通の大学とか？

**私**：有名な大学のほうがいいと思います。就職するとき、有名な大学を卒業した人はいい仕事をもらうチャンスが多いだと思います。例を挙げれば、私は9月に退社することにしてから、マネージャは新しい人を探し始めた時、履歴をもらって先ず見たところが大学の名前でした。有名な大学の卒業者に対して興味が直ぐ起こったからです。この人は最初に面接に招待されました。ですから、いい大学を卒業して、出世して、豊かに幸せに暮らせるチャンスが多く与えると思います。

教育のレベルと幸せの生活が前の話のテーマになった。この二つのものに関連があるか、ないか、誰も確かにいえないけれども、とにかく一流の大学の教育とともに更なる生活に出世するチャンスをもたらしたいと思います。うちの両親も私の将来を考えて、ロシアの一番良い大学に私をおくった。私も未来に子供がいたら、できれば良い大学に入学して欲しい。

そのあと蛇抜先生は私の動機を読んで、質問した。

**蛇抜先生**：ヤーシャさんは一番言いたいのは大衆文化の現在の優先は不安感を起こすことであるでしょう。その優先はなぜ不安感が起こりましたか？

**私**：そうですね、その不安感について説明する方がいいでしょう。前に言った通りに大衆文化というのは気晴らしの文化であります。従って、こういう文化の小説、映画が簡単過ぎて、人を考えさせないです。考える必要がなくなる結果、人が思想能力を失うようになってきます。

**蛇抜先生**：ヤーシャさんにとって、簡単すぎる小説、映画というのは何の意味ですか？

**私**：具体的な例知して新しいアクション映画を挙げられるでしょう。この映画をみんなが知っていて、どこの国でも見せるものであって、本当に国際大衆的な文化の欠かせない部分になりました。でもこの映画を見るとき、人は強力な宣伝を見ていると思わないでしょう。けれども、それは実際に宣伝である。この映画では良い主人公がいる反面、必ず敵の姿も出ています。10年前、その敵の役をソ連が果たしていました。現在ソ連の変わりに色んなイスラム教の国は敵の役を演じます。

**蛇抜先生**：それはヤーシャさんの生活とは何の関連がありますか？

**私**：その映画は国際的なものであって、映画の中にある宣伝が国のイメージをつくってしまう。私はロシア人であって、外国に行く時、こういう映画から来ました「変なロシア人」のイメージとよく直面しています。人は古典文化にもっと注意を払ったら、もしロシアについてKGBのことだけでなく、ロシアの豊富な長い歴史のある文化についても知識をえました。結果として、アクション映画から来たイメージは人に植え付けなくなってから、いろんな国からの人々との間の疑念感も消えるでしょう。

その話の時もう一度古典的文化に基づいた教育の意義を強調したかった。こういう教育のある人だけ、大衆文化を気晴らしとして扱って、実際の知識を基礎として、自分の価値観と自分の個人的な見方を作られると思う。だから、私にとって、クラシック教育がそんなに欠かせない意義をもっている。

### 結論

結論として何を言うほうがいいだろうかと思っていた。私のテーマはちょっと論理的だったので、上記に述べたものを簡潔に書くしかないだろう。一番大切なのは一人一人が思考力をつけて、判断できるような力をつけることであると思っている。その思考力を発展させるため、私の考えで一番良い方法は古典の小説の作品を読むことを通じて、古典文化を習うと言うことである。古典文化は人々が長い間築いてきた営みが現れているからだ。古典小説には、個人の意見を押し付けず、まず読者に、登場人物の気持ちやおかれた状況などを推測させたりして、そのストーリーに隠された意味を考えさせる。だから、古典文化は教育の基礎になるべきだと思う。

しかし、今の現状は、このような小説に替わり、安易なつくりの映画やテレビの情報が優勢である。その結果、メディアや情報を鵜呑みに信じる人や集団的思考様式に陥り、個人の思考が、さまざまな戦略に操作されやすくなっている。

これは、とても危険なことだと思う。

### 終りに

終りに言いたいことがあまりない。とにかく、三ヶ月にわたって、「物語」グループの皆さんと一緒に勉強するチャンスが与えて、嬉しい。私が間違った時、困ったとき、皆さんはいつも優しく、助言を言ってくれて、どうもありがとうございます。今度もどうぞ宜しくお願い致します。

## 私と薬物

ウィツケ・アレクサンダ

- 1 . 理由
- 2 . ディスカッション
- 3 . 結論

### 1 . 理由

人間は精神状態を変えるとか嬉しくなるためにいろいろなタイプの薬物を使っています。その幸せな状態になるため、私にとって音楽は薬物見たいな物です。それで私は好きな音楽を聞くととても気持ちがよくて、とても嬉しいです。音楽は私のために「もう一つの世界」をに入るにドアを開けます。

この「もう一つの世界」に入ったらすごくいい気持ちになります。だから私にとって音楽は心のマッサージみたいなものです。

現実の世界にはいつも問題や限定があるけれどもこの「もう一つの世界」ではその限定がありません。例えば「もう一つの世界」では飛ぶことが出来るし、限定がないし、できない事もあります。

日本に来たときに荷物を出す前にすぐに音楽をかけました。私は好きな場所にいたり、大好きな音楽を聞いたりしている時に故里にいるような気持ちになります。それは気持ちだけではなくて、どこにいてもその場所がその時に私の故里になります。音楽のない生活は全然想像出来ません。音楽は私に同時にくつろぎと力をくれて、時々それはこの現実の世界で私にとって大きい助力です。

音楽は私の家族にとっていつも大切な事でした。それで赤ちゃんの時から両親は私に度々西欧とアジアのクラシックな音楽を聞かせてくれました。子供の時によく音楽を聞いたのは私の自分の性格に強く影響を与えました。もちろんそれを証明することができませんけれどもそうだと思います。ですから将来に自分の子供が出来たら、私も子供に音楽をよく聞かせてあげたいです。子供に音楽を早くから聞かせてあげるのはとてもいいと思います。

音楽は新しい友達と出会うのにも、大きな役割だと思います。音楽は私の重要な一部です。他の人々にとってもそれは同じだと思います。同じ音楽が好きな人々とは共感することが多くて、すぐに話があり、新しい友人となる事がやさしくなります。

「目は人間に世界を見せるけれども音は人間の中に入ってくるので耳は世界を人間の中に運んできます」。誰がこの事を言ったか知らないけれどもその通りだと思います。目は人間にすてきな景色と色を見せる。もちろんそれはすばらしい事ですけれども耳は私にとってより重要です。日本人にとっての蝉の鳴き声のようなものだと思います。

蝉の鳴き声を聞いた時の日本人にとって印象は大変深いらしいです。私の国で人々にとってそんなに大切な音あまりないと思います。だからドイツ人と日本人を比べると日本人にとって耳の重要性はより大きいかなと思います。この質問に答えるのはとても難しいでしょうけれどもたくさん日本人が音楽に大きい興味を持っているのを知りました。

日本人と蝉の鳴き声との関係は私にとっての鳥の鳴き声や音楽というものを通して、理解することができると思います。東京の道路を散歩した時の交通の騒音も私にとっては音楽の一種です。たぶんそれはモダンな美術と同じです。昔クラジックな音楽と美術は人間の楽しみのためにだけ作っていったけれども現在の音楽は現在の美術はそれ以外の機能を持っています：

現在の音楽と美術は人間に考えさせるために作られています。東京の道路を散歩するとドイツと比べて違う音が聞こえます。例えば屋台の音とか救急車のサイレンの音はぜんぜん違います。だから私にとって東京の道路の音も音楽の一種で、面白いと思います。盲目の人々と耳の聞こえない人々を比べると盲目の人々の方が外界と接触するのはよりやさしいと思います。もちろん盲目も大変な状態ですけども耳の聞こえない人々の疎外感をもっと強いと思います。耳の聞こえない人々と意思の疎通をするのは難しいので耳の聞こえない状態が一番大変な状態だと思います。

しかし現在の世界では耳の重要性が忘れられていると思います。昔、五感はすべて同じ重要性を持っていたけれど現在では情報を受け入れるために人間はほとんど目だけを使っています。理由はたくさんあると思います。テレビだけではなくて、科学も情報を受け入れるためにほとんど目だけを使っているのもこれも理由の一つだと思います。その耳の持つ役割の変化は残念ながら、人間の性格と能力を変えていると思います。そう言った意味でも私にとって耳は重要な感覚であり、音楽は私にとってすばらしい友達です。

## 2. ディスカッション

ディスカッションをした時二人ディスカッションのパートナーがいました。

最初アルペルというトルコ人と様々な音楽について話しました。

アレクス：アルペルにとっても音楽は大切なものですか。

アルペル：はい、私にとっても音楽は重要なことです。だからアレクスの考えをよくわかります。

アレクス：どんな音楽がアルペルは好きですか。

アルペル：実はそれは状況によって。暇な時は早い音楽が好き。そういう時いろいろなトルコのロックのバンドを聞くのが好きだけど、最近は私はなんか忙しいから、アルバイト後で今はゆっくりな音楽をよく聞いています。その時ジャズとかピアノの音楽が大好き。

アレクス：それは私と同じだと思います。忙しかったら日は帰った後に時々本当に二時間以上音楽を聞かなければなりません。だから時々次の朝私はすごくねむくて、あまり起きられないけどしょうがない！私にとってそのくつろぐための時間は本当に必要だ。

アルベル：その時アレクスはどんな音楽が好きですか。

アレクス：それは本当に気分によってだと思います。時々「ジャングル」とか「ドラムンベース」という音楽を聞いています。その音楽はすごく早いけど大好きだから自分の気分は早くよくなります。

アルベル：アレクスは他の音楽も好きですか。

アレクス：はい、もちろん。クラブに行けばその先程いった音楽が大好きですけどヒップポップとかポップという音楽はあまり好きじゃない。それに歌っている言葉もいつも同じだし、その音楽はつまらないと思います。しかし一人で座って、本を読む時とか友達と話す時は他の音楽も好き。その時はジャズからクラシックまでいろいろな音楽が好き。アルベルもクラシック音楽が好きですか。

アルベル：ええ、大好き。

アレクス：一番好きな作曲家がありますか。

アルベル：これとっていないけど例えばモーツァルトとかベートーベンが好き。

アレクス：ベートーベンが私の古里で生まれたことを知っていますか。

アルベル：そうだね。ボンで生まれましたね。アレクスはどうですか。一番好きな作曲家がいますか。

アレクス：一番好きな作曲家じゃないけど好きな作曲家は例えばドボルザークとかマーラーとかショパンが大好き。CDをあまり持って来られなかったから今はなんか悲しい。

アルベルは私と比べると大体同じ意見をもっているからアルベルとディスカッションをするのは本当に面白いけれども議論の余地があまりありませんでした。もちろん私たちの音楽の味を比べると違いがあるけれども私達と音楽の関係は大体同じです。

私にとって音楽は大切なことから多分音楽について大体同じ意見があるのはアルベルと私はディスカッションのパートナーだけではなくて、本当の友達になったの一つの理由だと思います。

二人目のディスカッションのパートナーは橋本弘美という人です。

初め我々の感覚を分けることについての意見は違いました。さき程私が書いたことは見ることと聞くことを比べると聞くことは私にとって一番重要な感覚です。橋本さんは自分の感覚を分けることが出来ないと言っていました。橋本さんは経験するために同時に全部の感覚を使っているので自分の感覚をあまり分けられないと言っていました。だから橋本さんにとって感覚はすべて同じ重要性を持っていると言います。



私はその考えもよく分かります。もちろん経験するために私も毎日毎日全部の感覚を使っていますけれども理論的にそのテーマについて話せば私は感覚の重要性を分けることが出来ます。

ディスカッションが進んだ時に私の作文の最後の部分の意味について話しました。はじめ橋本さんはその「音楽は私にとってすばらしい友達です」のメタファをあまり分からなかったとっていました。だからそのメタファを説明したかったけれども私は日本語がまだあまり話せないからそのメタファを説明しながらいっしょに絵を描きました。

ディスカッションの最後面白い絵ができていて、その絵はそのメタファをよく説明していると思います。その絵には三角があります。三角の三つの角に言葉が書いてあります：音楽と無意識とくつろぎ。その絵の意味は：音楽を聞けば意識が消えているの気持ちになります。だから音楽を聞くとすごいくつろぎの状態になります。私はその音楽の意味は私にとっていい友達と会うと同じことです。

私はいい友達と会った時にはそういうくつろぎの気持ちになります。だから私にとって音楽の効果と友達と会うことの効果はほとんど同じです。そう説明すると橋本さんは私の考えと先程書いたメタファをよりよく分かったと思います。

この第二ディスカッションを第一ディスカッションと比べると第二ディスカッションは議論の余地よりがありました。だからこのディスカッションの間私の音楽について意見よく考えなければなりませんでした。

まだ私の音楽について意見はまだ大体同じのに橋本さんは私に自分の意見に付いて考えさせたのはよくて、面白いと思います。だから橋本さん、アルペルさんありがとうございます。

### 3 . 結論 :

たぶん音楽が好きではない人々はあまりいません。音楽は感覚の問題から音楽は私にとって他の人々と比べてより大切かどうかは今分かりません。しかしディスカッションをして、他の人々の音楽についての意見を知ることができたから今は様々な事をよりよく分かります：誰にでも音楽は影響を与えるから音楽は人間にとって素晴らしい贈り物です。この音楽を作ることが出来るということは人間の才能の一つでしょう。

多分私にとってではだけでなくみんなにとって音楽は同時にくつろぎと力をもらって、時々それはこの現在の世界でみんなにとって大きい助力です。

# 私と日本に留学した事について

スザンネ グルンドマン

1. 動機
2. ディスカッション
3. 結論
4. 終わりに

## 1. 動機

私は15歳の時に一年間日本に留学した事があります。その時、滋賀県の甲賀という町にホームステイして普通の高校に行って日本の事を大好きになりました。

今回私は希望通りに東京に住んで大学に行く事になりました。

やはり日本の田舎の方に住んでいた時に出来た経験は、東京でする経験と違っているところがあるので、私はそれをよく比べて田舎の方がいいと考えてしまう時があります。けれども東京に住んでいると新しい経験が出来るので、それはとてもいい事だと思います。

しかし私は今の生活にまだそんなに慣れていないので、今の生活は5年前の生活と比べると何が違うか、それが私が今一番考えている事です。だからこのテーマについて書いて見ようと思っています。

初めて日本に留学した時、日本語が話せなかったのに最初から日本の社会に入れる気持ちがありました。日本料理を食べさせてくれて、毎日放課後部活をやって、朝から夜まで日本語だけで話して、私は日本人と同じように生活しました。

日本の社会に加わっていた気持ちで、毎日新しい経験をしながらもうちょっと深い所まで理解できたので、私は日本にいる事が大好きになりました。日本に一年間いる間にやはりつらい事もありましたが、それも勉強になりますから、とてもいい経験だと思います。一番つらくなったのは、ホストファミリーと私が文化の違いでお互いに誤解した事だと思います。誤解をすぐ解く事が出来ず、何回も説明してあげても分かってくれなかった時もよくありました。例えば、ある日私の友人がコンサートを開いた時、私も見に行きたかった、お母さんの許可を得て、私は楽しんで見に行きました。22時に帰ると約束したから、

22時に帰ろうとしたけれども、道に迷った結果、遅れてしまいました。遅れそうになった時、私はお母さんに連絡しました。それは22時になる前だったので、あまり心配する事はないと思っていましたが、お母さんもお父さんも後で私の事を怒りました。その時私は日本語がまだあまり上手じゃなかったので、私の説明は分かりにくいかなと思って、もっとゆっくりと短い文で説明しようと思いました。その結果、ホストファミリーがもっと怒りました。私の失敗が何だったか、分かるようになったのは、3ヶ月後でした。このころ、他の留学生が会議の時間に遅れたことがありました。その時、他の日本人は彼に対してとても怒りました。私はなぜ、皆がそんなに怒るのか、よく分かりませんでした。それで、日本人の友達がその理由を私に説明してくれた。その時、私はホストファミリーの話も分かってきました。私は失敗した時、もちろんごめんなさいを言いましたが、いつも失敗した理由も言ってしまいました。だからお母さんは、私のごめんなさいと口では言うけれども、本当に心から反省していないと思ってとても怒りました。

先に言った通り、誤解が起こっても、私は甲賀で毎日の生活を楽しんでいた事は認めます。ホストファミリーと一緒に一日中いると、文化の違いを感じる事が沢山ありました。だから、その違いをお互いに理解し合おうとして、文化の壁を超えて身近な存在になる事ができました。だからこそ日本の中に入っているという感じを受けました。でも今は、ずっと一緒にいる日本人がいないので、文化の違いを感じるほどの仲にはなれません。ですから日本の中にとけこめない印象を受けます。今は日本語よりドイツ語と英語を使っているし、大抵の友達は外国人だから、たまにドイツにいるのと同じような感じがします。

日本に着いた所ばかりなので、今から生活がまた変わっていくかもしれないけれども、東京に住んでいる人は毎日疲れているし、忙し過ぎるから、ゆっくりする時間があまりないと感じました。皆がそうではないと分かっているけれども、今までよくそういう経験をしました。ですから東京は、日本人の社会に入りにくい所だとたまに思っています。

一年間甲賀に留学をしていた間、私は日本の事を大好きになりました。日本文化の影響を受けた私は、今でも日本の伝統的なものを見る時や、ドイツと違う日本の習慣をみつけた時、それだけで幸せになります。

ですから私にとって日本の田舎はなつかしいです。

## 2. ディスカッション

私のディスカッションの相手は千田さんという、同じ別課センターにいる人でした。千田さんは外国へ行った事があります。日本に帰った後で、東京に移動する事になりました。

最初は、私と同じように東京で暮らすのは大変そうでした。一度話をした後に、もう一度ディスカッションができて、その時はセイジさんという留学生もディスカッションに入って三人で話しました。セイジさんは、必ず東京に住みたいという希望を持っていました。セイジさんは、千田さんや私とは違って、東京に住む事が難しいという気持ちは最初からなかったそうです。それは私とは反対の考えですから、中々いいディスカッションが出来たと思います。千田さんもセイジさんにも様々な意見を言うてくれて、本当に感謝しています。

作文を読んでくれて最初に、二人ともに聞かれたのは、なぜ私は15歳の時留学したかったかと、なぜ日本を選んだのかという質問でした。日本に行きたかった理由は何回も聞かれた事があるから説明しやすいと思って次のように答えました。

私は1997年に一年間日本に留学した事があります。その時、滋賀県の甲賀という町にホストファミリーと一緒に住んで普通の高校に行きました。なぜ私は日本に行きたかったかというと二つの理由があります。

一つ目の理由は、二つ年上のお姉さんは、私が13歳の時、一年間オーストラリアに留学して、その代わりにニュージーランドの女の子が私の家族に入ってホームステイをしました。その一年間の間、私はいろいろな留学生と話が出来て、私も外国に行ってみたくて思いました。その留学生の中は、ドイツ語がぜんぜん話せない人も沢山いましたが、大抵の人は帰国するまでにドイツ語が大変上手になりました。それを見ると英語を話さない国へ行ってみたくて思いました。

二つ目の理由は、両親が若い時に柔道をやっていたからです。母も父も二人とも強かった母は試合に出るために1ヶ月くらい日本へ行きました。日本で出来た経験に感動した母は、私の祖母の家で自分の部屋に沢山日本の物を置いていました。私は小さい時からずっとそれを見て、日本の事に興味がだんだん大きくなってきました。だから、ドイツと違う文化を体験してみたい、日本に留学したいという希望を持つようになりました。

そこでセイジさんも千田さんも、今回もう一度日本に留学をしたかった原因は何でしょうか、前と同じでしょうかと聞きました。その質問は私にとって先のより難しい質問でした。少々考えてから私は次のように答えました。

今度留学したかったのは、日本の都市に住んでいると田舎の方で出来なかった経験が出来るので、東京で暮らしてみたいし、日本の新聞が読めるようになりたいし、日本の大学で勉強してみたいからです。

それを聞いて、千田さんは、そう言えば最初日本に来る事にしたのは、中々自然に決ま

った事じゃないと言ってくれました。私は自然に決まったとはどんな意味ですかと聞いて、それは両親が柔道をやった日本の事が好きで、私に日本の話を聞かせたし、日本の物を見せたから、私は日本が興味深い国だろうという考えが強くなりました。多分だから日本に留学をしたくなったのでしょうかと答えました。

しかし今度の留学は、きちんとスサンネが決めたのですねと言ってくれました。私はそういう風に考えた事がなかったので、なるほど、千田さんと同じ通りだと私は今思っています。

次に言ってくれた質問に対しては、相手と私の考え方は違いました。それは誤解について書いてある話でした。私が書いたのは、ホストファミリーと私は、文化の違いでお互いに誤解があったという事でしたが、千田さんはその誤解は文化の違いのせいだけではなく、個人的な問題もあったのじゃないだろうかと言いました。そう言われて最初、それは違う、文化のせいだろうと思いました。もうちょっと時間を使って考えると、私の考えは少し変わってきました。誤解は人々の関係に起こる事だから、相手と話をする場合、話をするのは個人だから、話がうまくできなければ、やはり個人的な問題もあると分かってきました。

しかし、個人的な問題も入っているだろうと思っても、ホストファミリーのお母さんの場合、誤解が起こったのは個人的な問題のせいではなかったと思います。その時、誤解が解けなかった一番大きな理由は、文化の違いだったと私は思います。それはホストファミリーのお母さんが何を考えていたか、私の失敗は何だったかを直接言ってなかったからだし、私も自分の思っていた事は言いたかって中々言えなかったからです。

様々な人がいるから、日本の文化は何であるかをいうのは中々難しい事ですが、私にとっては、相手に本当の思っている事や本当の気持ちを見せず、嫌な事があっても何も言わないで我慢するのはドイツと日本と比べると、日本文化の一つの特徴であると思います。

ところが、日本人の皆がそうではないので、他の日本人だったら、誤解がなかったかもしれない。その意味で、個人的な問題も入っていますが、文化について言えば、文化の特徴はいつも日本人全員の性格を表しさないの一般的な話しかできません。

ですから私は文化の違いで誤解が起こったという事を信じています。

### 3. 結論

ディスカッションする時間はあまりなかったのに大変参考になったと思います。今まで考えていない事をたくさん言ってくれたおかげで、話し合った後、私の考え方が変わりました。変わっていない事もあったけど、変わっていても、相手の意見を説明してく

れた後では相手の立場をもっと理解出来るようになりました。

ディスカッションの相手に質問された時や、相手の意見をもらえた時、自分の思っている事について説明した時には、私が話す前より自分の考えている事がちゃんと分かりようになりましたので、とてもいいディスカッションだったと思います。

最初、授業で書くテーマを決めた時、私と田舎のタイトルにしようとしたのですが、クラスでグループのメンバーと書きたい事について話し合っ、私の考えがだんだん変わってきました。それは他人と話したからだけではなく、今までの東京に3ヶ月住んでいる間、私は東京での生活態度をだんだん改めてきたからです。

この作文を書き始めた時、日本に来たばかりでしたし、日本に4回行った事があっても、東京は初めでしたのでまだ慣れていない事が多くありました。

その時、東京は日本らしくないから甲賀に帰りたいと思っていて、田舎は私にとってなつかしい事であるというような作文を書くつもりでした。しかし、今の作文は初めと違うテーマになったほど変わりました。書き直すと田舎の話がだんだん減ってきて、今東京で生活しているのも認められるようになりました。それが分かった時、全部書き直さなければならぬと思いましたが、ディスカッションに入って、それについて話し合った後、私の考える事が変わったのは結構面白いし、ディスカッションの結果ですから全部は書き直しませんでした。日本の田舎は今でも私にとってなつかしい事ですが、なつかしさの意味が変わりました。最初、どうしても田舎の生活の方が好きで、あそこに帰りたいし東京にいと幸せになれないという強い気持ちがありました。今、田舎に住んでいた時、良い経験ができたのおかげで私は日本の事が大好きになったのは分かっていて、日本の物を見る時や、日本の習慣を体験できる時、私は幸せになります。初めの留学の経験を認めていまずので、今回の経験と比べたくなってきました。東京の生活も楽しくなった私は、東京は社会に入りにくい街ではなく、どこへ行っても一人暮らしをする時、慣れるまでは、たまに社会に入りにくい気持ちがあるかもしれないと思います。一年間日本に住んでいた事があっても違う街に行くとき寂しい時もあるのは普通の事だと分かって来ました。

#### 4. 終わりに

今まで私は日本語でレポートを書くのは一回もしたことがなかったので、書き始める前に作文が書けるかどうか、色々な悩みがありました。ところが、少しずつ書いてみると、けっこう大丈夫でした。分からない時や迷った時は、皆に相談して他の人の意見やアイデ

アをもらったおかげで、レポートを書けるようになって、感謝しています。皆さん本当にありがとうございます。その3ヶ月は勉強になった事に加えて、とても楽しかったし、それぞれのグループのメンバーは個人的なテーマについて書いたので、思っている事をたくさん言ってくれたおかげでいい友達ができたとおもいます。

この作文をきっかけとして、15歳の留学の体験に対して私はどう思っているか、東京に来てなぜ私は最初あまり元気ではなかったのか、私にとって大事な質問についてよく考えた私は今の東京の生活がだんだん楽しくなりました。また、たくさんのアドバイスをもらった事はとてもよかったです。むらさきの皆さん、千田さん、セイジさん、本当にありがとうございました。

## 私と留学生の生活

マリオン・ガイジンガー

1. 動機
2. ディスカッション
3. 結論
4. 終わりに

### 1. 動機

私は留学生の生活に興味があります。オーストリアのウィーン大学で日本語の勉強していました。毎年、ウィーンの大学の先生は学生に交換を与えます。一年間、日本に住んでいるのがとても大切だと思いから、交換を決めました。今回の留学が初めてなので学ぶことがとても多いです。この一ヶ月、たくさんいい経験が出来、たくさんびっくりするのを見ました。困ったことは少なかったです。

例えば、一番びっくりしたのは電話でした。空港に着いてからお母さんに電話かけようと思いましたが、かけ方がわからなかったので、電話できませんでした。インフォメーションカウンターの女性は私に電話のかけ方を教えてくれたので、電話できました。

日本に来てから、たくさんことをしなければなりませんでした。

でも、事務所の人と他の人はいつでも助けてくれましたから、困りませんでした。例えば、実力試験を受けてクラスの登録しなければならなくて、とても緊張していた時係の人が助けてくれたので、心強かったです。

それから、私は外国人登録しに区役所へ行くことをとても心配しました。でも、区役所の人はとても親切で用紙の記入の仕方を教えてくれました。

また、いろいろな活動と旅行が日本語研究教育センター準備されています。その活動の間いろいろな国から来た留学生に会えますから、とてもいい考えと思います。

日本の留学生の生活はオーストリアの生活は違いますけれども、とてもかっこいいと思います。時々日本語の授業は忙しく、たくさん勉強をしなくてははいけませんが、観光したり遊んだりするための時間はあります。

私にとって外国に住んでいる時間はとても大切だと思います。なぜなら、外国では私の国でできない経験ができ、その国の文化をもっと詳しく知ることができます。



## 2. ディスカッション：

私は日本が大好きなので、以前から日本に住むのがの夢でした。ディスカッションするの前、私はとても心配していました。何について話せばいいのかわかりませんでした。

しかし、私はドイツ人のニコラさんと韓国人のシンさんと一緒にディスカッションをしました。シンさんも留学生の生活について書きます。初めて、皆はそれぞれレポートを読み、話し合いははじめました。

私：たくさんのびっくりすることを見ました。例えば、私にとって電話の仕方はとてもびっくりしたことのひとつです。ニコラさんにとってびっくりしたことは何ですか。

ニコラ：あー、電話かけるのはすごく難しいと思います。電話には、いろいろな種類があります。たとえば、日本に来てから、家族に電話をかけたいと思いました。でも、緑の電話とグレー電話があるのでどちらの電話が使えばいいかわかりませんでした。それぞれ電話にはアクセスコードがあるし、それぞれの電話に合ったテレホンカードを使わなければなりません。しかし、どちらの電話にどちらのアクセスコードやどんなテレホンカードを使えばいいかまだわかりません。結局使えなかったのでいやになりました。今でも、電話をかけたい時、いろいろな方法を試しています。

私：シンさんはどうですか。

シン：僕も心配で電話できませんでした。時々、日本人も使い方を知らないような気がします。(笑)

私：私は日本人はとても親切な印象があります。例えば、区役所の人はずごく親切で私を助けてくれました。皆さん、どうですか。

ニコラ：区役所に行った時、とても緊張しました。しかし、係の人は本当に親切だから、困らなかったです。その人はゆっくり、はっきりと説明してくれました。

シン：区役所へ行った時、僕に韓国語で説明してくれました。だから、心配しなかったです。(笑)

その係の人は英語も中国語も韓国語も話せました。

ニコラ：ほんとうですか。

ドイツと比べるととても違います。ドイツでは役所の人はずごく不親切で私に長い時間待たせます。いつもここに行くとき迷惑しました。韓国ではどうですか。

シン：大丈夫ですよ。

私：私は今回の留学を通して大人に近付けると思います。皆さんはどう思いますか。

ニコラ：そうですね。私は二週間病気でとても大変でした。しかし、直った後で、気持ちが悪かった。我慢したから大人みたいよ。例えば、国で病気だと、お母さんが世話をするでしょう。でも今は外国に住んでいるから、自分でかんばってみなくてはなりません。

シン：僕にとって留学はおもしろい。

私：どういう意味？

シン：日本に来てからいろいろな所を旅行しました。それはたくさんの人々と会い、日本の文化を詳しく知ることができました。この経験は自分の発展にとって大切だと思う。

ニコラ：そうですね。この間、私はたくさんの人たちと友達になりました。ほかの人の意見を聞いたり話し合ったりするのはすごく面白かったです。いろいろな国から来た人々としゃべるのが大好きなのに時々日本語でどう言えばいいかわからなくて困ります。

シン：仕事についたとき、役に立つと思います。僕は先生になりたいと思います。この経験は将来の僕の生徒にとっても役に立つと思います。

ニコラ：私にとってその留学は勉強をつづけるのために大事です。国へ帰る時もう二年間大学の勉強しなければなりません。その間は難しくて昔からの本文を読んで翻訳しなければならなくてよくわかることができます。また、日本の文化についてのゼミがあり、私はよくわかれると思う。

外国に住んでいる時間を楽しいですけれども、両親と親しい友達から遠いからいろいろなことを頑張ってみます。私は洗濯したり料理を作ったりするような日々ことを困りません。しかし、親しい話し相手を不足しているので、時々寂しい感じが起きます。

また、今回の留学が仕事を探すのに役に立つと私も思います。オーストリアの社長はいつも外国で住んでいて経験をした人を勤めることが好きですから、留学が将来の仕事にとって大事なことです。

私は国へ帰った後、いつも日本でした経験と会った人々をおもいだします。

### 3. 結論

授業中、私たちはたくさんこのテーマについて話していました。日本に来た時、私たちは同じ経験をしてたくさん日本の特別なことをびっくりしました。はじめに皆さんはいろいろな事を不安でした。一番困ったことは聴解と話す言葉でした。この留学年は仕事と続く大学の勉強のようなことにとって役に立つと私たちは思っています。私の人生も豊かになります。

話し相手は同じことを困るので、ディスカッションの後でも私の意見は変わりません。誰と話しても、私に似た体験と経験を話して聞かせていました。ですから、誰でも最初の不

安していました。

#### 4. 終わりに

このテーマについて書けるので、うれしいです。日本に来る前にこの留学生の生活をたくさん考えました。どうあるかわかりませんでした。楽しみにしています。このクラスで、レポートの書き方を勉強して TA とクラスメートのおかげで終わりました。その上に、私たちは作文を書いてディスカッションする練習してくれました。

**本の世界に生きる私**

## 目次：

- 1 私の「読書観」
  - 1.1 本に対する私の好み
  - 1.2 読書の機能
    - 1.2.1 本は情報を供給する
    - 1.2.2 本は思想と道德の源泉である
  - 1.3 ある本から習った思想の一例（「論理的な自己主義」）
  - 1.4 読書のよくないところ
  - 1.5 本は私の親友と先生
  
- 2 ディスカッション
  - 2.1 私はいったいどうして本を必要とするか
    - 2.1.1 本は精神分析医者
    - 2.1.2 本と私の存在意義
    - 2.1.3 本の思想に従うのは実際に可能なのか
    - 2.1.4 本より本物の親友と先生のほうがいいのか？
  - 2.2 本が好きな他の人と意見交換をした結果
    - 2.2.1 共通点： 二人とも本を大切にしている
    - 2.2.2 新しくて面白いと思う相手の意見： 作家の社会的な役割など
    - 2.2.3 反対する意見： 主人公が悪人の本を読む気持ちは私には理解できない
    - 2.2.4 自分は世界の文学がよく知らないと分かった
    - 2.2.5 「面白い本」という表現の意味が正確に分かるようになった。
  
- 3 結論
  - 3.1 私の見方が変わらない
  - 3.2 この授業は私に何かの影響を与えたのか
    - 3.2.1 前の記憶を蘇った
    - 3.2.2 他人から意見をもらった
    - 3.2.3 他人に自分の意見を伝えてみた
  
- 4 . 終わりに . 感想とお礼

## 1. 私の「読書観」

### 1.1 本に対する私の好み

世界には多種多様な読み物があるが、私は文学小説を愛好している。チェホフ、トルストイ、ディケンズ、ヘミングウェイのような世界クラシックの雰囲気の中で暮らしている。プーシキン、シェクスピア、キプリングなどの詩人の詩も崇拜している。幼い時にデュマ、スコットなどの冒険小説、ティーンエイジャーの時に SF を夢中になって読んでいた。クリスティ、ドイル、ポーなどの推理小説やアンデルセン、ホフマンなどの昔話はいつも大好きだった。最近、哲学的と科学的な文献にも興味を持つようになっていつかソクラテス、カント、ユングなどの著作を読もうと思う。

一方、不思議なことに新聞、雑誌、漫画などが苦手だ。皆に面白いといわれる新しい本もあまり読まない。

### 1.2 読書の機能

私の意見では読書には2つの主要機能がある。

#### 1.2.1 本は情報を提供する

子供はいろいろなところから情報をもらいながら自分の世界を早いスピードで広げているが、本は豊かな情報源であるのでそのプロセスをもっと加速化させることができる。私の場合を見ると、SFの本を初めて開けた瞬間、内部の世界がまるで宇宙を生んだ大爆発のよう急に広げ始めた。

#### 1.2.2 本は思想と道徳の源泉である

しかし本はただの情報源だけでなく、思想、空想、理想、道徳などの源泉でもある。立派な人間になるのにこれらをどこかから手に入れなければならない。教えてくれる両親か先生か友達かいたい。自分でこれらを悟る天才もいるだろう。けれども両親などが忙しいし、本人も平凡な人で頼りなしに学べないというケースが圧倒的に多い。こうした場合に本を通じて自分を発展させるのは一番効果的だと思う。しかも両親などからもらえる知識には限りがあるのにひかえ、本は人類がその数千年の歴史にわたって貯めた情報や思想を含めているので自分の知能をいくらかでも高めさせる。

一言でいえば、本は自己修養に欠かせないものである。

### 1.3 私がある本から習った思想の一例

私に深い印象を与えた本の例として19世紀の後半にチェルヌイシェフスキーというロシアの作家が書いた「何をなすべきか?」というタイトルの作品を挙げたい。結構面白い筋をもとに作られて時代を現実的に描写する物語だが、一番大事なのはそれに現れている筆者の思想だ。それは筆者が作った「論理的な自己主義」という哲学的な理論だ。ここには「論理的」と「自己主義」という矛盾している二つの概念が結合されている。「自己主義」は悪い意味をもっている言葉だ。自己主義者は自分のことだけ考えているから他人に対して悪いことをしてしまう。しかしチェルヌイシェフスキーによると自分のことを考えているからこそ他人に対してもいいことをする人がいる。つまり他人が幸せだったら自分も幸せだ。他人

が困ったら自分も困る。だから自分が幸せになるために先に他人が幸せになるように全力を尽くさなければならない。「何をなすべきか？」はユートピアというジャンルの長編小説なのだが、現実離れはよくないと言われているけど、私の考えではユートピアも人類の将来の目的を設定する以上注目すべきだ。私はこの「論理的な自己主義」の理論がとても気に入っている。それが実現できるかどうかは別としてとにかくその本のおかげで私の人生観がより明るく楽天的になった。

#### 1.4 読書のよくないところ

何事にも裏がある。本も例外ではない。私は暇を読書に使ってしまったので、友達が少なくて、孤独な子供だった。大人になってもコミュニケーションの問題がたくさん起きて困ったことがよくある。今は人との付き合いの技術を習わなければならないのは本のせいかもしれない。

#### 1.5 本は私の先生と親友

人間は呼吸しているのに気づかないが、空気がなくなると直に死んでしまうというように私も本は手元にある内にそれに気がつかないが、なくなったらいらいらしている。だから私にとっては本が空気のように必要だと言ってもいいだ。毎日何かの本を読んでいる。

読書好きが多少の困難を生じさせるものの私の態度が変わらない。どうみても本は私にとって親友と先生のようなものである。

## 2. ディスカッション

蛇拔さん、ヤコブさん、三代さんの三人の三人とディスカッションをした。蛇拔さんと三代さんは日本、ヤコブさんはデンマーク出身だ。主なディスカッション相手は蛇拔さんで、ヤコブさんとヤコブさんのディスカッション相手である三代さんとは少しだけ話した。

### 2.1 蛇拔さんとのディスカッション

会話の出発点は本が私の気持ちや人生観さえ変える力を持っているという前提だった。私は例の「何をすべきか」によって自分の人生観がもっと明るく楽天的になったと書いたが、蛇拔さんにそのところを説明してほしいと言われて、説明してみた。

#### 2.1.1 本は精神分析医者

私：私は実は悲観的な性格です。数年前に生活に疲れていて何もやる気がなかったのですが、チェルニシェブスキーの作品を知ってから周りの世界が何とか耐えられるようになったんです。

蛇拔：何かプレッシャーがあったんですか。

私：ええ、そうです。学校の勉強が難しすぎてストレスがたまっていたんです。

蛇拔：大学ではエレナさんがやりたいことと違うことをやっていたわけですか。

私：いいえ、そうじゃないです。ただ授業が思ったより辛かったのです。

蛇拔：でも難しいことをこなした時の喜びもあるでしょう。

私：あるのはありますが、授業はあまりにもたくさんあると、宿題を完成する途端新しい課題が出てくるはめになるので、自分が何かを達成したと考える時間すらないのです。

蛇抜：そこなんですか、考える時間か。エレナさんはどちらかという物事をきちんと論理的に考えて自分が納得しながら生きたいんだけど、勉強のテンプが早すぎていますね。エレナさんがじっくり考えるのが好きですよ。

ここで蛇抜さんは私がストレスを解消するために本を読んでいるという事がわかったようだ。それはそのとおりだ。ただしストレス解消方法はテレビ、アルコール、ギャンブル、おしゃべりなどいろいろあるのにどうして私は本こそ選んだのかと自分でもはっきり分からない。「じっくり考えるのが好き」な私に本の根本的な特徴がぴったり合っているからかなと思っているけど。例えば、私は本を読むのが早い、特に気に入ったところか分からないところを何回も読むのが好き。そして周りが静かのが好き。酔っ払うのがきらい。だから本以外の慰めの方法は私には利かないかもしれない。

### 2.1.2 本と私の存在意義

蛇抜：でも何のために勉強を必死にやっているんですか。将来に何になりたいんですか。

私：実は経済学者になる夢があるんですが、ロシアでは学者は経済的と社会的に非常に低い地位に立っているのだから、たぶん会社に勤めることにします。

蛇抜：どうして経済学者になりたいんですか。

私：人類は現在さまざまな問題に直面しているでしょう。私はそれが気になっているわけだ。自分なりにロシアをはじめとして全人類の生活の改善に貢献したいものだ。そして私の意見では生活がいいというのは生活水準が高いということの意味です。で、生活水準を高めるのに経済の原理がよく分からなければならないでしょう。だから経済を研究したいんです。

ティーンエイジャーのころからこのように自分の存在意義を理解しているが、どうしてこうなったのかと考えてみるとやはりまた本の影響だ。偶然かもしれないが、私が読んだ本の中では幸福を遂げる上で福祉の意義を軽視してはいけないという意見が多かった。そして私がこういう目的を達しようとするうちに本が私を精神的に支えてくれるというふうに思われる。

### 2.1.3 本の教えに従うのは実際に可能なのか

本が私の生活の目的を構成したことまで明らかに述べているが、蛇抜さんは本に書いていることをどの程度実現できるのかという問題に触れたら私の原則の基礎が少し揺れた。

蛇抜：私はその「論理的な自己主義」がとても気に入ったのですけどね。その「論理的な自己主義」が言っていることを今までにどこにも聞いたことなく、聞いたなら自分がその理

論のとおりに暮らしていると思ったんです。つまり他人のことを別に考えないで自分の利益だけ追求しているが、そういう行動は他人にとってもいい結果をもたらすんです。たとえば町ではタバコを吸っている人は自分の迷惑だけでなく、ほかの通行人の迷惑にもなりますので、そういう人に文句を言うのは自分の権利だけでなく、他人の権利も守るということの意味します。そういう意味でとったら非常に論理的だなあと思ったのですが、エレナさんはこういう生き方が出来そう？

私：こういう生き方を目指していますけどできなさそうです。「何をすべきか」の主人公のような生き方をするのに（例えば自殺を見せかけて、新しい名前を取って他国でゼロから再出発するのに）非常に意志の強く、すぐれた人じゃないといけませんが、私はそんな人じゃないです。

蛇抜：いろんな生き方で「論理的な自己主義」という生き方が出来ないですか？この本はただ一つの例ですね。

私：まあ、小さいことなら出来るかもしれません。

私が紹介した本の思想は蛇抜さんの気に入ったのはとても嬉しかったが、ご自分で読んでいただいたらまたご意見が変わる可能性があるというのは忘れては生けないと思った。蛇抜さんによるチェルニシェブスキーの理論の解釈は非常に具体的で実用的に見えた。それで蛇抜さんの解釈を頼りにするとその理論は従いやすいし、直ぐ社会の役に立てるような気がする。それに対して私のとらえ方は現実から離れている。いや、正直に言えば「論理的な自己主義」を現実に適応しようとも思わなかった。でもどんなにユートピア的な理論であってもある程度まで実現できるという考え方の方が正しいと確信している。

#### 2.1.4 本より本物の親友と先生のほうがいいのか？

蛇抜：エレナさんは「あなたは自己主義だ」と言われていやな思いをしたことがあるのですか。

私：はい、ありましたけど、それが「何をすべきか」が気に入った理由じゃないです。私の気持ちが明るくなったのは自分の自己主義のために正当な理由を見つけたからじゃなくて、どこか世の中に「何をすべきか」の主人公のような人がいると信じたからです。私は理想主義者ですから、決して理想的でない世界の人々と合うとがっかりしたり悩んだりします。だからこそ理想的な人がどうやって自分の問題を解決しているか、どういうふうに生きているかについて読むのが興味深かったのです。実際の生活に欠けている印象をもらったのです。

蛇抜：それはどういうこと？自分の行き方が分かってもらえるという意味？だってエレナさんはその人と関係なかったら、つまりエレナさんはその人を眺めているだけではないわけ？



私：理想的な人は私の行き方が分かってくれと期待していません。私はいろんな欠陥を持っていますので、むしろ私のことを嫌うとかかわいそうに思われるでしょう。それにしてもそのような人との出会うことを憧れています。残念ながら今までにそのチャンスがなかった。

蛇抜：この本はエレナさんをいろいろ考えさせるでしょう。

私：はい。私は本を通して自分の性格を作ってきました。でもここで一ついいたいことがあります。前は本が私の先生のようにと書きました。それは真実ですが、それと同時にいつも心の中で私には生きている先生がいてほしかったのです。「先生」というのは私にとってはどの質問にも答えられる人、何でも説明できる人、いつも支えてくれるひとです。いくらでもいい本であってもそれと対話ができないですよね。書いたことを直すことができません。何か分からない時、コメントをしたい時、不満な時にどうしようもありません。それに控えて人間だといつでも意見交換ができます。でも本当の先生と出会う可能性が非常に薄いと思います。だからそのうちに本が先生のやくわりを果たしています。とても悲しいですが、ないよりははまだ。

蛇抜：本にめぐり合う時のようなエレナさんに深くものを考えさせるような人はまだ出会っていない。でも本を読む時に「あ、これはいいこと書いている」か「この人の考えていることは私がすごく理解できるな」、と思ったことがあれば、本当の人間と会った時に見つけやすいじゃない。

私：私の好きな作家はもう皆死にました。「この人がもういないのは残念だな」と何回も溜息をしたことがあります。そういえば私の一番好きな作家は私が生まれた1979年になくなりました。もう少し長く住んでいたら合えるようになりませんでしたのに。

蛇抜：でもエレナさんはまだ若いからエレナさんの世界も小さいです。これから世界が広がればこういう人たちと出会う可能性は大きいけれども、その時に見る目がなかったらたとえ出会ったとしてもそれは見つけられないでしょう。時代関係ないから。エレナさんの世の中の見方とか、人々との関係の持ち方の問題です。いくらでもこういう人は出てくると思う。

私：そうかもしれませんが、もし潜在的な先生に会えるとしてもその先生が作家じゃないと思います。現在の文学はほかの芸術に衰えつつあるので優れた人は作家にならないと思います。その意味で文学はバレエに似ている。ただしバレエより一世紀ぐらい長生きしました。

蛇抜さんは私の意見に賛成しなかった。蛇抜さんによるとどの芸術でも新しい形で再び生まれることができる。私も自分の意見があまり好きではないので、主張しなかった。

## 2.2. ヤコブさんと三代さんとのディスカッション

ヤコブさんのテーマは「文学について」なので、私のテーマと共通点が多いはずだと思ったが、本人と話してみたらいろんな相違点も現れた。そのディスカッションの結果は以下

のようである：

### 2.2.1 共通点

私とヤコブさんは文学に対する態度が一致していることがある。一番目立つ類似点はやはり「私は小説が自分の家庭教師みたいなものだと感じている」というヤコブさんの発言と「本は私にとって先生と親友である」という私の発言だ。

### 2.2.2 新しく面白いと思う相手の意見

それからヤコブさんから初めて聞いたこともある。例えば、「私は若いころからずっと映画を見るより何かを読むことが好きだった」、小説の役割の一つは「社会を批判すること」、作家がすべての限界を解消できる可能性があって、時間や歴史的な事実を自由に作り直すことができるなど。

### 2.2.3 反対する意見

私にはなかなか納得できないところもある。たとえば、ヤコブさんは「三島由紀夫の『金閣寺』という小説は実際の出来事に即している。主人公は金閣寺に火をつけて壊す。確かにそれは大きい犯罪だ。でも三島は主人公の意識にもぐりこんでその人の論理を想像してみ、読者を主人公と共感させるくらいうまく書く。というのは金閣寺を読んで一時的に他人の身になって世界を新しい目で見られる。」と言っている。私は三島由紀夫が大嫌い。彼も彼の主人公もひどい劣等感に病んでいる邪悪な人だと思う。人間の精神は暗い面と明るい面はありますけど、私の意見では文学を真剣に思う作家は人を描写する時にどちらでも避けるわけにはいかない。でも三島由紀夫によると私たちの周りにはなさけない倒錯者ばかりだ。

でもそれは今書いているが、その時に日本語で言えなくて、「主人公が悪い人だから、彼に共感すると自分も悪い人になっちゃうんじゃないですか」と聞いただけだ。それに対してヤコブさんは「作家はいつでもぼくを共感させることができる」と答えて、結局私たちのそれぞれの意見が変わらなかった。実は私もほんを読む時にその主人公の身になりきる。でも主人公は悪人かばかだったらそれができないのでその本が読めない。例えばドストエフスキーの「罪と罰」が大嫌いなのはだからこそだ。

### 2.2.4 自分は世界の文学はよく知らないと分かった

私が本が好きと言いながら実際はとても未知な人だということも分かった。大体知っているのはロシアの古典文学だけだ。ヤコブさんと三代さんは世界に有名な作家のことを口に出すと私はさっぱりわからない。でも、いい勉強になると思う。三代さんとヤコブさんが教えてくれたベッケツというノーベル賞をもらった作家の作品をこれから読んでみたいと思う。

### 2.2.5 「面白い本」という表現の意味が正確に分かるようになった

三代さんは小説を書いたことのある人として私の興味をひいた。彼に「小説を書くのはどんな経験ですか」と聞いた。三代さんにとっては難しいそう。私の意見では難しいだけじゃなくて、つまらない。読むことだけ楽しいと思う。そして三代さんに読んだら面白いと

思う本は何かと聞かれて当惑させられた。私にとっては「面白い本」というのは時間の潰しとかストレス解消のために楽に読める割と簡単な本を意味するから。そのような本は価値があまり高くない。でも三代さんは「面白い」という言葉を「高く評価される」という意味でも使ったのは明らかだった。ついに三代さんに「面白い」という言葉の使い方を教えてもらった。だから今は私たちのディスカッションが私にとっても面白かったと言うときに「面白い」という言葉を「楽しい」と「意義のある」という両方の意味で使う。

### 3. 結論

#### 3.1 私の見方が変わらない

この論文を作成する間に選んだテーマについてたくさん考えさせられたが、ディスカッション相手とグループの相手との話し合いによって私の見方の肝心な点が変わっていない。でもそれが当然だと思う。本に対する私の態度はもう数年前に構成されとても安定しているし、それを変えるのはこの授業の目的ではないだろう。

ただし私の見方が安定しているだからといって本と自分との関係について何でもわかるとはかぎらない。自分のことが徹底的に分かる人がいないだろう。私が自分に関して分からないことといえば、それは例えば私がもともとこういう性格だから本が好きになったのか、それとも本が今の私の性格を作ったのか、つまり何が理由か、何が結果か分からないということである。でもそういうもともと答えがなさそうな哲学的な質問にこの授業を通して答えを見つけるわけがない。

#### 3.2. この授業は私に何の影響を与えたのか

私の考え方が変わらなかったけど、この授業が私に与えた影響がある。ここで3つのポイントを述べる。

##### 3.2.1 前の記憶を蘇った

読書に対する私の態度が構成されていた時思ったり感じたりしたことをもう一度体験した。例えば、このテーマを選んだ理由が本が大好きで、本が私の親友と先生であることにあると書いたが、それは10-14歳の時に考えたことである。そして蛇拔さんとディスカッションをする時に実は心の中でいつも生きている先生、人間の先生がいてほしかったと言いつつ切った。これを自覚したのは高校生のときぐらい。次に蛇拔さんとのディスカッションの終わりにこの人間の先生に出会うまでに手が届くものすなわち本から自分が必要とする知識や思想などを受け取ればいいのかと断言した。それが大学生の私の考え方。今の段階では生きている先生もほしいけど、例え出会ってとしても本を大事にし続けると思っている。

##### 3.2.2 他人から意見をもらった

授業の時に自分のテーマに対する他人の意見をたくさん聞いた。今はそれを自分の意見にしないが、考慮に入れた。いつか役に立つと思う。たとえば、蛇拔さんによる本の思想の実用的な解釈とか。そして新しい本と作家がいくつか何人か紹介されたのもとても重要

だと思う。私は今でも多くの本を読んで、多くの作家を知っているが、絶えず発展して行きたいのならそれに満足してはいけない。

### 3.3.3 他人に自分の意見を伝えてみた

自分の考え方を分かりやすく説明して相手を納得させるためにいろいろ工夫した。今までに本に関する私の色々なアイデアをこう具現する機会がなかった。学校では例えば友達に数学の宿題を教える内に自分ももっとよく覚えると言われているが、私の場合もそうだった。この文章を読んでいる人にその内容が分かりにくいと思われるかもしれないが、自分自身の頭の中で物事がもっと順序だてて並んだ。

## 4. 終わりに

「本と私」というテーマはあまりプライベートなことに触れたくないと思って無作為に選んだ。しかし何気なくとても身近なテーマに当たったのだ。それがテーマについて話せば話すほど分かった。その時に「このテーマを提案したのは私の潜在意識にちがいないからしょうがない」と思った。どうせテーマを取り替えたくなかった。

後に偶然に選んだそのテーマに対して“不変の原則”を持っていると感じるようになって自分でも驚いた。最初は自分の意見を主張するつもりが一切なかったのだから。本が私にとって空気のように必要だというようなことを書くのも想像できなかった。そしてある文学作品をあんなに激しく批判するつもりもなかった。もともとは他人を批判しないほうがいいと思う（自分も批判されるから）。授業に伴って私のテーマも展開すればするほどそれに対して関心というか、それを一つの完全な形まで発展させたいという気持ちになった。

この三ヶ月で私の日本語の能力がかなり伸びたと感じるが、それは自分の努力の結果だけではなく、グループのリーダーやディスカッション相手をはじめとするほかのグループメンバーのおかげだと強く意識するのでみんなに心から感謝を表したいと思う。

---

## 参考

### 『何をなすべきか？』（ロシア、チェルヌイシェフスキー著）の概要

「何をなすべきか？」の筋立ては複雑で、哲学的な部分と文学小説的な部分が織り交ぜられているがここに思想はともかく、具体的な内容を述べるつもりだ。

「何をなすべきか？」は三角関係を軸に展開する小説であり、主人公は若い女の子の A さん、医学部大学生の B さんと B さんの親友と同級生の C さん。

A さんの家族は庶民だが、少しお金を持っているので、A さんは教育を受けた。A さんのお母さんはとても厳しくて、A さんに大金持ちの悪人との結婚を強制している。A さんが辛くてしょうがないから自殺を図るところを彼女の弟の家庭教師になった B さんと出会う。二人は友達になって、いろんなことについて正直に話し合う。B さんは A さんがひどい目に遭っているのを見兼ねて彼女を助けたくなくなった。しかし当時、女の人は必ず親か夫の権利のもとにいた。だから

---

Aさんは家出して、Bさんは彼女と結婚した。Aさんに対するBさんの感情は決して恋ではなくて、純の博愛だった。彼はいい人が苦しんでいるのを冷静に見るに耐えないような高潔な性格だった。

AさんとBさんがとても仲良く住んでいるが、3年経ってから、AさんがCさんと知り合う。AさんとCさんがお互いにほれてしまう。二人ともBさんに迷惑をかけたくないので、自分たちの恋を忘れようとしているができない。Bさんは偶然に二人の内緒が分かって、妻と親友の恋を妨げたくないという気持ちになる。しかし離婚は19世紀のロシアには禁じられていた。だからBさんはある日家を出たきり行方不明になり、数日間彼が橋から川に飛び降りて、自殺したというニュースが来る。

AさんとBさんは非常に悲しんでいたが、数ヶ月経ってから、結婚して幸せになった。そしてまた数年間が立った。AさんとBさんが相変わらず幸せな日々を送っている。子供もいる。ある日突然Bさんと巡り合う。Bさんが数年前に死んでいないわけ。自殺を見せかけただけだ。実際は妻と親友の前から姿を消して、名前を変えて、外国へ行って、ゼロから新しい生活をはじめた。で、数年間で儲かって、安定した身分に達して、いい女性と結婚した。彼ももう子供がいる。AさんとCさんはとても嬉しかった。そのときから二つの一家が有効の関係を持ちつづけている。

ご覧のとおり、この小説はハッピーエンドに終わる。それは非常に不思議だ。最初は非常に現実的なことが描かれているので悲惨に終わるという印象を与える。本当の生活は悲劇だから。しかも哲学的な思想もたくさん入っているが、真剣な作品とハッピーエンドは相容れないだろう。でもそれこそがご紹介させていただいた本の面白さであると思う。

## 友達について

カストロ・ヒメナ

1. 初めに
2. ディスカッション
3. 結論
4. 終わりに

### 1. 初めに

このレポートのために自分でテーマを選ばなければいけないということを知ってから何を書けばいいか頭には何も出て来なくて、本当に困った、頭も痛くなり眠れなかった日もたくさんあった。

何の話をすればいいか本当に分らなかった、得意なこともないし、趣味もないので本当に大変だった、色々を悩んでいたのが友達に聞くことにした、そして皆は心配してくれて色々な助言を言ってくれたがレポートにぴったり会うテーマを見つからなかった。

その時、得意なことや趣味はないが友達と過ごす時間は本当に私にとって一番大切な時間だと思う、どうしてかと言うと私の今までの人生の中ではいつもそばに友達がいた。

それでその私にとって大切な友達の話をしたくなったが中々私にとって一つの言葉で友達や友情が何かと表すのが本当に難しい、また困った！！そしてもう一度友達の方に行って相談をしたが私の友達たちも友達を一つの言葉で表せなかった。

どうすればいいか本当に分らなかった、本当に友達のことについて書きたかったのに一つの言葉で表せないでテーマを変えろと思ったが私にとって友達よりいいテーマがないと思ったのでそのテーマでがんばることにした。

私は今まで私の国だけではなく日本にも住んだことがある、六年前ぐらいに父の仕事のために日本にくることになった、私はまだ小学校六年生だったので日本もどこにあるか知らなかったが他の国へ行くと大人になったら役に立つと言うことを父に言われたので色々な気持ちを持って日本に来た。

日本に着いてから二ヶ月も立ってなかったのに両親に学校へ行かされた、日本語でありがとうも言えなかった私、日本にいるということにも気がついてなかった私は知らないうちに知らない人たちと知らない教室に座っていた。あの時私の国の学校にいる私の知っている友達、私の知っている教室に戻りたかったのだ。その時から三年間私の国の友達と会えないということにも気がついた、それだけではなく、今から新しい友達を作らなければいけないと思った。三年間も国の友達と別れるので向こうの友達が私のことを忘れてしまうかと思ったのでその友達たちに手紙をたくさん出し始めた、国にいる友達のことばかり考えていたから日本に友達を作れなかったがあの時日本語ぜんぜん話せなかったので作りたくても作れないと思ってそのまま友達を作らないことにした。

日本語も話せない、日本人でもない日本人の友達もいないのにどうして日本に住んでいるか本当に色々なことを考えても分らなかった、家族と毎日その話をしていた、両親や姉たちに「今そう思うかもしれないが絶対日本語を話せるようになって友達もたくさん作れる日もくるから、ペルーに帰る日来たら絶対帰りたくなるよう」と言われたが、私が日本語を話せるのは私にとって無理なこと、それにここに友達作りたくない、ペルーの友達だけでいいとかこういうことでことわっていた。

しかし日本に三年間も住んでいたの友達を作ってしまった、知らない内に本当に深い関係の友達を作った。最初から私のそばにいた人たちだったが私は全然気がついていなかった、今思い出してみると学校へ始めて行った日あの人たち一緒に学校まで行ってくれた、ペルーに帰えた日に6人の友達空港まで向かいに行ってくれた、本当はもう一人行くはずだったけれども私にさようならを言うのがつらくて最後の日に私の家のポストに手紙を入れてくれた。

その友達たちのおかげで日本も好きになり、日本語で話せる相手もいたのでそのおかげでも日本語少しでも話せるようになった。日本にも慣れてきた時にペルーに帰ることになった。また友達と別れなければならないということに気づいた、一生友達を作らない方がいいかと思った、何をしてもいつか別れる時来るから。

でもそれを考えても私にとって友達を作らないということは無理だ、ペルーに帰えた瞬間に三年ぶりのペルーの友達と会えてペルーに帰えて良かったと思った日もあったが日本にも友達がいるから日本にも戻りたかったのだ。

日本に三年ぶり戻るようになったが三年間も立っし私には日本語で手紙を書くのは本当に恥ずかしかったから全然手紙出してなかったし絶対皆私のこと忘れていた。三ヶ月前三年ぶりに日本に戻ることになった、またペルーの友達と別れてしまった、日本に本当に戻りたかったが友達とまた別れるのがつらかった。でも今毎日ペルーにいる友達からメールや手紙も書いてくれるので遠くに行っても近くのように感じる。

日本では中学校の友達と会えた、それで私たちの間には何も変えてなかった。

今この話をすると本当に友達は不思議なことだと考え始めた、考えられない人と知らないうちに仲良くなるって言うことは友達のおかげだ、私の経験を見ると本当に友達も作れない、友達も作らない、友達を作りたくない時に一番大切な友達を作れたから一つの言葉でいうと私にとって友達とは一番不思議なことである。

## 2. ディスカッション

私にとって友達とは言葉で表すのが本当に難しい、だからディスカッションで相手に自分の気持ちを言うのは本当に難しかった。

最初の日エレナというロシアの人とディスカッションをした。エレナは私と同じ寮に住んでいる友達である、エレナにとっても友達がとても不思議であると言っていたので私の考えと賛成だった。私のレポートを読んだ後エレナこう言うなこと言っていた。

## 「友達を作る瞬間」

エレナ：そうだよ、友達...やっぱり不思議だよな...一つの言葉で表せないんだもんね、私にとっても友達はそうだよ。

私：そうでしょう？友達は不思議でしょう...、私もそう思うけど何が不思議かまだ分らない...

エレナ：そうだよ、いつの間にか友達になった人いるんだよね...国も違って文化も違って...何かあるのだよね... 人の中に... それは不思議だよ...いつの間にか、分らない内に本当に考えられない人と仲良くなるなんて...もう仲良くなった人といつからそんなに仲よくなったかというのを考えてみると分らないでしょう...その瞬間は不思議だよ...知り合いから友達になる瞬間...

私：そう！！！！！！！！

その時、五分くらい何も話さずにこれ考えた：そうだ！！！！あれは今まで探していた答え...不思議なのは友達になる瞬間だ...私も今まである人と友達になれたけど他の人と努力してもならなかったのだ...それとどうして国も文化も習慣も全部違って知り合いから友達になれるのだろう...

これをエレナに言われて一つの不思議を分かった...今まで分かってたかも知れないけど言葉で言えなかった。

## 「誰と友達になるか人の中にある」

私：そうだ、知り合いから友達になる瞬間だよな、...不思議なのも文化も全然違って、国も、仲良くなれるの... それとある人と仲良くなれるため努力してもならない場合もあるよね... 何か私たちの中にあると思うけど...

エレナ：そうあるかもね、私たちの中何か...

エレナ何も言えなくなった、私のレポートも一回読み始めた...私たちの中に何かがあるか探していたみたい...

私：何かあるんだろう...それは不思議だよな...私達もいつから仲良くなったのだろう...日本に二人とも着いた時知り合いでもなかったんだよね...で少し前まで知り合いだけでしょ...いつから仲良くなっただろうね...私たち？

エレナ：そう...私も覚えてない...知らない内だよな...知らない内に友達になれるけど凄く大切でしょう友達...

私：そう私にとってもすごく大切... でも皆そう思わないでしょう、人によって友達の大切さは違うでしょう... 友達はいてもいなくてもいいと言う人がいるんじゃない？

エレナ：そう、そう、私にはそれを考えられない...



私：私もわからないけど私にとって大切だからね...私が友達がいなかったらどうなっているんだろう...でも人はそれぞれだから...

エレナ：それも不思議だよ...どうしてある人達にとっては友達が大切だけど、違う人達には大切じゃないんだろう？

私：性格だよ...やっぱり、だから友達を作れるか作れないと誰かと友達になれるのは私達の中にあるんでしょう...

エレナ：そう... そう！！！！！！

エレナそれ以言わなかったが賛成な目で私の顔を見ていた...

私：だから不思議だよ...人の中に誰と仲良くなれるのが決めてあるのが...

エレナ：賛成です...

二人とも少し笑った。

それでエレナつつけた：

エレナ：そう、確かに私達の中にあるのだよね...誰と仲良くなれるか...前ヒメナ言っていたとおりに努力してもなかなか仲良くなれない人もいるんだよね...

ディスカッションの後も色々な話をした、二人とも言葉を言えなくなり...友達やっぱり不思議なことだねということしか二人とも言えなかった... この話の後...前より友達とは不思議なことだともっと考えるようになったが今どうして不思議か少しでも分るようになった...やっぱり不思議なのは友達になる瞬間だ...今まで仲良くなった人たちといつからそんなに仲良くなったか考えても思い出せない...確かにいつが知り合いになったか覚えているけどいつから親友になったのは思い出せない...今まで友達とは不思議なことだと考えているがどの部分が不思議か分った知り合いから友達になる瞬間である...

## ディスカッション 2

二回目のディスカッションの日エレナが他の人とディスカッションをする予定だったので私は他の人とディスカッションをすることになった、その人は日本人で知らない人だったので少し恥ずかしくて緊張した、私の日本語は正しくないしレポートにもたくさん間違いがあるのでドキドキしていた...それに知り合いでもないのできちんと私の考えていることや感じていることを伝えられるか心配だったが最初からとても優しくしてくれたので緊張も恥ずかしさもなくなった。

### 「友達に本当の自分を見せるのは勇気？」

ディスカッションの相手はさえりさんという人である、冴利さん私のレポートを読んだ後綿

私の方を見てこれを聞かれた：

さ：ヒメナさん友達たくさんいるんですか？...

その質問まで答えられなかった...たくさんかな？私にとって少なくはないが...多いのかな...どのくらいが多いんだろう...

私：ええ、多いかな？...分らない...

何、誰に比べればいいのか分らなかった、二百人はいないけど一人だけでもない...

私：そうですね...親友そんなにいないけど友達...たくさんいるのかもしれない...家族とかに友達とか親友いい過ぎとかと言われるんだけど...私にとってそんなに多くないと思うんですけど... 冴えりさんは？

さ：私はね...友達あまりいないと思いますね、親友はもちろん一人か二人がいるんですけどそんなにたくさんはいないんですね...ヒメナは凄いですね。

私：ええ...どうしてですか？...ええ（少し笑いました）...何が凄いですか？

さ：ヒメナのレポートを呼んだ時にヒメナは勇気を持っている人だ！と思いましたよ。

私：ええ...どうして勇気？

それを言われた時びっくりしました...勇気？私勇気を持っているのかな？...今まで私勇気全然ないと思って来たのに...勇気？...怖い！...私にとって友達はそんなに大切なのは勇気を出してくれるからだと思ったのに...自分から出せないと今まで思ってきた...でもあまり知らない人から勇気を持っていると言われると...怖い...ちょっと嬉しいけど...勇気？...

さ：私にとっても友達はとても大切なんですけど...不思議なのは友達を作る、出来るのは怖い...

私：怖いですか？何が怖いんですか...友達だから怖いことは無いんじゃないんですか？

さ：何が怖いだろう...

私に説明をしたかったみたい...でもどう言う風に言うか分らなかったみたい...何分かたつた後言い出した...

さ：ヒメナさんにとって友達関係は何ですか？

私：友達関係？

さ：例えば友達に自分のどの部分を見せるんですか？

その時冴利さん鉛筆を持った...絵を書き出した...紙には丸を書いてあった...それで言い出した

さ：この丸は自分かとするどどの部分を見せるんですか？...

私：友達だから全部...自分の中まででしょう？...

さ：それが怖いんですよ、自分の中まで見せたら余計に友達が逃げてしまうんじゃないですか？

私：友達だから逃げないんでしょう？...

その時までそれを考えたことはなかった自分の友達たちにはいつも中まで見せるようにしている...で自分の中を知っていて逃げてしまったら本当の友達ではなかったと思う...でも見せないと本当の親友を作れないのではないのかな？...その方が怖いと思うけど...

さ：それはそうかもしれないけど...中々見せられないんだよね...

私：私ももちろん怖いんですよ...わたしの性格を分ってから逃げてしまった人がいるから...それでも頑張っています...友達は大切だから私の頭にあること全部見せるようにしています、見せようと思っても見せられない時もあるんですけどそれでも見せるようにしています...

さ：だからヒメナ勇気あるんですねと言いました。私も見せたいけど...

私その時何も言わなかったけど色々な事を考えていた...今までいた友達との関係を思い出しながらさえりさんの言葉にあわせていた...やっぱり今まで私の中にあることを見せようとした時に最後に良かったと思った人もいたが逃げちゃった人や私の中を見てから嫌と思った人達もいるからやっぱり怖い！！！！今までそう言う経験がたくさんあったが、今から見せないと思ったことがない！！...どうしてだろう...勇気？それではないと思う...私には友達はとても大切だからいないとつらい...

### 「友達と恋人の違い」

私：自分の中を知らない人たち親友とか本当の友達と言えないんじゃないですか？

さ：そうだけど...でも...そうだったらヒメナさんにとって友達と恋人の違いは何ですか？

私：恋人？ついぶん違うんでしょう？

さ：でもヒメナさんの話によると同じような意味だと思うんですよ...私にとって恋人には全部見せられると思うんですけど友達には中々見せられないんですよ

私：ええ、それは勇気！！！！私そう言うのは出来ないんですよ...友達には見せられるんだけど好きな人とか恋人には見せられないんですよ...

その時他の人私たちのディスカッションにはいて来ました...でも今までさえりさんとの話についてよく考える、どうして私にとって友達に本当の自分を見せられるのだろう？どうして彼氏とか好きな人に見せられないのだろう...どうしてさえりさんは好きな人とかに見せられるのだけど友達に本当の自分見せられないのだろう？...これも不思議...一瞬文化の違い

いかと思ったけどそれは文化ではなくて人はそれぞれだからだと思う...こういう人間関係は私達の中にあるのだ!!!また私の中にどういうふうに人間関係を出来るのが私達の中にあることを分かった...

冴季さんとのディスカッションから今まで色々なことを考えてみました...今まで友達との関係と恋人との関係を比べたことがなかった...誰に本当の自分を見せるかそんなに深く考えたこともなかった...私にとって恋人が本当の自分を知ってから逃げてしまったら本当につらいや怖いと思う...でも友達を無くすのも怖い...どれの方が怖いか言えない...どちらも怖い...それを言うと恋人と友達の区別ないことになるかもしれないけど私の中にある...言葉で表すのが本当に難しい...私にとって両方とも大切...多分同じように大切だけど気持ちは違う友達とはもっと自由な関係が感じられると思う、例えば友達何人いても大丈夫だしそんなに嫌な気持ちにならないと思う、それにそのせいで関係をやめられないと思う...でも私の考えには恋人一人しか出来ない...何人も出来ることは出来るけど本当に愛があったら凄く嫌気持ち出来ると思う...

### 3 . 結論

このレポートを書き始めた時と同じように友達は不思議なことであると思っているがこの三ヶ月の間色々なことを分かって来た。

何が不思議か少しでも分かって来た、知り合いから友達になる瞬間が一番不思議なことである。

誰と友達になるかももう不思議なことである...色々な努力をしてもある人達と違ってとおりには仲良くなれない場合がたくさんある、それと別に友達になりたくなかった人と知らない内仲良くなれる...それを考えるとやっぱり人間の中にどういう人と仲良くなれるか決めであるかもしれない。

友達を作るには勇気は大切ということが分かったなぜかという友達を作るには本当の自分を見せられなければならいので逃げてしまう可能性がある。

それと初めて友達との関係と恋人との関係を比べました、最初言葉でどういうふうに違いを説明をすればいいか分らなかったが色々を考えたあと違いが関係ではなくてどういう気持ちを感じるかである。

### 4 . 終わりに

このレポートを書き始め時と今の私の友達についての考え方がずいぶん変わっている、最初友達について書こうと思った時に友達がいつもそばにいるから私の近くにはそれしかないと思ってそれについて書くようになったけれども少しづつ友達について色々なことを考えて来た、今までそんなに深く友達について考えたことはなかった。グループの時とかグループの皆から色々なことを聞いてディスカッションをする前にも色々なことを考え始めた...その時から友達は不思議だと思い始めた...ディスカッションを始めた時エレナさんと色々話

しながら色々なことを分るようになった不思議なのは友達になる瞬間だ！と思い始めた...  
さえりさんとのディスカッションからも色々なことを習った、人はそれぞれ...文化一緒でも  
違って考え方や感じ方が違う...それとこの二つのディスカッションからとても大切なこと  
に気がついた...私達は人間であるが私たちには人間関係を言葉で表せないこと...自分の外  
のことが言いやすいかもしれないが自分の中のことを人にきちんととした正しい言葉で表  
せたくても表せないことに気がついた。

# 趣味について

イワン・ロガチェフ

## 1. はじめに（動機と仮説）

## 2. ディスカッション

## 3. まとめ

### 1. はじめに（動機と仮説）

「一体どうして人間がこつこつ様々な趣味を考え付いているのか？」ということについて一度ならず考えを凝らしたことがある。大体の人には趣味か或いは好きでしようがないことかどちらかが必ずあると思う。もちろん、「あなたに何かの趣味があるかい」という質問に「いや、一つもないよ」というふうな答えをする人が出るかもしれない。しかし、こんな人たちにさえ趣味がなくても、いつかの興味があるところがきっとあると思う。何せ人間というのはどんな無関心な態度をとっているにしろ、とにかく人生、すなわち自分の存在に対して興味を持たざるをえないだろう。

但し、私の意見では十人並みの興味より趣味の方はよっぽど強い現象である。このテーマをなぜ選んだかということに興味と興味との意味の違いを把握したいからだ。皆さんもこの微妙な差をちゃんと掴めるようこの二つの単語の意味がどう違うのかを一生懸命に説明してみよう。

つまり、小さい時に車に熱中して、ミニ・カーや車を対象とする雑誌などを収集したり、大事にしたりして、大人になって、本物の車に対してなんかかかんとか興味を持ち続けても、前のように拘らないし、自分の車さえを持っていない。言い換えれば、子供時代の趣味はもう去ってしまって、車に関する興味にすぎないものになってしまった。

ところが一方、幼い頃から色んな運動をやったりして、スポーツが好きでたまらないと言っても言い過ぎじゃないと思う。けれども、「スポーツが好きだぞ」と言えば、テレビでスポーツ番組を見ることより、自分で運動をやる方が好きだというものを指している。2年前空手道に物凄く熱中して、自分の趣味として殆ど毎日精一杯練習していた。最初空手道に対して興味しかなかったが、や

ればやるほど色々な技術や能力などを身に付けるに連れて上手になったし、相手と戦いながら「よく出来たぞ」と考えて、技術的に進歩していた。この例から見れば、興味と趣味とのそれぞれの相違点が明らかになるかもしれない。大体、趣味を持っている人には新しい知識、能力、芸術、こつなどを身に付けるチャンスが多い。

しかし、こういう説明に基づいたら、いくつかの逆説が生ずる可能性がある。例えば、私は日本と日本語に興味があったのが切っ掛けとしてモスクワ大学に入って、日本語を習い始めた。だが、日本語の文法、漢字、敬語の使い方などの勉強を通して新しい能力や知識などをたくさん身に付けても、「日本語が私の趣味だよ」と一切考えられない。もちろん、それは「運動をやるのが楽しいけど、日本語の勉強がいやだ」というわけではないが、私の場合には日本語が趣味じゃなく、将来としていい仕事に就く手段の一つではないかと思う。なぜならば私にとって趣味というのは、生活を楽しませたり、もっと面白いものにしたたりするものと強く連想しているからだ。纏めて言うと「興味」と違って、「趣味」という単語はずっと好きなことに熱中する様子を指しているのではなからうか。

## 2. ディスカッション

目次：

- 1 . ディスカッションの相手と理由
- 2 . ディスカッション施行日時
- 3 . ディスカッションの内容
  - 3 . 1 趣味と興味はどう違うか
  - 3 . 2 最初は興味 後は趣味
  - 3 . 3 趣味の基準は何かあるか

### 1 . ディスカッションの相手と理由

ディスカッションは同じNSPの授業に参加する牛窪さんと「物語」のダッグさんをお願いした。授業中牛窪さんから趣味について色々質問を出してもらって、私のとそうとう違った趣味と興味の捉え方を示してもらったからディスカッション中その二つをどう区別すればいいのかしっかりと意見を交換しようと思って、ディスカッションの相手をお願いした。もう一人のダッグさんは「ゴルフについて」のレポートを書いた上でまさかゴルフはダッグさんの趣味じゃないか、またダッグさんは趣味をどう捉えているのかと考えて、彼とディスカッショ

ンするようになった。

## 2 . ディスカッションの施行日時

ディスカッションは12月6日の3時限目で、14号館5階の510教室で1時間半程度行った。

## 3 . ディスカッションの内容

趣味について三つの問題点を巡って、ディスカッションするようになった。最初は牛窪さんとダッグさんをディスカッション相手にして、趣味と興味はどう違うかについて話し合った。その次に趣味と興味とどちらが最初にあるかについて牛窪さんと話してみた。最後に趣味にどの基本があるかそれとも頻度を趣味の基準として考えることができるかどうかというのは話題になって、それについて牛窪さんとダッグさんの二人としっかり意見を交換した。

### 3 . 1 趣味と興味はどう違うか？

牛窪：僕だと趣味と言われると映画を見るとか、後お酒を飲むとか大体そういうことですが、イワンさんには趣味と興味が何かありますか。

イワン：ええ、両方ともありますよ。趣味はスポーツで、それと興味があることもたくさんあります。

牛窪：イワンさんは趣味と興味をなんとか分けるのですか。

イワン：ええ、私の考えで趣味と興味がどう違うかという趣味っていうのは何かの好きなことをずっとやる様子を指しているけど、必ず面白くて楽しいものです。

牛窪：そうですか。やはり趣味と興味はどう違うのかと聞かれるとなんかこうはっきり区別できないかもしれないけど、多分今まで考えたことはないでしょう。それと趣味と興味を分けるというイワンさんのレポートを読んどいて、興味は趣味より必要がないみたいな感じがしたけど…。

イワン：いや、違うと思います。つまり、興味と趣味とはどっちが大事かという問題じゃありません。その二つを対比すれば興味の方はもっと広い意味をしているかなと思いますね。例えば、ある人にいくつかの興味があって、その内に必ずしも趣味が入っているわけじゃないのです。だから、ある意味で趣味は興味の頂点だと言っても言い過ぎではないかもしれないのです。言い換えれば興味より趣味の方は微妙で、細々としたものだと思います。



牛窪：成る程ですね。でもここで日本語が趣味じゃないって書いてあるけどそれはどういう意味でしょう。

イワン：そうですね。私の考えでは日本語って趣味より大事で、真剣に捕らえなきゃならないのです。どうしてそう思うかというともし日本語をちゃんと勉強しないと将来としていい仕事に就けないし、いい生活にならないからです。また、日本語に一切興がなければ、勉強がうまくいくのは全くあり得ないでしょう。だから、日本語と日本に興味があっても「日本語が私の趣味ですよ」と全然言えないわけです。興味は趣味と違って必ずしも楽しいものじゃないです。

趣味と興味の違いについて牛窪さんから十分に質問されて、どうしても意見が一致しなかった。やはり一番目に見えるのは牛窪さんが趣味と興味をあまり区別しないことだ。もしかしたら牛窪さんになんとかの分け方があるかもしれないけど、彼はそれをはっきり意識せず「今まで考えたことない」というふうに述べた。それに反応して私は趣味と興味をちゃんと分けるし、それぞれの相違の例を続々挙げる。要約して言うと趣味は微妙で、細かいものを指し、興味は一般的概念しかない。終わりに動機の最後の段落で書いてある「日本語が私の趣味じゃない」のについても質問された。私にとって日本語がなぜ趣味として考えられないかという趣味より大事で、楽しいものじゃないからというふうに説明してみた。

イワン：ダッグさんは趣味と興味を分けますか。

ダッグ：いいえ、分けるというより一緒に考えていますね。

イワン：例えば、ダッグさんにはあらゆる興味のあるところがあるけど、その内は一番好きなこと、つまり、趣味とされるのがありますか。

ダッグ：実はイワンさんのように趣味と興味をなんとか区別しているけど、その区別とは何かと聞かれるとうまく説明できないかもしれません。私は趣味って何ですかと聞かれたら先ずゴルフが好きだし、多分テレビを見るのも好きで、それは趣味ではないかと思います。やはり趣味をやる時にいい気持ちになって、幸せな時間を過ごせるという気がするのですよ。

イワン：そうですね。こういう点で私たちの意見は一致するかもしれませんが、私もいつも趣味は何ですかと聞かれるとやっぱり気持ちがよくて楽しいものに違いないと思います。

ダッグさんは牛窪さんのように趣味と興味を分けるというよりむしろ一緒に考えているようである。彼になんとか区別がきつとあるけれど、その区別って何かと聞かれるとうまく説明できないはずだ。一方、ダッグさんと一致したところは趣味が興味と違って必ず気持ちが良いくて、楽しいものである。やはり好きなことをやればやるほど楽しい時間を過ごせるのは言うまでもないことだろう。

### 3.2 最初は興味 後は趣味

イワン：何の興味もないと趣味にならないと思わないですか。

ダッグ：多分最初は興味から始まって、例えば、映画とか音楽の場合には段々見るようになって、段々音楽を聞くようになって、趣味になっちゃうのです。けれども、趣味はたった一つしかないとかじゃなくて、人間って色々するのじゃないですか？だから、暇がある時に何をしているとか何が凄く好きだとか私にとって趣味だと思います。イワンさんの意見とある程度似ているかもしれないけど、それに趣味と興味のことをどう考えればいいのかちょっと違うと思います。

イワン：やっぱり最初は興味があって、好きなことをやればやるほど段々趣味になっちゃうっていうダッグさんの考えと全く賛成します。前私も空手道に凄く熱中して自分の趣味として殆ど毎日練習していましたけど、最初はやっぱり興味しかなかったと思います。

ダッグ：ええ、確かにそう思いますね。

ダッグさんは私の意見を大体同じくしているようだ。彼も興味を趣味の動機とかいわゆるスタート・ポイントとして いるし、興味がなければ趣味にならないという私の意見とそっくりだと思う。

### 3.3 趣味の基準は何かあるか？

牛窪：イワンさんは回数に強調しているのですが、要するに趣味と興味を分ける主な基準はどれぐらい好きなことをやるのか、つまり、半年とか一年にどれぐらいやるのですか？決まりとか何かありますか？例えば、もう一回はやらないともう趣味にならないという限定がなんかあるのでしょうか。

イワン：もちろん、そこまでは行かないですけど、私にとって趣味と興味の大きい違いの一つはどれぐらい好きなことをやるのか、つまり、頻度が

見逃せないものですが、趣味の唯一の基準じゃなくて、それより継続性が大事だと思います。ダッグさんにとって頻度は興味と趣味を分ける基準にならないでしょうか。

ダッグ：そうですね。頻度か？前は一度考えたことはなくて、今はちょっと考えを纏めなきゃいけないかもしれないんですけど、簡単にいうと私にとって趣味というのは何回ぐらいやるのじゃなくて、どれくらい好きかという基準があるのですけれども。それは週に何回見るとか、週に何回聞くとかが趣味の基準じゃなくて、暇のときは何をするのかということなんです。

牛窪：後はイワンさんになんか趣味の基準がありますか。

イワン：「スポーツは私の趣味ですよ」と言うとテレビでスポーツ番組を見ることより自分で運動をやるのが好きですっていうのを指します。例えば、2年前は空手道をやり始めて、やればやるほど色々な技術とか能力が身につけるに連れて上手になったし、相手と戦いながら「よく出来たぞ」と考えて、技術的に進歩していました。そう言えば興味と趣味とのそれぞれの相違点が明らかになるのじゃないですか。

牛窪：だって音楽を聞くのは趣味として考えられないですか。それとサッカーを見るのも趣味と言えないのですか。自分でやらなくても好きなサッカーチームのユニフォームを着て、サッカー所に行って、試合を見る人にとってサッカーは趣味か興味かどっちだとちょっと分からないですけど…。

イワン：それは興味じゃないですか？

牛窪：興味か？やはりイワンさんの考えでは自分でやらないと趣味にならないでしょう？

イワン：そうです。というのは趣味って継続的に好きなことをやって、途中で新しい知識とかコツを身に付けて、技術的に進歩していることだと思います。ここは趣味と興味とのもう一つの大きな相違が潜んでいるかもしれません。

牛窪：僕はそう思わないですね。例えば、何かバンドが極好きで、そのコンサートに行って、そのコンサートの音楽を聞くけど、自分はギターを弾かないという人にはそれは興味か趣味か？例えば、ギターが好きだけど、ギターは弾けないとかそういう人はいるじゃないですか。料理は好きだけど、自分で料理を全く作れないとか凄く苦手だとかこういう人たちにとってそれは興味か趣味か？

イワン：興味ですよ。もしそれは本当の趣味だったら自分で料理を作れるようになってっちゃうのじゃないですか。というのは物凄い興味があったら何

回も料理を作ってみても結局うまいくいのじゃないですか。その反面料理に興味がある人は自分で何も作らなくて、他人はどう作っているのかを見るのが好きな人か或いは他の人に作られた飯を食べるのが好きな人とか。色々ありますよ。こういう人たちは料理に興味を持ってても料理が彼らの趣味だと言えだと思えます。

ここでいくつかの趣味の基本について話してみても、また牛窪さんのと食い違う意見が結構出てくる。例えば、私の考えで趣味は必ず自分自身でやらなくちゃならないものである。もし自分で極好きなことをやらないとそれは趣味じゃなく、興味にほかならない。しかし、牛窪さんには反対の意見がある。例えば、ある人は料理が極好きだけど、自分で何も作れないほど苦手だ。牛窪さんは料理がその人の趣味だと主張しているけど、私はそれと賛成できない。本当の趣味は料理だったらその人は日々一生懸命練習して、かつかつ身に付く技術を一層洗練して、結局うまいくいだろう。自分で料理を作れないなんて趣味じゃなく、料理に対する興味しかないだろう。例えば、他人が何を調理しているかを見るのか或いは他人に作られた料理を食べるのが好きだとか。この例を見ると私たちの意見がどう違うのかがきつと分かりやすくなるだろう。

次は牛窪さんとダッグさんと継続性を指している頻度、つまり趣味になるようにどれくらい好きなことをやればいいのかについてしっかりと討論していた。そうすると意見がまたまちまちだった。恐らく2人とも頻度を趣味の基本として到底考えていないだろう。反対に趣味にどういう基本があるかと聞かれると頻度を言及しないわけにはいかない。もちろん、頻度は趣味の唯一の基準じゃないけど、見逃さないほうがいいと思う。

### 3. まとめ

牛窪さんとダッグさんは趣味をあだこうだとして、随分違った意見を相次いで述べた上で、自分自身の考えは正しいかどうかあるいは何かのあやまりに陥ただろうかと色々考えを凝らした。もちろん、人には各々違う意見があり、ディスカッション相手の2人は私のレポートの要点をちゃんと掴めて、鋭い質問をたくさん出して、結構役に立ちそうな感想を述べた。それを全部頭に入れて、多分いつか自分の考えを変更するだろう。一体趣味というのはなんだろうか。終わりに自分の意見をもう一回きちんとまとめたいと思う。趣味は我々の人生を楽しくて、面白いものにする。また趣味を持っている人には新しい知識、能力、こつなどを身に付けるチャンスが多い。興味の頂点である趣味は微妙で、細かいものを指し、それと違って興味は一般的概念に他ならない。



# 私の運命について

朴 恩慧（ウネ）

## 《目 次》

1. はじめに
2. ディスカッション
  2. 1 運命の存在を信じるか
  2. 2 宗教的運命観について
  2. 3 運命について個人的な体験
  2. 4 運命をどう理解するか
3. 結論
4. おわりに

## 1. はじめに ー動機ー

運命とは人間の意志に関わりなく身の上をめぐる吉凶禍福、またはそれをもたらす人間の力を超える作用と言う。人生は天の命によって支配されているという思想に基づいて将来の成り行きとも言える。私がいつも気遣わしいものである。仕事がよくなる時、自分のせいではないと思いたい時にそれが運命だと信じたがる。

あなたは自分の運命というのを信じますか。

私は子供の際に私がしたいことなら、自分の意志によってなんでもできると思った。自分の人生がもう決まっていることなんか全然考えもできなかった。ところが年をとりながら思ったとおりのまくならないのが世の常だということを知った。私の家は昔からキリスト教としてイエス以外のことを盲目的に信じ込む思想は迷信だと思うほうである。このような環境で育ったが、なんとなく私の人生が自分の意思とは関係ではなく、何かによって左右されるのではないかという気がする時がある。

日本語を勉強するようになったこと、今日本にいること、そしてこの授業のこの組に属していること、この全部が私にはもう決まっていた私の運命の一部ではないかという考えをして見た。

ところで、日本に来る二ヶ月前に突然事故のために体の具合が悪くなった。日本へ来ることでどきどきしていたのに、来られないかもしれない状況であった。幸いに現在こんな

にみなさんと向き合っているが、ひょっとするとこのようなものも運命だと言ってもいいだろうか。とにかく今まではそれが私の運命だから来るようになったと思った。

しかし、運命に従うものが決して貴い人生だとは言えないだろう。自分の意志で何かして見たい、もう運命のせいだけをしているしかない。入院している間、私について省みる時間を持つようになったと思う。早く退院するのを切に願ったものもあったが、失敗しても何かに挑戦することができる勇気がある私になりたいとも思った。やはり何かに挑戦して、その結果において成就感を味わえるものがもっと大切なものではないか。

このごろ「運命の彼氏（彼女）にいつ頃会うことができるだろうか」という話を友達からよく聞いている。大体の人々もそう考えているかもしれないが、未来のことは誰でも知りたいものである。まだ起きていない未来のことを運命だと言いながら生きていくだけであるものではないだろうか。私にとって運命とは以前の運命については後悔しても仕方がないが、未来の運命は新しい出発点から開拓してみたいものである。

## 2. ディスカッション

### 【ディスカッションの相手と選んだ理由】

\*カンさんー同じNSPの授業に参加。彼のレポートのタイトルは「歴史と人間」。運命については「僕は昔から運命についてたくさん関心があった。」と話したこともあるし、私より年上の方として人生についていろんな経験があるだろうと思った。彼の意見を引き受けるとまだ自分がわからない分野に接することができると思い、ディスカッションの相手をお願いした。

\*牛窪さんー同じNSPの授業に参加。授業中に牛窪さんからの運命についていろいろな質問をされて、彼の意見を詳しく聞きたくてディスカッションの相手をお願いした。

\*星野さんー同じNSPの授業に参加。彼女のタイトルは「大気のおいをかぐことについて」。レポートのなかにポジティブになれるためににおいをかぐ行為が必要だという述べている。私のテーマについて関心を見せてくれた彼女の意見を聞きたかったし、彼女が述べている前向きで生きることと私の運命に対する考え方が関連されているものではないかと思って、ディスカッションをお願いした。

これから運命について四つの項目について述べようとする。まず、運命の存在を信じるかどうかについてディスカッションの相手全員に聞いてみた。それから、自分が動機において述べたようにキリスト教で話す教理に関わってディスカッションの相手と話し合った。次はディスカッション相手の運命の経験とか体験があるのかについて聞いてみた。最後は今まで話し合った運命を、どういうふうに理解するといいかについてまとめてみようとした。

## 2. 1 運命の存在を信じるか

ウネ：人間は人生を生きながら様々な接するものをたぶん運命だと信じるものではないでしょうか。もう決まっている自分の運命というものがあると信じますか？

カン：私は運命が存在しないと思います。私にとって運命とは前もって決まっているものではないです。

ウネ：その理由は何ですか。

カン：運命というのを人間の尊厳性のほうで考えてみると、人間というものは誰でも等しいものです。お金持ちの両親の下で生まれて、お金持ちとして生きながら長寿する人もいるし、貧乏な家で生まれて一生を貧乏に生きて行く人もいるでしょう。では、そんなものが始めてから決まっているものなら、あまりにも不合理ではないかと思います。それから、もしそうだとすると人生の意味がないでしょう。やはり人間の尊厳性の問題と、または自分を省みる時に、自分の人生がもう決まっていることなら生きる意味や能力する意味がないものではないか。そんな意味で運命が決まっていなとは言えないけれども、せめて決まっていけないと信じています。

ウネ：カンさんの話によると、「運命というものは必ずない」ということではないですよ。言い換えると、完全に否定するものではなくて、運命の存在は確かに分からないけれども、運命が決まっていはならないものだという意見でしょう。それは運命を否定するものではなくて、信じたくないことでしょう。

運命が自分の意思とは関係なく、もう決まっていたということについてどうにも拒否感が出るようである。運命は必ず存在しないものではないが、信じたくないときがあるだろう。逆に存在しているけれども、その存在を信じたくないものではないだろうか。初めから、尊厳性の問題が出でしまってこのレポートがちょっと重くなるものではないか気になっている。次は牛窪さんの話を聞いてみた。

牛窪：運命という考え方はあるんですけど、運命の存在はないと思います。運命というのを信じていません。

ウネ：どうしてですか？

牛窪：運命っていうのは結局その物事の考え方～？それをどういうふうに考えるか…こうすればこうなるとか、そういう考え方か見方が言うだけだと思いますよ。そう考え方をしているから、そう言っているだけです。

ウネ：それが運命だというから運命だったんですかって言われると、そう考え方



をしているからそう言っただけですって…それが運命だと考えるから運命？

牛窪：そうそうそう、だから、そのものはないですよ。ね、だから一つ考え方が運命～。

自分なりの考え方というのはもちろん誰にもあるものである。自分なりの考え方でこれは運命だと判断すれば、それが運命になることができるものであるか。世の中には一般的には理解できない部分や奇跡が数多く起きている。でも、その全部は人間の考え方だけで説明できないときがある。ある物事を眺める考え方か見方かという自分の立場ではなくて、そもそもあったこと、それで人間の言葉では説明できないもの、それを運命だといってもいいと思う。自分の意見とは全然違って、運命を考え方だという牛窪さんの意見はとても面白かった。

私はなんだか迷信のきがする占い（未来の吉凶を判断する）や運命について興味があった。では、ディスカッション相手の宗教観や宗教で話す運命をどういう考えをもっているのかについて話し合った。

## 2. 2 宗教的運命観について

カン：キリスト教では運命というものを認めていないです。運命っていうものは個人の能力によって違っていくものです。キリスト教の教理は熱心に頑張っていて生きると神様から福をもらったり、逆にそうではないと地獄に落ちたりするものです。神様の救いにとって、あらかじめ救われるか救われないかが決まっていたという、とても不公平ではないでしょうか。やっぱりキリスト教では人間の運命は決まっていないものです。

ウネ：結局キリスト教では人間の運命は決まっていないものです。でも、たぶんキリスト教ではその思想を信じないと天国には行けないというふうにいわれます。個人的能力の問題ではなくて、盲目的だとしかいえません。

私はキリスト教で育ったが、キリスト教の教理を信じないと天国には行けないとか、信じて天国に行けるようなキリスト教の二分法的な論理は今も賛成できないものであった。キリスト教で話す個人の運命もそのまま能力だけでは得ることができないものではないか。

牛窪：私は運命とか宗教というの信じてないですよ。

ウネ：その理由は？

牛窪：その宗教とか運命とかを信じるといいこともありますし、考え方も強くなるし、いいこともあるでしょう。でも、逆に悪いこともあるらしいです。そうじゃないことをそうだと信じるために使ったりとか、で、自分が強く信じちゃうとほかの人がほかのを言っているときにそれが見えなくなっちゃう。

人間というのはもともと弱い存在であるものではないか。それで、自分がなにかに寄りたから、神様や宗教を信じることだし、あるいは結婚の相手を探して、自分の家庭を作って一生を頼りながら生きて行くものであろう。ただ、どんなものでも自分の人生を代わってくれるものではないことを忘れてはいけないものである。

私は、今私の両親の下で生まれたものやいい友達と付き合ったこと、または日本にいることなどを運命ではないかと考えてみた。『五体不満足』の著者である乙武氏の奇跡のような経験はないが、私の人生を振り向くと人々との出会いや場面を全部自分の努力の結果などで説明できない部分があると思う。そんな説明できないものは全部自分の運命だというしか言えないだろう。すくなくともそういうふうに言ってもいいものではないか。

次はディスカッション相手の運命の体験について聞いてみた。

### 2. 3 運命について個人的な体験

ウネ：私は、なんか、したいものがよくなならない時があると、それが私の運命だと思っちゃいます。自分のせいではないって思いたいとき、そのままに信じ込んでしまいます。

カン：自己を合理化するためにそう考える人がいるかもしれないですね。

ウネ：もしね、私が日本語の勉強を始めたことや、今日本にいることも全部、もう決まっている運命の一部かもしれないですよ。運命だと感じた経験がありますか？

カン：私の話ではないけれども、妻の話です。妻は結婚する前である29歳の際に結婚についていろいろな考えをしたといました。でも、私に会うすぐ前に夢の中で私と似ている人とデートする夢を何回か見たといました。それで、私に会ってから、ただ一目惚れではなくて、なんか会えば会うほど私に心をひかれたといました。とにかく、妻はそういうものが運命だから私と結婚したものではないかと思っているって話しました。

運命の経験というと、まず素晴らしい奇跡が起きたものを思い出しやすい。または運命の彼（彼女）と出会ったこととかのように、周りでたびたび起こっている物事である。あまり大きく考えなくてもいいものだと、せめても私はそうだと思っている。

牛窪さんと星野さんは運命の存在を信じていないから、運命についても経験がないと話した。

次は今までのディスカッションを通じて、私が話したい運命についてディスカッション相手や自分の考えの変化とかをまとめてみようとする。例えば、運命的にだれかと出会ったという、それは偶然であるか必然であるか。偶然に出会った人と何回も繰り返して出会ったという、これは偶然だとは言えないだろう。牛窪さんは運命というのは偶然だと話した。ここで、突然思い出したのが因縁という言葉であった。因縁というのはものごとの生じる原因として、因は直接的原因、縁は間接的条件を言う。または因と縁から結果が生じることとして、転じて、定められた運命だとも言う。運命の範疇の中でこの因縁と偶然が入っているものではないかと聞きながら、ディスカッション相手と最後のディスカッションをした。また、ここでは星野さんとのディスカッションを通じてまとめてみようとした。

## 2. 4 運命をどう理解するか

ウネ：人と人が出会ったことは、普通因縁だと言うんでしょう。その因縁っていうのは運命の中にあるものではないかな…

牛窪：因縁っていうのは偶然だと思います。

ウネ：偶然だっていうとそれは自分の意志ではなくて、ただ偶然、なんか、あの、どんな意味を含めていることではなくて、因果関係もなく予期できないこと、それを表現することですけれども、ある人は運命によって会うことに決まった、あるいは、偶然に出会ったというふうに表現できるでしょう。

牛窪：なんで、運命というのをないと考えたいかというときさっき言ったみたいに、運命があるって言うと、あのう、変えられないみたいじゃないですか。しょうがない…偶然だったらどちらでも変えられる道…

ウネ：そうか。どうして？

牛窪：そのときに自分の偶然という考え方で変えられるわけだから、…あの、これが運命だ思っちゃうとちょっと重いし、考え方としてだと、ほかのことが頭に浮かんだときに「いや、それ運命じゃないか」というふうになっちゃうから不便になる…

偶然！因縁！運命！ある人との出会いが偶然だとすると、その出会いが何度も繰り返すときに、それも偶然だとは言えない。表現の差と考え方の差という違いはやはり多いものであった。しかし、因縁を大切にする人には偶然という表現よりは運命がもっと気に入るだろう。私も因縁を大切にする人である。

ここで、私の運命について今までの考えのようにはちょっと無理があるものではないかと思ってみた。まず、運命は存在するものだという考えは変わらなかった。でも、運命がもう決まっているものだという考えが少しずつ変わっている。星野さんとのディスカッションを見てみよう。

星野：運命は決められているものって言うてたんだよね。そうするとウネは全然きめられっては思いたくないんでしょう。自分の力でもどうにかできるって思いたいたよね。未来とか将来…そうすると運命の定義は矛盾してるんじゃない？

ウネ：だってさ、星野さんの意見は決められているから、なんか、変えられないって？

星野：でも、変えられるって思いたいたいんでしょう…将来。そうしたら、運命ないってことなっちゃうじゃん。だから、そこで矛盾になっちゃうから私がなんか聞いた、あそこおかしい…。で、結局、その占い言ったときみたいな、その運が悪いとか運の波があってチャンスがたくさんあるとか、ないって言うのだったら分かるその定義だよ。

ウネ：その私が話した運命のながれのなかで小さいとか大きいなんかを変えようって言う部分が、ちょっと理解できない、分かりにくいって？

星野：うん、だから、矛盾だと思う。だとさ、運命はもともと決められているものって言うのがあるでしょう。でも、全部決まっているわけじゃなくて、大きい流れが決まっているから、その中で小さいことは変えられると思う？変えたい？

ウネ：変えられるかどうかは分かんないけど変えたい。

運命をどう理解するといいかについて、私は最初決められているのをもう変えたいものだと言った。でも、その定義だとすると私の定義自体が矛盾になってしまうことだという話が出た。私が話したかった運命だというのは、人生を生きながら人々がよく話す運がいい、運が悪いという意味にもっと近づいている。それで、自分の能力や努力だけではありえないし、できないものについて、その運命だというのはやはり存在するものではないかと思っている。そして今もその考えは変えていない。だが、決まっているものよりも天によって支配されて、時々自分の力でもしょうがない場合には運命だといってもいいものではないかと思う。

では、ある人との出会いは縁であるか、または偶然であるかに関することについてはどう考えればいいのか。次の対話を見よう。

星野：縁があるとか運命っていうのは後から言うことと思うの。なんか、あの人と出会ってどうして何回も出会うのか分からない…。これはありえないっていうか、逢う可能性が少ないところで何回も逢った、それは変なありえるんじゃないかなっていうのは…思いたいから思えばいいんじゃない。

ウネ：思いたいからそういうふうに思うとするとそんなのも考え方って言えるの？

星野：運命だけだな、だって一回逢ってもこの人運命だって思うことができるじゃない…だって、すごくそのことが自分にとって大きくて、なんか、その運命決まっていることぐらい特別な意味を持たせたかったら運命って呼ぶじゃない。

ウネ：多分、人との出会いで運命的っていうと、なんか、いいイメージとか自分がそういうふうにいいたいから話す感じがもっと強いかな？

星野：私はその気がするの。

ウネ：やっぱりいやな人にはそんなに言わないかな。運命だっていう…

自分に関してそんな分からない力とか説明できない部分はもちろんある。ところが、先に言ったように自分のせいだとは考えたくない時や、他人との出会いについて話す場合には、主観的に判断してそういうふうにいいたいから運命だと話すかもしれない。それは、言いたいどおりに、または考えたいどおりに、自分の意志や意思に関するものだと思った。

### 3. 結論

運命というのはなんだろう。ディスカッションを通じて、私にとって運命に関する考えはあまり変わっていないが、運命に対してもっとも前向きになったと思う。

運命の存在についてディスカッション相手の全員に聞いてみた。運命というのがもう決まっているものではないかということについて、全員拒否感があるようであった。「決まっている運命がある」というと自分の力ではなにもできないし、自分がそれを選べないものである。自分の生まれた国や両親や性別などは多分努力しても変えられないものだろう。しかし、運命が決まっているものだというよりも天によってなにか作用をされているものだという理解できるようになる。

それから、なにかに寄るために宗教を信じることや、何かがよくなるかとき運命のせいをするなど、もともと不完全な人間の本性だといってもいいだろう。

ディスカッション相手の全員は運命について経験がないと答えているが、私は、みんなが運命を経験できなかったから、そういうふうに答えたというより認識していなかったと思う。運命という意味付けだとも言えるかもしれないが、先に述べたように、私が同じクラスのメンバと出会ったことも運命だといってもいいし、人と人の出会い、つまり、縁と

いうのも運命の一部分だと思う。全員運命を信じていないし、または信じたくないかもしれない気がしたが牛窪さんの運命は偶然だという考えはとても面白かった。

もしかして、運命がもう決まっていたというとなんな努力でもしないかもしれない。私の意志によって今まで生きてきたとも言えるし、ただ、どんな分からない力かによって生きてきたといってもあまり巨否感はない。この人と出会ったのは大事なことだと思いたいから運命だと言ってもいい。運があるか運がないか、特別な意味があるか意味がないかということも、やはり運命だと思いたくなるかもしれない。ここで、星野さんは運命がもしもう決まっているものなら運命を変えたいという私の考えが矛盾になってしまうから、運がある、運がないというとなん得できると話してくれた。

だが、自分が最善の努力をしていい結果や満足する結果が出たという、自分の運命を望ましい方向で引いたものだろう。私の努力にもかかわらず悪い結果だといっても、ほかの方向を探して行かなければならないものである。人間の限界というのは当然あるものだし、どうしてもできない部分もある。そういう意味で運命が決まっているか天によって支配されているのかにかかわらず、自分自身は自分の運命を望ましい方に変えるのが最善だと思う。最終的に、私にとって運命は私が人生を生きながら直面する現実や障害において挑戦すべきものである。

#### 4. おわりに

この「私の運命について」というレポートを書きながら、私の人生をつくづく振り向ききっかけになった。レポートのテーマがちよっと重いものではないかと思って重くならないようにしようと気になった。それで、運命の体験とかを入れるといいと思ったが、ディスカッション相手の全員は経験がないと答えてくれて、どういうふうに書くといいかについていろいろ大変だったこともある。しかし、ディスカッションをしながら、このレポートを書いたのは自分には忘れられない思い出になるだろう。

「赤きは酒の咎」ということわざがある。顔の赤いのは酒のせいでは自分の罪ではないと言うことで、過失を他人のせいとする意味である。今まで私はなにかがよくなるに、このことわざのように自分のせいではなくて運命のせいをした。運命は存在しているという考えは変わらなかったが、私が生きていかなければならない未来に対する自分の視覚がもっと明るくなったと思う。それで、運命のせいではなくて、いずれにしても私は運命を開拓したいし、挑戦すべきものである。

最後に、NSPの人たちと、「私の運命について」に対してアドバイスして下さった「FUI」の人たち、そしてディスカッションして下さったカンさん・牛窪さん・星野さんに感謝したい。

## 読書について

ヤコブ スキュット イエンセン

### 目次

- 1 .) 動機
- 2 .) ディスカッション
- 3 .) 結論
- 4 .) おわりに

#### 1 .) 動機

読書は私にとってどんな意味を持っているのかということについて書きたい。若いころから、ずっと映画を見るより何かを読むことが好きだった。私はもちろん面白い物語を満喫するが、読むことで人の日常に表面に出てこない考えに近づくことや、人生に対していろいろな反応を読むことができるのは読書の魅力だと思う。

例えば大江健三郎を例として取ってみよう。大江の息子は知的障害者だ。このことは大江の執筆に大きい影響を与え、幾つかの小説にそのテーマ（知的障害者の赤ん坊か子供というテーマ）を使った。個人的な体験という小説はお父さんになったばかりの人の話に回っている。主人公は生まれたばかりの知的障害者の赤ん坊に対してどう考えるか、どう反応するかということが語られている。主人公は最後に赤ん坊を殺す代わりにその存在を認めて育てることにする。でも、大江は別の小説には主人公に赤ん坊を殺させてその行為の結果を検討する。つまり、作家は自分の無意識に押さえている自分のほかの側面を検討して、そしてそれによって私たちの無意識に隠されている、よく知らない側面を表面に引き出してくれる。

小説は自分と違う生活スタイルや考え方を紹介し、普段そんなに気づかない日常のことを自分と違う角度から照らす。その一方では、もし本に私と同じ状況や体験があったら読んで面白いとも思う。その上、ほかのいいところは、作家はニュースとか、ある出来事を取り上げ、テレビや新聞と違って自分の感想を入れて書くということだ。例えば三島由紀夫の「金閣寺」という小説は実際の出来事に即している。主人公は金閣寺を燃やす。これは確かに共感しにくい行動だが、三島は主人公の意識にもぐりこんでその人の論理を想像してみて、読者を主人公と共感させるくらいまく書く。というのは金閣寺を読んで、一時的に他人の身になり、世界を新しい目で見られる。

本のない世界は荒涼とした世界だと私は感じるが、人々の読書に対する態度の中に差があ

ると思い、この差についてディスカッションするつもりだ。どうして読むかは相手に向かって一番聞きたい質問だ。暇つぶしだけではないだろう。私は本が自分の家庭教師みたいなものだと感じるから読む。

## 2.) ディスカッション：

ディスカッション相手には谷口さんと三代さんを選んだ。谷口さんは本を読むことについてレポートを書いている。その中に読むとき本の世界に没頭してしまうということが挿入されている。つまり谷口さんも読書に深い関心があるらしくて彼女にディスカッションを申し込んだ。三代さんは文学部を卒業した大学院生なので三代さんの読書についての意見を聞くのが面白くなると思ってディスカッションを申し込んだ。

私は動機で本を読むことと読書が私にとってどんな意味を持っているのかということについて書いた。ディスカッションで谷口さんと三代さんに読書への気持ちを聞いた。

私：私は作家の意見や体験を知りたいから本を読みます。だから本を自分の家庭教師みたいなものと呼んでいます。谷口さんはどうして本を読みますか。

谷口さん：私はほかの世界に行きたいからです。

私：谷口さんの行きたい世界はどんな世界ですか。実際の世界と関係ある世界と関係ない世界とはどちらのほうがいいですか。

谷口さん：関係ないほうがいい。いろいろ悩んでいることがあるから、そこをもっと深く考えるために本を読むじゃなくて、そこを考えないようにするために本を読むんです。

私：その悩みを消すためですか。

谷口さん：消えないんですよ。だから、、、

私：その世界に行って帰る時ほかの世界から何か手段を持って今の現在の問題を解明することはあまりしない？

谷口さん：あまりしない。だから現実の世界から脱出。本の世界にいる間こっちのことを考えなくてもいいですよ。いろんなことを考えて苦しくなっちゃうんですね。悩んでいることの世界だけにいるとすごく、なんか、例えば論文が書けないと思ったらずっとしんどいんですよ。リラックスできない。だからそのために一回その考えないところに行くと気が楽になりますよね。

これは面白い点だ。現実とは違うだけではなく、現実とは関係ない世界のほうがいい。本の世界に入る度に回りのことが解消され、本の中の滞在は一時的に自分の人生から暇をとる機会だ。それによって気分をすっきりさせるし、現実に戻ったらすべてがもっと新鮮に見える。



私：私はその他の世界から何かを持って来るはずだと思いますが何か役立つことはありませんか。

谷口さん：あるかなあ。直接だから、もちろん何かは残っていると思うんですよね。でも今すぐに役立つかもしれないかもしれません。だからあまり意識していない。

現実の世界を本の世界につなげる橋があると思う。それで本の世界へ旅する時、私は荷物を持って行く。行ったり帰ったりする時考えや希望で詰め込んだ荷物を抱いて旅する。一方では、谷口さんは何も持たずに両方の世界をそのままにしておいて旅する。多分私にとってある程度本が道具かもしれない。読む目的は自分のために本を使うことだ。谷口さんの考えは、本は役立つなくてもいいし、誰にも影響を与えてくれなくてもいいし、ということだ。

私：もちろん本の世界から何かを持って来ることができるかどうかは本によって違います。でも谷口さんは現実の世界を見向きもしないで小説の世界に逃げるってどういうわけですか。

谷口さん：逃げるっていうのは自分の気持ちをもう少し冷静にするためにもう一回その世界に行って帰ってくるっていう意味もある。一つのことばかり考えていると小説の世界に行って心が冷静になる。こんなちっちゃなものを考えてて、私は、もっと世の中が広い。

本当にそうだね。もっと世の中が広い。でも悩みや、しないといけないことは自分の全部の注意を引く傾向がある。本を読むことで直接に悩みや問題を解明するのが難しいが私はできるなら本で現実の状況を作り直してみる。谷口さんは現実の状況から考えをそらすために本に没頭する。二つの世界の間に関係がないので影響の交換もない。

それから三代さんに向かって：

私：三代さんはどんな本が好きですか。

三代さん：言葉がきれいな本が好きです。本当のことをいうみたいな言葉。特にベケットの戯曲が面白い。

私もベケットに興味があるから面白いと思った。ベケット（サムエル ベケット、1906・1989、アイルランド出身）の戯曲は読んだことがないが小説を読んだことがある。でも本当のことというのは一体なんだ？私の場合、本が実際に生きている人間の考え方をきちんとまねするなら本当の雰囲気を感じられる。ベケットは「意識の流れ」とい

う書き方を使う。これはストーリーの流れを中心にする代わりに主人公の複雑な考え方を中心にすることだ。人の次々に出てくる、いろいろな方向に飛んでいく考えが書いてあったら、それは私に「ああ、本当のことだな」と思わせる。全く私が毎日考えるように。私にとって本当のことと日常の間に結構強い関係がある。というよりは本当のことは私たちが日常のことに対してどう反応するかを表す。

「きれいな言葉と本当のこと」についての話が出てきたら、急に二つのことが頭の中に現れた。詩と日常ということだった。

私：三代さんは私の動機に書いた日常についてのところに気がついた。書いたのは日常を変えるために本を読むということ。三代さんは同じ目的で本を読む？

三代さん：その目的として本を読まないけどもそうなった時、すごく読んでよかったと思う。

私：三代さんはどう考えますか。詩と小説の違いについて。本当のことを表すためにどちらのほうがいいと思いますか

三代さん：実は、僕は、詩も、小説も、演劇も、映画も、本質的なところでは同じ気がしています。本当の言葉、もしくは本当のこと。それは実際にあったこととか、真実とか、そういう意味じゃなくて、ただ僕が本当のこと、本当の言葉、と思えるもの。それがそこにあれば、それは僕が好き。そして形が違うけれども、それは詩にも小説にもある。ただ形式の違いという気がする。

私は詩の別の世界が小説の別の世界と違うと思う。だから詩の世界と言えるくらい詩の世界は存在していないように思える。詩のほうは感覚が重要だ。詩が私の考えを動かさ、作家の気持ちより、私の気持ちに関心を向けることにしている。詩の話が出てきたらそれについて谷口さんの考えを聞きたいと思った。

私：私は詩の世界と小説の世界が違うと思いますが谷口さんはどう考えますか。

谷口さん：私も詩の世界と本の世界が違う。詩の世界はすごく瞬間のものじゃないですか。書く人が捉えてその時感じたことを書いていますよね。でも小説はもうちょっと時間の幅がありますよね。私はその世界に行きたいっていうのはその時間を過ごしたいという意味がある。幅があるから動きがありますよね、その世界の中で。でも詩はその瞬間のことだけなので私が入って、やっぱり、いけないんですよ。

私：私は動機に書いたように本を読むとき、なんか、一時的に他人の身になるみたいな感じがします。でも詩を読むときそれは逆になります。詩人が私の中に入ってくるみたいです。

谷口さん：ああ、何となく感覚が分かります。

私：詩を読むとき自分がどうやって読み取るかが一番重要だと思います。作家のメッセー

ジより。

谷口さん：私は逆に詩を読むとき作者が何を言いたいのかを考えます。書いた人がどんな気持ちで書いたのかなあ、と。小説にいろんな説明がたくさん入ってますよね、想像するために。詩っていうのはすごくご説明がないんですよね、ものに対する。何度も詩を読んで自分で考えないといけないんですよね。詩は細かい説明は省略して詩人が言いたいことだけを書いているので、作者の考えを考えなきゃいけないという感じがします。何を作っているかな、詩を書く人はその四行の詩で何を書きたかったのかっていうことを考えながら読みます。

谷口さんは詩を読むとき作者のことを考え、それも作者が書くときどんな気持ちを抱いていたのかを考える。谷口さんにとって重要なことは作者とその気持ちを共有できるということだ。

ディスカッションの終わりのころ、三代さんがいい見識を話してくれた。それは家庭教師という表現についてのことだった。そのとき、読みながら自分の日常を照らす何かを、本の中に探すということについて話していた。

三代さん：家庭教師の代わりに別の表現を使ったほうがいいと思う。

私：どうして家庭教師は適当ではない？

三代さん：小説が、なんか、教えてくれるよりも自分でそこにあるものを取っていくという感じが出る。家庭教師ならば自分が受身だけど、もっと共同的なものだ。

私：そうだな。でもそういう意味で使うつもりはなかった。一方通行ではなくて、僕も判断するし、本の内容の中のいい点を選ぶ。だから三代さんの言うとおり、もっと共同的なものだ。心を開いて読むなら本といっしょにもっと広い世界を作ることができるはずだ。

#### 4.) 結論

ディスカッションの目的はどのようにして人が読むかという差を検討することだった。読書と何が読んで面白いということについてディスカッションすることでいろいろな意見をもらった。主な点は別の世界と、本当のことと、作者の言いたいことだった。この三つの点の重要さは人によって、違うし、詩とか小説を読むことによっても、違う。でもこの点の間に共有の面もあると思う。特に別の世界と本当のこの間に。私の考えでは、本を読む時、別の世界に行くことで自分の人生から間をあけるが、同時に自分の人生にもっと深く入り込むみたいな感じもする。本の世界は遠くて違うが、そこで基本的な「何か」にぶつかると思う。この基本的な「何か」というのは人生の基本的な価値という意味を表すことだ。

その上、本当のことを感じることでこの基本的な「何か」を見出すこともできる。多分現実にはこの基本的なことの輪郭はぼやけて見えにくいかもしれないが、別の世界か本当のことが鮮やかにしてくれると、冷静になったり、世の中がひろくなったりすることがある。ディスカッションの一番残っている印象はみんなが自分の読む理由を持っているし、その根本的な理由を変えるのが難しいということだ。でも変わる必要ではない、というような気がする。もちろん相手の理由は自分のと同じ場合もあれば、自分のと違う場合もある。ディスカッションからもらう、いいことは、相手が自分にとっての重要なことを説明してくれると私がそれに関心を向けるようになる、ということだ。最初に「文学について」というレポートを書くつもりだったが、文学のいろいろな特徴を話すよりは、本を読む動機のほうが面白いな、とだんだん思ってきた。それでテーマを「読書について」に変えた。

## 5.) おわりに

レポートを書く過程は本当に面白いと思う。最初にテーマについて自分の印象や考えをまとめて短く、はっきりと書くのはいつも思ったより難しい。でも考えを基本的なことに縮小して、それからそのことがディスカッションで広がっていくことを見るのが面白い。同じテーマについてディスカッションをして、それから相手の意見や自分の考えをまとめて、グループのメンバーと話し合ったり、次のディスカッションにもう少し中心するべきな点を見つけたりした後、もう一度ディスカッションして、もう一度まとめて、話し合う。そういう手順は私にとって総合授業の一番感心なところだ。八月、総合授業が始まった時、私は特別な期待を持っていなかったが今から振り向くと本当に楽しくて面白かった。

## 階層差 = 学力差の恐れがある教育について

丁文珍

### 目次

- 1・動機
- 2・ディスカッション
- 3・結論

#### 1. 動機

親として子供の教育に関心を持つのは当然のことです。私の娘が今年小学校二年生です。子供の教育が大事なことで、できる限り一番良い学校に通ってもらいたいと思いますから、一年前に娘を今通いの学校に入れた時、余計にお金をたくさん支払いました。

中国は日本と同じで小学校6年と中学校3年が義務教育で、家に近い所属学校に通うわけです。もし別の学校に通う場合、たくさんお金がかかります。特に教育水準の高い人気のある学校に入るのはもっと高いです。

今年の9月に姉の娘は中学校通いを始めました。家に近い学力普通の中学校に放っておくと不安だと思いましたが姉夫婦が相当のお金を払って娘を今の学校に入れました。そして、今後親子で服代を節約し、旅行などを減らす事にします。

姉の娘のことで私の娘のことを考え出しました。娘があと4年間経つと中学校にも入ります。家の近くに人気のある中学校がない為、別の学校に通うわけです。そうすると又お金の次第だ、それに4年間経つと、かかる費用が今よりもっと高いでしょう。私たちサラリーマンの給料の増加が年ごとにわずかしかないですが、学校にかかる費用が毎年大幅に増えると悩んだり、親同士と文句を言ったりしました。

義務教育というのは差がほとんどなく、全体の質を高めていくであるはずですが、私の小中学校時代がそうでした、その時どの学校にも通う費用が少ししかありませんでした。でも、「今親の経済力で差がついてしまう。この国はどうなってしまおうの」と感じています。

このように、親の経済力や収入の高い子供たちは早い段階から良い学校に入り、大学進学実績が普通より大きく伸びるわけです。さらに将来の取得や職業などの機会も影響を受けます。親として我が子の為にやむをえずこのようにし始めたのですが、実には私は今の階層差 = 学力差の恐れがある教育すなわちお金のかかる教育ということに不満を持っている。

従って、もしすむ地域によらずにどの学校も水準が同じ高くお金もたくさんかからないのは一番理想ではないかと良く考えている。私としてこの理想的な教育制度を目指して教育改革を行う必要があると思います。

## 2. ディスカッション

教育のテーマで、お子様のいる親同士をディスカッション相手にすれば一番良いと思ったから、矢本さんのご紹介で蛇拔さんをお願いことにしました。途中ヤシャさんが入りました。蛇拔さんは25歳の娘さんがいるそうです。そして、まず理由の荒筋を話しかけました。

蛇拔さん：日本でもお金がかかります、教育改革をする必要がありますが、実現できると思いますか？

丁：初めは個人の力でなかなか難しく無理だと思いましたが、その後、私一人で力弱いですが、もし私と同じように考えた親の声が集まると、力強くなると思います。

蛇拔さん：丁さんが今の教育に不満を持っている理由はお金がかかることですが、それは丁さんはお金を払う余裕がありますでしょう。

丁：そう言われてもそうですが、いくら余裕があってもやっぱり払わないほうが良いと思います。

蛇拔さん：丁さんの理想は一つはお金がたくさんかからないで、もう一つは水準が高いそうですが、具体的にどういう水準ですか？それは親からの考えですか？

丁：「水準が高い」というのは二つの意味があると思います。一つは学力の高いことで、もう一つは人間成長環境の良い事だと思う。例えば、中国では都市の中心部にある小学校は歴史が長くて先生がベテランで「特級小学校」や「先進小学校」などに選ばれて人気があります。娘が今通っている学校は人気が高い為、毎年日本と韓国の小学校との交流があり、お互いにホームステイを交わします。ほかの小学校はなかったです。

今まで話していた親同士と全然違って、蛇拔さんは始めから良く私に質問しました。そして、水準が高い学校とはどのような学校ですか？その中身について話しました。

蛇拔さん：丁さんは娘を良い学校に通ってもらうのは何の為ですか？

丁：もちろん良い大学に入ってもらいたいです。

蛇拔さん：そして？

丁：良い就職を見つけます。

蛇拔さん：良い就職を見つけるのは何の為ですか？

丁：豊かで幸せな生活を過ごす。

蛇拔さん：よい学校を卒業すればきっと幸せな生活ができますか？私の娘は普通の大学を卒業したのに、幸せだと思う。

丁： もちろん、幸せとは精神的と物質的の両方が揃ってあるはずだと感じます。  
親としては子供の為良い環境を創ってあげるのは当然だと思います。蛇拔さんは娘が幸せだとおっしゃいましたが、具体的なことは？

蛇拔さん：自分の好きな事を自分で決定すると思いました。

子供を良い学校に入れた最終目的が子供の幸せの為だとみんなそう思いますが、幸せの中身について蛇拔さんは私と違いました。私は子供が良い大学を卒業すると幸せになれるのに対して、蛇拔さんは子供が自分の好きな事を自分で決めると普通の大学でも幸せだと思いました。この時、ロシアのヤシャさんはディスカッションに入りました。そして、良い学校に入って、良い大学を出れば、必ず良い就職が見つかるかどうかについて話し合いました。

ヤシャさん：ロシアでも良い教育を受けるとお金がかかる。例えば家庭教師を使うと

蛇拔さん：ヤシャさんは親からお金がかかったという文句を聞いた事がありますか？

ヤシャさん：ないです。教育は大切ですから。

蛇拔さん：水準の良い学校をどう思いますか？

ヤシャさん：年によって違います。小学校の時、雰囲気の良いのが大切です。つまり先生が親切で子供がいじめない。中学校になってから学力が大切になります。学力を高める為先生も厳しいし生徒間の競争もあります。従って、雰囲気が良いと学力が高い、この二つ揃っているのが無理だと思います。

蛇拔さん：ロシアでは人気の高い大学を卒業すれば、就職し易いですか？

ヤシャさん：そうです。面接の時、会社の方はまず大学の名前を見ます。例えば、私はモスクワ大学を卒業しました。モスクワ大学がロシアで有名ですから面接の時会社の方は興味深くなり色々話し合いました。普通の大学卒業生だったら、あんまり話してくれない。だから学歴が大事です。

蛇拔さん：そうですか。でも学歴より人の能力を見るはずだと思います。

丁： 水準や能力が同じの場合、有名な大学卒業生の方が採用優先になります。中国もそうです。日本もそうでしょうか？日本の中央公務員の半分ぐらいが東京大学卒業生だそうです。

蛇拔さん：それが一部分です。

良い大学を卒業すると就職し易いだと私がヤシャさんと同感でした。そして良い就職が見つければ幸せな生活ができるかどうかについて話し合いました。

ヤシャさん：生活の為教育が大切だと思います。良い教育を受けると豊かな生活ができ

ると思います。

蛇拔さん : 女が大学を出なくても男性と結婚すると豊かになりますでしょう。

ヤシャさん : そういうチャンスが少ないです。良い教育を受けないとお金も稼げなくて自分で選択する範囲が狭くなる。

丁 : 良い教育を受けると人の素質が高くなりチャンスも多くなると思います。

蛇拔さん : 豊かな生活とはどんな生活ですか？

ヤシャさん : お金があり好きなことができる。例えば好きなものも買えるし、好きな国へ旅行に行けるし、必要な時何かする。

蛇拔さん : そう言えば、丁さんが今幸せでしょう。でも彼女が不満です。

丁 : 私の理解では幸せとはお金があり、健康が良くて、家族がそろっていることです。

蛇拔さん : 丁さんの娘が今幸せですか？

丁 : 幸せだと思います。

蛇拔さん : どのように幸せですか？

丁 : 娘は学校の先生が親切ですから、将来の夢が先生だと言いました。それに今の学校に対して誇りに思っています。私も娘を今の学校に入れて良かったと思います。

蛇拔さん : 娘が誇りに思ったのは他人から高く評価されて認められたからでしょう。そう言えば他人が高く評価すると幸せになるでしょう。

他人が高く評価すると幸せになるとは言えないですが、時には他人と比べると自分が幸せだと感じる事がありました。今度日本に来て、友達と会いました。友達の一人は奥さんが6年前になくなって、子供もいなくて今70歳の母さんと暮らしている。電車の入り口で別れた時、彼の寂しそうな後ろ姿を見て、自分が家族揃って幸せだなと思いました。

蛇拔さんと二回ディスカッションしましたが、同じ親同士なのに教育制度や子供の幸せなどについて考えが違いました。蛇拔さんは娘が普通の大学を卒業しても今幸せだと言われたから、それで、蛇拔さんの娘さんが小学校に通った時、蛇拔さんも娘さんを普通の公立学校に入れたでしょうかと思いました。確認する為、一週間後蛇拔さんに聞きました。

丁 : 蛇拔さんの娘さんの小学校や中学校時代、水準の高い学校に入るのはお金がかかりましたか？

蛇拔さん : かかりました。十何年前からお金がかかりました。

丁 : 蛇拔さんは娘さんを水準の高い学校に通ってもらいましたか？

蛇拔さん : 水準の高い学校のかわりに娘に合っている学校に入れました。日本も中国と同じで、都市の中心部にある学校は人気が高いです。それに国立学校と



私立学校は違います。国立より私立の方はからがあり、つまり特色が在ります。従ってお金も高いです。

丁： 娘に会っている学校とはどういうことですか？

蛇拔さん：その時、私は娘を連れて学校に行きました。表面だけですが学校のシステムや行事を見てから、娘が好きだと言ったからその学校に入れた。

丁： それが私立ですか？

蛇拔さん：私立です。

丁： お金がかかりましたか？

蛇拔さん：かかりました。私はこのお金を払う余裕がありました。でも余裕がなくていけない人もいます。

確認した結果として、世の中には親が子供に対する関心の気持ちがやっぱり同じだと思いました。娘に合ってる学校とか水準の高い学校とか問わず全部子供の将来の幸せの為にしました。

### 3、結論

国や年齢を問わず、親として、子供の教育に関心を持つのは普通の事です。子供の将来の幸せの為、親は全力を尽くします

昔から平等を提出しましたが、絶対の平等がない。階層差 = 学力差の教育の問題、つまりお金がかかる問題が昔からあったそうで、中国や日本とロシアでもあります。すむ地域によらずにどの学校も水準が同じ高くお金もたくさんかからない教育制度がただ私の一つの夢に過ぎないです。

良い大学を出ると、就職し易いし、豊かな生活ができる事は現実社会の中に確かに存在ですが、今度のディスカッションで子供の幸せの中身についてもう一度考え直した。前に言った通り、幸せとは精神的と物質的両方揃っているはずだと思いました。良い大学を出ると、豊かな生活ができるのは物質的な幸せだ、自分の好きな事を自分で決められるのは精神的な幸せだと思います。良い学校が必ずしも子供の好きな学校ではないです。従って、子供の意見を尊重するのも大事な事です。娘がもし良い学校に入ると、私もそのお金を払う余裕があります。もし普通の学校でも構いません

上記のように考えると、階層差 = 学力差の恐れがある教育現状に不満を持った私が落ち着いてきます



# 「なぜ日本語」という理由は大事

ポントゥス・ファンネンストール著

\* \* \*

1. 理由
2. ディスカッション
3. 結論
4. 終わりに

\* \* \*

## 理由

人間は言語が少なくとも一つ話せる。それは試行錯誤によって習得されていて、すぐ、得た知識で全く新しい表現を作れるほど上手になる。いつも言いたいことを表す言葉があるのは素晴らしいことだね！

しかし、新しい言語を学びたいと、そのようにすばらしくない。そういうのは、日本語を勉強する学生には簡単な意見を発表したいと日本語がそんなに分からなければならないから大変だ。母語と全く違う言語を勉強した経験のある人も分かると思う。国の言葉が分かったら安心して、逆に分からない場合には必ず不安になる。言葉が分からなくても生活してみることは文法授業の間に教室のなかで服を脱いで裸になるのと同じようだ。

それで、なぜそんな勉強するの？趣味？面白さ？お金？実はそれについて話したいと思う。私は「なぜ日本語」という質問を何回か聞かれて、答えが毎回違うけれども、どの場合にも大事な理由がなければならぬと思う。それは日本語の難しさに関する。言うまでもないことだが、日本語はとても難しいから、勉強の理由のない人は途中で勉強をやめる傾向がある。半分に習った日本語は役に立たないのだから、それは悪いことと思っている。

私の日本語を理解したいと思う気持ちは高校生時代に生まれた。その時、私は自分が何でもできるという感じがしていたのに、友達はずっと普通の勉強、工学、経済学、物理学などを求めている。だから、全く違う勉強をしたいと思うようになった。日本についてのことをあまり知らなかったけれども、生活水準などはスウェーデンと同じくらいそうだが、社会・文化は大きく異なっているだろう、ということに興味をいだいた。

さらにいっそう高い見地から物事を見たい感じがした。一生ずっと同じ国で生活したら全世界の人々の気持ちが分かりにくいはずだ。そういえば、地球で日本とスウェーデンは場所が反対なので、どちらにも目があつたらほとんど全世界が見えるようになって、もっと分かりやすくなると思った。だから、日本語を選べばいいと考えた。

今日まで、昔の勉強をする理由が変わって、しっかり増えている。今、そのひとつは、やはり日本人の友達が簡単にできるようにしたい。それはともかく、私にとって言語学生に勉強の明確な理由を持つことは不可欠だ。そういう理由はないと必ず不幸せな気持ちが出てくると思う。私はある知り合いが何においても日本のことは嫌いと言うから、彼らに「なぜ母国に帰らないの？」という質問をしたいと思っている。日本語は、特にインドヨーロッパ語族の言語しか話さない人達にとって難しい。だから、日本と日本に関係のある物事を嫌いと思えば日本語を習得することは無理で、途中で日本語の勉強をやめがちだと思う。

## ディスカッション

### 第一日 - 勉強するという理由

このディスカッションは二回に亘って行われた。まず、私(ポントウス)はチャンさんと話し合っ、二回目はキムチさんも参加した。チャンさんは七年前日本に留学しに来た。以下は自己紹介中から。

チャンさん「私は韓国から来た、もう七年ぐらい前なのだ。韓国にいるときに、あまり仕事もしたくなかった！したくないんじゃないかと、何をしたいのをよく分からなかった。それで留学しようと思った。」

ポントウス「まあ、なぜ日本語？」

チャンさん「大学の専攻が日本語・日本文学で、私は唯一できるのが日本語だけだったの。英語あまりできないし、日本語がよくできる。だから留学できるのは日本しかなかった。日本に行ってから勉強も何をしようとか、それも考えようと思ったのね。だけどポントウス見たいにスウェーデンと反対に日本があるから日本に来ることによって目を広げるとはあまり思わなかった。たまたま少し日本語ができて、日本語留学しようと思った。」

これで、チャンさんと私の一番明らかな違いが分かってくる。私のレポート通りに、私は日本語を勉強することを徹底的に考えた。一方チャンさんは少し偶然的に日本語を選んだようである。

ポントウス「経験を比べるのは難しいと思う。韓国は日本に近い国だから、多分韓国人にとって明白な選択だ。」

チャンさん「いろんな[日本についての]情報がある。スウェーデンは全然違うの？」

ポントウス「そうです。」

そのとき、私はレポートの理論がアジア人などに適用されないかも知れないということに気づいた。

## 個人的な理由ってなに？

以下の例の経済学者は架空のものである。ディスカッションの中でお金をずっと考えて日本の興味のない人として働いている。

チャンさん「人によって、皆はそういう理由を持っている。理由が全然ない人がいるかな・・・」  
ポントゥス「ない人もいると思う。大切な理由というのは、必ず personal、個人的な理由だ。例えば、ある人は経済学をしている。そのために、日本語が話せる経済学者が少ないから、“日本語の勉強をしよう”と考える。そして経済と日本語ができればすごくえらくなる。その理由でオキムチさんだけ、あまり個人的な理由ではないでしょう？」

チャンさん「ではないの？個人的に私はえらくなりたいと思ったら個人的な理由じゃん？」

あいにく、私の下手な通訳で互いに分からない。私は personal というと、「心の近い」という意味にした。そのニュアンスを「個人的」は持たない。具体的に、ある経済学者の場合に、彼はお金をもらいたい、だから自分を会社にとって不可欠な者にしたい、だから日本語を学ぶ。やはり個人的な勉強する理由なのだけれども、心の一番近いことは「日本」よりもむしろ「お金」ということである。一方、語学者や社会学者などの専門はほかの国ではなくて日本にさえ関する専門である。そんな学者にとって「日本」は手段よりもむしろ目的で、もっと重要なことだと思う。

ポントゥス「あの・・・個人的な理由は、例えば、日本の文化などに興味があること・・・」

チャンさん「あっ、日本と関係がないとだめなんだ？理由が。日本と関係がある、それは個人的な理由になる？」

ポントゥス「そうです。経済学者にとってどんな国の言葉を学んでもいい、中国語、インドネシア語とか。だから、あまり日本に関係ない。逆に私は特に日本と日本文化に対する興味がある。」

/---/

チャンさん「もともとの目的はお金だから日本とあまり関係がない、理由が。それは個人的ではないということ？（そうです）日本語勉強をする人は日本と必ず関係がある理由を持たないとだめ？どうして？！（笑）」

ポントゥス「どうしてでしょう・・・ヨーロッパ人にとって日本語はちょっと難しい・・・多分私の考えは間違っている。もし、ある人は日本語を全部習得するために、お金などという理由が十分だったら、私の理論は違う。」

このところで、私は少し困っている。言うまでもない、その「どうして」とは中心的な質問なのだけれども、ディスカッションの時に私は答えられなかった。たまに自分の言ったことを否定するからお互いに筋が分からなくなったかも知れない。

## 日本語できるというのはなに？

チャンさん「でも、日本語を全部習得するというのは、どういう意味？」

ポントゥス「日本人のように話せること。」

チャンさん「ポントゥスは自分の母語が全部分かる？」

ポントゥス「違う。そうだね。私は全部の日本語が分かると言ったら、多分、“結構”分かるという意味を表したい。日本語が結構分ると、例えばニュースが分かるし、新聞を楽に読めるようになる。」

“全部”と“結構”とは同じではないけれども、実は“結構”とは“スウェーデン語ができるくらい”である。そして、経済学者についての話題が飛んだ。

ポントゥス「経済学者にとって、経済に関する言葉で十分じゃない？日本で生活したくないと日常的な言葉はあまり要らないでしょう？」

チャンさん「専門用語だけ分かればいいのか？」

ポントゥス「そうです。彼は日本語が上手にならない。」

チャンさん「でもその人は専門用語だけでできればいいじゃん？その人は本とかが読めるくらいで自分はいいと思えば、それでいいわけでしょう？」

ポントゥス「それでいいけど、本当に日本語ができないよ。しゃべるけど、経済について話だけできるよ。例えば、彼は子供と日本語で話せないと思う。経済用語だけの勉強をして、そして子供と話してみると、変な会話になるだろう…」

## 第二日 - 日本語、ベトナム人によれば。

今回、キムチさんも参加した。キムチさんはベトナム人で、相手と日本語でいい会話できる機会を見つけるという問題についてのレポートの書き手である。最後の半分で主にキムチさんのレポートについての話をしたので以下は最初の半分である。」

キムチさんは自己紹介する：

「私の理由とはおばあさんは勉強していた、通訳の仕事をやった。だから私も日本語の勉強をしようと進めて、あと大学で勉強した。小さいところから日本が大好きです。桜なども日本人も大好きだった。」

ポントゥス「キムチさん、日本語の勉強をする友達を見たら、彼らはどんな理由を持っている？」

キムチさん「わあ、いろんな理由、例えば、ある人は英語がうまく行かないからから。もし日本語を勉強したら、皆初めてだから。だから、日本語を勉強することにした。」

チャンさん「こういう理由は、ポントゥスはどう思う？大事な理由と思わない？」  
ポントゥス「最近、私はちょっと考えていた。そして、ヨーロッパなどの人とアジア人と比べてアジア人にとって日本語はもう少し簡単で、自分の言葉に似ているね。でもヨーロッパの(言語の)ほうは全然違う。だからヨーロッパ人にとって大事な理由はもっと必要かも知れない。」  
チャンさん「レベルアップしやすい、アジア人に？難しいからこそ大事な理由がないとだめ？」  
ポントゥス「そうだね。だけど、ベトナム語はローマ字でしょう？」  
キムチさん「昔は日本語と似ていた、漢字を使ったから、今は全部が変わった、ローマ字だけ。」  
ポントゥス「それで勉強は大変じゃない？」  
キムチさん「うん、結構。」

### 難しさとやめる傾向の関係

あと、中心的な質問が一つ残った。

ポントゥス「チャンさん、日本語は難しいので強い理由が必要だと言えば、どう思うのか」  
チャンさん「皆は何をしてもそうする理由があると思う。その理由はだんだん強くなる。私は日本に来たときに何をしようか分からなかった。日本語を勉強していて、日本語教師になりたい気持ちがだんだん強くなってきた。もし初めに理由が弱ければ途中で止める場合もあるけど、そこで止めないとずっと続けると思う。私は少しの間に日本語を勉強した後達成感があった。そう感じたことのある人は止めたい気持ちがほとんどないと思う。さらに、難しいか易しいか自分の理由に含めない。」

## 結論

最初には私は相手として西洋人のほうが良いと思った。しかしアジア人になって、実は今そのほうが良いと思う。西洋人だったら、あるいはその人はテーマの理論を確認できるかできないかも知れないが、アジア人だから全く新しい見地はディスカッションに入れられた。それで私はアジア人の見方とほかの人の見方との違いの大きさに気が付いてきた。それは、アジア人にとって、言葉が難しいのだけれども、日本は故国に近くて故国に文化に似ているので、安心できる。それで、安心できたら、そんなに大変ではないかも知れない。

テーマがそんなに難しいということも分かってきた。質問は明確に言われていなかったから脱線した。そうは言っても色々な面白い要点が出てきた。特に、“日本語ができる”と言えるようにしたいとどこまで勉強しなければならぬという問題は面白い。勿論言語を本当に全部習得できないが、多分母語ができるほ

どもできない。

皆は自分で“どんな勉強の目的にしよう？いつ‘結構’となる？”と考えるべきである。

さらに、自白をしたいと思う。私はもうこのレポートの理論を信じない。これはもともと日本で一ヶ月くらい暮らしていた後の考えだった。私はいつものように関係の弱い観察をつないで理論を作ってみたいと思ったが、失敗した。そのため、このレポートは矛盾が多くて申し訳ない。

とにかく日本語のいろいろな面が分かるために日本の色々な面に興味が必要だと思う。

## 終わりに

この授業は明らかに教育学部の最近の研究通りである。学生の地位と先生として働く人の地位は同じようだし、コミュニケーションは二方向だし、話の中の誤りは訂正されない。そこにいい点も悪い点もあると思う。いい点はこうしたら何も言わなくてはいけない。先生に言葉はいわば口から取り出される。一方、こういう教え方に慣れていない人や、恥ずかしがりの人に注意しなくて話させると危険だ。グループを大きくするにつれてその危険も広げる。しかし、「エスパルス」は小さいグループなので、そんな問題はあまりないかもしれない。

最後に、いろいろな問題について話し合っって新たな結論に達することができるクラスとして、このクラスはあまりよくない。特に私のように理論的な分かりにくいテーマを選べば、すぐ混乱する。しかし、それは二次的なことで、日本語が上達できるクラスとしてこのクラスはすばらしかった。



細川先生

周浩然

明日と私

1 仮説

先学期、「スポーツと私」のテーマのレポートを書きました。今度、テーマを選んで大変難しい。人によって人生がいろいろ、どんな人生は明るくて、楽しい、私は探してみたいです。人生はいろいろ重要なものがあるので、両親や、妻や、仕事など、自分の責任重いです。私にとって、重要な人ために、自分の将来もために、責任もってがんばるぞ。今度、「明日と私」のテーマを決めました、皆さん、よろしくお願いします。

最近、気分がとてもわるくて何でもしたくない。自分よく考えて、半年に以来、いろいろ悲しいこと発生した。友達は有名な大学院に合格する事に比べて、私は大学院に合格しなかった。友達は結婚することに比べて、私は恋人から捨てられた。本当に気分が悪かった。深夜、誰かいない時、悲しい感情の音楽をきて、知らず知らずに寝た。さびしい人、さびしい夜、つまらない一日。

いつも私から自分に質問して「日本の生活がつらいですか。」「日本の生活がつらいですが、」いつも、日本人から同じ問題をきた、答えがひとつだけ、いいえ、つらいじゃなくて面白い。本当に面白いですが、自分よく考えて、本当に面白いですよ。早稲田にいろいろな国の学生がいるので、もちろん、いろいろな国の美人がいる、自分は失恋したものの、まだ機会がいっぱいあるよ。今年、私は27歳、大学院に合格しなかった大丈夫、なぜなら若い僕には夢

がある、無問題、頑張れぜ。

私から見て、生活は甘い味だけじゃなくて、さまざま味がある。宝くじをあつた時、もちろん人生は甘すぎ感じがある。恋人は結婚したものの、私とじゃない、心がすっぱい。自分は死に物狂いで仕事をして、電気代、家賃、学費払ったら給料がまた足りない、苦い生活。人によって、性格的に弱いところがある。悪いことがあったとき、たじたじしない「気にしない」、明るく気持ちを持って、いいことじゃない。

実は、大学院に合格しなかったこと、大変気にする。三ヶ月の準備は失敗した、一週間に元気が全然ない。人生はほんとに可笑しい、同じ事時間によって考え方全然違います。大分これは人生の二つ面。大学院に合格するどうか大切な問題じゃない、失敗の経験をもらってまとめて重要なことだとおもいます。私から見て、人の一生中、昔の経験は明日ためにもらいました。明日ために仕事して、明日ために貯金して、人生は明日があるさ。私にとって、明日とは笑顔して頑張ることです。

## 2 ディスカッション

先、自分から相手に自分の将来の理想を紹介してあげる。私の人生の目的が知らない、私のレポートは理解することができないと思います。日本にくる目的は日本語が上手になると大学院に入ることである。あと、英語を勉強するためにイギリスに行くつもりである。多分10年くらい海外の留学生活になると、中国に帰る。その間に、もちろんいろいろな困難がある、困難に対してどんな気持ちを持って大せつな問題だとおもう。

ディスカッションの相手：

「ヒメナさん：ベルに生まれた。中学校の時代は日本に過ごした。日本語を勉強すること

が彼女の興味である。今ヒメナさんは大学生として未来があまり考えないとおもう。」

「さえりさん：日本語の大学院の院生である。中国で一年留学することがあったので、  
中国語がうまいである。将来、日本語の先生になりたい。」

「三代さん：日本語の大学院の院生である。先学期、同じグループにディスカッションを  
した。三代さんの未来はまた決めないである。」

「栗野さん：教育学部の学生である。」

「張さん：私の友達、中央大学の法学部の学生である。日本語を勉強する先輩。冬休みに  
なったら、ディスカッションの相手である」

#### ディスカッションの内容

さえりさん：周さんにとって、明日は笑顔して頑張ることである。今日はどんないみで  
すか。

私：明日は普通の生活の明日じゃなくて、私の人生の未来ということである。私から見  
て、人によって人生の目的が違う。未来はどんなこと発生する誰にもわからない、私の人  
生は昔と将来だけである。昔は自分の未来ために経験を集まって、知識を学びする。今日  
は未来の目標に目指す準備する。さえりさんは日本人にしてまた日本語を勉強するのが、  
日本語の先生になりたいですか。

さりえさん：そうですね。多分未来は日本語に関して仕事すると思う。

ヒメナさん：周さんのレポートのテーマは明日と私である。明日とは笑顔してがんばることである、今日がなんでもしないですか。

私：人によって人生の目的が違うと思っています。目的は長期目標と短期目標が二つある。例えば、明日に新宿へ行くつもり、二月に国へ帰るつもり、それは全部短期目標である。40歳に大学先生になりたい、20年後社長になりたい、それは長期目標である。私の人生のがんばることは長期目標のためにということである。もちろん、普通の仕事をやって、毎日に遠慮しない楽な生活して、しかしそんな生活が私にとって大嫌い。人生は淡淡な何十年間、宇宙により非常に短い、短い人生中自分がやりたいことをやって、難しいことを挑戦して、楽しい人生じゃない。今、日本語を勉強して、将来ために準備することである。

三代さん：周さんのレポートのテーマは明日と私、明日笑顔してがんばること、今日から、今からがんばるほうがいいじゃない。

私：そうですね。中国人として、いろいろな中国的な習慣がある。中国にいろいろなことわざ、古い言葉ある。例えば、あしたはもっとうずくしい、人生ために明日に挑戦しよ。明日の本意は自分の気持ちを表現することである。

私：三代さん日本人として、ただいま早稲田の日本語教育研究科で日本語を勉強している、多分将来に日本語の先生になりたい。

三代さん: : そうですね。将来、日本語の教育に関して仕事をやりたい。

私: それは、三代さんの日本語を勉強する目的である。人間の行為は、是対目的がある。

「私と栗野さん少し話した。内容は前の内容と大題同じ。」

「年末、中国の友達と忘年会をやった、趙さんが手伝ってくれてディスカッションをした。」

趙さん: 仮説をみった、面白い。周さん、いいたいことは自分の人生の目標ために失敗の経験をまとめて、もう一度挑戦することですか。

私: 趙さんはそう思う、私の意味と多分同じ。

趙さん: 人によって人生の意義が違う。

私: みんなはそうおもう。

趙さん: しかし、人生に対して、みんなの態度が違う。私の印象中、周さんは主観できない人である。例えば、周さんは日本に勉強の目標がなんですが。

私: 日本語は上手になったら、修士と博士を取りたいである。私はよくわかる、それはとても難しいことである。難しいですが、挑戦したい、そして、明日とは笑顔してがんばることである

趙さん: いいですけど、大変なことじゃない。私の日本語の先生ははじめて日本にくるとき、目標がとても偉い、博士を目指す人である、自分の会社を作ることになっている。しかし、死に物狂いで勉強する結果は病気になった、死にそう。病気を直ったから、人

生の価値観が全然変えた、ただいま翻訳者として中国で日本会社の支社に働いている。

私はおおきい人生の目標がない、簡単な生活、静かな一生、満足することである。

私：私は今若いですから、いろいろなことやりたい、困難が多いよくわかる、なぜなら笑顔して頑張ることからである。趙さんは普通の生活に悩むことがあまりないですが。

趙さん：もちろんあるよう。

私：同じ面毒性な生活、なぜ高いレベルに挑戦したくない。中国の昔に百家争鳴はちがう人生観、価値観をもっている人がいる。私と趙さんは人生の態度が違う。

趙さん：そうですね。私の意見は人生を変々淡々過ごすことがいいじゃない。平凡な生活ですが、楽しい一生。

私：いいですけど、私の理想な人生じゃない。

#### 結論

人生は悲しいことがいろいろ、人生は楽しいことがいろいろ、人生は大切な体得することである。成功と失敗は気にしないでください。

今度、クラスメイトと一緒に楽しい学期を過ごした、いろいろにめずらしい人生の経験がもらった、本当に貴重な人生の経歴である。この学期中、細川先生、大学院生、クラスメイトたちからいろいろお世話になっております。心から、有難うございます。私にとって、人生の道は始まって、たくさん困難がある、自分の信念を持って、やめないで頑張ります。  
人生に挑戦しよう。



# 建築と私

新屋・アンドレ・盛次

1. 動機
2. ディスカッション
3. 結論
4. 終わりに



ブラジルで私の専攻は建築で、建物設計や風景設計やグラフィックデザインや工事技術や都市設計など勉強している。私は時々「なぜその専攻を選んだ？」を自分に質問している。高校の頃、何を大学で勉強するか良く分からなかったので建築を選ぶのはけっこう難しかった。その時色々な専攻について考えて、美術、文化、歴史、経済、経営、映画、コンピューターに関係あるの専攻を良く考えた。3年生の時、私はまだ決めてなくてぶらぶらして、お父さんが「君は美術と歴史が大好きで、またコンピューターと工学も大好きだから建築をすればいいと思う。どう？」と言った。その勧めを聞いて建築で決めたが、コンピューター工学でも。そして、その2個の入学試験を受けたが、合格出来なかった。あと1年間で浪入して、コンピューター工学部で美術と設計と絵を描くに関係があるの科目あまりないので、諦めたが、経済学に興味が湧いて来た。そしてその2番目回到建築学部と経済学部の入学試験を受けて、両方を合格しやはり建築を選んだ。

建築を多分子供の頃以来好き、建てるおもちゃ・例 えばLEGO・良く遊んでいて、特に家と城をいつも建っていたから。また絵を手書きもその頃以来好きで、創造性を良く伸ばしていた。建築家が設計している時に創造性をいつも使い、手書きで計画や絵も良く描いている。建築家もコンピューターを良く使う。例えば建設会社で働いたら、設計を詳しくて専門的に描くために必ずコンピューターを良く使っている。初めて働いている従業員はコンピューターで手描いた設計を描きばかりの仕事を一般的にやっている。私はコンピューターを初めて使った中学生時代で、勉強とゲームを遊びするために、それから容易に良く使ってどんどん好きになった。それから高校3年せいの時コンピューター工学も選んだ。

大学に入った時に本当に建築を勉強したいかあまり分からなかった。しかし、1年生の経験がとても楽しくて、色々な好きなことをやったので2年生の時建築を勉強したいのははっきり分かるようになった。例えば入学してすぐ絵を手書き練習始めて、裸のカープルのモデルを見て、JAZZの音楽を聞きながら、何枚を描くの練習があった。それから都心に行って、建物と風致を見てその遠近法によって絵を描く練習もあった。また、美術の歴史を詳しく勉強しながら建築様式も



勉強して始めて、とても面白かった。そんな活動しながら工学と建築技術も勉強して、本当に色々なことを建築家になるのに習うべきだと気づいた。

今私は4年生で、たくさん知識を習い覚えて、色々な経験をもたらした。この期間でやはり詰まらないこと一杯習ったが、面白くて好きなこともそう。

例えば建築の学習で歴史と建築様式の科目の講義は主に退屈だが、授業外活動のおかげで写真の趣味を発見した。その活動で勉強した建物を見学して、その建築様式を分析するためにたくさん写真が取るべき、どんどん好きになった。



あと2~3年間卒業して、まだ様々な知識が習い覚えられる。私にとって建築から多数な知識をもらえ、建築は趣味しながら仕事出来るの諸活動だ。

私はディスカッションを始める前、自分のテーマに似ているのを探したけれど、見つけれなかったので、相手を選ぶのはとても難しかった。でも6人に選ばれて、ディスカッションした。

初めての相手はアルペルさんだった。アルペルさんはトルコ料理のレストランに調理の仕事をやっている。最初にそれを考えて、そのお店のデザインについて話した。私はレストランのプロジェクトを設計したことがないから、こんな建物の使用者と話すのはとても面白くて、建築の勉強も出来た。

そしてボランティアの千田さんとスザンネさんにディスカッションして、その話し合いにお父さんのアドバイスしてくれたことについて話した。スザンネさんが「お父さんのアドバイスを聞いて、本当に建築を決めたのですか」と聞いて、私は少し考えて、やはりそのアドバイスはとても大事な決めるポイントだった。今建築を3年間ぐらいで勉強して、やはり建築の知識の中に美術と歴史が入って、またコンピューターも工学も入っていると思うので、お父さんの考えはとても正解だった。

それからイクさんは最後の相手だった。イクさんと自分の専門と趣味の関係について話した。私は「自分の勉強から自分の趣味の関係がある事を何かもらえますか」と聞いて、彼女は、つまり、具体的に何ももらえないと言って、「実は自分の専門あまり好きじゃない、親のアドバイスを聞いて経営学を選んだ」と言った。それは私の場合を考えて、つまりお父さんのアドバイスのことで、だいたい同じと思うけれど、イクさんが日本に来てから自分の専門をどんどん好きになったと言われた。私は大学二年生から好きになった。彼女の場合は、日本にバイトをやっていて、その仕事で色々な日本社会を勉強が出来て、お店の営業の事も色々習

ってから経営に興味がわいてきたと分かった。私は日本に来て、授業外で建築の勉強になっているから、やはりもっと自分の専門を好きになった。



最後にボランティアの橋本さんとフローさんに議論した。その話し合いに最初に「どうして建築から多数な知識をもらえるのですか。それはどういうことですか」と橋本さんに聞かれて、建築の活動について話した。その多数な知識に理学部とか文化学とか美術学部の知識などが含まれて、色々な勉強ができるからとても面白くて、就職に色々な仕事ができる。その上述の事はだいたい私の答えだった。

さらに橋本さんが「新屋さんが好きな事で、自分の趣味に関係がある専攻を選びましたね」と理解して、私とフローさんの場合を比較して、「フローさんの場合はだいた新屋さんの反対です」と言った。それから私はフローさんに「自分の専攻は何？ どうしてそれを選んだの？」と聞いた。フローさんがやはり好きな専攻を選んだけれど、それは彼に聞いて後で、決めるポイントではなかったと理解した。フローさんは給料が高い仕事を希望するので経営学部を選んだと言って、私の場合はやはりそんな事も決めるポイントだったけど、一番大事なポイントではなかった。

動機の纏めるが終わったから、6人の相手にディスカッションして比較的他人の十分な意見をもらって、色々な質問を聞かれてから、自分の決めたり考えたりした事を前よりもっと理解出来た。自分の考えがあまり変わらなかったけれど、その経験のおかげで深くに考えられた。

お父さんのアドバイスのはやはり大事な決めるポイントだったけれど、「父親のアドバイス」ということではなくて、「目覚ましアドバイス」だった。私は専攻を選んだ前に何かするか知らなかったけど、自分の好きな事で、色々な知識がもらうの専攻を勉強したかった。そのアドバイスというのは建築を勉強して「自分の望んでいる事をもらえる」とお父さんが教えたことであると分かるようになった。

それから、多数な知識の事についても色々な考えが出来た。多数な知識をもらうのは、橋本さんとフローさんと議論し流れて私にとって幸せで、とても大事なことである。自分の勉強からだけではなくて、全体的に人生から多数な知識をもらいたいと考えるようになった。

最後に自分の専攻を選んだ理由が1個を動機に書かなかったけれど、フローさんとディスカッションしてこの理由が出た。それは「給料が高い仕事ができる」ので、やはりフローさんの場合に全く反対ではないけど、一番決めるポイントは好きなこととの関係がある勉強である。

二回目で細川先生の日本語総合授業に参加して、全然つまらないようにはならなかったけれど、他の学生と授業を受けて、他のボランティアに会って、他の相手にディスカッションして、また面白くて、とてもいい日本語の勉強になって、楽しかった。二回目で、テーマを決めるのは難しくて前のだいたい同じのを選んでしまったが、また自分のことについてもっと考えようになった。



終わりに

# 名前の意味とは

金サンミン

## 目次

1. 始めに
2. ディスカッション
  - 1) 名前は気持ちが込められた「プレゼント」
  - 2) 名前とは何だと思うのか - 「看板」か「人」か
  - 3) 名前の意味と人生は
3. 結論

## 1. 始めに

「誰でももっています。自分の物ですが、自分自身はあまり使いません。これは何でしょうか」こんなナンセンス問題がある。正解は「名前」。

誰かを呼ぶとき使う「名前」。名前の辞典的な意味は「人が生まれたとき、一生、その人を呼ぶため、あるいは指すため、親とか祖先、または周りの人によって付けられる固有のもの(韓国国語辞典から)」である。このように、一般的な名前の意味は人を区別するため、また人を呼ぶため必要なもので、一種の名詞なのだ。

「金サンミン」。これは私が生まれた時、祖父に付けられた自分の名前だ。私は幼い時からこの名前がいやだった。人から自分の名前を聞いたら、なんとなく恥ずかしくて平気で答えられなかった。その原因は、自分の名前が「男の子みたい」なことにあった。人に出会って名前を言うと、みんな決まっているように「え - ! 女の人でしたね。ごめんなさい。男だと思って・・・」、または「家系に男の子が珍しそうですね」と言う。私は人のこんな反応がいやだった。いつかはこんなことに聞き飽きてしまって「おじいさんはどうして私にこんな名前を付けたの?」、「おじいさんはそんなに男の子がすきなのか?」と思って、祖父を憎んだこともある。

そんな私が最近、変わっている。今も韓国人に出会って自分名前を言うと、その反応は同じだ。でも、私は平気に言う。そんな私を見て、「年をとるにつれて慣れたから」というかも知れないが、実は小さな事件があったからだ。

私の名前の中には日本の漢字では書けない字がある。それで、学校の書類などにはその字と形が似ているほかの字が使われていた。変更の可否を尋ねたが、複雑でできないかも知れないことだと言われて、また自分もあまり大したことではないと思って、止めた。しかし、外国人登録のためにいった市役所ではその字が正しく書かれていた。え - ! それなら、学校ではどうして？

それで、学校の事務室にもう一度尋ねることにした。今回は「それなら方法探してみます」と肯定的な返事を聞いて、大したことではないと思ったのになぜか嬉しかった。ところが、数日後、呼び出しで行った事務室ではその漢字がパソコンにはない字だからできないといいながら、勝手に漢字とカタカナが混ぜ合わせた学生証を渡した。その時、私は「人にとって名前は一つしかないもので、その人を表す重要なものなのになぜ一言とも言わずにこんなふうにしたのですか」と抗議した。でも、「学則ですから仕方がないです」という答えだけ、何も変わったことはない。

しかし、この「小さな戦い」のおかげで、得たものがある。名前の字を変更するのはできなかったが、今まであまり考えなかった事実、自分の名前には何か意味があるということを知るようになったのだ。

「サン：お互いに ミン：安らかに柔らかく楽に」。これが自分の名前の意味である。その中には願っていた男の子ではなかったが、生まれた「女の孫」に向かう「祖父の願いと祈り」が込められてあった。名前の意味を分かってから、ただ男の子の名前を付けてくれたということで祖父を憎んだ自分が恥ずかしく感じた。

名前は「単純に誰かを呼ぶ名詞だけ」ではない。名前は「誰かの関心と愛情が込められているもので、特別な意味が隠されているもの」である。今、私は自分の名前をいう時、その意味の説明も付け加える。その意味を聞いた人は「そんなにいい意味が入っています

か、いい名前ですね」と言ってくれる。

私にとって名前の意味は、もう憎むことができないおじいさんの「ありがたいプレゼント」であり、お互いに安らかに柔らかく楽に生きて行く、と言う名前の意味とおりいきたい自分の「人生の目印」である。

## 2. ディスカッション

ディスカッションの相手は大学院生である「塩谷奈緒子<sup>しおやなあこ</sup>」さん。彼女は、彼女のお母さんが私と同じく、男の子みたいな名前で友達からいじめられたり、悩んだりしたことがあったそうだ。彼女はそのおかげで、自分はお母さんから女の子らしい、きれいな名前を付けられたから満足だ。名前に対して私とは立場が違う人だが、両方の立場を理解しているからディスカッション相手としていいと思ってお願いした。

### 1) 名前は気持ちが込めた「プレゼント」である

---

サンミン：自分の名前に満足だといいましたが、その理由は何でしょうか。

奈緒子：なぜかという、家の母がサンミンさんのように名前が男の子みたいで、友達からいじめられたこともあったそうですって。だから、私には女の子らしい、きれいな名前を付けてくれたんですって。それで、満足だし私も「プレゼント」だと思っています。

サンミン：私が名前を「ありがたいプレゼント」だと思ったのも、女の子だからおじいさんの願いにはこだわらなかったんですが、自分の孫だから孫への愛情とか願いは持っていて、それを名前に込めてくれたことだからです。そうでしたら、奈緒子さんも自分の名前に意味が込められていると思いませんね。

奈緒子：そうです。私の名前に母の心が込められているから、それで、私もサンミンさんの最後の段落で、「名前は誰かの関心と愛情が込められているもので、特別な意味が隠されているものだ」という話に同感します。実はね、私の母の名前も、おじいさんの名前のなかで一字を取って名を付けたですって、で、それなりの意味はあるんだけど、どうしても、それは男の名前だったから、母はいやだったそうだね。

---

プレゼントとの意味は気持ちを込めて人にものを贈るものである。奈緒子さんも私も、名前がプレゼントだと思ったのもその理由であった。私はおじいさんが自分の孫を心配して愛情とか願いを込めて、それを名前に込めてくれたから、奈緒子さんもお母さんが気持ちを込めて付けたからだ。

プレゼントを贈る人はもらう人を考えながら自分の気持ちを込めても、もらう人の気持ちを間違いなく当たるのは大変なことのよう、名前も、もらったことはそれほどの関心と愛情が込められていることでありがたいことだが、奈緒子さんのように満足な人も、私と奈緒子さんのお母さんのように不満な人もいるのだ。しかし、重要なことは「関心と愛情」、それで、やはり「名前」は「プレゼント」だと思った。

---

奈緒子：サンミンさんはね、おじいさんがなぜ男の子を願って、自分に男の名前を付けたと思ったの。

サンミン：そうですね。私の考えでは、韓国では昔から男の子を重要な存在で、男の子が生まれないと家計の血統が切れると思われました。今になってはだいぶ古い考えですが・・・それで、男の子を生めないで自分のせいでもないのに、お嫁さんが自分の実家に戻らせることもありました。お母さんの話によると、おじいさんも別には言わなかったんですが、男の子をもっと願っていたようです。それで、兄の後に生まれた二人の姉と私は名前がちょっとおかしい、変な名前を付けてくれたかも知れません。

奈緒子：本当に？おじいさんはどんな人でした？

サンミン：私の思い出のおじいさんは、昔の人で、いつも韓国の伝統衣装、白いハンボクを着て、昔の髪形に帽子みたいなものを被って、部屋の真中に小さな机を置いて、声を立てながら漢字ばかり書いてある本を読んでいました。私が5 - 6歳のことだと覚えられますが、おじいさんは外で遊んでいると「私に見えない他の所にいけ」と怒鳴ったりした・・・思い出があります。兄は可愛がっていましたが、女の子にはあまりやさしくはなかったんです。

奈緒子：もし、おじいさんを憎んだのはそれも理由になるんじゃないかな・・・でも、名前の意味はよかったですじゃない？

サンミン：そうですね。そんな影響もあったかも・・・

---

亡くなってもう20年近づいているおじいさんは、私が住んでいたところから車で3時間ぐらいかかる田舎に住んでいたため、多くても一年に2、3回、祭祀とかお正月、お盆の時におじいさんの家に行った。それで、私の思い出に残っているおじいさんの姿もこれが

全部だといっても過言ではないほど少ないし、よかった思い出はあまりない。

もし自分が、おじいさんがいやだったと思ったのも、あまりにも少ないおじいさんの思い出を基にしたのではないか。自分に男の子の见たいな名前を付けたことだけでなく、孫なのに女の子だから、孫として自分の存在を認められなかったのではないか、と思った。

---

奈緒子：サンミンさんは、以前は自分の名前の意味を考えたことはないですか。

サンミン：いいえ、考えたことはあります。でも、名前に使われた「ミン」の漢字が、常に、よく使われない字なので、調べるのも難しかったです。それに、字の意味は探せましたが、その意味も分りにくい漢字の熟語だったので諦めました。また、韓国では普段、ハングルを使いますので、名前を言いながら漢字の意味まで説明する必要がないというか。日本に来てから名前の漢字をよく書きますので、もっと必要になりまして、最後まで頑張って探すようになったのです。文に書いているように小さな事件がきっかけになりましたが・・・。

---

今まで、もし誰かに間違っって呼ばれても、そんなに愉快なことではないが、言い直してもらうことだけで我慢して、あまり真剣に考えなかった。そんな自分がなぜ、こんなに名前の意味にこだわっているのか、正直に自分自身も知らなかった。

ただ、ハングルとは違って、漢字は一文字に深い意味があるということだけでは説明できなかった。自分の物なのに許可なしに変わったからか、あるいはここでも、自分の存在を認められていないという不満の爆発だったのか。

## 2) 名前とは何だと思うのか - 「看板」か「人」か

---

奈緒子：サンミンさんはどうして、名前が重要だと思うの。

サンミン：私は、名前はその人を表すものだと思います。どこかで知り合いの名前を聞いたら、その人を思い出します。また、現在、私が呼ばれるように私の子孫に、もし自分が有名人になったら、いつまでも残るもので、私を表すものだから重要だと思っています。勿論、同じ名前を持っている人もいますが、この名前を私として知っている人は、その名前で覚えるから。また、その人を知らないときは、その人の名前は自分に何の意味もないんですが、親しくなってからその人も、その存在も意識するのだと思います。

奈緒子：もし、名前を変えたら、周りの人に、これから新しい名前を呼んでください、と言ったらいいじ



やない？

サンミン：そうですね。しかし、新しく出会った人は知れませんが、私の経験から見ると周りの人はその名前に慣れるまで、あるほどの間違いがあると思います。初めは自分自身も新しい名前にとりまいます。私は人に出会い相手の名前を聞いたら、なんとなくその人と名前はぴったりだ、とかあまり似合わないじゃないか、と思ったことがあります。それは名前を自分なりに人と名前を結びつけて、イメ - ジ化するから、また新しい名前に対しての間違いもそこから出るのではないかと思いますね。

---

私に名前は人を表すもので、例え、私が Aさんと Bさんのことを話すようになると、現在 Bさんが同じ場所にいなくても、Bさんの名前がその人を代われるから重要だと思った。私は人と名前を結びつけて一つのイメ - ジで覚えるので、そのイメ - ジが頭の中に鮮明に残されていないと名前をよく覚えられないのも、そのせいだと思った。しかし、奈緒子さんの質問に答えながら、それが必然でもないし、なんとなく自分の答えがい言い訳みたいだと感じられるのはなぜか。

---

サンミン：奈緒子さんは、名前は何かだと思いますか。

奈緒子：私は、名前は看板だと思う。例えば、この間、授業で名前が間違っって呼ばれたことがあったの。

周りの人は間違っていると言い出したが、漢字の読み方の間違いはよくあることだし、名前は看板に過ぎないと思うから、私は平気だったの。もし、外の看板、名前がどのように変わっても、内の中身、私、自身はそのまま、変わらないからね。それで、私は自分の名前が何に変わってもいいの。

サンミン：もし、名前と自分が別々だという考えを持つようになった、特別なきっかけでもありますか。

奈緒子：人間はやはり看板ではないと非常に思ったのは、アメリカに行ったときに・・・今のサンミンさんもそうですが、外国に行く、日本で通用していた看板は何の意味も持たないし、自分で実績を作っていくしかないじゃない？私が日本人だとか、どんな大学を卒業したとか、どんな会社に勤めていたのか、名前は何かとか、そんな偏見・・・

なんか、自分が何の看板もない状態は初めてだったです。やはり、そういう看板なしで人間関係を作っていくと経験は初めてでしたよね。それで、日本の時のことを考えると、日本で、生活していたときは自分の「看板」についてことさら意識はしていなかったけど、やはりそういうところで、看板で人が自分を見たりとか、優しくしてくれたりとか、そんなことがあったんだろうと・・・すごく、気が付いて・・・

やはり、そういうことがあったから多分、看板なしに人の名前の書き方とか、その人の背景などに偏見を持って見ないで、ありのままの人を受け入れるのね。それで、名前は看板で、大切なものではないものなのだと思うの。

---

もし、人を外と中に分けると、どんなものが外に、どんなものが中におかれるのか。奈緒子さんは、名前は看板で外にあると言った。名前が変わってもその人中、本質はそのまま残るから看板だ。しかし、もし名前が看板で、自分の外についているもの、例え、どの国の人か、どんな学校を卒業したか、誰の娘だ、などと同じものに扱って思うと、それは何の意味もない、呼び物に過ぎないのでなら、名前に意味を与えるのは無駄なことなのに、なぜ人々は意味を与えて付けているのか。名前がいつでも変える看板なら、その意味をどこに置いたらいいのか。今まで、名前は人だと思っていた私は、奈緒子さんの話も間違いだとは思わないが、私はあくまでも「名前」が「看板」か「人」かの関係で、「人」だと思いたい。

---

サンミン：奈緒子さんの名前はお母さんが名付けてくれたもので、お母さんの気持ちが込められているから大切だといいましたね。お母さんからもらったので、そんなに重要なものだと思いますが、変わってもいい看板だと思いますか。

奈緒子：勿論、名前は母が自分の気持ちとか意味を与えて付けてくれたので、重要なものであるんです。でも、母がくれたのは名前だけじゃないでしょう？それで、その名前が別になくっても変わっても、私は母の願いとか気持ちはよく知っていますし、母からもらった愛とかその全てがベ-スになって、それが自分の中にもう馴染なじまれているのだから、外が変わっても中身の私は私、そのまま残るのね。名前にはそんなに執着心がない、というかな。

---

名前は意味が入れている重要なものだという考えは同じだ。ただ、私は名前の意味が、名前を含めてその意味まで、全体が重要だと思った。その反面、奈緒子さんは名前の意味は、その人が親から育てられながら、親の心とか気持ち、考えがもうその人の中に入り込んで溶けているから、名前自体よりその意味だけを取り出して重要だと考えていたのだ。なぜ、私が思ったのは名前の意味なのに、名前自体にこだわって執着しているのか。

### 3) 名前の意味と人生と

---

奈緒子：サンミンさんは、お互いに安らかに柔らかく楽に生きて行く、と言う名前の意味とおりにいきたい

自分の「人生の目印」であります、書いていますね。それは名前の意味を分かってからですか。

サンミン：いいえ、そうではありません。

奈緒子：そうですか。それでは、いつからその名前の意味とおりに生きたいんですか。

サンミン：私は、別に有名な人とか、偉い人になりたいと思ったことはありません。ただ、生きながら会

う人とよく釣り合って楽しみがある人生をいきたいと思いました。それで、自分の名前の意味と

自分が願っている人生が偶然ですが、通っていて自分もびっくりしました。

---

私は人々との付き合いが苦手だ。それで、自分なりに努力しながらやっていると思うが、そんなにうまくいけないようだ。そういうことで、大変だと思ったことが多かった。おじいさんは、私がこんな人になると予想でもしたのか。そんなはずはないとは思ったが、びっくりした。それで、ただ考えていたことを自分の「人生の目印」にしようと思ったのだ。

---

サンミン：私は自分の名前がこれから生きたい人生と似ているから、できれば、そのとおりに生きたいとい

う気持ちがあります。それで、私の人生には影響があると思います。奈緒子さんはどうですか。

奈緒子：名前と自分の人生ですね。あれとはあまり関係があるかな。人生というのは自分で切り開いてい

くのだから、名前が何でもあまり関係がないかな。でも、途中までは親に育ててもらっているか

ら、親の心と気持ちなどは自分の人生に投影された部分もあるから・・・まったく関係ないとは言

えないもんね。だけど、親から離れちゃうと、そのときからは自分でやらなくちゃいけないから、

その意味でいくとそこまで関係があるかな。誰でも子供の時に、親から育てられたので、それが

ベ - スだからまったく関係ないとは言えないけど、私にこの名前が付いているからこういうふう

にいこうとは別に思わない。

---

私は自分の名前の意味を分かってから、これからの人生でその部分をもっと考えながら生きたいと思った。それで、自分の名前の意味が自分の人生に影響があるから、ほかの人もそうではないかと思った。しかし、奈緒子さんとの話のどおり、名前とか名前の意味よりは、それを付ける時の親の気持ちとか育てながらの心が自分のベ - スになったので、そのほうがもっと影響を持っているかも知れない。結局、考えの始まりが名前の意味にあっ

ても、自分の中身にあっても、名前の意味と人生は全然、関係がないものでもないし、私のように名前の意味を大事に考えながら生きる人もいるのだ。

### 3. 結論

始まりのところで、私は、自分にとって名前の意味は、もう憎むことができないおじいさんの「ありがたいプレゼント」であり、お互いに安らかに柔らかく楽に生きて行く、と言う名前の意味とおりにいきたい自分の「人生の目印」である、といった。こんな考えはディスカッションが終わった今も、あまり変わっていない。

名前は自分の気に入らないけど、どうであれ、それはおじいさんが孫への気持ちを込め、自分に贈られたものだから、「プレゼント」であると思う。しかし、奈緒子さんは私と同じく、お母さんが気持ちを入れたから「プレゼント」であるとは思いますが、名前自体にはあまり意味がないといった。その理由はどこにあるのか。

その理由を、名前の意味への考えはどこから始まったのか、から考えてみた。私はおじいさんからもらった男の子みたいな名前がいやだったが、その意味を分かってから、そんな深い意味を与えてくれた事実にありがたいと思ったのが切っ掛けにになった。自分の名前に満足している奈緒子さんと違って、自分が名前にこだわって執着するのは自分の人生での目印にしたいのも、今までのいやな感じを脱ぎ捨てたいから・・・かも知れないと単純な結論を出した。

人によって自分の名前が、またその意味が重要だと思う人も、それに何の関心も持っていない人もいると思う。しかし、一度は自分の名前に関心を持って意味を考えてみて、また、名前を付けてくれたその人の心とか気持ちを感じながら生きたら、より心暖まる人生を生きていけると思う。



## 1. 序論

10月6日、日曜日の朝8時45分、外は寒く、天気は曇りである。雨について心配していて防水の上着を折りたたんでジャージの後ろポケットに入れる。3時半位の天気予報の降水確率は高まって、私はその時間前に峠から下らなければ軽井沢行きの道は雨で滑ってしまい危険になってしまう。手でホイールを回し、ホイールがまっすぐ回っているかチェーンステイに触れているかチェックする。自転車は持ち上げやすいし、8.6キログラムで1才の赤ちゃんと同じ体重位。一つの手で持ちながらたいていだれでも頭の上に上げられる。金属で作った自転車ではなく、フレームは鋼鉄より強いプラスチックのようなカーボンファイバーという原料で作ってある。サドルに座って少し自転車を走らせる正しい調節した自転車ではとても乗りやすい感じがある。数分後、筋肉が暖かくなるともう1キロメートル乗ったがまだ79キロメートルの道と800メートルの山登りがある。

前橋から高崎までの道は都市部であるため町並みは単調であるが高崎から軽井沢までの道はすばらしく美しい。美しいが激しいコースだ。高崎から横川という小さい町まで、道は登り下り、その後に山がある。数年前、高崎と軽井沢の間に普通列車線が走っていたが、今はなくなり代わりに1996年の長野オリンピック大会のために作った浅間新幹線がある。たぶん多数の人は新幹線があるのになぜだれか軽井沢まで自転車に乗りたいのかと思うだろう。高崎から軽井沢までは新幹線で30分で着いてしまうけれど自転車ではきつい道程を3時間掛けていかなければならない。さらに、私が読んだ記事によると、プロ選手にとってサイクリングは楽しくないようだ。私もサイクリングのことを考えたら、大変なストレスを感じる。趣味としてサイクリングはつらく、苦痛なスポーツだと思う。

だれかになぜサイクリングが好きか質問されたら、サイクリングのいい所をうまく説明できない。みなは自転車に初めて乗れた事を思い出して欲しい。子供にとって自転車に乗れることは自由への一歩である：どこへも行けて子供の世界が広がる。この頃、自転車に乗る事が楽しいが、子供にとって趣味じゃなく、「サイクリング」と呼べない。私は大学を卒業した後、日本へ来て学校に勤めていた。忙しかったが私の人生で初めてたくさんの収入があり、毎日良く食べていた。1年経って太ってしまった。以前は運動しなくても太る事がなかった。高校生時代に陸上部に行ったのに運動が得意じゃない、好きじゃなかった。でも働いていた時、健康について心配していたので安い自転車を買って、職場に通った。ゆっくり痩せたが、自転車に通っていた2年後に他の事を発見した：サイクリングが大変だけれど本当に

好きだ。

なぜサイクリングが好きか直観で説明したら、サイクリングはたくさんの人生の熟練の鏡である。例えば、ロードレースをする時に、力、耐久力、注意力、運動能力と速度も必要だ。この熟練で全部は人生に適用できる。それに、サイクリングから自信も貰っている：自分の肉体や空気や自分の意志で山を登れたら他の挑戦に対してなんでも出来るような気がする。私にとってサイクリングは挑戦と包括的な教育の意味である。

## II. ディスカッション

私は2人の相手とサイクリングについて話し合った：

---

**坂本ダグさん：** ダグさんは中学生の頃からゴルフをしていた。彼は本当にゴルフが好きだけれど、ダグさんにとってゴルフは社会的な活動の意味である。彼はユタ州民で、ユタ州ではモルモン宗教を信じている人が多い。モルモン宗教の人は生活が厳しく、酒やカフェインが入っている飲み物が飲めなく、バーや喫茶店があまりない。若者（中学生、高校生、大学生など）は遊べる所や楽しい所がかなりなく、ほとんどスポーツに参加している。

---

**“マーちゃん”：** マーちゃん（高橋正史さん）は高血圧のため自転車に乗る事を始めた。マーちゃんもレースの自転車をもっていて、時々一緒にトレーニングをしている。体重が軽くて山を登ることが得意。マーちゃんは今コンビニの店長で忙しく、トレーニングの時間あまりないけれど本当に自転車のレースや自転車のテクが好きだ。3年前、私が新しい自転車を探していた時、マーちゃんがレースの自転車を買うように進めてくれた。

### 挑戦としてサイクリングについて

ダグさんが私の作文を読んだ後、すぐにサイクリングの挑戦について質問した：

---

**ダグさん：** サイクリングに関してどういう面が挑戦ですか？精神的な挑戦とか？体とか？なんで挑戦と書いてある？

**私：** 私はスポーツが得意じゃなく、スポーツはなんでも挑戦 ... 最初に職場まで通えるかどうかやってみたかった。

**ダグさん：** 最初にね。やりながら好きになったね。

**私：** 28才以降人生に挑戦があまりなかった。大学生や大学院生の頃はたくさんの挑戦があ

---

ったけど28才から生活はちょっと退屈になった。ちょっと早いけど... 英語で mid-life crisis [中年の危機]という事かな... 勉強以外挑戦も欲しかった。

---

ダグさんは負けず嫌い人で成績でもスポーツでも勝ちたいと思う気持ちが強い。サイクリングに対して私の気持ちも同じだけれど、レースで勝つというよりもやり遂げたという満足感を大切にしたい。特にレースをする時に、私は他の相手ではなく、時間と自分の目標と競争している。このテーマについてマ・ちゃんに質問した：

---

私： サイクリングではどんな挑戦があると思うか？

マ・ちゃん： 山を登りきれぬかどうか分からないので挑戦と心の関係ある。自分の意志力や自信は大切だ。

---

もちろん人によって挑戦の意味が違うけれど、サイクリングは激しいスポーツなので、他のスポーツでは挑戦がなかなか出来ないと思っていた。サイクリングで特別な挑戦があるか考えた。このテーマから、私はサイクリングの苦痛なところについて調査した。

### サイクリングの苦痛なところについて

ゴルフとか他のスポーツと比べたらサイクリングは激しいスポーツだと思う。ダグさんと話し合った：

---

ダグさん： ストレスとか疲れるとか... そういう事があってもサイクリングが好きだね。それが... なんで好きか考えたか？

私： 乗っているところにももちろんストレスがある。でも終わった時、心の中に最高の感じがある... アドレナリンラッシュがある。ガッツポーズをとって大きい声で「やった！」とエールを送れる...

---

話した時、言わなかったけれど、私の場合は本当にこの感情に、特にアドレナリンに、病み付きになった。長い時間に乗られなかったら私は機嫌が悪くなって、麻薬の使用中止の徴候に似ている。乗れない時に、足の筋肉がかゆくなって私はいつもちょっと神経質だ。冬と雨天が一番悪い時間だ。マ・ちゃんの考えはサイクリングをしている人はちょっとマゾヒストという感じがあるという事だ：

---

私： 他のスポーツと比べたらサイクリングは苦痛のスポーツだね。なぜやっているか？

マ・ちゃん： 他のスポーツはサイクリングほど辛くない。マラソンと同じ位辛いけど、マラソンで疲れたらもっとゆっくり走る事が出来る。しかし、自転車で山を登る時、坂道に乗って

---

たら、ゆっくり乗ったらすぐ倒れる！... すごく辛いけど好き... 自転車のトレーニングをしている人はかなりマゾヒストだ ... 辛いスポーツ場合は挑戦がないと思う ... 退屈だ。

---

この言葉を聞いた時、私も同じだと思った。それと、サイクリングの辛いところと日常生活と関係あると思う。次の所にもっと説明がある。

### サイクリングの熟練について

私の作文に「サイクリングはたくさんの人生の熟練の鏡である」と書いてあるから、この文書についてダグさんの印象を聞いてみた：

---

私： サイクリングから沢山の熟練を習った ... 例えば、計画を準備することとか体の調子に注意することとか ... それとこの熟練は他の生活の所に役に立つ。ゴルフについては同じ言える？

ダグさん： 日常生活に？ ... 普通の生活とさほど関係ないかも知れない ... ちょっとだけ、ストレッチングとかするけど、多分体にいい...

---

その時ちょっとがっかりした。多分サイクリングについて持っていた印象はまちがいで、印象だけだと思っていた。マ・ちゃんに同じ事について質問した：

---

私： サイクリングと日常生活の関係があると思うか？

マ・ちゃん： 自転車から赤城山の坂（群馬県の有名な山）を初めて見た時、無理だ、登れないと思っていた。でも、今登れる、前より速い ... この経験から自信を貰った。仕事でも自信があるサイクリングとつながっていると思う。

私： 自信以外？

マ・ちゃん： これはちょっと日本人的な事だけど、忍耐も学んでいると思う。

---

サイクリングの選手多くはサイクリングについてこの印象をもっていると感じられるが、この印象はたしかではない。しかし、私にとって「サイクリングの学んだ事」は本当の意味で普段の生活とつながっていると思う。





### III. 結論

私はマーちゃんとサイクリングの観念について話し合った。一般人にとってサイクリングは気晴らしである。サイクリングは友達と一緒に景色を見ながらゆっくり乗るというイメージがある。ダグさんにとってゴルフも気晴らしである。しかし、私たちにとってサイクリングは激しい私的な戦いであり、気晴らしはない。

なぜこのスポーツをやりたいか？アメリカの有名な放送会社の社長は以前、人生において完全に終わる目標を選んではいけないと言った。40才までに、この社長はあらゆる挑戦を成し遂げて、他の挑戦がなく、彼の生活は退屈になったそうだ。彼の言葉のとおり、人間として新しい挑戦を探すことは必要なことだ。人類にとって長い間、生き抜くということは最大の課題であり、私達の体は挑戦し進化し続けている。だから私は挑戦することやめてしまっはいけないと思う。さらに、生活に挑戦がなかったら、特に20才代後半、人間の身体は衰えてくる。私も26才位体重が増えはじめた。マ・ちゃんは血圧が高くなった。日本やアメリカでは男性は仕事を退職して、すぐ亡くなることが多いそうだ。サイクリングの挑戦は私自身にとって必要なことだと思う。私はマゾヒストではないが、どんなに苦しくても、自転車に乗りながら、私は「本当に生きている」と感じる。

何が挑戦かももちろん人によって違う。たくさん的人是はそれほどこいつスポーツをしたくないそうだけど、私はサイクリングしながら多くの事を学んだ：精神面においては、自信、忍耐があり、身体面においては、力、耐久力がある。私にとってサイクリングの熟練は日常の生活に役立っている。高い目標に向かって精神をきたえるから進み、達成感を得ることはサイクリング独自のものではないかと思う。この作文を書いたことから、サイクリングの良さを改めて知り、ますますサイクリングが好きになった。これから私の体力の続く限りまでに乗るつもりだ。



## おわりに

10月6日、3時。軽井沢に到着した。疲れているけれど大満足だ。山から下って、今軽井沢駅の北口近くにいる。友達は駅で待っている。食事と買い物後、群馬県へ一緒に帰るつもりだ。サイクリングは個人的なスポーツだけど時々友達の手助けは必要だ。書く事もそうだと思う。友達、先生や同級生がこのレポートを書く事に手伝ってくれた。この人達に感謝している。

(Q021049-2)

# 目次

ガブマイヤ フロリアン  
Gabmeier, Florian (フロー)

1. 私の理想的な生活
2. 議論
3. 結論
4. 授業の評価と感想

## 1. 私の理想的な生活

私にとって簡単な生活ではなく、沢山の挑戦のある生活が面白くて理想的な生活である。私の実現方法は将来国際的な生活を送る事である。つまり外国（例国；日本）で働き、住み外国人（例国籍；日本）と結婚したいと思う。

ドイツ人として将来ドイツで住めるのはもちろん、簡単にドイツで就職をでき、簡単にドイツ人と結婚できるかもしれない。そうすると簡単な生活の道を選び、大した挑戦が全然なく、退屈で普通な生活を送らなくてはいけなくなるという心配を感じている。具体的に言えば、毎日ドイツの日常の環境に住み、友達と会社の同僚がほとんどドイツ人で、仕事以外外国語の使う機会が全然なく、つまり私にとってあまり挑戦のない生活である。言い換えればずっとドイツに居ると、普通過ぎる生活になってしまう。一方、外国に住んだら全く逆な生活になる。違う法律を始め規則、習慣、言葉の壁で日常の生活と職場にいる時（どこに居ても）色々な問題があるので、ずっと努力しないと駄目である。その問題に挑戦する事が生活の面白さを保証できると期待している。

更に外国での生活をもっと面白くさせる為になるべくいつか外国の女性と結婚する事を目指す。ドイツ人と結婚すれば生活が普通の物となるから、早くつまらなくなってしまう。一方、外国人の外見、母国語、性格と考えがはじめからちょっと違うので、非常に面白くて魅力的な点である。当然国際結婚を一生成就させる為に夫婦の性格と考えが必ずよく似なくてはいけない。それでもたまたま将来の奥さんと違う文化で喧嘩に巻き込まれるかもしれないが違う文化で生活がより面白くなる。例えば（1）神道か仏教に基づく結婚式になれる。（2）奥さんに作ってもらう料理もドイツ料理ではなく、よく東洋的な料理になる。（3）日本人の家に行くと靴を必ず脱がないといけない。（4）お風呂の習慣がある。（5）違う言語、など。従って違う文化は「全く違う世界」を作る力を持っているから、その「全く違う世界」に感じられるようになる。休暇のある時ドイツにちょっと戻って行くと、また「昔の世界」を感じられる。つまり二つのユニークな世界の中で生きられる。言語の違いを詳しく見れば三ヶ国語で（日本語、英語、ドイツ語）毎日違う言葉を使いながら気分によってコミュニケーションを変えられる。子供達も三ヶ国語で育てる。子供達

がハーフになるのでかなりの確率で綺麗で特別で絶対非常に誇りに思う子供になる。従って国際結婚に基づく短所と長所があるけれど短所より長所が重要（重い）だと思う。

以上の説明した国際的な生活は私を満足させる事ができるから、私にとってあのような生活は一番実現してみたい生活で理想的な生活である。

## 2. 議論

私の文章について合わせて六人と（細川先生、千田さん、橋本さん、栗野さん、申さん、ハンさん）議論をできた。次のように議論の流れがあった。

ハン： 国際結婚だったら文化の問題が多すぎるのじゃないですか？

フロー：多すぎると言えないと思います。文化でももちろん問題が発生しています。一方、ドイツ人と結婚すると、沢山の問題もあるかもしれません。どんな結婚に基づいている関係でも問題があるでしょう。

ハン： 私の意見は全く逆です。文化の問題が多すぎると思います。

フロー：でも国際結婚だから思いやりがいっぱいあるでしょう。人の態度によってそのような結婚が成功します。

国際結婚相手は二人ともやさしくない道を選ぶ。「私達の結婚は国際的な成分が入っているので特別な結婚だ。問題があったら精一杯頑張らなくてはいけない。」という態度で生活を送ると、うまくいくはずだと思う。相手達の性格が非常に決定的な事である。

ハン： 国際結婚に対しての両親の拒絶と言われたら、どう反応するつもりですか？

フロー：韓国の両親はとても厳しいですね。僕の場合は僕の夢を実現したければ、両親の意見を聞いた上で決めます。必要であれば両親の意見を無視するつもりです。

やはりどんな重要な話題でも韓国人と議論すると、韓国人は常に両親の意見を大切にします。理由は韓国の文化は保守的な規則に基づいている文化だよだから。ドイツの文化はだいぶ開放しているので、自分の意見を大切にしている人が多い。とても勝手な態度だけれど、自分を喜ばせる事ができる態度である。

千田： 「文化の違い」ってどこですか？国内も文化の違いがあります。

フロー：本当に？そのような文化の定義もありますか？知りませんでした。

本当にそのような定義は今まで全然知らなかった。ともかくドイツの国内の考え方や言

語(方言)はそんなに変わらない。私にとって外国の国をドイツに比較すると、面白い違いがいっぱいある。国内ではそうではない。

申： 国際文化の違いで、絶対どんな時でも韓国人と結婚したいと思います。

フロー：でもそうすると、いつかつまらなくなるんじゃないですか？

申さんは韓国人である。もちろん人によって考え方は違う。私にとって結婚を成功させる為に、言語の違いが大切である。申さんにとってその違いが大切ではない。

栗野： 私は英語が話せないから外国人と結婚できないと思います。だから外国人と結婚するのは想像できません。

フロー：そうですか。私の理想的な人が英語が話せますよね。外国語の関心がありますか？

栗野： アラビア語を勉強しています。

フロー：アラビア語が話せるんですか？あぁ、もしアラビア語が話せる人と恋に落ちたら、その人と結婚するのは？

栗野： 恋に落ちたら結婚するのを想像できます。でも国籍と言語の関係がありません。

確かにそのような態度は理性的である。言葉の壁を対抗できなければ国際結婚は最初から不可能である。

栗野： しかも外国で住めないと思います。両親をよく会いたいですからね。

私の経験ではその希望はご主人達をよく悩ませる女性的な望みである。私の昔の四年間の彼女もそのような強い希望があった。一方、私が大学に入ってから私の両親がいない事によく慣れてきたから、両親とたまに電話だけで話すのは充分である。

「柔軟な考え方、それとも柔らかい頭が必要だと思う」というのは難しくて新しい事というか挑戦のある事を恐れなくて、「難しい事が良いし、多分有益な事だし、コレに必ず精一杯挑戦したい。」という考え方である。私はそのような人である。だから外国に住みたい望みを簡単に追えます。

橋本： フローは英語を話せるようになるから外国人と結婚したい気がします。

フロー：言語の話す機会は大切な点です。毎日母国語じゃない言葉で話さなくてはいけないと満足を感じられるようになるのじゃないか。そうなら、私にとって挑戦のある生活ですよ。

言語に挑戦するのは面白くて魅力のある生活の大切な成分である。英語は世界の一番大

切な言語、いわゆるリングフランカ、である。家族と一緒にどうしてもこの重要な言語に挑戦したいと思う。なるべくドイツ語をあまり使いたくない。そうすると私にとってきつと楽しくて面白い生活になる。

橋本： なぜ外国人と子供が欲しいですか？

フロー：僕はとてもはっきり考えている将来の幸せな生活の想像を持っています。

子供は一つの重要な点です。でも順番がありますよ。次のように順番を立てています。 ~ 卒業、就職、面白い仕事、高い給料、外国へ転勤、愛しい人と結婚、子供 ~ その順番を追うと、幸せになると期待しています。

橋本： ドイツ人の奥さんが居たら、子供も欲しいですか。

フロー：そうなら、普通の子供だけになるから、欲しい気が強くない。

ドイツ人の結婚相手だったら子供が普通のドイツの教育で育てられる。家族は自然にずっとドイツ語だけで話すであろう。子供の外見も普通だから、つまらないであろう。一方、三カ国語で育てられる子供になる。さらに外国的な違う血を混ぜると、かなりの確率で美しい子供になるかもしれない。できれば特別な子供が欲しい。

橋本： フローの文章は日本人を例にしますね。スペイン人の結婚相手なら...

フロー：ん~？ スペイン人なら多分そんなに豊かな生活になりません。将来は三ヶ国語がよく話せるでしょう。ドイツ語、英語、日本語ですね。スペイン人なら一つのお互いの言語だけがあります。僕はスペイン語が話せないし、彼女はドイツ語が話せない。話す時には一つの言語（英語）だけで可能です。

議論する前に国籍を指定するのをしたくなかった。国際結婚なら一番いい相手は多分日本人だかもしれない。今からきちんと国籍を言えると思う。

橋本： なぜその予定を立てましたか？

フロー：普通の生活を送るのは僕の心配です。僕にとって普通の生活は非常につまらない生活です。そうになると、早く飽きてしまいます。だからどうしてもずっと生活を面白くさせないと駄目です。生活に面白くて自分のきちんと選んだ挑戦を入れると、その「早く飽きる」という問題を解けると期待しています。

橋本： そうですか。フローの飽きっぽい性格はその予定を立てられる推進力ですね。

そうであろう。飽きっぽい性格だから、家族の幸せな生活を守る為にその挑戦のある生活を作らなくては行けない。言い換えれば欲求を満たす為に、国際結婚を目指さなくては行けない。それとも娯楽的な生活と挑戦のある生活が必要である。

橋本： そのような生活を送る知り合いがいますか？

フロー： 居ないと思い～ます。あ、居ますよ。僕の叔父さんはそのような生活を送っています。52歳のドイツ人の彼はフランス人と結婚してて、イギリスのロンドンに住んでいます。英語、フランス語、少しドイツ語が話せる15歳の子供も居ます。幸せな家族だそうです。僕は会う機会がありませんけど...

今まで皆の議論相手が反対した。今、私の叔父さんの生活をみれば、「成功できる人がいるよ。」と考えているから、ほっとしている。

橋本： 国際結婚は失敗になるという心配が感じませんか？フローさんの国際結婚の生活は幸せな生活になると思いますか。

フロー： はい、必ず幸せな生活になるんです。失敗という可能性がありませんよ。

橋本： 強い意志ですね。

この目標はそんなに大切なので、私は幸せを祈る。皆は努力するから、絶対成功になる。

細川： 自分を喜ばせる生活を実現できるのは国際結婚だけを通じてですか。

フロー： ん～。もちろん、色々な違う方法でその目標を実現できるかもしれませんね。でも私にとって国際結婚が一番簡単で魅力的な方法です。私の国際結婚はつまらなくなる事を期待しています。違う方法なら、絶対飽きてしまうと思います。

### 3. 結論

私にとって「私の理想的な生活」は文章に書いてある目標である。

やはり議論を通して私の考え方が変わっていない。私の意思はとても強いので、議論相手の意見を聞いて検討した上でも、私にとって国際的な生活の短所は少ない。

結局なぜこの国際的な生活の予定を立てたか結局明らかにわかった。一生、私を喜ばせる生活を送る為に、結婚してから、ずっと面白い生活を送らなくてはならない。それを実現するために一番大切なことは私の飽きっぽい性格を落ち着かせることである。そうしないと、いつかの結婚生活に飽きてしまって、私は新しい結婚相手を探しはじめてしまうかもしれない。いつか離婚したくなったら、私の家族の生活と自分の人生を損害してしまう。私にとって一番簡単な落ち着かせる方法は国際結婚を実現することである。だからそのような予定を立てて、追い続けなくてはならない。国際結婚にならないと、だいたいつまらない生活を送ることが私の心配である。つまらなくなると、すぐ飽きてしまう。

どんな将来の結婚相手とでも、どうしてもお互いの生活を一生守る為に、私は努力しなくてはならない。魅力的な国際結婚だったら、絶対簡単に努力できる。言い換えれば結婚を破らないようにしたい。「私の理想的な生活」に書いてある事を目指すのはただ一つの簡単に成功できる方法だと思っている。自分の選んだ挑戦を作って娯楽のある生活を実現できると、私の良くない性格の成分（飽きる事）を消失させることができる。

私の議論相手が皆反対したけれど私の考え方が正しい考え方だと思っている。私はこの夢みたいな目標を追いつづけたく、この目標を絶対実現できると確信している。

## 4. 授業の評価と感想

この授業は私にとって日本語センターの一番有益な授業で、私は非常に楽しめた。なぜかという、ここの授業に参加していた間、自分の日本語の能力を使い、頑張らなくてはいけなかった。今回の私は凄く面白い話題について書いていたけれど、来学期のより面白い話題を見つけるのは無理だと恐れている。

私は授業全体のレポート集の題名を指定した時の議論を強く批判している。早稲田大学で真剣な人と真剣な過程が多いと思った。意外と、まるで幼稚園の過程のような過程が使われ、結局ばかげた題名が指定されたと思う。言い換えれば、子供っぽいな仕方、子供っぽいな題名が選択されたし、真剣な題名を指定した方がいいと思う。でも当然で、私は違う過程を決められなく、責任者達への私の来学期のお勧めである。

一番大切な改善提案は授業中の基本的な間違いをすぐ訂正してほしい。完成しているレポートも訂正した方がいい。特に最後の二週間のレポートを評価する間、訂正している文章があればよかったのに。そうしないと、皆は皆のつたない日本語と、おかしい日本語を吸収してしまう。来学期には最初の日から大学院生に是非訂正してほしいと思う。もらいたい。訂正がまたなかったら、評価する時、私は絶対参加しなく、評価しないようにする。

大学院生には心から感謝を申しあげたいと思う。授業中の熱心で一生懸命な大学院生が学生にサポートを下さっていたので、私はとても喜んでいる。

以上

ガブマイヤ フロリアン  
Gabmeier, Florian (フロー)  
2003年1月29日



# 旅行と私

韓 惠 貞(ハン ヘ ジョン)

- 1 . 動機
- 2 . ディスカッション
  - 2 . 1 旅行から達成感を感じられるのか
  - 2 . 2 旅行は小さい幸せ
- 3 . 結論
- 4 . 終わりに

## 1 . 動機

私にとって旅行は特別な意味がある。それは旅行のお陰で私の性格が変化するとともに私の生活にも大きな変化があったからだ。

私は小さい都市で生まれ、ずっとそこで育てた。私が生まれたところは少数の人口が住んでいる地方の小都市だ。それで成長しながら私が見たのはその小さい町で見たのが全部だとしても言い過ぎではない。

私は20才まで一人ではどこへも行ったことがほとんどなかった。素直に言えば一人では行けなかった。それほど子供ごろ私の性格は内気な子だった。内気な性格だった私が日本に来る前に6年間旅行会社で働いたことがある。

大学の卒業を目前にして旅行会社で1ヶ月間アルバイトをする機会が与えられた。私は引込み思案だが学生時代には旅行に興味があるから社会人になればぜひ、観光に関係がある仕事をしたいと思っていた。それで私にとってはいい経験になると思った。

1ヶ月間いろんな業務を学びながら私はだんだんその仕事に魅力を感じて卒業した後も旅行会社で仕事を続けることにした。私の性格の欠点を克服できる機会になるかもしれないと思ったからだ。

旅行会社の社員になった1ヶ月後、初めに一人ではなく添乗人として10名の団体を連れて海外出張する機会が与えられた。しかしそれはまったく不可能ことだと思った。

初めて出張する予定地は香港だった。出張する何日前、不安のせいか夢の中で人々とともに香港の空港であちこちに迷っていたことだ。あるいは過ちでもするのではないかと心配になった。しかし実際には思ったように事故は起こらなかったし、ミスもなかった。むしろどんなこともなくて無事に帰られた。思いよりあまり大変な仕事ではなかった。それからますます出張の機会が増しながら自信がもてるようになった。

二つ目の出張地はタイだった。タイに到着する時、柔らかい雰囲気はなかった。なぜかというタイもその時までは見知らぬところだったからだ。初めて行ったところだったからだ。空港に到着すると、現地ガイドさんという人が私たちを待っている。それから私たちをホテルまで案内する。私とともにホテル手続きを済んだあと、ガイドさんは家に帰る。

その日、バンコクに着く時間が遅れてツアーは明日に延ばすことにして、まっすぐホテルに行って荷物を部屋に置いた。私も部屋に入ってホットして横になったとたん電話のベルが鳴った。お客さんの電話だった。「ハンさん、バンコクに行ってみてもよいところがあったら一緒に行きませんか」と言ったことだ。私は添乗人だから断ることはできなかった。私はおろおろしていた。しかし仕方がなかった。私たちはホテルのロビーに集まってあてもなく出かけた。

私はタイ語も全然分からない状況だったが何日前から簡単な挨拶ことばとか数字などは勉強しておいた。とりあえずタクシーに乗って運転手さんに一番にぎやかなところへ案内してくれるのをお願いした。それから私たちはある露天カフェでビールのいっぱいずつ飲んでホテルに無事に帰った。大変なことではないからそんなに心配する必要もなかった。

今は空港とか街で迷う夢も過ちをするような心配もないで新しい所を行っても「今度はどんなところかな」と心がわくわくする。

そうしながら6年間のそんな仕事を通じて経験したのが私の性格をちょっと変化させてくれると思う。さまざまな国を歩き回りながら、いろいろな人たちと会いながら経験したのが気弱な私の性格を変化させるきっかけになった。ひょっとすると私が現在日本にいることもそんな理由かもしれない。

もちろん私の場合は旅行だけじゃなくて仕事の一部として旅行をしたけれども一人で旅行するより添乗人として役割は私の以外の人の安全まで責任を負わなければならないから私の性格が強くなったことにしたきっかけになったと言える。

子供の時、一人ではどこでも行けなかった私、今は趣味が旅行になって暇があったら一人でも行く。去年12月一人でバンコクに行けるようになった。ただ二日間の一人の旅行だったが、私にとって生涯に忘れられない思い出になるかもしれない。

だから私にとって旅行というのは私の内気な性格だけでなく、今は一人でどこへも行けるようになるほど、私の生活にも大きな変化を与えてくれたことである。

## 2. ディスカッション

### 2.1 旅行から達成感を感じられるのか

初めのディスカッションの相手は他のグループの冴里さんだった。冴里さんは私よりも旅行の経験も多かったし、私が全然経験できなかったこと、私はまだ一人では怖くって行けないところを行ったことがある人だったくらい、旅行にたくさん興味がある人で、私が感じたことを理解できて、お互いに共感するディスカッションだったからおもしろかった時間だった。

冴里さん：このテーマについて書いた理由は？

私：ええと、私は日本に来る前、旅行会社で添乗人として働きながら、内気だった私の性格が旅行のおかげで変化したからです。

冴里さん：具体的に旅行がハンさんの何を変えたのですか。

私：動機に書いたとおり、子どもごろ私は引っ込み思案だったから、一人ではどこへも行けなかったんです。しかし、今は一人で旅行するほど、自信を持ちになったからです。

冴里さんも旅行したことあるでしょう？では、冴里さんは旅行する時、何か感じたところがないですか。

冴里さん：はい、もちろん、あります。私も旅行大好きです。私は一人で中国を一ヶ月間旅行したことがあります。初めには友達と一緒に行了きましたが、途中、友達と離れてあまり期間は一人で旅行しました。食中毒で苦しかったんだけどおもしろかった旅行でした。

私：一人で？危ないじゃないですか。

冴里さん：うん、もちろん危ないですよ。その時、私のカバンからカメラを取り出して行っちゃった人もいましたから……でも、私の場合は他の人々があんまり行かないところを旅行するのが好きです。それでウズベキスタンも一人で一ヶ月間旅行したことがあります。そんな所を旅行した後の気持ちは私が何かを達成したという気持ちです。

私：うん、そうです。私も旅行をしながら、冴里さんも同じにそんな達成感を感じました。それが自信を持ちになってきた理由です。

冴里さん：そうだとすれば、ハンさんは旅行の以外の、他のことについてはそんな感じ、達成感を感じた経験はないですか。

私：達成感というのはもちろん、旅行するだけで感じられることはないと思います。スポーツとか勉強とかしながらも感じられるからです。例えば、私が水泳を習った時、四ヶ月間水泳を習いながら、初めには水面に浮かぶことさえできませんでしたけど、四ヶ月後、休まないで、ずっと500メートルをぐるぐるすることができた時もそんな達成感を感じられました。しかし、旅行によって感じた達成感はスポーツを通じて感じたことはちょっと違うと思います。なぜかというと、スポーツは私、自分との戦いの反面、旅行とは私の以外にも自分で克服すべきことが多いからです。水泳の場合はプールという小さい空間です。スポーツで特別に何か起こられることはない、起こられることを予想できると思いますが、旅行の場合は、次は何が起こるかは全然わからないからです。例えば、冴里さんのみたいに誰かがカバンからカメラを取り出して行っちゃうことも起こられるし、道に迷うこともあるかもしれないから。特に私の場合は自分ではなく、添乗人としてお客さんたちまで責任しなきゃいけないから、そんな問題が発生する時、私が解決しなきゃいけないから、旅行を通じて感じた達成感がもっと大きいじゃないかと思っています。私の場合は一人でする水泳をより旅行にもっと達成感を感じられました。

冴里さん：では、ハンさんが旅行で持ちになってきた自信感は旅行だけでなく他の部分でも何でもできる自信感、新しい環境を作り出せる力で表現してもいいでしょうか。

私：そうです。旅行を通じて自身を持ちになってきて、今は何でも心配しなくていいです。だから、旅行は私にとって特別な意味があると言えます。

冴里さんとのディスカッションを通じて私が旅行のために得たことを一つの言葉で表れた。それは達成感である。冴里さんの質問したこと、旅行とその以外ことがどのように違うかということについて私は旅行とはスポーツとか勉強とかは明らかに違うところがあったということをつかんだ。

それはスポーツ（ここでは一人でするスポーツを言う）との違って、旅行は自分ではなく、予想できないことも起こられるから、旅行の方が感じられる達成感ももっと大きいだと思う。特に、私の場合は添乗人として他の部分、お客さんの安全まで責任を負わなくてはいけないから、私が旅行によって感じられる達成感ということはもっと大きく感じられる。

## 2.2 旅行は小さい幸せ

私の二つ目のディスカッションの相手は同じグループの星野さんだった。私の総合の授業を始めからずっと見てきたから誰よりも私のテーマについて十分に理解できる相手だと思うから私が特別にお願いした。

星野さん：ハンさんがこのテーマについて言いたいことは何ですか。

私：簡単に言えば、いろいろ経験できる旅行によって、私の気弱な性格が変わったから、今は新しい環境でも、何でもできるという自信を持ちになってきたということです。私の場合は旅行によって達成感を感じましたが、星野さんは旅行を通して何を感じましたか。もちろん旅行したことあるでしょう？

星野さん：そうです。私も旅行を大好きです。私はポルトガルとスペインを一人で旅行したことがあります。一ヶ月くらい、一週間は友たちの家で泊まりながら、三週間は一人であちこち見回しました。私が旅行する一番大きい理由を一つの言葉で表すと好奇心からです。具体的に言えば、知らないことを知りたい、新しいことを見たい、旅行のパンフレットを見て、それを目で見たいということです。また、いろんな人とか知らなかったことを接することが楽しいから旅行をします。

私：そうです。星野さんが言ったことの中で、私はいろんな人を接することが楽しいからということについて共感します。私の場合は仕事で旅行をしましたけど、その仕事をしながら会うお客さんたち、またいろんな国を歩き回りながら会う人々を接するが楽しかったですよ。

では、旅行をしながら、また旅行をした後は何を感じることはないですか。

星野さん：旅行を通じて小さい幸せを感じられます。私がスペインに行った時、何かを買うために店に行きましたけど、私はスペイン語を全然知らなかったからガイドブックを見ながら言いました。でも、お店さんが笑ってくれたとか、私が道に迷っているのに過ぎて行った人が親切に道を教えたとき、私は本当にうれしかったです。そんなことについて私は小さいけど幸せを感じました。だからと言ってそんなうれしさだけあるのではないでしょう。旅行をしながら、いやなこと、大変なことあるでしょう。でも旅行を終わって家に帰えた後、振り返って見ると、大変なことが10個あって、うれしいことは3個がある場合、どんなに大変なことが多くても、3個のうれしさがすごく大きく感じられます。

私：そうです。旅行を経験した人なら誰でも、星野さんのように幸せを感じたことがあると思います。旅行をしながら日常生活では感じられない小さい幸せを経験したことが多かったです。私もそんな経験を全部言えませんが、例えて私が動機の部分で私の出張の経験を言ったように、私がタイに行ったときタイ語を

全然分からなくてもお客さんたちを連れてあちこち見回った後で感じたうれしさ、私がやったという満足感が、星野さんが感じた幸せがないかと思えますけど。その幸せが、私が旅行によって、何かを達成したとき感じた幸せだと言ってもよいか分かりません。

星野さん：うん、全然関係がないとは言えません。関係があるでしょう。新しい環境で自分が初めて接する状況についてそれをやったとき感じられる達成感、満足感が幸せだと言えるから。

星野さんとディスカッションをしながら私が気づいたことは旅行を通じて感じた達成感、その達成感というのは小さい幸せから来たと言ってもいいだろうと思った。私の場合は仕事だから星野さんの場合のように好奇心から旅行したことはないですが、旅行をしながら発するいろんなこと（自分との戦いではなく、私の意志だけでは仕方がなかったこと）を解決しながら感じたことから星野さんが言ったように小さい幸せを感じたとしてもいいだろう。私はそれを達成感という言葉で表れたが、星野さんとディスカッションを終わった現在はそれを小さい幸せから感じた達成感と言いたい。

### 3 . 結論

私にとって旅行は私の性格が変化するとともに生活にも大きな変化があったから特別な意味があることだ。それがディスカッションをする前、私が旅行から得たものだと考えた。しかし、ディスカッションをしながら私が考えたことの以外にも私が感じられなかったことを私の相手を通じて分かった。それは、一つ目は旅行から得た、自信がもてるようになってきた達成感である。達成感というのは旅行の以外のことから感じられることだ。しかし、旅行から得た達成感と他の事から感じた達成感はどのように違うのか。それは同じ達成感でも旅行の場合は予想できなかったことも起こられるし、危ないことが多いから、旅行から感じた達成感はずっと大きく感じられることだ。また、二つ目は旅行を通じて日常生活からは感じられなかったところ、それは小さい幸せである。もともと旅行というのは人が自分の日常生活を脱け出して新しい環境で新しい経験することだと思う。だから旅行しながらささやかな経験、例えば、店で買い物こと、道で迷うこととか、その時、自分が何をやった時、感じる気持ち、それがささやかな部分かもしれないけど、小さい幸せを感じられることだ。私の場合は旅行を通じて大きく得たと考えられたことは私の性格や生活の変化だと思われませんが、人々は自分の経験によって自分にもっと大きく感じられる部分が違いだと思った。

### 4 . 終わりに

私は日本語は言うまでもなく母国語でも作文をするのが下手なので、この授業は私に苦しい時間になるだろうと思った。しかし、授業が繰り返しながら、私のグループの皆さんからもらったアドバイスは私がレポートを書くことに多く影響をくれた。だから、このレポートは私が一人で書いたものではなく、【ものがたり】グループの皆さん、今井さん、星野さん、チャンさん、ファンさん、ヒメナさん、ダグさん、ヤシャーさん、オレーナさんのおかげでできたものである。皆さん、ありがとうございます。また、このレポートを書くことは、私の仕事、それで私の生活だった旅行について、広い意味で私の人生を振り返るきっかけになった。

### 目次

- 動機
- ディスカッション
- 結論
- おわりに

### 動機

どのような家族を作りたいのか。こういう問題は二年前まで一度も考えたことがなかった。しかし、二年前日本に留学してから、私は自分の未来の家族について真剣に考え始めた。なぜかというと、日本に留学して、日本の家族に家庭内暴力や親子関係などの問題がよく見て、自分はどういうふうになれば、こういう状況が私の家族で起こらないのかと思い始めた。

二年前日本に留学した時、テレビのニュースで家庭内暴力に関する事件をよく見かけた。もちろんそういうニュースはどんな国でもあるが、私が気になっているのは女性への暴力と児童虐待二つだけではなく、日本では対尊属暴力もよく起こっているということである。前者の二つはすぐ理解できると思うが、対尊属暴力について簡単な説明をしたいと思う。対尊属暴力というのは、自分の親や目上の人に暴力を振るということである。私にとって、これは本当にありえないことだから、どうして日本でそういう状況があるのかとずっと考えている。対尊属暴力は私が家族のことに興味を持つようになるきっかけと言っても言い過ぎではない。

そういうわけで、自分で実際に日本の家族を観察したくて、日本人に日本の家族について聞きたくなった。だから、二年前日本に留学している間に、3回ホームステイに参加したことである。どの期間もあっという間に過ぎてしまったけれども、私にとっては本当にいい人生勉強になった。私は日本の家族の問題点と対尊属暴力の構成がだんだんわかるようになり、日本の家族の特徴についていろいろな面白い発見があった。父親の存在が幽霊のようになり、親が子供を甘やかし過ぎて、子供が親に甘えるようになっているということが日本の特徴であるだろう。他には、他国との共通点がいろいろあると思うけど、この二つは日本の特徴だと思っている。私はこの二つの原因があるので、対尊属暴力という日本で独特な現象を生み出したと考えている。これの具体的な例をあげてみる。

私は長野のある家庭にホームステイしたことがある。その家は父親、母親、三歳の長女と一歳半の長男がいった。家族はたまに朝ご飯を一緒に食べるけど、それ以外はあまり会わないというのが現状である。父親は毎日10時以後家に帰るけれども、子供たちは9時以前寝る。最も驚くべきことは、母親は子供たちが寝たあと、夫を待たなくて寝てしまう。そういう状況を見た私は分からなくて、悪いと思ったけど、お母さんにどうして夫を待たないのと聞いた。お

母さんは夫と何をしゃべっていいのかわからないと言った。この答えを聞いた私はこれ以上の勇気がなく、別の話題を移した。それゆえ、父親は家にあまりいないという幽霊のような存在という印象が強く残っている。

次は子供が親に甘えすぎるという状況である。ホームステイする時に感じたことだけでなく、日常生活の中にもよく見かけられる。日本は先進国として、経済がかなり発展している。従って、子供の要求に対して、できるだけ満足させたいと考えている親が結構多いようだ。また、日本の子供は親に叱られることが少ないと思う。電車の中に子供があちこちでうるさくて遊んでいても、お母さんはただ優しい声でやめなさいとしか言わない。あまり怒ってもないし、説教でもない。

父権の社会である日本が、父親がよく家にいなくて、母親は子供に甘やかしてばかり、家庭内の権力はだんだん子供に移ってしまう。また、親の要求に対してストレスがたまるとともに、子供は不満から親に反抗することになるかもしれない。

社会は一つ一つの家族から成り立ってきたから、小さな家庭問題を解決しないと、大きな社会問題が続いて起こると考えられる。だから、家族問題の原因を取り出さなければならない。さらに、私は他人/他国の問題や状況を勉強することは、自分/自分の国のことを反省することができると思う。将来、親になるかもしれないので、今からどういう家族を作りたいのかをよく考えたほうがいいのではないだろうか。

私にとって、理想的な家族を作るために、現在の家族問題をよく検討して、問題の解決方法を考えなければならない。

## ディスカッション

この間に三人の話し相手と三回ディスカッションをした。ロシアからきた若い女性（エレナさん 11月22日）は独身で、日本の女性一人（武さん 11月29日）と韓国の男性一人（カンさん 12月6日）は今結婚している、二人とも子供が二人いる。

家族の問題と云ったら、範囲がすごく広いので、ディスカッションの中に、私は動機に書いた対尊属暴力は話の導入としてみんなと話し始まった。私は動機に書いた二つの原因に対して、みんなはどういう意見を持っているのか、ほかの原因はあるのか、と聞いてみた。それから、どうすれば理想的な家族を作れるのか、例をあげながら、みんなと探求していた。

## 日本の対尊属暴力

### 甘すぎる？

私：カンさんは対尊属暴力に対して一番重要な原因はなんだと思う。

カン：やっぱり家庭教育としつけの問題ですよ。日本には、一人子が多くて、親が厳しくしつけしようとしてもなかなかできない。つまり、今の親が子供を甘やかし過ぎる。子供の叛逆の時期に、もし親に何かをやっちゃうだめとかと言われたら、だんだん不満にな

ってくる。子供は親を叩く可能性もある。しかも、親は子供が一人しかいないから、何でも許してあげる。結局、ますますひどくなって、対尊属暴力を生み出す。

私：私は韓国人の友達によると、韓国のお父さんが結構厳しそうです。例えば、家族は食事するとき、みんなはお父さんよりはやくテーブルの前に座っちゃうだめだ。また、お父さんの前にタバコを吸わなさそうです。本当ですか。

カン：そうですよ。それは基本的なマナーですよ。

エ：ジャグリンさんの文章に書いている権利ということも親が持たなければならない。一番いいのは、子供は親が怖くなるという時もあるという認識があって、自動的に悪いことをやらない。

私：子供は何かいいか悪いか分からないから、間違っている時、ちゃんと直さないと、同じなことがまたやってしまう。ですから、日本のお母さんのようにただ“やめって”とか、“ダメだ”とかを言っているだけで、子供が常識さえ勉強できない。

エ：だから、子供に説教することは必要だ。日本は七歳までまだ子供だから、何でも許してあげるという考え方を持っている人が少なくない。

私：私も日本の子供について研究するビデオをみたことがある。日本の幼稚園の先生は子供に叩かれても全然怒らない。だから、先生に対して、尊敬する気持ちがない。

実は、昔の家族は夫いわゆる父親は家族の軸として子供の教育に厳しかったが、子供は父親のことを尊敬していた。子供は一般的に父親あるいは年輩の人に対して距離感があり、ちょっと怖い印象を持っているので、何かよくないことをやったら、叱られるかもしれないと思っていた。だから、子供は普通は大人が教えた通りしていた。しかも、今の親が優し過ぎるので、子供は親のことを基本的に尊敬してない。いつも自分がやりたいとおりにやってしまう。親が反対の意見を言っても聞かないうえに、親に暴力を振る場合もあるだろう。

### 家に幽霊のような存在の父親？

私：日本のお父さんはどうですか。家にあまりいないですか。

武：最近若いお父さんは子供のことに熱心になっていると思うよ。子供の運動会にデジタルカメラを持って、子供の姿をおって写真を撮っている姿をよく見るよ。今の60代のお父さん達が若いときはちょうど日本の経済が急速に発展している時期だから、忙しくてあまり家にいなかったけど。

私：そうか。時代によって状況は違って、いつでも変わっているね。でも、日本って、やはり残業が多いでしょう。

武：そうですよね。また、香港は狭いから、どこに行っても近い。私の場合は横浜に住んでいて、東京に仕事をすると、通勤は1・2時間かかる。もし仕事が8時に終わっても、



家に着くのは十時ぐらいだ。私の子供が小さい頃、夫は毎日夜11時とか12時とか、遅くまで家に帰ってきた

私：そうだよね。これは地理的な問題だ。香港の場合は、遠くても45分ぐらいしかかからない。

武さんは日本の父親が家にいないという状況の原因について解説しながら、新しい情報を説明してくれた。私は父親の幽霊のような存在に対して、新たな考えが出てきた。

私がずっと持っている日本の父親に対する印象はちょっと変わってきた。前、ある日本人から「私のお父さんは違うよ、よく家にいるよ」と言われたが、私はあまり信じなかった。でも、竹さんはちゃんと日本の経済が不景気という現況を引用し、運動会の中に父親の様子を例としてあげ、私は日本の若い父親がだんだん変わってくるという状況を納得できた。つまり、私の知っている日本の父親が家に幽霊のような存在は現実の一部分だけで、あるいは特別な例なのかもしれない。しかし、武さんの例を参考すると、10年前は日本の父親がよく家にいないという状況が多かったようだ。だから、こういう傾向がまだ残っていると考えられる。もう一つは、日本は地理的な問題や残業の問題がまだ解決していないうちに、日本の父親は家族のメンバーとの会う時間が少ないということも否定できないのではないだろうか。こういったわけで、日本の父親は必ず家にいないということではない一方で、今の若い父親は必ず子供を熱心に考えると一概には言えない。

## 理想的な家族

### 私達が知っている日本の家族

エ：私は専門学校に勉強している時、先生の話によると、今三歳の子供が生まれたから、夫妻はずっと別々な部屋で寝ている。妻は子供と一緒に、夫は自分で寝ている。なぜかという、「私は仕事があるから、子供がうるさくて、お母さんだけ面倒を見て」とその先生は言った。

女が子供を産むことは当然なことじゃない。体もばらばらになるし、ストレスもたまる。そんな簡単なことじゃない。男はそう思うんだって、自分で生んでみて。

私：そうだよね。私は名古屋にホームステイする時、もっとすごい話があったよ。それは子供二人の四大家族だった。お母さんに日本の家庭内暴力の話を聞いて、お母さんは自分の経験を話した。長女が三歳の時、次女を産んだばかりで、夫はすぐ単身赴任で行っちゃった。小さい子供二人の面倒を一人で見、すごくストレスがあったそうだ。子供二人が泣いて、自分も涙が出て、一瞬子供を枕で殺そうと思った。結局、お母さんは子供を連れて親の家に行った。夫が帰ってきて、家は誰もいなくてびっくりした。

それは多分妻が夫にちゃんと話してなくて、夫もそういう時期は単身赴任で行っちゃったからだ。

エ：夫はもっとやさしくて、よく電話をかけてきたら、こういう状況にならないと思う。

妻もちゃんと自分の気持ち、つらさを夫に伝えなければならない。日本の文化では愛していても、あまり話さない。

私はエレナさんと話して、二人とも日本の家族関係は自分の国にありえないことだと思っている。普通に、もし妻は専業主婦だったら、夫が10時 11時まで働いていても待ってあげるはずだ。だから、動機に書いているホームステイの家族の関係がおかしいと私達は考えている。

また、エレナさんも私も実際に日本で起こっている例をあげてみて、二人ともびっくりした。いったいこういう家庭に愛があるかどうかよくわからない。話す機会を作るために夫を待つべきだが、妻は夫の苦しさも理解できないふりをして早く寝てしまうし、自分のストレスや困難なども夫に伝えていない。逆に子供の世話と家事を分担するべきだが、夫は妻の苦勞に関心を持たない。こういう自分しか見えない夫婦は幸せになれないだけではなく、冷たい家族に成長した子供は、将来大人になって、悪循環でまだ同じような家庭を作るかもしれない。結局、こういう家族がどんどん増えてくる可能性が高いだろう。

## 母親として

### 妻・母親として、落ち入りやすい穴+母親へのアドバイス

武：私は子供を産んだ後、仕事をやめた。その時お母さんとして子供を育てることは自分の仕事だと思った。でも、時間が過ぎて、こういうふうを考えちゃだめということに自分も気が付いた。子供を育てることは仕事じゃなく、ただ生活の一部だけ。ですから、私はまた仕事を始めて、今大学院でまた勉強している。

私の子供が小さい頃、夫は仕事で忙しくて、毎日夜11時とか12時とか、遅くまで家に帰ってきた。子供のことは私がやるしかない。その時は苦しかった。

ジャグリンさんの文章の中に最後の部分は“自分の国”を書いているけど、実は家族というのは自分だけの問題として考えたほうがいいよ。国なんか関係なく、自分はどうすればいいかを考えれば。私は今までの人生の中にいろいろな体験があるが、一番大事なのは、自分がやりたいことができる。自分はやりたいことをやって、相手も自分のことを尊敬してくれる。もし自分がやりたくないことを我慢してやって、自分の意向を殺して、相手も我慢しなければならない。以前、私は夫に言われたが、“君は子供のことを必死にやっているが、要求していないことまでやって、家族のみんなも疲れているよ。やめた方がいい。”

妻が子供の面倒を見ることを仕事としてみなすなら、昼も夜も仕事をやっているののような形で、大変疲れているのではないかと。夫婦二人が子供のことを共通に関心を持つべきなのに、それが妻の仕事になっていると、子供を育てることの楽しさと苦しさを体験できなくて、二人の生活は別々になってしまう。子供を育てることは親二人の責任だから、一人

しかやっていないと、二人とも不平等だという感じがするかもしれない。母親はどのように私だけ子供の面倒を見ているのかと落ち込んでいるとともに、父親はどのようにして私は子供の世界に入られないのかという淋しさを感じている可能性がある。

ちなみに、私は日本でもし子供を産んだら、仕事をやめることは普通だという印象をもっていましたが、武さんは最近日本の労働人口が減っているので、女性もだんだん働くようになっていった。それは本当にいいことだと私は思っている。

## 父親として

### 夫婦の協力

カン：今、子供に厳しくすると、私のことが好きじゃなくって、親しくなれない。私は“なんでもいい”と我慢して、子供と親しくなるが、子供は腹が立つとき、私を叩いたことがある。そのとき、妻は厳しく叱って、“だめ”とか“家に出なさい”とかを言った。だから、父親って厳しくなると、子供と親しくなれないが、甘すぎると、無視されてしまう。

子供は父親への要求もただお金だけじゃなくて、休日に遊園地へ連れていくとかいろいろな愛の証明をしなければならない。父親は母親のようにいつでも子供のそばにいないから、自分が努力しないと。

今の父親は子供に厳しく接したら、子供に無視されるかもしれない。お互いに友達のような関係が一番いいと思っているが、子供がよくないことをやったら、やはり厳しくしなければならない。もし賞罰があったら、子供がちゃんと覚えるのではないだろうか。

いつも子供のそばにいる母親は、父親の役割をちゃんと子供に伝えなければならない。例えば、お父さんは私達のために、一生懸命働いていることとか、お父さんを尊敬しなければならないこととか、子供が小さい頃から教えるべきである。そうしないと、子供にとって、いつも会えないお父さんの存在はどういう意味があるかわからないかもしれない。また、カンさんがあった場面のように、子供は優しい父親にひどいことをやったら、母親が夫の権力と地位を守るため、子供を説教しなければならない。逆に母親がこういうことをやられたら、夫も子供に教えるべきである。これは子供の教育のために、夫婦二人が協力して教えなければならない家庭教育である。

## 結論

対尊属暴力について様々なことを話したが、今私が考えていることのは冒頭で動機に書いたこととちょっと違っている。対尊属暴力は、私が今まで考えていた二つの原因（父親が幽霊のような存在と親子関係）だけではなく、ほかに考えられる原因のディスカッションで出てきた。

その一つは子供が学校でいじめられるという問題である。学校にいじめられた子は家で親を殴る可能性が普通より高いということがわかっている。また、核家族が多くなること

につれて、親子関係の仲介とをなるものと手本がなくなることや、相談できる相手がいないことや、長幼序の概念がなくなるなど、いろいろな問題を生み出した。直接の関係がなくても、対尊属暴力が起こる間接的な原因と言っても過言ではないだろう。

父親が家にいないという状況は50年代からだったが、対尊属暴力は80年代から出てきた新たな問題であり、特に最近増えている傾向がある。なぜこういう現象が生まれたのだろうか。または父親が家にいないという状況が変わらないとすれば、どういうふうに解決できるのか。

家族の問題はすごく多くて、家によって違うと考えられる。だから、理想的な家族を作りたいと、家族の問題を解決する方法を考えるより、問題が起こらないようにどうすればいいのかと考えたほうがよいだろう。家族の基本的な組合は夫婦二人と子供である。子供は生まれたばかりとき、白い紙のような単純で、どういう人になるのか最初に親の次第だろう。それゆえ、対尊属暴力の原因は親の育て方が間違っているかもしれない。親は子供をしっかり育てないと、理想的な家族が一切作れない。

実は、みんなの意見をまとめてみると、一番大事なのは父親が家にいるかどうかということではなく、子供が父親を尊敬するかどうかということである。それは子供がどういうしつけと教育を受けているかによる。親が子供を甘やかし過ぎて、また教師が子供に寛容になり過ぎて、子供が無礼なことをしても、許してしまう。結局、親や年輩の人の意見と存在を無視することになる。子供は、親がほかの人より甘いというイメージを持ち、腹が立ったとき、一番手を出してしまいやすいのは間違いなく、なんでも許してもらえる親だろう。こういうわけで、対尊属暴力への対策は、社会的に（特に親が）子供への態度を変えて、しつけと教育をきちんとしなければならない。

親はこの善し悪しを判断できるので、家庭内の権力を持っているというわけである。それゆえ、子供が間違ったとき、ちゃんと直してあげなければならない。例えば、人を殴ってはいけないこととか、年輩の人に席をゆずってあげることなどの常識を教えるべきだ。

子供を育てることは夫婦二人の責任である。夫婦の関係がよくなないと、子供が正しい教育をもらえなれない場合が多い。だから、理想的な家族を作るために、一番基本的な条件は夫婦関係がよくしなければならない。

ディスカッションの中で、結婚というのは何と聞かれたが、その時にうまく答えられなかった。今よく考えてみると、結婚はお互いに愛を表すと答えると、ちょっとものたりないかもしれない。もちろん、愛が結婚の基本条件ということには変わらない。しかも、結婚というのは愛するという気持ちを持っているだけではなく、相手と新しい生活をしたいという希望があるわけである。結婚後の人生の中でぶつかるさまざまな障害や困難などを二人で一緒に乗り越えなければならない場合が少なくないだろう。そういうとき、我慢するのではなくて、自分の気持ちを打ち明けたほうがいいと思っている。

武さんが言ったとおり、お母さん（特に専業主婦）はずっと一人で子供の面倒を見て、自分が“ 苦しい ”、“ つらい ”と考えて落ち込んでいる人が多い。子供のことは夫婦二人の責任だから、妻は何があったら、必ず夫に言って、一緒に解決したほうがよいではないか。そうすると、二人の関係をもっと深めることもできるし、子供も親の愛を感じるだろう。また、お母さんは仕事や趣味などの目標を見つけて、子供のことをただ生活の一部として考えたほうがまだ。

夫は妻の役割を認め、妻の仕事や趣味を尊重しなければならない。妻は専業主婦をしていても、夫は子供の面倒や家事などをできるだけ手伝ってあげる。子供との関係については、カンさんが言ったとおり、厳しくしてはいけませんが、親を尊敬するように育てるべきであろう。

今、私は望んでいる結婚の相手は私のことが好きだけではなくて、私と同じに家族のことが大事に考えて、理想な家族を作るために、私と一緒に努力したいような人である。また、子供が私達を尊敬になるように、二人は協力して、子供を甘やかさなくてしっかり育てたいと思っている。

実は、理想的な家族と言っても、私の想像だけだから、実現できるかどうかまだわからない。自分は親になるとき、また新しい問題が出てくるかもしれない。しかし、みんなの意見と経験を忘れないで、理想の家族を作りたいを思っている。

## おわりに

エレナさんは未婚であり、子供もいないので、批判的な立場で日本の家族を見て、さまざまな点において間違っていると指摘している。エレナさんはロシア人であり、考え方はやはりアジア圏の日本や韓国や香港の人と違っている。文化的な交流ができたと思っている。

結婚していて、子供も二人がいるカンさんと武さんは、表面的な家族の問題だけではなく、経験者として問題を解決する方法とか、親はこういう場合にどうすればいいのかと深く考えている。今までの人生で体験した例をあげて説明してくれた。

三人といろいろこれまで話し合っ、本当にいい勉強になったと感謝している。私もこれから幸せな家族を作るために頑張らなければならない。

# 日本のテレビについて

ブレッカー・ニコラ

## 1. はじめに一動機

私は日本に来てからよくテレビを見て、よく驚くことがある。テレビを見て驚いたことについて考えると、私は日本についてよく新しい発見をし、ときに日本について新しいことを学ぶ。もちろん日本の生活でいろいろな驚くことがあるけれども、テレビでこのことは強調されるので、私にとって最高に目立った。

例えば、日本語の使い方の経験だ。日本語でよく「どうしたんですか」や「どうして」を使われる。子供が泣いたら日本人は子供になぜ泣いてるか聞かないが「どうしたの」とたずねる。あるいは、予想しなかった所で友達と会う時、「ここで何をしていますか」ではなくて「どうしたの」としか言わない。「どうしたの」という言葉はこのようなときに使われるとは知らなかったので、私は驚いた。

ほかの驚いた表現は「わかりました」である。英語で映画を見たとき、登場人物は「Yes」と言っていたが日本語の字幕では「分かりました」と書いてあった。私は「Yes」は日本語で「はい」という思っていたが、使い方が違うようだ。最近私は「はい」と言いたい時に、代わりに「わかりました」と言うようになった。私はテレビを見て、日本語の使い方について学んだ。

さらにほかの事は目立った。CMは一つの例しかない。日本のCMはドイツのCMより頻繁や短くだけではなく、ドイツのCMに比べて内容も違う。日本のCMに出ている人は子供っぽい人が多い。私はこれがあまり好ではなく、どうしてこのようにCMが作られるかが分からない。なぜ日本人は子供っぽいCMを作るのか考えると、多分日本人はいつも若く見られたいのだと私は思った。その後で、日本人と話した時、特に女の人は本当に若く見られたいに気づいた。私は彼女の年齢を23歳に見えると言うと、彼女はがっかりした。なぜなら、彼女はもっと若く見えられたかったからである。それは私にとって新しい発見だった。

そして、日本のテレビではよく字幕を使われることに気づいた。ニュースで、お笑いでもよくこの字幕が使われる。ドイツでは字幕がぜんぜんないから驚いた。私はどうして使われるか考えた。日本ではたくさんの方言があるし、同じ発音の言葉がたくさんある。例え

ば「端、橋」である。私はこれが日本のテレビで字幕が使われる理由なのかもしれないと思った。その後でニュースの字幕は耳が不自由の人に助けであると聞いた。お笑いの字幕は強調のためらしい。私はこれらの字幕に驚いた。しかし、番組の内容を理解するため私の助けになるから好きだ。

このように私はよくテレビを見て、驚くことがある。私にとって日本のテレビは驚いたことについて考えさせられることであり、新しい発見をすることである。

---

## 2. ディスカッション

ディスカッションの相手は同じグループの千田さんとほかのグループのジャブさんとナインさんだった。日本のテレビは気づいたことや驚いたことについて話した。

### ・ 日本テレビはおもしろくない

ニコラ：みなさんにとって、テレビは何の意味がありますか？どな風に日本でテレビを見ますか？タイとドイツに比べて同じ風にテレビをみますか？それとも感じが違いますか？

ジャブ：ちょっと違います。日本のテレビで面白い番組が少ない、タイで土曜日と日曜日はのんびりします、テレビで面白い番組がたくさんある。でも日本で週末の番組はおもしろくない、お年上の人のためです。夜の遅くの番組もあまりおもしろくない、タイで夜遅くの番組は若者のためです、音楽と映画す。。

千田：面白くないってどういう意味。

ジャブ：つまらない。

千田：面白さは人によって違うでしょう？ジャブはどのものはおもしろいと思う？

ジャブ：音楽とか映画とかゲームショーもいいし、でも日本はドキュメンタリみたい。

千田：あ そういうことか。ぜんぜん分からなかった。なるほど。確かドキュメンタリが多い。

ジャブ：ゲームショーもあるけど、あまり分からないから、おもしろくない。

人によって印象が違う。ドイツでたくさんのドキュメンタリがあるので、日本でたくさんがあると私は気づいてない。しかし、タイでゲームショーの方が多いから、ジャブは日本でドキュメンタリが多いのは気づいた。

### ・ 話すことばがたくさん使われる

ナディン：私は驚いたことは 話す言葉だけ使われる。例えば NHK だけで丁寧言葉を使うけど、かのチャンネルで話し言葉だけ使う。

ニコラ：それは驚いたことだったね。。

ナディン：はい、例えばこの 食べちゃった、飲んぢゃった。。。。

確かこの話す言葉がたくさん使われる。日本語で丁寧さのレベルはほかの国語より多いである。日本語を習う時ももちろん初めに「ですーます」という形を勉強する。それでテレビで話す方に驚くところが多い。この場合で日本語が特別な言葉だと思った。私はフランス語と英語を勉強していて、この言葉でお笑いはニュースより分りやすいである。言葉はもっと易しいだから。しかし日本語でそれは違う。

#### ・ CM について

ジャブ：好きなこともある。CM の時間は少し短い。。タイでとても長い。。

ニコラ：でもこれでいい。ドイツで CM は長いですから、トイレに行ってもいい、ちょっと料理を作ってもいいけど、日本でトイレに行つて、帰ると番組もう始まった。でも。。 どうですか。ジャブは CM が好き？

ジャブ：まだ決まってない。

ニコラ：それ面白い、ほかの人は CM は本当にめんどくさいと言つたけどジャブはそんなに嫌いではないね！

ジャブ：嫌いではない。

ニコラ：おもしろい。。

ジャブ：時々日本の CM での踊るを見たいです。

ニコラ：まじで。。

私は皆が CM が嫌いと思つたから、驚いた。。

#### ・ 日本のテレビはうるさい

千田：私は例えば7年、アメリカに住んでいて、日本に帰つて来て、日本のテレビを見たときおもしろいと思つたけど、すごくうるさいと思つた。

ニコラ：私もお笑いを見たときとてもうるさいと思つた。とてもうるさいだから、いつもすぐチャンネルを変えた。

千田：日本語はいしょうけんめい聞かなくても分かるでしょう。だからうるさいと思つていた、。

ニコラ：でも日本のテレビでいつも大声で話して、そしていつも笑う。それでうるさいと思う。



千田さんと私は違うことをうるさいと思いきや、千田さんは例えばお笑いの内容が分かって、この内容はばかだから、うるさいと思う。私にとって、お笑いではたくさんの騒音があるから、うるさいとおもう。ドイツでも時々テレビを見るでのんびりしたかったんだけど、番組の内容はばかだったから、頭に来て、うるさいと思った。

---

### 3 . 結論

日本のテレビを見ると、たくさんの驚くことがあると思った。ディスカッションの後で、驚くことは人の観点次第であると気づいた。いろいろな国の人によって、驚くことは違いくらい。それで、観点は背後事情が重要で、つまりお古里や過去は重要で、どこに生まれたか、どんな文化に育たれたということである。例えば、ジャブはタイから来て、タイでたくさんのゲームショーであり、番組は若者のため作られるのようだ。それで日本のテレビは面白くないと思った。私にとって、日本のテレビでドキュメンタリあまり気づかなかったけど、ゲームショーがたくさんあり、これらは若者のためであると思った。ドイツでゲームショーはそんなに多くないからだ。

ナディンの発見もそれを見せる。彼女はドイツで丁寧語を勉強したから、テレビの話す言葉で驚いた。観点は教育次第だった。

千田さんは日本人なのに、このような発見をした。アメリカで違い状況に住んでいてから、日本のテレビがうるさいと思った。日本のテレビを知っていたのに、このことに驚いた。アメリカの生活に慣れていたので、日本で驚いた。

動機で「私にとって日本のテレビは驚いたことについて考えさせられることであり、新しい発見をすることである。」と書いた。今はこの新しい発見は上記な背後事情という要因から影響を受けると分かった。時々驚くことは日本の現象だけではないし、つまりそのような事はほかの国でも見られるが、ドイツでその現象がないから驚いた。

私はテレビを見ると驚くけど、番組をドイツに比べると驚いて、日本とドイツと比べると新しい発見をする

---

### 4 おわりに

私は日本に来た時、だいぶ前から日本語を勉強していたけれども、話す機会あまりなかった。しかし、この総合授業で話すチャンスをもたらした。自分の考えを表すために新しい言葉を使いようになって、やさしくて説明できるようになった。

その上、ドイツで作文を書いたことがなかったから、ちょっと緊張した。総合の作文を書く時、恐怖がなくなった。それで「ちえ」の皆さんありがとうございます！大変お世話に

なりました！これからまたがんばりましょう！

# 望ましいイイ先生！

河 イル 黙

## 【目次】

### I. 動機

### II. ディスカッション

1. 望ましいイイ先生、誰が思うのか？
2. 映画『今を生きる』のキーティング先生について。
3. イイ先生という判断はなぜ必要か？
4. 「望ましいイイ先生」になるためには。

### III. 結論

### IV. おわりに

## I. 動機

私の夢は中学生の頃から今まであいかわらず先生になることである。小学校時代から先生が好き、さらに私にとっては、私が尊敬している先生という職業ほど素晴らしいものはありません。なぜかというと、先生は学生にただ教科書に出る知識を教えることだけではなく、もっとも大切な、学生一人一人が世の中を生きていけるように人生のありかたを教え、指導しながら導く大事な責任を持っているからである。

大学時代学部生として1年間いろいろな国の言葉を勉強した時、友たちと私は専攻で日本語を選ぶつもりだったが、勉強の意欲が下がるほど先生の心ない態度に傷ついた友達は専攻としての日本語の勉強を諦めた。その時、先生を志した私にとっては学生が先生の一言で自分が望んだことにやる気がなくなったことがショックであった。学生に大きな影響を与える先生の行動と言葉の重要性を実感した。

その時、一般的に先生はいい学校を卒業し、専門分野では優秀ならその理由だけで尊敬されるはずであった。しかし、ただ生徒に教科を教える側を‘先生’だと呼ぶべきか？と疑問をもって「良い先生はどういう先生か。」と悩んだことがあった。

数年後、日本に来て見た TV ドラマ ‘3年 B 組金八先生’ をきっかけで最近「イイ先生はどういう先生か。」についてまた考えるようになった。

3年 B 組では、すごく色々なことがおこったりするが、先生がクラスの皆と考えて解決

をしていくその姿は感動的だったし金八先生が生徒に愛を持っていることを感じる事ができた。金八先生が学校は楽しい所だと、苦勞した後にはかならず楽しいことが待っているのが人生だと心を込めて教える姿を通して将来先生を目指している自分とついつい比較するようになった。「この場面だったら私はどうするかな？もしこうなったらどうするかな？」というふうに考えながら金八先生こそいい先生だと思った。

私にとって「望ましいイイ先生！」は学生に愛情を持っている先生である。

## Ⅱ. ディスカッション

### 1. 望ましいイイ先生、誰が思うのか？

私「望ましいイイ先生」について皆が認める何かがあると思います！イイ先生はどういう先生？と聞いたら重なる意見があると思いますが新井さんの考えはどうか？

新井さん「重なる部分がぜったいあると思うけれど重なる部分を見つけたとしたらそれにどんな意味があると思う？」

重なる部分があったとしても、もし河さんが思っていることが入っていない場合それを捨てますか？皆がそう言うから自分が思っていることを間違いだと思いませんか？

私一人から重なっているところを見つけてイイ先生像を探しても結局、自分がどう思うかが大切だということでしょうね！

新井さんは私に何か伝えようとしたのじゃないか…直接は言わなかったが…。

しかし、重なる部分は本当に必ず、あってそれは信じるべきもの。私がついているイイ先生像の中で人の意見と重ならない部分は本当に私個人的なもの…イイ先生だと思われる条件は本当に多いと思っている。

はじめは、「望ましいイイ先生」に関して話す時、立場からして違うし、個人的な考えになるものだし、そんなに複雑だとは思わなかった。その漠然と、先生全体について話すのは無理なことだと思った。

範囲を狭くしたほうが本当に私が言いたいことを話すことができると思うようになった。

どういう基準をもって「望ましいイイ先生」のことを取り扱おうか？

普通、一般的に知られている「望ましいイイ先生」とかいろいろな人の意見よりも私の意見や考えで話したらどうか！そうしたらほうがもっと正直な自分の話が出るのではない

か！

私にとって「望ましいイイ先生」というのはどういう意味があるのだろう！もう一回動機を読んだ。

あ！そうだ！動機にも書いていたが「将来先生を目指している自分とついつい比較するようになった。・この場面だったら私はどうするかな？もしこうなったらどうするかな？..ふうに考えながら…」やはり私が望んでいる先生つまり、私が先生になった時どういう先生になるのか？に焦点を絞って考えてみたいと思った。時々は一般的な話が出てきても仕様がなければ…。

## 2. 映画『今を生きる』のキーティング先生について。

新井さん—どうして『今を生きる』という映画を見て下さいといたんですか？

私—その映画にでてきたキーティング先生がイイ先生だと思ったし、キーティング先生は私たちが望んでいる先生じゃないかと思ったからです。

新井さん—キーティング先生のどこがイイ先生だと思う？

私—学校側が学生は有名大学に入る進学率を高めるためにいる存在だというふうな考えをもっているし、その立場から教えている先生とは違って、キーティング先生は学生と人生を語った先生です。

新井さん—動機のまとめで、愛情を持っている先生がイイ先生だと言ったがそのキーティング先生が愛情を持っている先生だと思いますね。

私—もしかして愛情がなかったら、学校の規則というか…そのまま、それだけを伝えることしかできなかったのじゃないかと思います。

新井さん—その映画でほかの先生は学生を愛していなかったんでしょうか？

私—愛情がぜんぜんないとは思わないですが学校や親からの期待感からの責任というか義務というかそういうものが多かったと思います。

新井さん—でも、学生がいい学校に入れるのが学生にいいと思う先生もいますよ！その先生も学生を愛しているかも知れないし、そういう場合も考えられるのでしょうか？  
いろいろな先生がいて愛するかたちも違うかも…

私—勿論そうですが、それが本当に学生のためか？そのために学生がなにかを犠牲してまでするべきものか？と思うし、また、その割合がどちらかと言うと心からの愛よりやはり立場からの責任と義務にあるんじゃないかと思います。

新井さん—キーティング先生とは違って昔からのやり方で学生がいい学校に入れるようにするのが学生の幸せだと思い込んでいる先生でも学生を愛している先生がいるとは考えませんか？

私一否定するわけではないですが、愛を持っている先生なら、そのやり方が違うと思います。

新井さんにディスカッションをお願いした時、『今を生きる』という映画について話をした。キーティング先生！私がイイ先生だと思っている先生だ。あの映画と一緒に見た友達もそう思った。その時、私たちはなぜ、キーティング先生がイイ先生なのか？話し合わなかったが共感した。

また、映画にでるほかの先生は悪い先生だとか、愛情がないとか、そういう意識はなかった。ただ、キーティング先生だけが見えたのだ。

学生が学問に熱情をもって勉強を楽しみにしていれば、高い学歴が幸せになるための+面があるから話は違うと思うが、実際、学校はそうじゃないからキーティング先生見たいな人が望まれているのじゃないかと思った。

キーティング先生は理想的な先生かも知れない。映画だから可能なことだと言われるかも知れない。だが人間は理想を持ってだんだん理想に向かっていくものじゃないか！今の現実も理想があったからできたものじゃないかと思っている。

『今を生きる』のキーティング先生は映画を見てから10年たった今も心に残っている先生だ。

### 3. イイ先生という判断はなぜ必要か？

私—いい先生かどうかは誰が判断すると思うでしょうか？

新井さん—それぞれの人、自身！

私—私が思ったのと、ほかの人が私の思うのとが合わない場合はどうしますか？

新井さん—合わない場合はなんで困るのですか？

私—もしかして先生のほうに何も問題がない場合はそういう判断が合わなくてもいいと思いますが、先生側に何か問題があるとしたら先生のほうが自身のことを直さなければならぬと思います。

新井さん—例えば、河さんが「この先生はイイ先生じゃない」と思ったらそれを先生に改めてほしいです？それを言うためには私も、AさんにもBさんにも皆同じ考えをもっているかを確認、その先生にちょっと直して下さいと言いたい？

私—私の場合、そういう話ができないですが、学生が判断しようとするより自然に感じられることでイイ先生か、どうかかわかります。そういう判断は先生の方に大事な意味があると思います。

新井さん—なぜ判断したいか？もしかして先生がすごく変な先生で学生に対して優しくな

いし、変な習慣もっているし、やり方が分かりにくいし、いやな人かも知れないから私たちにとってはこの先生はイイ先生じゃないかもしれないけど、Aさんは、Aさんの何かを助けてもらったとかの理由でイイ先生だと思うかも知れないでしょう！そしてたら何が困る？まず、判断してどうしますか？

私—先生のすること全部がイイところならイイ先生と言うより、先生ならすべきこと、皆に期待されていることなどいくつかのことがあるはずだと思います。その中で何かが欠けている場合、人から「A先生はこういうことがよくない」と言われて、先生は自分が気づかなかったところを直せると思います。



今の話しの根本には学生は正しい判断ができる、先生は学生の意見を受け取れることができる場合に限られるとは思いますが。

私は心配りしてもいつも何かを間違える。先生になった時もきっと何か間違いがでると思っているから心配にもなる。こういう私にとっては学生とか人の評価というのは大切なものだ。自分自身の価値観とか考えも守るべきだが、学生の意見にも耳を傾けることは自分自身を成長させるために必要なことだと思っている。

でも、何か厳しい基準があって、それに合うかどうかによって判断されるのは寂しいことじゃないかしら！先生と学生の関係がそんなに厳しい状況にならなくなるためには何よりも愛が大事なものになっていると思っている。



私—イイ先生か！どうか！判断するのは、先生自身よりも学生のほうだと思います。

新井さん—それは河さんが先生になったとき、河さんが自分自身のことをイイ先生だと思う必要がないということ？

私—必要がないと言うよりも、先生って先生一人ではなにもできない、意味がない、学生と一緒にいるからこそ何かができる！と思います。学生からイイ先生だと思われる先生のほうが、先生自身がイイ先生と思った場合より意味があると思います。従って学生の意見が重要だと思います。

新井さん—例えばね、河さんは学生に宿題とか予習をちゃんとしてもらわないといけない…という考え方で学生が宿題をだす先生はいやだとイイ先生じゃないと言ったらやめるつもり？

私—教科的なことで学生がやるべきなことなら問題は違います。ただ教科を教えるだけが先生じゃないと思います。学生との生活中でいろいろなことを通して先生と学生の間に心から感じられる何かがあって、そこから学生がイイ先生だと感じることもできると思います。

新井さん—河さんは結局、先生に何を求めているのか？

私—先生が学生に愛をもっているか？どうか？が重要だと感じています。

新井さんの「河さんは結局、先生に何を求めているのか？」という質問に私の心は慌てた気がする。今も偉い答えはできないが…！

愛を持っているイイ先生とは、「イイ先生は愛を持っている先生だ」という答えとはちがって、愛以外にもイイ先生の条件が別にあるというふうな曖昧な答えだった。そうだ。愛は必修条件になるのだ！ほかにもイイ先生の基準は沢山ある。

理想的な先生は多分ないと思っているのに、私は先生に何を求めているのだろうか？本当に何かを求めたいという気持ちが私の潜在意識にあったのか？それで今、「望ましいイイ先生！」についてレポートを書けるようになったのか！

イイ先生はどんな先生だろう？具体的に「望ましいイイ先生」について考える時、先ず、自分が思っている基準に比べてみるはずだ。

人によって、学生を信じてくれる先生・公平な判断ができる先生・授業が分かりやすい先生・強い理念と熱意を持っている先生など等…を優先的にあげるかも知れない。

私が望んでいる先生、私はどういう先生になりたいのか？私は心の温かい先生が好き！学生と心のつながりもできる先生、心のつながりができるためには多分、学生に愛情がなければできないと思う。

#### 4. 「望ましいイイ先生」になるためには。

私—この前、A 授業の先生に B 授業のレポートの検討をお願いしたことがありますが先生は断りました。レポートをだした先生の授業で検討するべきだと言うのが断った理由でしたが…。A 授業のことは A 時間にというのは視点を改めて考えてみるとそれは義務的な教え方だと思います。

新井さん—基本的にその先生の言い方とか理由づけがどうだったのか私は直接聞いてないから分かりませんが。この場合、レポートの間違ったところを・“こういうふうに直しなさい”と言ったとしたら自分がいろいろ工夫すれば勉強になるだが、先生に全部直されたものは自分が意識しないでしょう！

私— ええ…！先生の考えが「その授業の時間に考えながら直したほうが勉強になる」ということなら理解できますが、先生が担当している授業以外の授業には関係したくないという意図だったら…

新井さん—学生自身が問題を解決していけるような力をどうやってつけるかを教える方が先生じゃないか！

私が思う 愛、責任、義務は…

- 愛—先生の心が込もっているもの。



- ・責任—義務より強制性がない、個人的な意思も反映される。
- ・義務—保守的な立場からしなければならないこと。

でも、私の話では責任と義務が重なるところもある。

私は義務的に教える先生はイイ先生じゃないと思っていた。

私は先生が自分の授業だけつまりほかの授業のことで学生の面倒をみたくないふうな考えだったのか？が気になったのだ。

私は先生の本音は分からないが。新井さんがいった「学生の学習のために！」だったら先生に感謝したいし、安心する。

「安心する。」と言うのは、私は世の中の先生が教えることを仕事として考えて義務感を感じるより、学生のことを考えればこそという気持ちになってほしいからだ。

義務的な教え方はイイ先生とは距離があると思ったがしかし、新井さんからの意見は私にもう一つほかのことを考えさせた。学生のことを考えればこそとは、先生の責任、義務をもって教えるべきのことを教えるということも含まれているのではないか！…。

そうしたら、先生には責任も義務も要求されることになるから、「望ましいイイ先生」になるための条件にもなるのだ。

### Ⅲ. 結論

“あなたは「望ましいイイ先生！」はどういう先生だと思いますか？”実は、できるだけ多い人の意見を聞いたかったのだ。しかし、ディスカッションをしながら私自身の問題に絞って考えるようになった。

多分、誰にも当てはまるイイ先生！皆の意見が一致する望ましいイイ先生！はいないだろう。それを分かっているのになぜ、私は「望ましいイイ先生！」を求めたのかしら…！はじめ、そう思いながらディスカッションに興味がなくなりかけていたところ、私の有一無二なディスカッションの相手、新井さんの質問は私が今まであまり思わなかったところまで強く刺激してくれた。そのおかげでいろいろなことを真剣に考えるようになった。

イイ先生は、学生を信じてくれる先生・公平な判断ができる先生・授業が分かりやすい先生・強い理念と熱意を持っている先生・学生の個性を認める先生等等…数え切れないほどだろうが 望ましいという言葉を加えると、好ましい！という主観的な意味もあるし・現実にあまりいないから欲する！という意味もあると思われる。

最近、先生という意味がだんだん職業を指す名前に変えていて義務とか責任が強くなるに比べて、愛のほうは無視されているような状況が気になっている私に好ましい先生+ほし

い先生の像は学生に愛情を持っている先生だ。

先生に愛こそ一番大事なものだと思うが、「望ましいイイ先生！」に対してもっと幅広く考えるようにはなったこともディスカッションを通して感じた大事なことだ。

皆が共通しなくてもいい！自分がイイ先生だと思えばその理由だけで十分だと思う。イイ先生か、どうか考えなくてもかまわない。かならず、判断する必要はないだろう！

私は昔から今まで先生は重要な人だと思うから、その重要な人が望ましいイイ先生になってほしいし、私も先生になって重要な役割を果たしたい。

私は、私が愛を持っている先生だと思っているキーティング先生、金八先生みたいな先生を理想像としてイイ先生になりたい。

## IV. おわりに



初め、一回、二回目までの授業は細川先生の総合が一番優しいと感じてイイなあと思ったが今はそう思わない。しかし、それなりの大事な意味はあった。

8名から出発したが人が増えると共に八の鼻が八+1の鼻になり、また八+2の鼻になり、うちグループだけの名前に関する話しも面白かった。

グループの人が面白そうなテーマを決め、動機を書いて発表した時は、私は今後どう書いていくか悩んだりしたが毎週ちゃんとメールを送ってくれたり、私にアドバイスもしてくれたグループの人から勇気をもらってここまで来ることができた。

このレポートを書き上げるために、ディスカッション相手をしてくれた新井さんをはじめ、毎週の授業記録を書いてメールで送ってくれたさえりさん、意見やアドバイスをくれた八+2の鼻皆さん、うちグループを担当した矢本さん本当にありがとうございました。





# 私のホーモの友達

ジットラポーン スパー

- 1 . 理由
- 2 . ディスカッション
- 3 . 結論
- 4 . 終わり

.....

## 1 . 理由

あなたはホーモの友達がいますか。私ならたくさんいる。おかまだけでなく gay やおなべもいる。但し、これは自分の国でこんな人がたくさんいると言う意味ではない。私にとって、その人達ともうなれたほど付き合った。

中学生の時代から、女子学校で勉強していたので、lesbians がよくみられた。彼女は女性ですが男らしい個性だ。初めてみるとおかしいと思った。この友達がいつも髪が短く切ったり男性のような洋服を着たり男らしい歩き方をしたりした。時々、かっこいいという気持ちもあったが、一方、考えてみると、くだらない事だと思った。その時は、親しいおなべもあった、いつしょに話すときや遊びに行く時だったら、大丈夫ですが。あるおなべが近くついてきて例えば、抱いたり、顔をキスしたりしたら危ないと思う。

また、大学に入る時、新しい友達がたくさん知り合ったので、その人達は男と女だけではなかった。おかまや gay やはっきり性別を決められない人もいるし、先輩と後輩の中に、そのホーモもいる。初めてあまりなれなかったけれど、長い間付き合ってみたら、とても面白いと思っている。例えば、あるおかまの友達は誠心誠意で、いつも自分の気持ちをはっきり表す人だ。いっしょに買い物する時、ファッションや化粧品や男についてしゃべる時、とても楽しかった。パーティーに行く時、どんな洋服を着たほうがいいたろうと迷ったら、その人達と相談したら、全く心配はいらない。

私にとって、その人達はかわいそうだと思う。自分の欲しい性別によって生活が出来ないので一生懸命に自分の体や個性を変えたいのだ。一方、ホーモの友達はとても面白い人だ。彼らは何かをしようと思ったら、いつも自信を持っている。ある友達はユーモアな人で、彼らの笑い話を聞く時、毎回笑って、楽しかった。時々、問題があったら、例えば、失恋や友達の問題の場合。ホーモの友達はよく手伝ってくれた。それに、いいアドバイスもくれた。もし、女性の友達だったら、甘い言葉で慰めてくれた。しかし、悲しい気持ちが消えて

いなかった。逆に、ホーモは直接に強い言葉でしかった「バカだ、なんでないてるの？、くだらないことを考えすぎだ。バカだ」。強く私にしかって、悩みを解いてくれた。私は徐々に悲しい問題を忘れた。

私はもしそのような友達と付き合わなかったら、自分の生活が退屈だったかもしれないと思っている。

そのホーモの友達は私の心と生命を豊にするものだ。

.....

## 2. ディスカッション

私のテーマ「 私のホーモの友達 」について、2回ディスカッションした。優しい相手はエスパルスのクルップ「 稲葉さん 」、「 ナディンさん 」とちえのクルップ「 千田さん 」、「 ニコラさん 」である。

### ディスカッション 1

稲葉さんは私の理由を読んだ後、様々な意外な意見を言ってくれた。どうもありがとうございます。

**私** : 稲葉さんはホーモの友達がたくさんいますか。

**稲葉さん** : イギリスで留学した時、ある gay の友達を知り合いました。ただ、先、ジャープの理由によるとおなべの友達はかっこいいと思った、一方、くだらない事だと思ったと書いたでしょう。くだらない事は何かですか。

**私** : おなべの友達は本当に女性なのになんでよく自分の性格とか個性をかわりたいですかと考えています。例えば、彼女がいつも男性のように短く髪形を切ったり男性のような洋服を着たり話し方と歩き方も男性らしいをしたりするのはくだらない事だと思います。

**稲葉さん** : これは個人的な個性じゃないですか。例えば、ある女は男性の洋服が好きなのでよく着る事もあるでしょう。

**私** : そうですね。でも、その女とおなべはちょっと違います。おなべはよく男の個性をするし、女が好き事もあります。

**稲葉さん** : ジャープさんは問題があった時、例えば、失恋について、よくホーモの友達と相談していたと書いたでしょう。もし、女の友達と相談したら、どう違いますか。

**私** : 悲しかった時、ホーモの友達の慰めり方と普通の女の友達はちょっと違います。ホーモの友達は強い言葉で慰めた。彼らの言葉はしかり言葉みたいですが聞くと気持ちがよくなりました。でも、女の友達だったら、いつも甘くて弱い言葉で慰めた。好きですけど、悲しい気持ちがなくならなかった。

稲葉さん : ジャ・プの女の友達は皆いつも甘い言葉で慰めますか。強い言葉で慰める女とかはっきり気持ちを表す友達がありませんか。私はその友達がたくさんいますのでいつも相談していた。

私 : まあ、私はそのような女の友達があまりいない。だいたい皆は弱く慰めました。大丈夫!とか泣かないで!とか言ってくれた。

稲葉さん : 私の友達は色々な人がいるのでもし、何かを相談したい時、その事についてよくわかる友達と相談したほうがいいじゃないですか。例えば、ある友達はファッションについてよくするので相談していました。もし、音楽について、音楽を興味がある友達と話します。皆の友達は個性とか好きな事が違いますでしょう。知りたいことがあったら、よくする人と話ししたら、いいじゃないかと思っています。

私 : そうですね。私もそうおもいます。

稲葉さん : 同じファッションに興味がある女とホーモの友達があるでしょう。ジャ・プさんはどう思いますか。誰と相談しますか。

私 : その友達もあるけどある事についてホーモの友達と話した方がいいと思います。例えば、洋服を買った時、私は着てみながら女の友達を相談して彼女があまりはっきり批評しなかった。いつも「ああ、いいです」とか「にあう」とか「にあわない」だけと言った。もし、おかまの友達ならよくはっきり批評したり説明したりしてくれた。私にとってその方がきめやすいと思います。

稲葉さん : そうですか。でも、人によって性格が違いますですね。しゃべる友達とおとなしい友達もいますね。

私 : そうですね。

稲葉さん : 最後、ジャ・プにとって「そのホーモの友達は私の心と生命を豊にする物だ」と書いたですね。心と生命を豊かにする物はホーモの友達しかないですか。普通の友達はそうじゃないですか。両方付き合ったですね。

私 : そうですね。実は、普通の友達とホーモの友達が私にとって大切なことだと思います。

稲葉さん : だったら、両方ともジャ・プの心と生命を豊かにする物ですね。

私 : はい。そうです。

稲葉さん : もし、もっとホーモの友達と普通の友達の違う事を説明したらいいと思います。

私 : はい、わかりました。人によって、あるホーモの友達の性格は他の女性の性格が違います。例えば、話方やかっこうし方など、ホーモの友達より自信があまりないかなと思う。

## 結論 1

稲葉さんとディスカッションした後、私はある意見が変わりました。稲葉さんの意見に同意する。実は、私はホーモの友達と普通の友達を比べたくない。なぜなら、友達の中で皆の性格や好きな事が違うけど、同じ興味を持っている人もいるし例えば、ファッションに興味を持っている女とホーモの友達を話したら、

もらった内容はあまり違わないけれど、説明仕方「話し方や気持ちが変わって」、聞く人の気持ちも違うと思う。ホーモの友達よりはっきり気持ちを表現します。

稲葉さんは様々な意見を明確に述べてくれた。それに、彼女は自分のホーモの友達を付き合った経験を言ってくれてもっとわかりやすくなった。一緒に意見を述べて嬉しくて面白かった。二人しか話さないのに全然つまらなくなかった。

## ディスカッション 2

次ぎのクラスの中で、新しい相手とディスカッションして千さんとニコラさんとナーディンさんである。彼女達の意見は前の稲葉さんの意見はちょっと違います。但し、時間が少ないから 10分しかディスカッションしなかったが面白い意見をもらいました。

千田さん : ジャ・プのテーマは面白いですね。

私 : ありがとうございます。皆さんはホーモの友達がいますか。

ニコラ : いいえ、いません。

ナーディン : 私もいません。

千田さん : 私はアメリカに行った時ある gay を知り合った。彼は本当に面白い。

私 : そうですか。えーと、日本ではホーモやおかまはあまりみられないですね。

千田さん : はい、そうです。でも、タイで多いですか。

私 : はい、最近、ふえてきます。ドイツではどうですか。ホーモの人がよくみられますか。大学でたくさんいますか。

ナーディン : 大学でいますけどあまりみられません。でも、ドイツで毎年 gay のフェスティバルがあります。その人達は女の服を着て道でダンスしたりパレードをしたりします。

千田さん : タイでホーモはよくみられるでしょう。タイの社会の中で他の人はホーモを受け入れることはできますか。

私 : 最近、だいたい普通な事になったのであまり問題がありません。でも、年上の場合は、あまりすきではない。

ニコラ : そうですね。ドイツ人はもしおかまとか gay をみえたらうわさ話をします。最近、gay のカップルは結婚することもあります。

- 私 : はい、よくみられますね。タイでレズの中でも結婚する二ユースもあります。皆さんはそのホーモが好きですか。どう思いますか。
- ニコラ : 私はホーモの友達がないのであまりわかりません。
- ナーディン : 私もその人達と知り合った事がないからよく説明できません。
- 千田さん : 私のその gay の友達はあまり親しくなくてはっきりいえないけど彼はすごく優しくていい人だと思います。

## 結論 2

三人はできるだけ自分の意見やできた経験を説明してくれた。けれども、時間が少なくてニコラさんとナーディンさんはホーモの事をあまり知らないので意見を述べにくい。但し、皆と話して他の社会についてもわかった。例えば、前に私の考えはヨーロッパ人が最近ホーモのことについてヨーロッパの社会で認めたとおもったが、ニコラさんとナーディンさんの話「ドイツ人はおかまや gay を見るとうわさする事である」を聞いた後、処々びっくりした。ホーモの事をまだ認められないあるヨーロッパの若者もある。もし、もっと時間があつたら、私は三人に質問したくてもっと意見を聞きたいのだと思う。

.....

## 終わり

本当に、私は作文を書く事はあまり好きではない。但し、このクラスで作文を書かなければならないので一生懸命書き出した。また、紫クルップのメンバーは感想や意見などを教えてもらって何回も一生懸命書き直した。一番好きなのは皆さんとディスカッションする事である。自分のホーモの友達について他の人を意見でも得た。ただし、ホーモの友達は私にとって新しいグループの友達である。付き合ったから好きだと思うわけである。私はもしそのような友達と付き合いなかつたら、自分の生活が退屈だったかもしれないと思っている。その友達は私の心と生命を豊かにする物で、両方は大事な事である。ホーモの友達は私の友達の世界を広げるだろう。もし、ホーモと会うチャンスがあつたら、私は皆さんが彼らと付き合ってみてほしいです。あるホーモは思ったより面白い人である。



# 留学生生活の心の支え

## 日本で出会った人

動機.....	2
ディスカッションの相手.....	3
プレゼント.....	4
サークルの友達と子供達.....	4
台湾人の友達.....	5
バイト先のお客さん.....	6
ホームステイのホストファミリー..	7
結論.....	8

## 動 機

小学校四年生のとき、初めて日本のことが好きになりました。最初は日本の「光 GENJI」というアイドルが好きで、メンバーの一人と結婚したかったから、だんだん日本に住むことが夢になってきました。

大学三年生のとき、交換留学生のプログラムを見ました。「日本に住みたい」という夢をもう一度思い出しました。夢を目指して、頑張って、とても充実していました。そして、合格して、早稲田にきました。ここに来て、いろいろなことがあって、楽しいこともあるし、辛いこともあるし、でも好きな気持ちは変わらないです。

よく考えたら、それはここで出会った人達が支えてくれましたから。楽しいことは周りの人と私一緒に作りました。辛かったときは、周りの人が一緒に乗り越えてくれました。周りの人のおかげで、日本のことがもっと好きになりました。

ここで、短い例をあげます。4月に日本に来たばかりのとき、まだ寒かったです。知らなかったから、半袖しか持っていなかったです。留学生歓迎パーティーで初めてある台湾人-メメちゃんと知り合いました。翌日、メメちゃんは私が学校に行くかどうか、全然知らなかったけど、わざわざ長袖何枚も持って、私にあったら、貸してあげると思っていたようです。服を渡してくれたとき、本当にびっくりして、心から感謝しています。

最近のことをあげると、サークルのある一年生-保子がわたしは冬休みのときひとりで東京にいると寂しいと心配してくれてかもしれない、「日本のお正月を過ごしてみる？」「一緒に実家に帰ろう！」と誘ってくれて、ご両親もチケットを予約してくれました。保子が誘ってくれて、本当に胸がいっぱいになりました。とても感激しています。今は冬休みに保子と一緒に過ごすことをすごくわくわくしている。

もし私がであったひとは今周りの人じゃなかったら、多分もう台湾に帰ってしまうかもしれません。最後、私にとって、日本で生活して、周りの人と出会って、心の支えになったことは人生のプレゼントである。

# ディスカッションの相手

## ディスカッションの相手

ディスカッションの相手は院生の星野百合子さんとブラジルの留学生の新屋盛次です。星野さんとディスカッションする理由は、星野さんの癖は空気を吸うことだと聞いて、おもしろいと思って、星野さんとディスカッションをしたら、きっと楽しいと思いますから、決めました。それに、ちょうど私は空気を吸うことがあまる好きじゃないです。

星野さんに支えてあげているのは家族だけじゃなくて、恋人も友達みんなもそうです。星野さんは自分が生きているだけで、「家族は幸せになってくれる」と自分の心の中にそう信じていて、それはすごく支えてくれて、前向きになっています。友達は自分のことをどう思っているのかわからないけど、自分はその人達のことを信じていますから、「信じる」ことで、すごくささえてくれるという気持ちになります。

新屋盛次さんは私と同じ 2002 の 4 月にきて、同じ交換留学生で、同じもバイトをしています。背景が似ているので、ディスカッションをすると、いろいろな話が出ると思います。盛次さんに日本で支えてあげたのは盛次さんの専門は建築で、日本の建物はブラジルとのぜんぜん違いますから、日本でいろいろな建物を見ながら、写真を撮ったり、絵を書いたり、とても楽しいから、ひとつの支えになりました。それに、2ヶ月前、できた彼女も、盛次さんの心の中での支えになったようです。

## プレゼント

### サークルの友達と子供達

最初、ただ日本のサークルに入りたい、子供が好きで、新宿子供会というサークルに入りました。みんないつも日本の文化も習慣も言葉も教えてくれて、お酒の飲めなくても、ジュースを用意してくれました。最初日本語は下手ですから、ミーティングでみんなの話はほとんどわからなかったです。聞くのは失礼だと思いますから、あまり聞かなかったです。一回、サークルの一人が「イクチュウ、わからないとき、いつでも聞いてね、せっかく日本に来たから、日本語はもっとうまくなりたいでしょう。今はいいチャンスだぞ、迷惑じゃないから、遠慮しないでね」と言ってくれました。

みんな本当によく私のことを心配してくれて、考えてくれて、とてもありがたいです。時々、落ち込んでいて、サークルに行きたくない、子供達にいやな気持ちを伝えたら、どうしようと思いますから。でも、サークルに行って、落ち込んだ気持ちを隠して、子供と遊んで、支えてあげたいつもりだったけど、逆に子供の笑顔が支えてくれて、何の不愉快は全部消えてしまいました。

盛次さんとのディスカッションで気が付いた、私は最初日本にいたい理由は日本に来たばかり、何でも初めてですから、とても楽しかったです。それで、日本にいたい。でも今は多分慣れてしまったから、「初めてですから、楽しいになる」というのはもうほとんどないです。最初はどんなことが楽しかったのがほとんど覚えてないけど、楽しかった気持ちは覚えています。なんか、最初の楽しさは、ほとんどサークルの人が作ってくれたって感じます。例えば、初めての飲み会とか、初めてのお花見とか、初めての合宿とか....すごく楽しかったです。サークルのみんながいるから、こんな楽しい思い出が心の中に残っています。

サークルのみんながいるから、私はここに（日本）いたい。

## 台湾人の友達

日本にきて、支えてくれた人は日本人だけじゃなく、台湾人もそうです。異国で同じ国の人とであって、友達になって、本当によかったと思います。

例えば、夏休みにディズニーシーに行ったとき、シーで記念葉書を出そうと思って、あまり合えなかった寮の一人台湾人は一度日本人の友達を紹介してくれましたから、この子にも出そうと思って、出しました。でもその子すごく感動して、私の部屋にきて、いろいろ話しました、今すごく仲がいい友達になりました。それは最初葉書を出すとき全然考えたこともない結果。

私がうれしいとき、すごく放送局みたいで、誰にも何でも考えせずに言ってしまいます。でも、辛かったときは、絶対顔に書いてあるけど、親友しかに言いません。一回あまり親しくないクラスメイトからカードをもらいました。あの人は「イクはよく笑っていて、楽しいことを言ってくれたから、イクは自分のことを友達と思ってくれて、ありがとう」と書いてくれました。うれしいけど、私はただ言いたいだけ、なにもしてないのに、ありがとうなんて、それはちょっとびっくりしました。それに、わたしだって、ストレスもあるもんと理解してほしかったです。

でも今よく考えたら、私は多分その人がきらいじゃないから、楽しいことを言っちゃった。それで、ちょっといい友達になりました。はがき事件もそうかもしれないです。

星野さんは何も友達に言っちゃうタイプだから、きっと友達がいっぱいいると思います。私の考えは、もし星野さんが何でも言ってくれたら、絶対うれしいです。それは、私のことが嫌いだったら、きつと言ってくれないと考えています。私のことを信用しているから、言ってくれたと思います。

わたしは、辛いことを言ってあげない人は多分私の心の中にあの人は親友じゃないかもしれないと考えています。私は言わないから、もちろん相手も言ってくれないです。つらいことを誰かに言ったとき、多分あの人は私の親友と信じています。もしある人がつらいことを言ってくれなかったら、私はつらいと感じる場合は、たぶん相手ともっと仲良くなりたくないかもしれないです。

私に何も言わなかったら、友達じゃないと思わないです。友達ですけど、言ってほしいです。別に何が知りたいわけではない、ただ友達が辛かったとき、私は支えてあげたいです。もし友達が言ってなかったら、私は気が付かないかもしれないと思います。それで、

支えであげない可能性もあります。

わたしは友達が辛かったとき言ってほしい、わたしも言いたい。こういう関係になりたいのは、人と人の気持ちが心か伝えるのが好きですから。

「人」っていう文字は、本当にお互いはお互いを必要としているというの感じがあります。「/」と「\」お互いに支えていますから、「人」になりました。ずっと、自分の心が開くと、相手の心も開くと思います。

### バイト先のお客さん

9月に、バイトが始まりました。いつも笑顔で親切してくれた女子高生やおじいさんやおばあさんや仲がいいカップルなどのお客さんはとても支えてくれました。毎日どんなお客さんがくるがどうか知らなくて、どんな人と会うのがすごく楽しみです。それが楽しいです。落ち込んだとき、バイトさきに入った瞬間、すぐ元気になります。

一回、お客さんが「あなた日本人じゃないでしょう？」と聞かれて、多分言葉でなんか失礼なところがあったと思いましたけど、そのお客さんは「ううん、そうじゃない。ただ、言葉通じなくてもいいよ、あなたの笑顔だけで十分、頑張ってるね。」と言ってくれました。初めて会ったひとが、応援してくれて、本当にうれしいです。バイトももっと頑張ろうと思います。それに、本当にラッキーだと思います。

私も星野さんもどうしてこの世の中に生きているのかなと考えたことがあります。私は特に落ち込むとき考えています。私の存在は、みんなに幸せになるために生きていると思います。ちょっと大げさかもしれないです。落ち込んだとき、そう考えたら、気分もすぐ転換して、もう一度前向きになります。バイトのときも、ちょっと幸せな気分をあげたいために、頑張ってる働いています。ただアイスを渡すだけですけど、あの人は幸せそうに見えたら、わたしはもっとやる気が出ます。

星野さんは「イクちは幸せをちょっとずつ分けるのが好きなんだ」と聞いてくれたとき、「そうだね」「好きだね」と感じました。でもよく考えたら、私の幸せは人達が私の気持ちを受けてくれたから、幸せに感じます。人はただ笑ってくれても、うれしいです。私にとって、周りの人達は本当に大切です。

## ホームステイのホストファミリー

一週間だけのホースステイ、お父さんとお母さんとお姉さんとお兄とてもやさしくしてくれました。お父さんあまり喋らない人ですけど、なんとなく私のことを大切にしていると感じられました。お父さんの体が心配で、よく「タバコをやめて」とか「お酒だめ」とか言っていました。帰る前、お父さんは「イクちゃん結婚する人大変だね、これもだめ、それもだめ」と冗談で言ってくれました。お父さんの笑顔は本当に素敵です。こんなにやさしいホストファミリーの人とあって、本当にラッキーだと感じました。

ホームステイのお父さん達は、本当の家族みたいです。東京に帰ってから、ほとんど毎日毎日お父さん達のことを考えているばかりです。

盛次さんはホームステイしたことがないけど、初めて一人暮らし、前より自由を感じる、それに、自分のお金で生活しているから、とても楽しいみたいです。逆に、私は大学に入ってから、ずっと一人暮らしです。楽しいけど、家族といるときはまったく違う楽しさです。日本にきて、家族ができて、なんか不思議で、とても幸せです。台湾での両親のそばにずっといたいけど、日本での家族にも離れたくないです。星野さんは「自分がいるだけで、両親はきっとうれしいと信じている」と言いました。本当にそうかもしれないと強く感じて、私がいるだけで、どこにいても、両親はうれしいと信じたいと思います。それに、私も星野さんもお父さんとお母さんがいるだけで、ラッキーだと思います。

## 結 論

星野さんが「支えてくれた人達の共通点は何ですか」と聞いてくれました。考えでもわからないから、グループの人に聞きました。エレナさんは「それはイクさんがあの人達が好きだからね」と言ってくれました。そう言えば、ほんとうにみんなのことが好きですね。

自分が好きだって言う人がいて、それだけでもすごいです。その人が自分のことを思ってくれて、矢印は両方になるって、もっとすごいと思います。それはラッキーですね。私はこういう関係が好きですけど、でもその始まりは、やっぱりその人が好きですから。

でも好きとか愛とか、見えないでしょう？自分は愛があると信じていますから、あるでしょう。愛がないと信じるとないでしょう。本当に不思議ですね、信じたいときは信じます、信じたくないときは信じません。(人間って、わがままだね^^;)でも、やっぱり信じることも大切ですよね。

日本でみんなとであって本当に神様が送ってくれたプレゼントみたいです。本当にみんなのおかげで、前よりもっと人のことを大切にしています。みんなは私のプレゼントですから、私も人のプレゼントになりたいと思います。



# 歴史と人間

かん ユンシク

## 目次

1. 動機
2. ディスカッション
  - 1) 歴史をどう理解するか？
  - 2) 歴史は人間に有益なものですか？
  - 3) 私を歴史を通してどんな有益をもらったか
3. 結論
4. おわりに

### 1. 動機

私は幼い時から歴史が好きでした。過去の人間の生を考えてみて当時の人々の生活を想像して見るのが面白かったです。私にとって過去の世界はもう一の世界でした。それで大学の専攻も歴史を選択しました。勿論歴史は硬くてうんざりする面もあります。それでも私が自分で考えてみれば歴史の勉強は私にいろいろ役に立ったと思います。

歴史を勉強して現在を生きていく私について深く考えてみることになりました。大勢の他人の生を見てこれから私がどのように生きていくかについて考えてみて人生の本の意味が何か考えました。私は歴史の中で小さな存在です。それなら私が今生きていく意味はなんだろうか？歴史の中で恥ずかしくないように私に与えられた生に最善を尽くすことが一番価値のある生だと思いました。

また歴史を勉強して私の視野が広くなりました。われわれの周辺では事件がたくさん起こります。そんな事件は過去に起きた事件と類似点が多いです。現在われわれの社会、国家で起こったたくさんの事件を理解して自分なりに評価、予測するのに歴史の勉強はとても役に立ちました。歴史の勉強はいわば私の世界観の形成に影響を及ぼしました。

私にとって歴史は人間の鏡です。もちろん歴史をほかの言葉で表現することができますが‘鏡’は歴史と人間の間をうまく説明してくれることばです。人間はかがみをとおして自分のすがたをみます。かがみを見て自分の顔の汚い部分をきれいにします。歴史も同じです。歴史をとおして人間を見ることができます。

## 2 . ディスカッション

わたしのディスカッションあいてはウネさんとライさんでした。3回にかけてディスカッションをおこないました。

### 1 ) 歴史をどう理解するか？

歴史といえばその範囲がとてもおおくて一言で歴史を表現することが難しいです。また個人的に歴史を理解することも全然違います。

私：歴史といえば、はじめにおもうのはなんですか？

ウネさん：歴史といえば教科書の中で何年に何が起きたとかある戦争である将軍が勝利したとか学校で勉強した歴史が一番早く考えられます。

ライさん：私も学校で勉強した教科書の歴史が考えられます。でも、教科書の歴史は国家、政府の歴史だから、本当の歴史かは一度考えてみる問題です。同じ事件に関する理解が国によって違う場合が多いです。ほかの国の歴史教科書とか資料も参考しなければなりません。

私：そうですね。太平洋戦争など、現代史をみれば、韓国と日本の理解が違います。また、中国と日本の理解も違います。その場合、国民の歴史理解も違います。しかし、歴史の解釈の問題は私たちの範囲を超えることです。ここでは、自分が理解している歴史について考えてみるほうがいいです。

ウネさん：カンさんは歴史はなんだと思いますか？

私：基本的には人間の生活の中でおきるすべてのことが歴史だと思います。そのなかで、いちばん重要なことを政府が整理して作ったものが教科書歴史です。でも、私たちが歴史を考えるとときには教科書の歴史以外の歴史も考えなければなりません。例えば、私たちは家族の歴史と個人の歴史があります。それは他人にはあまり重要な問題ではないですが、私自分にはとても重要なものです。

ウネさん：私の考えでは歴史というのはもっと幅ひろい物を意味すると思います。たとえば歴史は後世の人々に教訓になるものだといってもあまり無理がないと思います。特

に日本にきて感じたのだが日本人が私という存在を韓国人と認識するとき韓国の先祖がいるためだと感じました。私の民族、国の歴史があるために今の私がいるので歴史は個人の存在確立に役に立つようです。

私たちは普通歴史について考える機会がありません。でも、歴史は私たちと密接な関係にあります。私たちが知らずに今も歴史は進んでいます。

2) 歴史は人間に有益なものですか？

私：それなら歴史は人間に有益なものか？

ウネさん：歴史は人間に多く有益をくると思います。個人は歴史を通して自分の教養と思考のはばをひろげることができます。また歴史に関する豊富な知識は人間関係にたくさん役に立ちます。偉人らの生をみて青少年たちは夢と希望をもつようになって自分の生きていく道について考えてみます。したがって学校での歴史の教育は個人の価値観と国家観確立に多くの影響を与えます。

ライさん：私は学校で歴史を勉強したほか、特別に歴史を勉強したことはないのですが、歴史は人間にとっても有益だと思います。学校で中国史と世界史を勉強しました。中国の歴史はとても複雑です。私は近代以前の歴史に関心が多かったんです。いろいろな戦争のなかで歴史の人物はどんな作戦と制度を作ったのかを勉強してとてもおもしろかったです。例えば、中国では三国志という小説があります。歴史小説ですが、いろいろな人物が出ます。その人物は後世にいろいろな教訓をくれます。カンさんの考えはどうですか？

私：そうですね。歴史は人間にとっても有益なものです。具体的にどんなことが有益なのか？私は、次のような面があると思います。

一番目：人間は歴史の勉強を通して人間に関する理解の幅を広げることができます。過去の人間が生きた生の足跡をたどって行って人間の行動様式をわかるようになります。

昨年大阪城に行きました。大阪城の規模にびっくりしました。とても大きい城でした。でも、そのように大きな城を作るためにどんなに大勢の人々が犠牲したかについて考えてみました。昔の一般の国民は人間より機械の部品のような存在でした。私は今の世界はそうのように名前も残っていない大勢の人々の努力によって完成されたと感じました。それで、私たちはお互いに愛しながら仲良く生きて行かなければなりません。

ここでとても面白いところが一つあります。とよとみひでよし（豊臣秀吉）は おだのぶなが（織田信長）に続いて日本の統一を完成させた人物です。秀吉は低い階層出身でした。でも、最後は日本の主人になりました。彼の人生は一つのドラマのように開きました。秀吉は大阪を自分の基盤にして勢力を広げました。大勢の人々が彼の命令で戦争をしてなくなりました。ついに天下を統一してすべての大名の願いを完成させた。秀吉が死ぬとき最後残った一言は‘世上萬事すべてが空しい’でした。果たして人生の本当の目標は何ですか？という質問にどう答えるべきか。

歴史を通して人生の意味を考えながら自分の価値観をつくる場合が多いと思います。

二番目：もっといい人間社会を作ることができます。過去のいろいろな政治、経済、社会 SYSTEM を勉強して長所をならうことができるし短所はすてることができるのでだんだんもっといい社会を作ります。

ライさんがおっしゃったように歴史のなかでいろいろな政策、制度があります。そんなことは一瞬間つくられたものではなくて、長いあいだいろいろな失敗を繰り返した結果つくられたものです。

信長は100年間の日本の分熱を越えて、日本の統一の基盤を作った人です。信長は最初はあまり勢力が強くなかったが最後はほかの大名を全部勝って日本を統一させるようになりました。信長がどうやって難しい危機を局服したか、自分の勢力を広げるためにどんな政策を実施したかみると、今の私たちが学ぶところがとても多いです。

三番目：過去を通して未来を予測することができます。特定な状況、環境に対する人間の反応はだいたい同じです。過去の事件、人物を勉強するとき私たちの未来についていろいろな情報を得ることができます。

私たちは「歴史は反復する」という言葉をよくわかっています。とくに、人間の考え方と人間社会の一般的な秩序は、昔と今、ほとんど同じです。歴史は今の世界とは違うもう一つの世界だから歴史に登場するいろいろな人間の行動と結果をよくみれば、人間社会の一般的な原則とか原理を発見することができます。

古代ローマは世界帝国を創りました。大きな富と権威を自慢しましたが、結局つぶれてしまいました。いろいろな原因があると思いますが、普通上げられる原因の一つは支配層の腐敗です。歴史のなかでいろいろな王朝がありましたが、多くの王朝が外からの侵入より内の分裂によって破れたのはよく知られている事実です。それで現代の国も外からの侵入に対備しながら自分の国の政治、経済などいろいろな制度の改革にも力を入れるのです。

3) 私は歴史を通してどんな有益をもらったか。

私：今まで話したのはとても抽象的な話でした。それで、ちょっと難しいかもしれませんが。今度はもっと具体的にあなたは歴史を通してどんな有益をもらいましたか、歴史からどんな影響をもらいましたかという質問をしたいのですが。

ウネさん：韓国の学校教育の現実を考えるとすれば、歴史の教育らしい歴史の教育は難しかったです。歴史は受験科目の中で比率が低いですから、学生はあまり歴史の勉強をしません。また学校でも歴史より英語とか数学など、もっと重要な科目に時間を使うために歴史の教育はなかなかできません。受験戦争の中で歴史教育が重要にならないので私が歴史を勉強したというのがちょっとはずかしいですが分明歴史はわたしの価値観形成に多くの影響をくれました。大学時代韓国の現代史のなかでいわゆる‘カンジュ事態’という事件を本で読んでみて韓国の政治問題、現実問題に対して関心を持つようになった経験があります‘カンジュ事態’は1980年軍部が政権を奪うためにカンジュで罪のない市民をたくさん殺した事件です。人によって違いますが韓国の中ではその事件を韓国現代史の民主化運動の象徴として認める人もいます。

私：ライさんはどうですか？

ライさん：教科書以外の歴史に関する本を読んだことがあまりないのです。でも、学生時代に授業の中で勉強した歴史はいろいろ役に立ったと思います。例えば、今のアメリカ・イラクの戦争を見るとき歴史の知識はそれを理解するためにとても役に立ちます。個人的な経験ですが、文化革命についていろいろなことを勉強して共産主義はどんなものかと考えたことがあります。

私：そうですね。現代人はとくに歴史を勉強する機会がないから学生に対する歴史教育はとても重要だと思います。学生はまだ自分の価値観が作られていないため学校で正しく歴史を教育したら望ましい倫理意識とか国家観などを教育させるのが可能かもしれません。

ライさん：でも、それはちょっと危ないですよ。教科書の歴史は政府の歴史だから国家と政府の考え方を学生たちに教育することができます。時々歴史を歪曲もできます。

私：そうですね。政府による歴史教育は望ましいところがある一方、危ないところもあります。

### 3. 結論

ディスカッションを通して歴史と人間の関係について他の人の意見を聞きました。現代人は色々な理由で歴史について考えてみる時間があまりないと感じました。でも、ディスカッションの相手はみんな歴史は人間にとっても必要だと言いました。また、人間は歴史を通して過去の人と事件を合うことができるし人間の発展を造りましたと言いました。私の考えとほとんど同じでした。でも、ライさんが指摘した問題をどう考えたらいいかという質問が残りました。ライさんの指摘は歴史は必要ですが、政府の歴史、いわゆる教科書の歴史は政府によって利用することができるという指摘でした。果たして歴史は人間に悪い影響を与える場合があるのか。

ふっと思いついた映画の場面がありました。映画‘真珠湾’の中で日本の若い兵士たちが日章旗をもってアメリカ軍に自爆する場面でした。ほんとうに驚くべき事件でした。そのような兵士たちの忠誠心が日本の力になってアメリカとの戦争を可能にしたのは言う必要がないのです。私はここでそんなことがいいか悪いかを言いたくないのです。

それについては日本でも意見が分けていると思います。

ここで、言いたいことは歴史の教育の威力はとても強いということです。人間の価値観を造って、それをために自分の命まですてるようにします。

結局、人間の生、生活自体が歴史になると同時に人間は歴史から多くの影響をもらうと思いました。歴史と人間はきってもきれない関係にあります。

それなら私にとって歴史はどんなものですか？やはり最初にいったとおり歴史は人間の鏡です。私は歴史を通して人間の生を理解します。また現在起こっている事件を判断します。

歴史は私が私の世界観を作るとき一番重要なものです。

### 4 . おわりに

最初はこの授業は自分の主題について文書を作ったり他人の文書を読んだり相手の文書について討論をしたりしながら日本語の勉強にとってもいいと思いました。でも毎週自分の文書を作って mail を送ること、他人の文書を前もって読むことがとても難しかったです。時間がたつにつれてだんだん負担になりました。でもリーダーのおかげで無事に文書を完成しました。私が大好きな歴史が果たして私にどんな意味があるかについて考えてみたのは意味のある仕事でした。私にいろいろ役に立った皆さんにまことにありがとうございます。

---

# 日本語と出会ったこと

ポロル

目次:

1. 動機
2. ディスカッション
3. 結論
4. 終わり

## 1. 動機

日本といえば着物と相撲のことしか知らなかった私が日本語を習い始めたのは高校のときである。日本語に興味を持つようになったのは初めての日本語であった鈴木という先生のお陰である。鈴木先生は初めての日本語の先生でもあり、初めて出会った日本人でもある。先生は JICA という会社の機会、私の通っていた学校で日本語を教えることになったのだ。鈴木先生はモンゴル語であまり話せなかったし、私たち生徒日本語は全く分からなかったからこそ授業が一般的受けていた授業より面白かった。

私は小学校からロシアの学校に通っていた。だから文法や文章の構成などが日本語と比べると全然違うので、方仮名と漢字をはじめて書いたときの不思議な感じは未だにも忘れない。残念ながら日本語の授業は週に一回しかなかったので、その一日だけをいつも楽しみにしていた。

私をはじめて日本へ来たのは4年前のことである。一人で外国へ来たのははじめてだった。以前、親戚やあまりよく知らない人の家に行ったりしなかった私が日本人の家でホームステイし、一般の高等学校に通いながら日本の習慣を味わうことができとても楽しかった。

性格は消極的で我儘な私には友達が一人しかいなかった。どこか友達と遊びに行くより家にいるのが好きなそんな私に外国へ行って言葉も、文化も違うところに行き友達ができるのか、また自分の気持ちを相手にうまく伝えることができるのかな？ととても心配していた。片言の日本語で学校のクラスメートと話しても自分の言いたいことをうまく伝えなかったり、それとも

話し相手が疲れたりしていたから、来たばかりの頃は楽しかったとは言えない。

しかし日本に来て四ヶ月たってから意外と友達がたくさんできました。そして私のことを自分の娘のように可愛がってくれた日本のお父さんとお母さんと出会えた。日本のお父さんとお母さんはいつも相談にのってくれたり、たまには叱ったりもした。お父さんは仕事から帰ってきたら私に日本語を教えてくれたり、お母さんは私が迷っているときいつもそばに何時までもいてくれたり、相談にものってくれた。日本のお母さんとお父さんは私の両親とかわらない大切な人々だ。

私は自分の居場所を見つけたような気がした。

でも日本に留学したからといってももちろんいいことばかりではなかった。あの頃はまだ15歳だったから、他の人はともかく、自分のことさえよく分からなかったから、いろいろなことで悩んだり、迷ったりしていた。日本語を勉強するようになってからの私と日本語をする前の私はいろいろな面で変わったと思う。例えば：以前、高校の時は学校で行われていた運動会や文化祭などに参加しなかったが、留学してからはもっと積極的になった。

人生は一度だけだから、色々なことを挑戦しながら、自分の夢を見つめて、目的に向かって歩むのは本当に楽しいということがやっとわかった。日本語を通じて、日本人だけでなく、いろいろな国の人たちと接することができた。

日本語と出会ったことは私にとって私の考え方少しだけでも変えてくれた道でもあり、私の財産でもある。日本語を勉強したきっかけで、日本の家族と友達に出会えた。だからこそ私の宝物でもある。

## 2. ディスカッション

私はディスカッションするの相手が多ければいいディスカッションができると思っていたけど、多ければそれほど混乱してよりよいディスカッションができなくなってしまうので恐れがあるから「物語」グループのオレーナさんにディスカッション相手をお願いした。ディスカッションを動機のみから始めました。

### 2.1 動機のみについて

**私：** 私にとって日本語と出会ったことは少しだけでも私の考え方を変えてくれた道でもあり、私の財産でもある。日本語を勉強したきっかけで、日本の家族と友達に会えた。だからこそ私の宝物でもあると思っているんですけど、オレーナさんにとって日本語と出会ったことは何ですか。



**オレーナさん：** 日本語を勉強しているいろいろな国の人たちと出会えて本当にうれしいです。私はポロルさんのように特に変わったことはないですけど、ただ、日本の分からなかった部分というか習慣を少しずつわかってきたのです。ポロルさんはどうして日本語を自分の宝物だと思っていますか。

**私：** 私の宝物というのは私の家族と日本の両親、そして私の友達です。だからもし私が日本語を学ばなかったら日本の両親と友達と出会えることができなかったと思います。だから日本語を勉強したおかげでみんなに出会えたからこそ私の宝物と思うようになったのです。そして初めて一人で外国へ行ったのも、自分を少しでも変えてくれたのも日本語と出会ったからこそできたと思います。だからこそ私の宝物です。

**オレーナさん：** もしポロルさんほかの言語を学んでいたら今の考え方が違っていたかもしれないじゃないですか。そして日本語じゃなくて他の言語を学んでいたらまたいろいろな人と出会えるのではないですか。

**私：** 実は私はロシア語と英語を学んだことがあるんですけど、どちらでも興味があったから勉強したわけではなくて、学校で勉強しなければなかったから、私の義務として勉強したのですが。日本語は自分で学びたかったから、そして興味を持っていたから勉強したので、気分的には違います。日本語ではなくても他の言語も学べばいろいろな人と出会えたとおもいます。そして友達や知人ができるかもしれません。でも自分の両親のように心配して、愛してくれる人は少ないと思います。両親は私が健康で、幸せにいますようにといつも私のことを祈って、守ってくれます。母は私が不安なとき、病気のとき私のことを感じているような気がします。私が入院していたとき、お母さんは私について悪夢を見たといって心配して私のところに電話しましたこともあります。入院していたということを知らなかったお母さんは私が病気ということを感じたから、悪夢にうなされたかもしれません。私はそういう人に出会えるのはそんな簡単なこととは思いません。そして日本語と出会ったのは私の運命だったかもしれないです。帰国してから大学に入学しようと思ったらたいいていの大学の受験が終わっていてなぜかモンゴル国立科学技術大学の外国語学部の日本語学科と英語学科の受験がまだだったのです。だから日本語に出会ったのは私の運命かもしれません。

**オレーナさん：** じゃあ、もし日本の両親と出会えなければ、「日本語は私の宝物」と思わなかったということですか。

**私：** そうだったかもしれません。日本語は私の宝物と思うようになったのはこの日本語という言語のお陰で日本の両親や友達に出会えたからです。

私は日本じゃなくて、アメリカに留学していたら今のような意見をもっていなかったかもしれない。でも私の日本の両親のような人と出会えたのだろうか。それは誰にもわからないことだ。私と同じプログラムで日本へ来て、ホストファミリーと合わないからホストファミリーを変えたいという人がいたし、日本に来てから特に何も変わってないし、感じてないという人がいた。だから私は自分の日本の両親と出会えて本当によかったと思う。これは誰にもあるチャンスと思わないから本

当によかったと思う。そして日本という国の文化や人たちのこと、社会をもっとよく感じさせてくれたのは日本語という言葉のお陰である。私はこの言語を学びながら日本だけでなく、自分でも知らなかった母国のことまでも勉強するようになった。

## 2.2 日本語だけじゃなく、言語というものは人の性格や考え方を変えることができるのでしょうか？

**オレーナさん：** ボロルさんは自分を少しでも変えてくれると言っていましたが、それはボロルさんの性格が変わったんです。それとも...

**私：** 性格も少し変わったけど、考え方も変わりました。私は以前人のことを考えずに自分の意見を直接にいったりしていましたが、今は変わりました。言語を学ぶというのはその国の文化や習慣、社会を学ぶということだと思います。だから私は日本語を学びながら日本人のいいところを身につけようとして努力しています。もちろん日本だからって全てが完璧なわけではありません。それはどこの国でも同じだと思います。でもその長所と短所を分析するのは大事だと思います。私は日本語を勉強したお陰でいろいろな人に出会えたり、そしてその人たちのお陰で自分自身が気付いていなかった短所や長所をわかったのですが、でもまだまだ私自身が知らない、気付いていないこともあると思います。私は日本語を勉強してからこんなふうにこう変わったとか100%ははっきり言えません。なぜかという他人からみればわかるそういう部分もあると思うからです。オレーナさんは言語というものは人の性格などを変えることができると思いますか。

**オレーナさん：** それは人によると思うけど、でもそんなに変わったりしないと思います。私の場合だと性格というよりも日本に対する考え方が少し変わりました。以前私は日本のような珍しい国はあると全然知らなかった。私は日本語のお陰で日本の独特な文化をだんだんわかってきました。ウクライナ語はロシア語や英語とわりと近いので尊敬語などはあまりないし、それに自分の考えていることなどをはっきり言います。私は国で日本語を3年間勉強しているのもかかわらず、こうして日本語のお陰で日本に来てはじめて日本の尊敬語などの使い方をわかってきたのです。そして日本人とうまくコミュニケーションをやっていくにはウクライナ人なりのあまりにも直接に言わないほうがいいということがわかりました。日本語という言葉が伝える文化や習慣、社会に対する理解を深めてくれるということがわかりました。言葉というのは単語と単語を重ねて相手と話すのじゃなくて、その文化という大切なものをわからなかったら日本人とうまくコミュニケーションがとれなかったと思います。

**私：** 私と同じようなことを感じてないのはオレーナさんの周りに日本人というよりも外国人が多いからじゃないですか。

**オレーナさん：** 確かにそうかもしれません。日本にいるのに日本人と接する機会がありません。

ですね。そんな機会があれば日本語に対する考え方が違っていたかもしれません。でも私は英語を習ったからってそんなにかわらなかつたですよ。

**私：** それはもうしかしたら英語とウクライナ語の差が日本と比べるとそんなに大きくないからじゃないですか。

**オレーナさん：** そうかもしれませんね。

人は学んでいる言語のただ単語一つ一つを覚えていくのじゃなくて、その言葉の国の文化や習慣、社会のことも勉強していかなければならない。文化や習慣をもっとよく感じるために、そしてもっとよく知るためにはその社会に入るのが一番大事だと思う。四年前、私がモンゴル人はおるか、外国人もいない山形で十ヶ月間留学して、日本人の家にホームステイしながら、日本の高等学校に通っていたから、その環境によって私の考え方などが変わったと思う。もしこの経験がなかったらオレーナさんのように思っていたかもしれない。だからその言葉を学ぶ環境も大切だと思う。

**私：** 私はモンゴルにいた時は授業が終わるとすぐ家に帰っていたから友達もあまりなくて、自分の世界に閉じこもっていました。たいてい毎日同じことをやっていたから本当につまらなかつたです。そのときの考え方と今の考え方を比べると本当に違います。あのとき私は自分が正しい、みんながいけないとっていて、そして自分以外ほかにいろいろな考え方を持っている人がいる、そういう違う考え方の人と接する楽しみさを知らなかつたです。おかしいと思われるかもしれませんが、だが、私はそういう当たり前のことすら知らなかつたのです。それは多分人とあまり接したりしなかつたから物の見方や考え方範囲が狭かつたからかもしれません。その考え方を少しでも変えてくれたのは留学のお陰です。文化や年齢、考え方が異なる人たち交流しながら、いろいろなことがわかりました。いいこともあったしいやなこともありました。

**オレーナさん：** ポロルさんは初めて留学したのは日本だったからそういうふうに思っているじゃないですか。それともモンゴルで送っていた生活がつまらなかつたから、日本に来ていろいろなことができて、楽しかつたからじゃないですか？

**私：** そうですね。留学してから私は日本語を勉強して本当によかつたと思うし、そして一番大事なのは自分の欠点やいいところをわかつたことだと思います。私は留学したからといって、いいことばかりではなかつたです。学校で日本の学生にいじめられたり、無視されたりしていました。そんなことがあつたからこそよかつたと思うし、以前ぜんぜん感じなかつた、知らなかつたことを感じたからです。

性格や考え方は必ずしも日本語だけを勉強するから変わるのではなくて、どんな言語を学んでも考え方や性格が変わると思う。ただどういう風になるかは言葉の持っている文化や環境によってちょっと変わってくると思う。どんな国の言葉を学んでも性格や考え方が両方ではなくても、いずれ

が変わると思う。私はこのことに気になって、自分の住んでいる留学生会館の何人かに聞いてみると性格というよりも考え方が変わったという人が多かった。私は初めて日本じゃなくて他のところに留学していれば、今のいる私がいなかったと思う。またちょっと違う私があったと思う。以前も述べたように環境によって全てではなくても何かがちよっと変わると思う。

### 2.3 本当に宝物なのか？

**オレーナさん：** ボロルさんは日本の友達や日本の家族と出会ったからこそ日本語がボロルさんの宝物だと思うようになったと言いましたが、もしその人たちに出会えなかったら日本語は宝物だと思わなかったということですか。

**私：** 今のように思わなかったかもしれませんが、その人たちに出会ったからこそ日本語を勉強して本当によかったと思うようになったからです。留学する前は日本語にただ興味があっただけで、あまり深く考えていなかったです。そして日本語に出会ったことは私の日本の両親と友達に出会えたということでした。

**オレーナさん：** もともと日本語を勉強したからその人たちに出会えたのではないですか。

**私：** はい、それは確かにそうです。日本語は日本へ留学する出発点だったのです。だがモンゴルで日本語を勉強していた時は日本のことをあまり知らなかったと思います。本当に日本語と出会ったのは日本に留学して、その社会に住んで、日本人と交流してからだと思います。

**オレーナさん：** どうしてですか？

**私：** 言葉というのは、文法と単語だけを覚えていくことではなくて、その言葉の人たちの習慣や文化などを感じて、わかるようになるためだと思います。私がモンゴルでいくら勉強しても感覚できない、わからないことを日本に留学してからわかったからです。

私はオレーナさんに上の質問を聞かれて、“日本語は本当に私の宝物なのかな”と真剣に考えた。以前はこのことについて考えたことがなかったから本当に疑問に思った。そして今考えていると日本語と私はかなり関連していることに気付いた。日本語を勉強してから、ずっと日本語と関係することをやってきた。専攻も日本語にしたし、毎日日本語を使うし、夏休みにやっている仕事も日本語に関するなど。日本語を勉強しなかった自分を考えられない。

## 5. 結論

「日本語のおかげで日本の両親や友達に出会えたから私の宝物である」とまとめましたが、物語のグループのオレーナさんとディスカッションしながら本当に私の宝物なのかと動揺するようになった。そして日本語が宝物と思うようになったのは日本の両親や友達に出会えたからこそそういう風に思っているということに気付いた。つまり日本語と出会ったということは日本語のお陰で出会った人たちや私の経験、社会といった全てのものである。また日本語が教えてくれた、

感じさせてくれたことでもある。もちろん違う言葉を学んで、そして違うところに留学していれば、今の考え方が違っていたと思う。

ただ今の自分がいる立場から言えば日本語がいろいろなことを感じさせたり、考えさせたりしてくれたのである。そして今日本にこうやって勉強しながら日本人だけでなく、いろいろな国の人たちと交流しているのも日本語のお陰である。いろいろな国のことを理解させてくれるのも日本語なのだ。

日本語ありがとう



## 6. 終わりに

私は自分の選んだテーマについて感想や考え方を書きながら、そして私のディスカッション相手であるオレーナさんとディスカッションしながら自分のことをもっと分かるようになった気がする。総合のこの授業は難しかったけど、今まで受けていた授業と違ってとても面白かったしとても勉強になった。

このレポートを書き上げるまで、三ヶ月ディスカッション相手をしてくれたオレーナさん、それから「FUJI」グループのメンバーやグループのリーダーの森本さん本当にありがとうございました。

# 「アルバイト」というテーマ

レ・チ・ キム・チ

## 目次

- \* 動機
- \* ディスカッション
- \* 結論
- \* 終わりに

## 動機

今度のはじめて日本に来て、いろいろな国からの留学生と一緒に寮に住んでいる。最初の週間はまだ学校に通っていないから寮にいる時間が多くて、たくさん新しい友達ができる。でも、誰でも忙しそうだ。私に「忙しそうだね。」と聞かれたとき、殆どの友達が「だって、アルバイトをしているんだもん。」と答えた。

経済学は私の専門で、大学では日本語も三年間ぐらい勉強している。しかし、主に文法と翻訳を勉強した。聞き取り、日常会話を練習する機会が殆どない。外国語を勉強するとき、その国で勉強した方がいい。だからできるだけ日本に来られる為にがんばった。日本にいれば、日本語がもっと達成できると思った。毎日大学で日本人である先生が日本語を教えてくれまして、友達と一緒に話し合った。しかしクラスで授業だけならば、まだ不十分だ。クラスメートと私が住んでいる寮でできる友達はみんな外国人だから、日本語を話すことも限界されていた。結局、日本語を練習することが練習できたが、まだ十分ではない。

この問題を友達と一緒に話すとき、アルバイトしてみてくださいと答えてくれた。

自国ではアルバイトしたことがない。しかし、アルバイトしたくないというわけではなく、勉強するのは忙しかったからである。アルバイトすれば、自分の専門と関係があ

る仕事を探すことが多い。日本では、もし日本語が使えばどんなアルバイトでもやってみたい。アルバイトの主な目的は日本語を練習することだからである。むろん、給料もあり、いろいろな経験を持つことができる。しかし、アルバイトすると、日本語ができなければ、相手がなにか聞くとき、わからないから答えられない場合もある。それではだめ。だから一緒に懸命に日本語を勉強しなければならない。普通、教師やレストランでやっているというアルバイトが多い。会話のほかに聞き取り、口頭表現、新しい言葉も勉強できる。しかも、アルバイトするため、日本語がある程度ぐらまで達成せずには行かない。要するに、日本語を勉強することに役立つと思う。

「アルバイト」というテーマに関心を持っていた。みんなと一緒に討論してほしい。私にとって、「アルバイト」というのは日本語を勉強する機会である。

\*\*\*\*\*

## ディスカッション

私がディスカッションする相手はチャンさんです。

二回目、ポントさん、ちゃんさんとディスカッションする。

### \*\*\* アルバイトは日本語を勉強する機会だと思う？

私： チャンさん、アルバイトは日本語を勉強する機会だと思う？

チャンさん： そうだね。

以前すし屋でアルバイトしたことがあるけど、いやな感じがあった。とても疲れた。おじいさんばかりがいて、そこでやりたくなかった。食べてばかりいて、なんかマーナがよくない。もちろん、役に立たないといえない、日本語を練習する機会があって、新しい言葉も沢山出てきて、子どもの言葉も勉強できる。しかし、アルバイトやれば、いつも日本語を練習できるわけではない。アルバイトやサービスによって、よくしゃべる時もあれば、あまりしゃべらない時もあるから、あまり役に立たないと思う。アルバイトは日本語を練習する機会だと思わない。

私： へえ、本当？私はアルバイトしたことがないけど、アルバイトやってみたい。いま、授業だけが足りないと思う、寮での友達が外国人で、日本語で話すことは限界されて、相手がなにか聞かれる、わからない場合も多い。もちろん、日本語がきれいに話せる人がたくさんいる。毎日日本語で話せば、よかったなあ。でも、時間が違うので、会うことが少ない。会っても、日常の会話ばかりで、たとえば「今日は休み？」とか、「授業はどう？」、「昼ご飯を食べた？」とか、あとで、すぐ忘れちゃう。日本語で話すことがすくない。また、寮でベトナム人が多くて、いつもベトナム語で話す。だから、いま私の日本語を心配している。ベトナムでの友達は皆来日したからには、日本語が上達して行くと思うから、帰国して、日本語がそんなに話せなければ、恥ずかしい...  
読み物、文法等大丈夫と思うけれども、聞き取りと日常会話はちょっと...



それでアルバイトすれば日本語を練習できると思う。

・ ちゃんさん： どうして日本語のクラブ活動、勉強会に参加しないの？よく役に立つでしょう？

私： 勉強会に参加する？

そうですね。日本語を練習するために、勉強会に参加した方がいいと言った人もいて、しかし、いつも参加できる訳じゃなくて、自分に合う時間を選ばなければならぬし、たとえば、もし授業があると同時にこんな活動があれば、参加できないでしょう。アルバイトすれば、授業の時間に当たらないように自分に合う時間を選べるし、またこんな勉強会は、普通一ヶ月二、三回くらいだけ、一回は一時か、一時三十分くらいで、足りないでしょう。あとですぐ忘れちゃう。

二回目、ポントさんとちゃんさんと一緒に話し合います。

ポントさんのテーマの理由分は「なぜ日本語」という理由がないと日本語は上手にならないと書いてあった。私と同じように日本語を練習したり、勉強したりしたいと思う。

ちゃんさん： ポントさんは日本語が好きで、日本人になろうと思って、そして日本人である友達を作りたいね。アルバイトも日本語を勉強する機会だと思う。

ポントさん： 僕は寮に住んでいて、日本人がいない。日本人である友達がいるけどすくないので、日本語で話すこともちょっと...  
それで、アルバイトしたことがある。その時、日暮里でのレストランでホステスとしてやっていた。でも、皆の知っている通り、日暮里という地は外国人がいっぱいで、そのレストランで外国人ばかりから、日本語を全然使わなかった。外国語でしゃべって、英語とかソイデン語でしゃべって、また用語がすくない。一部分のある言葉だけを使って、たとえば「いらしゃいませ」とか、「ありがとうございました」といったお客と挨拶の言葉だけはよく使われるし、もしお客とよくしゃべれば、店長からやめろと注意られる。首になる場合も多い。それで、後でやめた。春休みにやろうためにアルバイトをみつけたが、まだ...

私： そうか？日本の道端に沿って「アルバイト募集中」と書いてあった店の掲示板が見えて、その店に行ってみたが、私が思ったよう自分に合うアルバイトを捜しやすくなかった。来日したばかりだから、日本語がべらべら話せないので応募できなかった。

ポントさん： そう。日本の店でやれば、日本語もきれいに話さなければならなくて、アルバイトは日本語を練習する機会だと思わなかった。

そうか？ちゃんさんと同じ、ポントさんもそう思った。2人ともアルバイトしたことがあって、2人ともアルバイトは日本語を勉強する機会ではないと思った。ちゃんさんの場合は依然私立の留学生だから、お金を儲けるためにアルバイトした、お金がなければ、勉強できなかった。アルバイトの大事な目的はお金。今もアルバイトしていない。

ポントさんの場合は、友達を作ることは大事な目的。人によって、アルバイトの大事な目的は違うでしょう。私の場合、元々アルバイトが日本語の勉強をする機械だと思ったからアルバイトやりたい。しかし、ちゃんとポントさんと話し合った後、ちょっと迷っている。アルバイトは本当に日本語を練習する機会であるだろうか。それなら、授業の他、日本語を上達させるため、どうすればいい。次、この問題について話し合った。

### \*\*\*授業の他、日本語を上達させるため、どうすればいい？

私：ちゃんさんは日本語を練習するため、どうする？

ちゃんさん：できるだけ日本語で話そうと思い。キムチさんの寮に外国人ばかりでしょう。それで、会う機会が少ないね。またベトナム人が多いから、毎日ベトナム語でしゃべってばかりいて、日本語で話すことは少ないといったわね。。

私の場合、依然、皆韓国人と住んでいて、韓国語でしゃべった。日本語を練習するため、皆韓国語じゃなくて、日本語でしゃべらなければならなかった。できるだけ日本語でよくしゃべればしゃべるほどいい。私達は勉強会を作って、一周間一回集まって、日本語で会話練習した。勉強会は皆韓国人七、八人のグループ。しかし、日常会話だけで、例えば、「今日、天気はいいね。」とか、「ああ、お腹がすいたよ。」くらいで止まって、話がすぐ終わっちゃって、あとで忘れちゃった。何回やって役に立たなかったということが分かった。後、格好がいいけど、まだ結婚してないし、仕事もやっていないグループの男の人がディスカッションのためテーマをあげた。テーマがあると、いっぱい話してくれて、考えてみよう。メリングリストも作って、一人のテーマを持って来て、楽しく話し合った。段々言葉を積もって日本語で口に出している。

私：そうか？私の場合、無口な人だから、話している時、何について、どのように話した方がいいか、分からない場合が多い。それで、勉強会に参加しても、話はすぐ終わった。私が住んでいる寮では一ヶ月に一、二回テア・パーティを開く。十数人の外国人が集まって、話し合う。一回一時か一時三十分ぐらいで、少ない。余り話してないけど、終わった。テーマがあれば、いいね。

ちゃんさん：私とキムチさんのこんな話合い(二人ぐらい以上)が好きじゃない？私も外国人。

私：そうじゃなくて。相手は誰でも、日本語ができれば、いい。でも、ちゃんさんの言ったような勉強会は時間が短いので、よく開くなら、もっと役に立つじゃないかと思う。

ちゃんさん：そうね。キムチさんは聞き取り、会話とかについて心配していると言ったね。なぜテレビやラジオでのニュースを聞かない？テレビを見れば、日本語だけでなく、色々な知識も勉強できる。日本人の生活、文化、日本の景色も見ることができる。ニュースを繰り返して、新しい言葉を積もって、聴解も練習するし、アナアンスのアクセントも真似るでしょう。ベトナム人と話しても、ベトナム語じゃなくて、日本語で話した方がいい。できるだけどんな場合でも日本語を使う。私達もそうした。韓国人としゃべる時も日

本語でしゃべる。少しずつ、自然に練習して、段々上達するだろう。日本語を上達させなければならぬとは思わないで下さい。

で、なぜ日本語が上手になりたい？

私：小さい頃から日本国が好きだった。動機で書いたように、専門は経済で、私の国にはいま仕事のため二つ以上の外国語を分かった人々はよく募集されている。日本とベトナムとの関係は特に経済関係、どんどん発展してくると思う。それで、日本語にしていた。一年間だけ留学生として日本に来て、日本語を勉強する機会を利用したい。日本語が大好きけど、駅で電車の時間を聞くとか、道を聞くとか、といった場合だけは日本語を使う。クラスで時々友達と先生の質問に答える。アルバイトすれば、日本語で話せないではいられないと思う。又は動機で書いたように、一年間後、帰国して、日本語がまだ上達していないなら、恥ずかしい...

そう考えながら「たぶん日本語を上達させたいほどさせれば、うまくいかないだろう。日本語を上達させなければならぬことを考えなくて、自然に練習して、心配し過ぎらない方がいい」というチャンさんの考えを覚えた。この考えは素晴らしくて、そうしたらもっといいなと思う。自然に練習して...

チャンさん：で、早稲田大学でたくさん学部を分けて、興味が同じ人を選び、勉強会を作る。皆何かをやって、探して、楽しく議論とかディスカッションする。後、発表し自分の意見を言う。一緒に本を読んだり、テレビを見たり...

私：でも、リーダとして人がいなければ、そんな勉強会ができないだろう。

チャンさん：キムチさんはリーダを担当できない？

私：ええ...できない。

チャンさん：で、暇な時何をやっている？アルバイトを捜そうと思う。

私：暇な時、友達と話して、ベトナムである友達や外国人である友達。それから、本を読んだり、テレビを見たり、遊びに行く。いま、勉強のことはちょっと忙しいので、冬休み、春休みにアルバイトをやりに行きたい。今も捜している。

チャンさん：アルバイトの主な目的は日本語を勉強のこと？おかねは？

私：.....

チャンさんの疑問に答えなかった。勿論、アルバイトは、日本語だけでなく、お金も儲ける。私の場合、国費留学生だから、お金の問題は心配しなくてもいい。アルバイトすると、お金も儲けるねと考えたことがある。旅行や遊びに行き、ほんを買うには使う。だから、お金も目的、でも主目的ではない。

次、二回目、ポイントさんとチャンさんと一緒に話し合った。

チャンさん：ポイントさん、暇な時なにをやっている？日本語が好きね。日本語を練習するため、どうする？

ポントさん：前の言ったように、一年間日本で住んで、日本人である友達を作りたい。日本人である友達がいるけど少ない。クラスでの授業だけで、要らないでしょう。家で自習して、本を読んだり、テレビを見たり...

それで、ホーム・ステイした方がいい。

チャンさん：ホーム・ステイ？ホーム・ステイしたことがある？

ポントさん：ないけど、見つけている。ホーム・ステイすれば、日本人と会ったり、話したりする機会がたくさんある。日本人の生活、習慣...分かる。

来日する前に、ホーム・ステイについてよく聞かれた。これはいい活動である。留学生は日本人の家族と一緒に住んでいて、伝統的な文化、生活を調べる。ホーム・ステイの期間が短いのに、役に立って、別れても、よく連絡し、お互いに思い出す。日本にいる間、一度ホーム・ステイしてみたいと思う。面白い...

ポントさん：もう一つの勉強仕方はよくしゃべる必要がない。映画やビデオを見る時、普通、英語とスウェーデン語とも入れる。で、英語を聞いて、画面にスウェーデン語を見る。それは英語を勉強している時、私の体験。チャンさんの言ったように、テレビやラジオでのニュースを聞くことも日本語を勉強する機会。多分一番いい仕方は日本人である友達を作って、話すこと。でも、外国人やスウェーデン人と日本語で話してもいい。

チャンさん：テーマがなければ話しはうまく行く？

ポントさん：日常会話を話せて、あるいはテーマを作って。もし新しいテーマならば、うまく話せないだろう。でもたくさんの新しい言葉が勉強できるでしょう。

チャンさん：たとえば、映画を見に行く待ち合わせて、会う時、どのように、何を話した方がいい言葉、言い方を練習しておく？

ポントさん：練習しておかない。練習しておく、大変でしょう。しかも、話は自然に行かないだろう。私は相手が自分に何を話すことが分からない。場合によって、場面や相手に合うように言い方、言葉を選ぶ。

私は「そうか」と呟いた。私は友達と待ち合わすと、会う前に、どのように、なにを話した方がいいか、よく考えている。場面を想像して、言葉、言い方を選んでおく。だから、大変なので、よく緊張する。何も考えていなくて、話がそのまま、自然的に行った方がいいかなと思っている。

これでディスカッションが終った。

\*\*\*\*\*

## 結論

みんなと討論して、色々な意見をもらった。自分でアルバイトしたことがないから、本当に日本語の勉強に役立つか役立つかないか、もう一度考えてみたい。私はアルバイトが少なくとも日本語の勉強に役立つと思っている。言い方、新しい言葉、口頭表現...など勉強できる。だから、今も、アルバイトやってみたい。全然役に立たないと言えないが、どんな程度で役立つか、人によって、違いがある。そして、アルバイトによって、あまり役立っていないこともあれば、よく役立つこともある。

他に、ディスカッションした後、たくさん面白くて、新しい日本語の勉強仕方を勉強できた。

## 終わりに

初めて日本語で論文を書いて、大変なことであり、よいよこの文章を出来上がり、とても嬉しかった。ベトナムでは経済について論文を書いたことがある。その時、いろいろ書類を調べ、集まり、そんな書類にもとつき、書いた。今度は自分でテーマを考えて、友達と一緒にディスカッションし合った後、書いた。グループのメンバから「何について書こうと思う」と疑問を聞かれた時、私はためらって、興味がたくさんあるが何についてか分からなかった。あとで、このテーマについて書くつもりだった。

このテーマの動機については何回書いても、皆から「分かりにくくて、もっと詳しく書いた方がいい」と話してくれた。そのとき、リーダの矢本さんからいろいろアドバイスを挙げてくれて、今までこの論文が出来上がった。本当に大変だけど、がんばったり、楽しみにしたりした。そして皆さんからの意見をもらって、心からありがとうございました。特にリーダの矢本さんありがとうございました。



# 留学をすることについて

シン ウンテク

## 1. 動機

## 2. ディスカッション

「留学について」という主題の意味について  
自分の留學生活の目的を設定する事について  
留学を始める動機はについて  
自分の留學生活で面白い経験について

## 3. 結論

## 4 おわりに

### 1. 動機

私は日本に行く前から、とにかく留学できれば良いと考えていった。そして、異文化を肌で感じたいと思っていった。そして、日本語が留学に行く前よりも上達していれば良いと思っていった。はっきり言って、それ以上のものは望んでいなかった。何ができるのかとか、何を学べるのかなんて、わからなかったからである。実際日本に行き、そこで生活してみると、ただ住む場所が違うだけで、けっこう生活感は変わらないんだなと思っていった。でも、その中でも、今、思うとたくさんの事を学んだと思う。毎日が新鮮だったと思う。私は今まで、留学に行く意味として、単に博士号を取るものだけを考えていった。けれども、私が想像していた事とは別に沢山の事と向き合う事が出来たのである。例えば、韓国を客観的に見る事が出来るのである。そして、韓国で勉強している学生と違う感じを取る事が出来た。また、日本では、たくさんの外国人と接する機会もあった。私が経験して一番良かったことは、たくさんの異国の人に出会った事である。私が留学を経験して一番良かったと思える理由は、これからの人生で、いろんな事を見ながら、いろいろと経験をしながら、あせらずに、本当に自分がやりたい事をやる事が大切なのだと思ったからである。

世界には、いろいろな才能を持っている人がたくさんいて、それだから、いろんな選択があるのだと思った。日本に行く前は、こんなにも外国で生活して得るものが多いとは思わなかった。こんなにも、世界には自分よりも頑張っている人がいて、自分なんてちっぽけなんだとも思った。だから、もっともっと、世界を見たいと思うし、たくさんの経験をして、私が日本で出会った人達のように、わずかの人からでも尊敬されるような人になりたいと思った。ところで、外国で生活する事は、いくら何人かが一緒にいても結局は一人な

のだから、自分の事は人に頼らずに、責任を持っていかないとだめだと思った。一人で生活して、そして、初めてたくさんの事を学ぶのだと思う。

つまり、私にとって「留学しているのは何か」とか「留学の意味は何か」のを考えるのが必要である。それで、私にとって「留学をすることは何か」は、どんな意味があるのかの質問を考えると、その意味は私の人生をやりがいがあるに過ごすためだ。その意味をいつも考えながら留学の生活したらもっと真摯な態度を抱くことができるようになるからだ。自分が選択する道を考えなくて留学の生活を過ごしたら、失敗する確率が高いだろう。自分が選択する事についていつもその目的と理由を考えるのは必ずしなければならない事だ。それが私にとって留学の意味を考える事の理由だ。

## 2. ディスカッション

ディスカッションの相手はイギリスに留学の生活をしたことがある稲葉さんという大学院生だった。

「留学について」という主題の意味について

稲葉さん：「留学について」という主題は申さんにとってどんな意味がありますか？

私：私にとって「留学について」という主題は全く重要です。なぜならば、私は今、留学しているからです。

自分の留學生活の目的を設定する事について

私： 稲葉さんの留學生活の目的はなんですか？

稲葉さん： イギリスで留學の生活をした時、幼稚園へ行って幼稚園生の世話をする仕事をした事がありました。留學生活の目的は英語を勉強することだけではなくていろいろな経験を通じてイギリスの人と文化を理解することも重要だと考えました。そして、留學生活の中でいろいろなところを旅行するとか、ほかの仕事しながらイギリス人と話すことを通じてほかの世界を経験するのが留學生活の目的でした。

私： 私もそんな留學生活の目的も望ましい考えだと思います。稲葉さんとディスカッションをしながら私が気づいたことは留學の目的は人によって違うから他の人の意見を聞くことが自分の留學生活の目的を設定する事に助けになることです。



稲葉さん：なぜ留学するか？この目的を設定するという事は非常に大変な事ですね。

私：それなりの理由を考えなければ容易に反対されてしまいます。

稲葉さん：とにかく留学する時にはその理由付けが必要になる時が多いです。留学にどんな目的が必要ですか？

私：考えると、立派な目的や理由等がなければ、周囲が納得してくれないです。

稲葉さん：周りを納得させてしまうような格好の良い理由には何がありますか？

私：体裁を整えるのが良いだと考えます。

#### 留学を始める動機はについて

稲葉さん：留学を本気で考え始めたのはいつからですか？

私：大学院生になってからでした。しかし、私は特別に日本語が得意というわけではなかったから心配になりました。

稲葉さん：留学を始める動機は？

私：私の場合は、日本に留学する前に大学を卒業した後、会社に就職したことがあった。私が勤めた会社は大企業の社員の研修を代行してあげる会社であった。会社で私が担当した任務は新入社員の研修を進行する事であった。会社は社員の研修するために素晴らしい学者を招請して色々な講演を開いた。その時、私は素晴らしい学者の講演を聞き、私も学生に教えてくれることのできる学者になりたいと思った。

稲葉さん：そんなことがきっかけで大学院に入学したんですね。

私：大学院で憲法を勉強し、卒業する時、「放送の自由に関して」と言う論文を発表したんです。そして大学院を卒業後にも続けて表現の自由に関して学びたい心が生まれたんです。したがって、日本にある大学院で憲法を勉強しようと決心しました。

稲葉さん：特別に日本にある大学院で憲法を勉強しよう理由は？

私： まず、一番目の理由は指導教授が日本への留学を勧誘したからです。勧誘された理由は日本の法学が格段に進歩していて、文化的にも韓国とよく似ているから後に論文を書く時、役に立つになれることが多いからです。

二番目は他の文化について知りたいからです。なぜならば、他の文化を接すると考えられるの範囲がひろくになれるからです。そして、考えられるの範囲がひろくになれば人生は豊かな生活になるだろう。

三番目は日本語をしゃべれるようになりたかったというのがあります。なぜならば法学に関する本が日本語で書いてある場合が多いからです。

稲葉さん：それで、日本の大学院の博士後期課程に入学するために日本語を勉強しているんですね。

私： 私は日本語が下手ですからさらに熱心に勉強しなければならないです。

私： いろいろな話をしながら、本当にいい勉強になったと考えます。

#### 自分の留学生活で面白い経験について

ディスカッションの相手は他のグループのマリオンさんと私のグループのニコラさんである。

私： 自分の留学生活の中で面白い経験がありますか？

ニコラさん：日本に来たばかり時、私の国へ国際電話を掛けた時の経験でした。国際電話を掛ける方法が国ごとにまちがって国際電話することがとても難しかったです。それで、私が持っている国際電話のカードで電話したができなかつたんです。それで、続いて他の色々な国際電話のカードを買ったができなかつた経験があります。

マリオンさん： Austria で留学している学生達は毎日遊んだり見物をしたりするが日本で留学している学生達は毎日、勉強だけです。面白くないです。

私： 日常生活の中で、「留学」という言葉が人それぞれの中で様々な形で形成されていくが、その成形された者のほとんどが憧れに近い物であると思います。

マリオンさん：日本で留学している学生にもっと重要なことは日本の色々な所を旅行することです。

私： 私が留学している目的は博士号を取得です。博士号を取得しよう目的は法律を教え  
てあげる先生になるためにです。それで、今は留学しているから現在の生活に充実するの  
が重要だと思います。

ニコラさん：自分の留学の生活でもっと面白い経験を書けば良い作文になりそうかもしれ  
ないです。

### 3 . 結論

ディスカッションを通して留学の生活の意味について他の人の意見を聞いた。

私にとって留学の意味を考える事は「留学の生活をやりがいがあるに過ごすためである」  
という結論だった。それで、ディスカッションを通して少し変わった。「自分が選択する道  
を考えなくて留学の生活を過ごしたら、失敗する確率が高いだろう」と言う考えは失敗す  
ることを心配して、ひたすら本を読む勉強だけすれば豊かな経験取れる留学の生活が出来  
ないからだ。

もちろん、最後の目的も重要だが留學生活の過程も重要だと考える。留学の生活をやりがい  
があるに過ごす方法はあまり急がないで余裕をもって留学の生活を過ごすことも一つの方  
法だ。余裕をもってもっと広く考えたら世の中を新しい目で見ることが出来るからだ。 あ  
せれば失敗しやすい確率が高いだろう。

### 4 おわりに

総合授業は自分が考えた主題について作文を書く事だが自分にとって「自分が考えた主  
題の意味」とは何かを考えなければならないから時間がかなり掛かった。今から経験した  
作文は、いろいろな本を読んだ後でそれを整理する事だが総合授業の作文は自分にとって  
意味を発表する難しい作文だった。特に、「文の一貫性」と「理由のまとめ」、「ディスカッ  
ションした後と何がどのように変わったか」が難しかった。

しかし、「ちえ」の皆さんのおかげで無事に作文を完成しました。そうして、総合授業はと  
ても面白かった。ディスカッションをするとき、相手の話から他の考えを発見した時間は  
とても有益して新鮮な時間だった。

「ちえ」の皆さん、いつも お世話になっております。本当にありがとうございました。

# ゴルフと私

坂元ダグ

1. はじめに（動機）
2. ディスカッション
3. 結果
4. おわりに

私は小さいときからスポーツが好きでした。中学と高校のとき、アメリカンフットボールやバスケットボールを友達と毎日のようにやっていました。高校2年を終えた夏休みに2人の友人とゴルフをはじめました。きっかけはゴールドカードという割引パスでした。このカードを使って、9ホールのゴルフ場を数百円で回ることができました。安くて長い時間を遊べたから、この夏はよくゴルフに行きました。最初はとても下手でしたが、やっているうちにちょっとずつ上達したので、ゴルフが非常に楽しくなってきました。このときから、ゴルフが好きになって、今でもゴルフが大好きです。

大学に入ってから、私は一人暮らしをするようになりました。毎日勉強もアルバイトもありましたので、とても大変で退屈な生活でした。でも週末に入ったら時間がちょっとできたので、よくゴルフに行っていました。父とよく行きましたし、ゴルフ仲間の友達ともよく行きました。

高校のときには、周りの近所の友達とゴルフをしました。でも、それは一つの夏休みだけでした。友達は皆ゴルフを続きませんでした。私はゴルフにはまっちゃったので大学生になってから、ゴルフができる友達をがんばって作ってみました。しかし、私は日本語の専攻だったので、いつの間にか、友達はほとんど日本人でした。友達と初めて会ったときは、ゴルフが好きな人は非常に少なかったです。

私は大学に入るまで、日本人の友達は一人もいませんでした。大学1年生のとき、受けてた日本語の授業にはコンバーセッションパートナーというプログラムがありました。日本語の授業の生徒と日本から来た留学生が会話できるためのプログラムでした。私のパートナーはスポーツ好きで彼も私みたいにアメリカンフットボールをやっていました。彼がスポーツに興味があったので、ゴルフにさそってみました。彼はゴルフをやったことがなかったんですが、彼にとっていい経験になると思って、彼と彼の友達と一緒に行きました。やっぱり友達に自分が好きなゴルフを紹介したかったです。友達たちも絶対ゴルフのよさに気づくと私は思っていました。最初でしたから、彼はとても下手でたくさん苦労しました。でも、彼によると楽しい経験でした。そのときから、彼とよくゴルフ

フに行くようになりました。それは5年前の話です。現在、彼は多分私よりゴルフが好きです。

私の去年のルームメイトも日本人です。彼も最初はゴルフをやったことがなかったんですが、私の紹介でゴルフをやり始めて、彼も他の友達と同じようにゴルフが大好きになりました。最近、この2人の友達は日本に帰国しました。3週間前に彼らと静岡県でゴルフをしました。非常に楽しかったです。ユタでは毎週彼らとゴルフをやっていたから、とてもなつかしい気分でした。行きも帰りも車で行了きましたので、話した話題はほとんどゴルフのことでした。この友達たちとゴルフ以外の共通点はあまりないですから、ゴルフがなければ、彼らと会えなかったかもしれません。

私は友達とゴルフをしているとき、本当に幸せです。これより楽しいことは考えられません。ですから、私にとってゴルフは友達と楽しい時間を過ごせるスポーツである。

## ディスカッション

私のディスカッションの相手はほかのグループのトーマスさんでした。彼はゴルフをほとんどしたことなくて、あまりゴルフに興味がありませんでした。しかし、話をしてみたら、彼が好きなサイクリングと私が好きなゴルフは共通点が結構あると気づきました。違いももちろんありました。

[なぜゴルフが好き]

私：私は友達とゴルフをするのが好きですが、トーマスはゴルフが好きですか？

トーマス：ゴルフは1回か2回しかやったことがありません。行ったとき、全然ボールが打てませんでした。ダグはなぜゴルフが好きなんですか？ゴルフのどのところが好きですか？

私：そうですね。いろいろ好きです。景色もきれいだし、外の風や天気も気持ちいいし、友達と一緒にするのも面白いし、思い通りにボールが飛んでくれるととても嬉しいです。

トーマス：なるほどね。私もサイクリングしているとき、同じ気持ちがあります。私にとってサイクリングは挑戦です。ダグにはゴルフは挑戦ですか？

私：うん、そうだね。ゴルフは挑戦だね。ゴルフをしているとき、たくさんの要素があります。例えば、あの日の天気、風、芝生の長さなどのいろんな要素があります。この要素の中で、ちゃんとショットを調節できるのがとても難しいです。でも、それが私にとって、挑戦になる。ラウンドが終わって、いい結果がでたらすごく満足感があります。でも、結果はよくなかったら、すごい悔しいですね。トーマスは1回か2回しか行ったことがないけど、ゴルフは挑戦と感じましたか？

トーマス：あまり挑戦とは感じませんでした。挑戦よりも、ゴルフはビジネスマンのゲームという感じがします。

このディスカッションの途中から、他のグループのちえさんが参加しましたが、上のディスカッションに入れなかったことにしました。ちえさんと主に「挑戦とは何か」と「友達とどう遊ぶや話をするか」の2つの点に対して話しました。考えてみたら、トーマスとはこの2つの点に対してあまり話さなかったと気づきました。だから、次のディスカッションで、この2つの点を話題にしたいと思いました。

「ゴルフは挑戦」

このディスカッションはまたトーマスと話すことになりました。前のディスカッションに私はゴルフが挑戦と言いましたので、なぜゴルフは挑戦なのかを考えてみました。そして、トーマスもサイクリングは挑戦だと思っていたから、この点でディスカッションをはじめようと思いました。

私：先週、サイクリングやゴルフが私たちにとって挑戦と言いましたよね。私は家に帰ってから、ゴルフはなぜ挑戦なのかを考えてみました。なので、これに対して、ちょっと話してもいいですか？

トーマス：もちろん。私もちょっと考えてみましたので、もっとこの話題に対して話しましょう。ダグはなぜゴルフは挑戦なんですか？

私：そうだね。私は小さいときから、負けず嫌いだったので、どんなスポーツをしても、そして学校の成績にもいい結果がでないと気がすまないような人でした。いつも、そういうような挑戦することがありました。でも、最近は学校が挑戦じゃなくなりました。だから、2、3年前は熱心にやることはなくなっていた。それで、ゴルフをもっと本気に挑戦しようと思って、今でも挑戦と思っています。やっぱり、挑戦するこ

とは自分の日常生活にないと退屈になってしまいます。じゃ、トーマスはなぜサイクリングが挑戦なんですか？

トーマス：私は日本に来てから、運動はあまりしませんでした。お酒もよく飲んだので、ちょっと太ってしまいました。だから、私も何か運動しないといけないと思って、サイクリングをもっと挑戦しようと思いました。今はサイクリングをしているとき、疲れるし、とてもつらいときもあります。でも、挑戦と思っているから、サイクリングをします。ゴルフの場合はどうですか？

私：はい、同じです。ゴルフをしているときにストレスもたまるし、怒るときもあります。ゴルフは挑戦ではないと思っていたら、多分ストレスは全然感じないと思います。でもゴルフは挑戦だと思っていますから、成功するときによけいに嬉しいし、達成感が感じます。それとともに、ゴルフのおかげで退屈にもなりません。まあ、全体的に考えてみると、ゴルフには弱点はいくつかありますが、それよりも、メリットの方がたくさんあると私は思っています。

ここで、ゴルフがなぜ挑戦なのかという話が終わりました。

「友達と一緒にゴルフをする理由」

私：私にとってゴルフは挑戦だけど、それとともにゴルフを友達と一緒にやるのがすごく楽しいです。トーマスは友達と一緒にサイクリングをするのが好きですか？

トーマス：いや、そんなことはない。サイクリングは1人でやるスポーツだから、別に友達がいなくてもいなくてもあまり関係ないです。同じレベルとスピードのサイクリングの友達と一緒に行くのは全然かまいませんが、自分より遅い人と行ったら、あまり楽しくないです。ダグは1人でゴルフをやるのはいやですか？

私：はい、そうです。何回か1で行ったことがありますけど、本当につまらなかったです。やっぱり友達とやった方が楽しいです。

トーマス：友達とゴルフに行くとき、どういう話をしますか？

私：そうですね。いろんな話をします。例えば、次のホールをどう狙えばいいのかとかゴルフ場のどういう所がきれいか、のようなゴルフ関係の話をします。でも、ホールとホールの間にも結構時間がありますから、他の話もします。例えば、最近の学校

の調子とか仕事のこととか、もちろん女の話もします。 多分、普通に居酒屋や喫茶店に行くときにする話とあまり変わりません。

[ ゴルフのイメージ ]

トーマス：私のイメージでは、ゴルフは40代とか50代のおじさんがやるゲームです。 ゴルフ場でよくビジネスの話や会社同士の交渉が行われるイメージがあります。

私：ちょっと話題を変えてすみませんが、トーマスの出身はどこですか？

トーマス：アメリカのネブラスカ州です。

私がトーマスを見て、彼は多分私みたくアメリカ人だと思ったから、この質問を聞きました。 彼は都会の人だったら、こういうことを言うと思いました。 でも、なんとなく雰囲気的にトーマスは田舎者という気がしました。 彼は田舎者だったら、こういうことを言わないと思っていました。 それで、トーマスにこの質問をしてみました。

私：そうなんですか。 ネブラスカはユタみたく広いですから、イメージはユタと同じくらいと思いました。 ユタではゴルフは全然イメージが違います。 ゴルフをすることはユタでは普通の遊びです。 この面でゴルフはバスケットやボーリングや友達と映画を見に行くのと同じです。 ゴルフ場に行くと、お父さんと彼の小さい子供と一緒にゴルフをやっているのを何回か見たことがありますし、高校同士の友達もよくゴルフに行きます。

私のゴルフに対するイメージは他の人のイメージとかなり違うと気づきました。 同じアメリカ人でもこんなに意見が異なりましたので、ちょっとびっくりしました。

この辺でディスカッションが終わりました。 私はトーマスとディスカッションをする前に私はなんでゴルフがこんなに好きかは自分でもはっきり分かりませんでした。 でもディスカッションをしているときに、トーマスにゴルフのどういう所が好きとなぜゴルフが好きなのかをはっきり聞かれました。 そして、私が具体的に答えなければなりません。 答えを出すときにはちょっと苦労しました。 でも、自分の答えを見たら、私がなぜゴルフが好きなのが何となく分かってきた気がします。



## 結論

私が動機に書いた通り、スポーツが大好きです。トーマスとスポーツのことを話している間に、昔のことが懐かしくなりました。小さいときからずっとスポーツをしていました。中学校から高校の最後までずっとアメフト部に入っていました。そして、同時に友達とよくバスケットをしました。アメフトやバスケットがなぜ面白かったといえば、やっぱり友達やチームメイトと一緒にできたからです。それと、アメフトもバスケットも両方うまくなりたかったから、挑戦だと考えました。だから、大変でも練習しました。中学校や高校のことを思い出すときに、友達と一緒にスポーツをやったのが一番いい思い出だったような気がします。

そして、私が大学に入って、勉強とアルバイトが大変で、とても退屈な日々が多かったです。それで、ゴルフをもっと本格的に挑戦しようと思いました。ゴルフが挑戦とされているから、ちょっとストレスもたまると、コースで怒るときもあります。でも、前より上手だし、昔よりもゴルフがはるかに楽しいです。

挑戦という点で、トーマスととても話が合いました。挑戦する理由と挑戦の意味はトーマスと私にとって共通点だと私は思いました。彼も私も退屈とちょっと運動不足だったから、何か挑戦しようと思いました。彼の場合はサイクリングを挑戦して、私の場合はゴルフを挑戦しました。彼も私も何かを挑戦するようになってから、2人とも結構夢中になってしまいました。例えばトーマスはサイクリングの部品に興味を持つようになったし、私はゴルフの道具にすごい興味を持つようになりました。

挑戦してゴルフをするよりも、友達と一緒にできるのが私にとってゴルフの一番のメリットです。私が好きなゴルフをしながら、友達と色々な話ができるのが本当に楽しいです。しかしトーマスはこの点で私と全然違う意見がありました。彼は友達と一緒にいなくても、サイクリングを楽しめます。私の場合は、ゴルフを1人ではしたくないです。友達がいないと、楽しくないです。

最後に、トーマスとちょっとゴルフのイメージに対して話しました。彼と私のゴルフのイメージは全く違います。彼の意見ではゴルフはビジネスやおじさんがする物というイメージがあります。私はそうじゃなくて、ゴルフは誰にもできる、とても楽しくて気楽なスポーツというイメージがあります。どっちのイメージが正しいのとどっちのイメージが間違っているという問題ではない。物やスポーツのイメージは人によってかなり違うということに気が付きました。

動機とディスカッションとこの結果を書いたおかげで、ゴルフは本当にすばらしいと私は思いました。

## おわりに

自分の動機とトーマスとのディスカッションを読み直したら、私はやっぱり友達とゴルフをするのが本当に好きと分かりました。 動機を書いているときに、私は友達とゴルフをするのは確かに楽しいと思いました。 でも何でそんな楽しいのかをちゃんと説明できませんでした。 正直、自分でもはっきり分かりませんでした。 でも、ディスカッションのおかげで、なぜ私は友達とゴルフに行くのか好きかを分かってきたような気がします。

# ポイ捨て禁止について

黄盛勉（ファン・ソン・ミョン）

- 1．動機
- 2．ディスカッション
  - 2．1 ポイ捨て禁止と歩きタバコについて
  - 2．2 歩きタバコの禁止と個人の自由
- 3．結論
- 4．終わりに

## 1．動機

私は日本に来る前、「日本はきれいな国だ。見当たるところところがよく掃除されていて、町の隅隅がきれいだ」と聞きました。私のはじめて見た東京は、たいてい、きれいな都市だといえます。人々が集まる駅みたいな場所はそんな期待に外れます。「ポイ捨て禁止」という警告文がよく見つかります。あちこちに捨てられているタバコ切れを見たとき、思ったより日本人ももっとよくタバコを捨てているようでした。逆にみれば、これはいろいろな人々が気ままに生きている自由な社会だと言えます。ポイ捨てが多少あっても、日本が秩序と清潔な国だというイメージを感じるに十分だと思います。

最近、東京の23区の中でたくさんの区議会がタバコなどをポイ捨てる人に罰金を払わせるという条例をさだめたと聞きました。タバコ切れを捨てることのみならず、道に立ってタバコを吸うとか歩きながらタバコを吸うことまでも罰金を払わせると聞きました。個人的な観点から見たら、私はタバコを吸わないので、タバコそのものが嫌いです。だが、タバコを吸うのが社会のうちで認められているし、喫煙人口がたくさんいる現状を考えれば、そんな条例は人々にささいな道徳を強い過ぎることではないだろうかとおもいます。ささやかなことまで行政機関の影響が及んでいることです。行政機関（もしくは、統制機関）は、人々の行いが異なる可能性を思いやらなくて、いちおう悪い行いだと認めたら、それを禁ずるべきものとして取り扱うきらいがあります。

私は韓国で公務員として働きながら、行政機関のそんな傾向は個人の自由にどんな影響を与えるのかについて興味がありました。特に個人の行いをとめる

規制の社会的な意味について関心がありました。人間は弱くて誘惑や欲望に陥りやすい存在として自分に慣れていく行いを簡単に禁じろといわれてもそれに従いやすいです。そういう人間を理解して許すという寛容が自由な社会の条件であり、それが本物のヒューマニズムだと思うからです。私は、社会内に暮らしている個人に道徳的な秩序意識を強いれば強いるほど、その個人は道徳的になりえるかも知れませんが、その社会は個人を非常に押し付ける非道徳的な社会になれるそうです。道徳的な人間と非道徳的な社会(moral man and immoral society)のパラドックスと言えます。

それなら、ポイ捨てという行いの社会的な意味は何でしょうか。

区議会が条例を通じてポイ捨てを少なくするために歩きながらタバコを吸うことまで取り締まるほどに市民の秩序意識が非常に悪くなったということを実感しているかもしれません。10年とか15年前にはあまりポイ捨てがなかったんですが、最近そうではないということです。その一方、タバコを吸うのが社会の中であたりまえなことに据わってあると言う意味もできます。ポイ捨ては長い間にわたって作られてきた問題として、もう社会の習慣になってしまってタバコを吸う人はそれに慣れていきます。この習慣は社会の中で暮らしている人々の行動システムを反映しています。ポイ捨てという行いは、個人が社会全体のために不便なことを堪えるのより自分の便利を求める現在の傾向をはっきりと見えてくれることです。

それに、タバコを吸うのが許されている状況で、タバコのポイ捨てを禁じるために、歩きながらタバコを吸うことまで禁じるのは個人の自由を非常に押し付けることではないでしょうか。ポイ捨てが悪くても、道でタバコを吸うのは個人の自由に認められてきたから、タバコを捨てるか捨てまいかは、しかたがなく、個人の自律的な判断に任せざるを得ないものです。

秩序と統制は社会を支える大切な要素ですから、行政機関はいつも秩序や統制の内に人々を進もうとします。行政機関は気に入らない問題に対して一番取りやすい処置が禁止や取締りだと言えます。機関の力(言い換えれば、権力)を誇りながら小さい費用で問題を解決できる方法です。まるで1円を払って携帯電話の契約できたから携帯電話の値段が1円だと考えるように、裏のシステムの理解ができない考え方は。

ポイ捨てという行いは、けっして、それによって社会の基が揺れるほどに大きな犯罪ではないです。社会を支える基本原則(資本主義、私有財産制、生命など)を違反することではないです。タバコを吸うことが認めている限り、外でタバコを吸うことも許さないわけにはいかないです。ポイ捨てに対して取り締まりと罰金のような方式より個人の自律性に任せておくことが、個人の自由を積極的に保ちながらも、社会発展の役に立てるといえます。取り締まりと罰金と

いう否定的な対応よりも、むしろごみ箱をもっと多く設置するとか、禁煙を勧めるキャンペーンを実施するとか、時間がちょっとかかっても、ポイ捨ての根を切る方式だと思います。

ポイ捨てというささやかな行いをそのままほっといてくれるのはいろいろなストレスに悩んでいる個人たちに息をつく暇を与える効果があるだろうと思います。個人の自律性に任せられる部分を取り締まるのは社会の変化と発展を滑らかに運ぶことの役に立たないだろう。

私にとって、ポイ捨て禁止に関する一連の条例は個人の小さな自由までも抑える気配をもっている処置として、しあわせな社会のために望ましい方法ではないものです。

## 2. デイスカッション

### 1. ポイ捨て禁止と歩きタバコについて

私のデイスカッションの相手はほかのグループのマルコさん(ドイツ人)です。マルコさんは私のテーマを読んでも、漢字がたくさん書いているからかもしれませんが、何を質問するかについて困りそうだったんです。それで、私が質問しながら討論を進めました。

まず、ポイ捨てとこれに関する条例について説明してから討論をはじめました。

私：ドイツではタバコ切れをよく捨てますか。

マ：ドイツでも人々がタバコを吸ってその切れを捨てます。でもごみ箱が多く設置されていて道に捨てません。もちろん、道に捨てる人がないことではないでしょう。

私：ドイツの道はそのタバコ切れのために汚いですか。

マ：いいえ、あまり汚くないです。駅になんて人が多く集まる場所には掃除する人がいるのでたいていきれいになります。

私：道に歩きながら、もしくは、立っている間に、タバコを吸うのは悪いですか。

マ：それは大丈夫です。

私：タバコ切れを捨てる人に罰金を払わせるのはどうですか。

マ：それについて罰金を払わせるのは大丈夫だと思います。

私：ドイツでは罰金を払わせますか。

マ：いいえ、そうではないです。

私：こちらから馬場まで歩きながらタバコを吸うことについて罰金を払わせるのは大丈夫ですか。

マ：それはおかしくて理解できません。

マルコさんは、タバコを捨てることについて取り締まるのは大丈夫だが、歩きながらタバコを吸うことまで取り締まるのはひどいという意見でした。

私：もしドイツでポイ捨てを少なくするためにそとでタバコをすうのについて罰金を出させれば、ドイツ人はどうしますか。

マ：腹が立つでしょう。それは個人の自由を厳しく押すことです。室内で禁煙するのは今はあたりまえなのだが、外でタバコを吸うのはほかの人にあまり影響しないからです。

私：歩きながらタバコを吸うことはどうですか。

マ：私はタバコをすわないから、道を遠ざがるときタバコの煙が嫌いですが、早く過ぎてしまうことができます。その間私がすう煙は大変なのじゃないです。道路を通る自動車の排気ガスがより体に悪いと思います。

私：タバコの煙が嫌いだから歩きながらタバコを吸うのを禁するのは禁煙の問題で、ポイ捨ての問題ではなさそうですね。

マ：それはそうですね。

私：では、歩きながらタバコを吸うことに対して罰金を出させる条例はどうですか。

マ：室外でタバコをすうのは個人の自由ですから、おかしいです。

私：ポイ捨ての禁止のために歩きながらタバコを吸うことまで禁するのはいい方法だと思いますか。

マ：一見、いい方法なように見えるが、外でタバコを吸うのが自由だと思います。空き缶のポイ捨ての禁止のために歩きながらカンコーヒを飲むことを取り締まるべきでしょうか。

私：罰があたるのは行いの結果に対してしなければなりません。ポイすてをするかも知れないと推し量って罰金を出させるのは行政機関の暴力のようなのです。そうすると、なにをしたらタバコのポイ捨てが減れると思いますか。

マ：みちにたくさんのごみばこを施す方法がいいです。私が見るには東京の道にごみ箱がよく見えません。

私：私も同じ感じました。考えよりごみ箱が道に多く見えませんよ。そして、禁煙キャンペーンをすることも、時間がちょっとかかるけど、根本的にタバコのポイすてをやませることができます。

マ：それもいい方法ですね。

マルコさんは、タバコを捨てることについて取り締まるのは大丈夫だが、歩きながらタバコを吸うことまで取り締まるのはひどいという意見でした。

ディスカッション中にタバコポイ捨ての禁じるために外でタバコを吸うのを取り締まれば、それは個人の自由を制限過ぎることじゃないかという思いを共通にしました。また歩きタバコの禁止に賛成する人はタバコの煙が嫌いで禁煙を希望するとか、歩きタバコが危険だからなど、ポイ捨てじゃなくてほかの理由のためにポイ捨てを反対するんだと感じました。

## 2. 歩きタバコの禁止と個人の自由

今まではポイ捨て禁止条例が歩きながらタバコを吸うことまで禁するのがポイ捨てを少なくするためにいい方法なのかという問題と、個人の自由を押し付けるかどうかの問題についてほかのグループの河さんとディスカッションしました。だから、こんどのディスカッションはどうしてその条例が個人の自由を押し付けると考えるかについて進みました。

私：ポイ捨て禁止条例の内容を見れば、それが個人の自由をひどく押し付けると思いませんか。

河：歩きながらタバコを吸うのが危険な面があるから、それを禁するのは悪くないんですが、ポイ捨て禁止という場合には、その条例が人間の行動を細かすぎて統制しようとするんじゃないかと思います。

私：どうしてですか。

河：タバコは麻薬と違いもので、タバコを吸うことがこの社会の中で許されています。したがって、タバコを吸うことは個人の嗜好です。それがほかの人を害することではない限り、その嗜好は個人の自由として認めなければならないことです。

私：細かすぎるといのは何ですか。

河：タバコを吸うのが自由なら、歩きながら吸うことも自由です。歩きながらタバコを吸う人がポイ捨てをしたことでもなくとも、あなたはポイ捨てをすることもできませんから罰金を出しなさいというのひどすぎることに思います。個人の行動を細かすぎて統制しようとすることです。道でタバコを吸うのはその人に任せるはずしかありません。

私：つまり、個人のささいな行いまで操ろうとするのは個人のささいな自由を制限するという意味ですね。

河：ポイ捨てを少なくするためにポイ捨てをしない人が罰を受けるのはおかしいです。禁煙を勧める社会のシステムを作ればいいと思います。

ポイ捨て禁止条例は人の行いを細かく過ぎて統制しようとする行政機関の処置だと思います。それはこの社会でタバコを吸うのを反対することができないか

らポイ捨てを少なくなるために禁煙を薦めようとはしないです。歩きタバコ禁止の条例を作った区議員たちの大部は喫煙者で、乗用車を乗り通っているから歩き通う必要はないかもしれません。タバコが認められている社会のなかでポイ捨てをしていない人にポイ捨てをする可能性があると思いついて取り締まることは個人の自由をものすごく押し付けることではないだろうか。

### 3 . 結論

ポイ捨てとそれを禁する条例などの問題は、どうにかすると、タバコを吸わない人にもあまり関心がないのだろう。さらに、タバコが嫌いな人にはそのポイ捨て禁止の条例を積極的に支えるだろう。道もきれいになるし、道でのタバコ煙でいやな顔をするのもないし、いろいろな場合から賛成するだろう。

しかし、その条例の矛盾については考えようとはしないことです。目的が正しいと思われるから、手段が正しいかどうかは考え逃しやすいです。ポイ捨てを禁するために歩きタバコを取り締まるのは、まだポイ捨てを行っていない人がそれをする気配があるという理由だけで処罰されるということです。人間の自由意志が権力者の恣意的な判断に任されることです。タバコが麻薬と違って許されているから、すべての歩きタバコをポイ捨てと同じもので取り扱うことは行政機関の無理やりな措置じゃないですか。ポイ捨て禁止条例に隠れている個人の自由意志に対する抑圧は、私にスティーブン・スピルバーグの映画「マイノリティレポート」を思い出せました。(その映画は、超能力者によってはんざいをする人と場所があらかじめ知らせれば、警察はその人を犯罪の前につかまるが、犯罪人に指摘された主人公が自分の自由意志によって犯罪をしないことによってその制度が非合理的だのを現すという筋です)ポイ捨てをやめろうとして歩きタバコに罰金を取ることは映画「マイノリティレポート」で話してくれる矛盾と同じです。したがって、タバコばい捨てを少なくするためには禁煙を勧めることによって解決することが合理的な措置だと思います。

### 4 . 終わりに

私のテーマが同じグループ野皆さんにつまらないのはもちろん、難しかったので、すまないものがあります。タバコも吸わない私がこのテーマを選んで、それに、ポイ捨て禁止条例について反対の意見をもっているのはほかの人に理解してもらいにくかったです。特に「私にとって」の部分において、テーマが個人的なものではなくて社会的なものだから、授業の目的に合わなかったかも



れません。私の範囲をどこまで定めるかの問題はぜんぜん考えられていないからです。ある存在が考えていることだけで「私にとって」の意味を十分に表すことではないでしょうか。

母国語で書くことも難しいのに日本語は言うまでもないでしょう。この授業を通して日本語に関する理解が深まって役に立ったと思います。

## ロシア人の私について

ムラトヴァ・エレナ



- 動機
- ディスカッション
- 結論

### 動機

初めて外国にいったのが19歳のときだった。日本の領事館で試験を受けて、大阪にある日本の国際交流基金センターの奨学金をもらうことになって、初めて日本に行くことができた。

その時に滞在期間が短かったけれど、同じプログラムで日本に来ていたいろいろな国の人にあって、ブラジル人とか、ギリシア人などの友達がたくさんできた。それをきっかけに、自分自身がロシア人だと強く感じて、ほかの国の人と話すときに私が普通のロシア人としてどのようにみられていることが気になっている。

たとえば、私がよく聞かれているのが「ロシアの定食ってなに？」で、自分の家族でよく食べたものを思い出して、「ロシア人はみんなこうだ」といったらいいか、ただ、「私の家族は　　を食べている」といったほうがいいのか、いつもなやんでいる。定食の話は別にそんなにたいしたことではないかもしれないが、ほかのロシアのことについての私の意見が大体のロシア人の意見・考え方が異なったり、間違ったりしたら、私がどれくらい責任をとるか、外国人が持っているロシアのイメージがどのように私のせいのおかげで変わってくるか考えきれない。

留学している間に、日本の小学校に誘われて、授業で、ロシアのことを紹介してくださいと言われることが少なくない。それで、小学生の前に立ってロシアのことについて話をする前に、何を、どういう風にいったらいいか、心配しているのが私の普通の気持ちである。小学生がロシア人を見たことがあまりないので、私のロシア人の名前を覚えるのがとても難しいから、授業がおわってから、その小学生たちが家に帰ってきて、「お母さん、今日口

シア人が授業でこう言ってたの」と言っていると思う。それでその会話の中で登場している外国人はもうムラトヴァ・エレナではなくて、あるロシア人になってしまう。

ロシアに住んでいる時に周りの人のほとんど皆がロシア人だから、私のムラトヴァ・エレナはロシア人だという気持ちがあまりなかったし、国籍とかそんなものにはあまりきにならなかったが、日本にきて、私がロシア人の一人であるので、あるロシア人として自動的にロシアの代表となってしまう。

責任といえば、実は私が責任感が強くて、責任の重いことをするのが大好きである。それで、外国人が持っているロシアのイメージが私のおかげでよくなったらとてもうれしいと思うが、私のせいでイメージが悪くなるのがとてもいやだとおもう。だが、私が好きなことをやるのを出来るだけやめたくないの、私のしたことをムラトヴァ・エレナがしたこととして評価してほしい。

それと、普通の外国人、外国にいるときに誰でも国の代表にされてしまうんじゃないかと思って、他の国の外国人もそういう感じを持っているか知りたいと思う。

外国人であっても私は日本にいるときにもロシアにいるときと同じようにロシアの代表ではなく、ムラトヴァ・エレナで見られることが大切である。

## ディスカッション

### ディスカッション1

ディスカッションを全部で3回することが出来た。ディスカッションに入る前にディスカッション相手を決めるのが必要だった。私のテーマだったら、ディスカッション相手になってくれる人はどういう人がいいかを考えて、すぐペルー人のヒメナさんのことを思い出して、ヒメナさんと最初のディスカッションをすることにした。なぜかというと、ヒメナさんは3年間日本に住んでいたそうで、私のレポートに役に立ついろいろな面白い経験を持っているからである。

私：ヒメナさん、自分がペルーの代表だとおもってる？

ヒメナ：ペルーは民族が多いし、地域によって、人がいろいろだから、ペルー人じゃなくて、私がリマ人だと言ったほうがいいと思う。私がペルーの代表だと思わないよね。ただ、日本人は時々私をみて、ペルー人がみな私と同じ顔をしていると思ってしまう。たとえば、ある友達が「ヒメナ、昨日ペルーについてのテレビ番組を見たのね。ペルー人がみなヒメナの顔をしていたよ」とか言ってるの。それで、その人はペルー人を見ているときに自動的にみなにシールを貼ってるように私の顔をつけてしまう。

**私:**面白いー。同じの国の人だったら、文化的とか伝統的に性格には同様なものがあるとおもうが、たとえば、ブラジル人が時間をあまり守らないとか、(ヒメナ:ペルー人もそうだけど)、それはもともと文化に関することだよ。でも、個人個人は違うよね。多分、時間をちゃんと守っているブラジル人とかペルー人がいるとおもう。

**ヒメナ:**それと、ほとんど皆の日本人は不思議に思っているのが私と私の兄弟が髪の毛とか、顔が似てないことだって。何で一つの家族なのに、顔が同じじゃないのによく聞かれている。それで、宇宙人のように見られているの。

**私:**ヒメナは日本にいる時に自分で外国人であるのを感じたことがあったのかな。

**ヒメナ:**そうです。日本人はよく日本人か、外国人か、すぐ区別すると思う。日本人と外国人が外見がずいぶん違うよね。顔を見ればわかるよね。自分で外国人であることを忘れても、周りの日本人と友達がそれを忘れられないのね。鏡でも見ればわかるね。

**私:**そうそう、日本は以前から元々一つだけある民族の国であったからね。ロシアとかペルーと全然違うよね。

**ヒメナ:**ああ、それと、代表といえば、私たちはロシアのとかペルーの代表ではなく、外国の代表になると思う。例え、アルバイトの時にパン屋さんでそのパンを作ってる人が私がどこの国の人かと聞いて、「ペルー人」と答えられたとき、「ああ、私は外国が大好きだ」といった。なぜかという、日本人が世界を区別するには日本と外国って考えている。それで、外国人って国籍になってしまう。今は私は外国人ばかり住んでいる寮にと住んでいるから自分が外国人であるのをそんなに感じていないけど、日本にいる外国人は同感を持ってると思う。なぜかという、外国人が韓国人とか、ペルー人とか、ロシア人などいろいろいても、大体の日本人から見ると、みな同じだ。ぜんぜん違うのに。

**私:**それと特に変な目でみられてしまうのは日本語が話せる外国人だよ。

**ヒメナ:**そうそう、この間、一緒に抹茶のアイスを食べに行ったときに日本人の店員さんに言われたことを覚えている？(ヒメナと私は二人とも欧米人の顔をしているのに、普段日本語を共通語として使っている。それで、抹茶のソフトを売っているお店に行ったときにも日本語でしゃべっていたが、店員さんはアイスがないと言って、なぜないと「アイスはサマーバージョン」と英語で説明した。ヒメナと私にとって英語が母国語ではないから、最初はその説明を聞き取れなかった。でも、店員さんは今度日本語で、アイスは10月までしか売っていないので、それで3月からまた売り始めるといつてくれた。お店を出てから、サマーバージョンという言葉の意味が明らかになった。二人とも、日本人は外人っ

てみな英語が話せるはずだと思っていることにびっくりしていた。)日本語で話しても、英語で答えてくるのが私たちに不思議なことである。

なぜだろうか。私はもういろいろ考えていた。理由はいろいろあると思う。多分、日本人は英語を練習したいからなるべく英語をつかいたいと思っているからかもしれない。とか、外国人とあまり親しくなりたくないから、英語で話したら、自分と外人の相手の間に壁のような物をたててしまう。ヒメナさんと話したことのなかで一番面白かったとおもったのは私たちは日本にいるときに自分の国の代表ではなくて、外国の代表になってしまうことであった。でも、自分が外国人だと言う感覚がないと思う。やはり、私はロシア人だと言う感じが強いと思う。

## ディスカッション2

今度はトルコのアルペルさんとディスカッションをすることになった。私たちの「8+2のはな」グループの人じゃなくて、違うグループのメンバーと話し合ったら、多分、新しい意見が出てくると言われたからアルペルさんにいろいろ聞いてみようと思った。最初アルペルさんに「理由」を読んでもらって、感想を聞いた。

**私**：アルペルさんは自分でトルコの代表の方を強く感じているか、個人のアルペルさんのほうが強いですか。

**アルペル**：そうですね。自分の気持ちでは俺がトルコのアルペルだと思います。自分の国が大好きだからです。それで外国にいるときに自分の国のイメージをいい方に変えたいですね。周りの人がトルコのイメージを持っていなかったら、自分の力でいいイメージを作りたいです。たとえば、今はトルコ料理のレストランでアルバイトをしています。そこにぜんぜんトルコのことを知らない人がたくさんきていますね。それで俺にいろいろ、「トルコはどうですか」などを聞く訳ですね。俺と話してから大体の人はトルコ人がやさしいといっています。もちろん、みなじゃないけど。やさしくてすごくいい人もいるし、悪い人もいます。

**私**：そうですね。ロシア人のイメージと言えば、「ロシアが寒いからロシア人はみな寒さが大好きだ」と思っている人が多いです。それは全然違うと言えないけど、人によって違うと思います。私だったら、寒が大嫌いで、周りの人はびっくりして、「あなたは本当にロシア人なの？」とよく聞いていますよ。

**アルペル**：そうですね。俺の持っているロシア人のイメージってみなウオッカが強くて、がらがん飲んでる人だと思います。

**私**：へー？私はウオッカが全然飲めないのですよ。それと私の以外に全然ウオッカを飲んでいない人がいっぱいいますよ。

**アルベル**：知らなかった。びっくりした本当に。じゃ、トルコ人のイメージってなんだと思いますか。

**私**：一言で言えるのは何かないですね。トルコ人の友達が少ないので、みなもばらばらだし、「トルコ人はみなこうだ」と言えないですね。ただ、私の友達Sさんはこうだ、Tさんはこうだと言うぐらいですね。すべてのトルコ人のイメージを持っていません。

**アルベル**：トルコ人はみな怒りっぽいとよく言われています。俺もそう思っているけど。俺も怒りっぽいです。

**私**：はい、気をつけますね。(笑)

**アルベル**：レストランにきているお客さんに言われたのはトルコ人ってみなひげがあって、刀のようなものをいつも持ち歩いているのです。でも、俺がひげなんかないので、「ああ、ひげのないトルコ人もいるんだ」とか、「トルコ人はみな同じじゃない」と分かってくれませぬ。日本はトルコ人が少ないので、悪いイメージがあまりないから、日本人が持っているトルコ人イメージがよさそうです。

**私**：いいですね。ロシア人はどうかなあ。新潟とか富山にロシア人がたくさん住んだり、仕事とか旅行に来たりするから、そこら辺はロシア人のイメージがあまりよくありません。いろいろな人が来ているから、いろいろな事件とか起こしてしまったりするので、全体のロシア人のイメージが悪くなってきました。それはとてもいやですね。個人が悪いことをやったら、それを国とか国籍と別にして、個人のやったこととして評価するのが正しいと思います。

**アルベル**：それは当たり前だと分かりますが、自分の経験から見ると、たとえば、初めて知り合った韓国人が俺にとってとてもいやな人だったので、「韓国人はみなダメだ」と思っていました。でも、後で韓国人の友達がたくさん出来てから、みながいい人ばかりで、韓国は今一番好きな国になったんですよ。そう考えると、その初めてのいやな人の他に韓国人の友達が出来なかったら、多分今まで韓国のイメージはずっとよくなかったと思います。それで、正しいイメージを作るのは一人の外国人と知り合ってからちょっと無理です。同じ国の外国人の何人かと知り合ってからその国人のイメージはこうだと思えるのが正しいと思います。

私：日本人のイメージはどうか。

アルベル：みなばらばらですね。ただ、直接に何も言わないですね。

私：あいまいということですか。

アルベル：そうです。それと、日本にきて、最初俺は英語を使っていたんです。英語を使っていたときにみなが親切にしてくれていたのに、おれはだんだん日本語が話せるようになってから、周りの人もすごく厳しくなってきました。外国人だから、多分日本語が話せると親しくなりやすいじゃないかという恐れがあって、「外」から「内」にいれたくないと思っています。

私：日本人はやっぱり、「日本人と外国人」と言う区別すると思いますか。

アルベル：正しく言うと「日本人」、「アメリカ人」と「外国人」になりますね。アメリカ人って思われたことがないじゃないか。

私：あ、ありますよ。本当にそうですね。それで英語で話かけるのですね。

アルベル：そう。歴史的にアメリカと日本は交流が強いから、大体の日本人がアメリカのことをよく知っていますね。

私：でも、アメリカ人に思われるのはいやですね。自分の国の代表に見られたくないけど、アメリカ人としてもみてほしくはないですね。

アルベル：多分、違う国の人に会うときに誰でもそのひとを国の代表にしてしまうと思います。それは人間の特徴かも知れません。

アルベルさんとディスカッションをした上で、人間は「何々人はこうだ」という言い方から、逃れられないのではないかと思った。外国人を集団で捉えることは当然であるじゃないかと考えるようになった。

### ディスカッション3

最後のディスカッションの相手としてさえりさんと話し合いが出来たらいいなと思った。なぜかと言うと、さえりさんからいつも新鮮なコメントとか面白い意見とか提案などを

らっていたからである。それと、さえりさんは私と一緒に同じグループに入っているの  
私のテーマを選んだ理由をよく検討したことがあったから、今回理由を読まないで、すぐ  
にディスカッションを始めた。

**さえりさん**：エレナは2回ディスカッションをして、何か考えが変わりましたか。とか、  
相変わらずムラトヴァ・エレナで見られたいですか。

**私**：そうですね。ただ、いろいろ考えた上で、他人から私のことだけでなく、私からほかの  
国の人のことも個人個人で見たいですね。さえりさんはどうですか。

**さえりさん**：私はほかの国の人を見ているときにばらばらで見ているんですよ。たとえば、  
一人でウズベキスタンに行ったときの話をすると、「ウズベキスタン人は皆こうだ」じゃなく  
て、「ウズベキスタンでこういう人に会ったよ」と言う感じです。(私もこういうよう  
になりたいけど、まだほかの国の人のことを話すときにやはり 人はみんなそうだとよく  
いう。これから周りの人を一般化しないように頑張りたいと思う。)習慣とか傾向と共通点  
があると思うんですけど、やはり、ばらばらで見えています。(それでさえりさんに「見られ  
るときは」と聞こうとしたところで、さえりさんは私の考えていたことを読んでいたよう  
に)見られるときは気にするか、気になるんですね。特に中国で旅行していたときに最初  
は(書いている)中国人民抗日戦争記念館のところに8月15日にちょうど戦争が終わっ  
た記念日の時にいって、そこのへんにいた大体の中国人は日本人に対してとても悪い印象  
を持っていたみたいで、私は出来るだけ自分が日本人であることを言わないようにしてい  
た。しゃべれなかったら、外見で分からないから。(ここで私はちょっとびっくりした。戦  
争は前のことだから、それは祖父の責任だと思って、若者とは別に関係ない)

それと、中国で足の悪いおじいさんにあって、いろいろ話しました。その人は戦争で足が  
悪くなってしまいました。で、直接の責任がないのに、私のせいじゃないと分かっていた  
のに、小さくなっちゃった感じがした。私の祖父は戦争の時に中国の以前から大学の建物  
であった兵舎で泊っていました。私も留学したときに偶然その建物に泊まって、もしか  
して、足の悪いおじいさんも私の祖父と何かあったのかなと思いました。多分、責任とい  
えば、自分の国の責任だけじゃなくて、自分が属するグループ：「家族」グループとか、地  
域」グループとか、様々なグループの代表として責任を感じています。エレナはどうで  
すか。

**私**：私の属するグループのイメージがよかったら、私もそのグループの一人だってもいいと  
思います。たとえば、ロシアの文学が有名じゃないですか。私とあまり関係ありませんし、  
有名な作品を私は書いていないけど、あるロシア人が書いて有名になったから、私もうれ  
しくて、ロシア人であることがすごくいいなと思っています。逆にイメージが悪かったら、



私はそのイメージと関係なく、ただムラトヴァ・エレナですよと考えてほしいです。  
さえりさんは？

**さえりさん**：私は別に誰か日本人がいいことをして、有名になって、その人だけはステキーだと思って、私はぜんぜん関係ないで、さえりです。逆に、誰か悪いことをやったら、関係なくありたいけど。。。たとえば、昔の戦争のこととか、時々新聞とかテレビで悪いニュースが流れてくると、エレナとかヒメナがそのニュースを読むと私には恥ずかしいです。

**私**：やはり逆ですね。ロシアはある人がオリンピック大会で賞をもらったりして、皆がうれしくて、ロシア人がよくやったという気持ちで、自分の価値も上がるような感じです。しかし、悪いことがあっても（ロシアでは私も理解できないで嫌いな習慣がたくさんある）恥ずかしくはないです。私は関係ないから。

**さえりさん**：エレナは外国人として何か悪いことをやったらはどう？ほかのロシア人に「申し訳ない」という気持ちがあるんですか。

**私**：ないですね。誰かが私のせいで何か被害を受けるとしたら、個人的に必ず誤るんですよ。でも、皆のロシア人に「申し訳ない」っていえません。私個人だけでなく、ロシアの政治家などもそうです。それはロシアの憲法にも書いてあります。退任した大統領は以前やったことの責任が取れないのです。それで、何か悪いとか正しくないことをやっても、国民に「申し訳ない」って言うはずはないですよ。それは本人次第ですけど、私も、誰かロシアにいたことがある外国人がロシアのことについて文句（たとえば、ロシア人はのんびりしすぎとか、約束とか時間を守らないなど）を言っても全然はずかしくはないです。だって、私も多分一般的のロシア人の性格の中では同じことが嫌いかも知れないです。私も子供のころロシアで教育を受けてこうだったかもしれないが、大人になってからどれがいいかどれが悪いかが区別出来るから、それと、長い間外国にいるいろいろな母国の事実が忘れてきますね。でも、一回ロシアに帰ると、最初自分はもともとロシア人なのに外国人のような感じがして、ロシアを新しい目で見ることが出来ます。それで自分のロシア人の中身の整理が可能ですね。自分のことを見直して、自分に合わないとか好きじゃないことを自分の性格から追い出すのが出来ます。それとともに新しくロシアの魅力が分かってきます。ロシア人は思ったよりいい人が多いことにびっくりして、「ああ、私もロシア人で生まれていいな」と思うようになります。

**さえりさん**：エレナは悪いことあったら、「私は関係ないでムラトヴァ・エレナです」といいことがあったら、ロシアのカバーをかぶりますか。

私：そうですね。今までは私のなかでムラトヴァ・エレナとロシア人の代表が摩擦か喧嘩  
していて、とても不安でしたが、やはり、私はもともとムラトヴァ・エレナで、ただ、  
場合によって「ロシア人」という傘をさしますね。

さえりさんのディスカッションによってやっと結論が出ました。

### **結論**

レポートを書き始めた時に心配していたのはムラトヴァ・エレナとロシア人の役割を同  
時にするのが出来るか(大丈夫か?)とのことです。なぜかと言うと、エレナである時にロ  
シア人はどこに行ってしまうかロシア人の役割をする時にエレナはここにいなくなるか  
なと悩んでいたからです。

何か一つを選ばなければいけないと思っていたが、やはり同時にロシア人とエレナであ  
ることが当然なことです。私のもともとはいつもムラトヴァ・エレナで、ただ、必要な時  
に“ロシア人”の傘をさしてロシア人のムラトヴァ・エレナになる場合があります。やっ  
と安心しました。

## 東京の影響について

ナディン・フォゲル

1. テーマと理由
2. ディスカッション
3. 結論
4. 終わりに

### 1. テーマと理由

私は今一ヶ月間東京に住んでいる。前はドイツに住んでいた。東京に着いたから、新しい印象をたくさん受けて、留学生としての生活も私にとって新しい経験なので、その印象や経験について書きたいと思う。

では、二ヶ月ばかり東京にいるが、故郷のドイツの生活に比べて、差が非常にあると分かってきた。

良いことも困ることも多くある。実は初めての日から今まで東京の印象が変わっていた。例をあげれば、新宿駅に着いたその日、ラッシュ・アワーの時だったから、東京はいつも込んでいて、人々でいっぱいだと考えた。そのため、東京は生きやすい所ではないと思った。そういう印象はどんどん変わった。もちろん、東京では人が多い。ここの生活は速くて、ストレスなどもたくさんある。しがし、公園に行ったり、お寺を見に行ったりしたら、そのストレスが解消できる。つまり、静かなところに行くと、東京の速さを少し休めることができると思う。

私にとって、一番大きい影響するのは、あいづちということだ。あいづちというのは日本人の話し方だ。例えば、日本語の話の中にいつも「そうですか」、「なるほど」、「その通り」などと言わなければならない。そうすると、相手に自分の関心を見せることができる。しがし、私の言語では、そのようなやり方はない。逆にあいづちはドイツ語でしない方がいい。あいづちをすると、話し手は流暢に話すことができない。だから、相手はその話に関心がなく、その話を聞く気がしないという印象を受ける。

最近、私は家族と電話した。電話中に無意識にドイツ語であいづちに似たような表現を使った。その時に、日本の生活と日本語の勉強は私に影響することを分かってきた。

毎日たくさんの小さな経験が出てくる。道で顔黒の女性たちを見ることや漫画の姿のような、普通でない洋服を着る若者たちを見ることも、そのような前は見たことがないことは

自分の意識を広げると思う。つまり、東京の生活は私に影響を与えていると思います。この影響に気づくことは、意識を広げるものだろう。

## 2. ディスカッション

ディスカッションの相手は千田さんという人です。千田さんはアメリカに留学があった大学院生なので、千田さんの経験を聞くことと、もし留学は何か影響をしたら、その影響を比べることも大変面白いと思われました。

私にとって、一番大切な質問は、外国に行ってそこで生活をしたら、それはどのように自分の意見や考え方に影響を与えるという質問です。

### a) 影響について

私：「千田さんは何かアメリカの生活で影響を受けましたか。」

千：「分からない。アメリカでできること、日本でできないことはないと思うんだから。でも、今まで留学の影響があるかないか、それについて考えなかったですが。そのため、留学の前と留学のあと、私は何かチェンジしたかどうかとは、はっきり言えないんだけど、両親や友達を聞いてみます。」

どうして千田さんは、このまま留学の影響について何も考えなかったのだろうか。私は日本に着いた、すぐその後、影響があると分かった。

外国に行ったら、それは自分に影響を与えないのは、私にそこまで考えられないことだった。

### b) 慣れることについて

千：「外国に行くと、どんどん慣れるようになるでしょう。」

私：「私もそう思うけど、話せるまま生活に慣れると思います。話せないと生活は大変と思う。そして、慣れるという process の中で、二つの面、つまりいいものも困るものも見つけることができるでしょう。いいたいことは、生活では全部はいいとも悪いとも言えませんが、どの経験でも、いつも二つのサイトがあるでしょう。」

そのとき、慣れることは確かに人によって違うと思ったのです。私にとって、慣れることは川の流れ見たいな流暢な経過だけじゃなくて、「どんどん慣れること」だけじゃなくて、それどころか、時々も break があると分かっていた。

### c) 影響は悪いかいいか

千：「東京の影響についてどう感じていますか。それにいいと思うか。いやだと思うか。」

私：「いいとか悪いとかではなく、それは自分お考えを広くすると思います。多分、ドイツに帰った後留学のおかげで私は日本人のことも、ほかの外国からきた人のこともよりよく理解できるようになるかも知れません。もしそうなったら、それはいいことだと思います。ほかの人のことを知るのは、大事だと思うから。そして、私は多分ドイツであいつちをうつとしたら、ドイツ人の友達が「どうしてこのようなことをするの」と聞いたら、私は「それは日本人のやり方から」と答えます。そのように、自分のまわりの人の考えも広くすることができるかも知れません。」

### 3 . 結論

留学をして、そして外国の生活や経験について話したら、それはどのように影響を与えるのは説明しにくい質問だと分かっている。

もちろん、千田さんにとって急に答えて、いい例をあげるのは大難しい。だから、千田さんが今まで具体的な影響を着付けなくてもいいけど、それについて何も考えなかったのを少しびっくりした。千田さんぜんぜん変わらない状態で日本に帰ったとは考えられない。私も東京の生活はどのように影響するのがすぐ分からなかったが、それについてたくさん考えた。私は今までみんなにとって影響は大事なことだと思ったけど、ディスカッションの中で、千田さんは影響を意識しなかったからほんとに驚いた。それは私と一番大きな違いだった。だから、私にとって影響はドイツと日本を二つの視点で見て、人間についてよりよく知るために大事な点だとわかった。

### 4 . 終わりに

私はディスカッションは面白かったと思う。

「エスパルス」のグループのなかのディスカッションは集中だった、時々大変難しかった。自分の話す能力をよりよくするためいいと思うけど、大学院生たちは最後のレポートを直したら、そのほうがいいと思う。

# 新しい場所としての「東京」に暮らすこと

千田 昭予

<構成>

1. テーマ設定理由
2. ディスカッション
  - 2-1. ディスカッション相手
  - 2-2. ディスカッション内容
    - 話題 「帰属意識」
    - 話題 帰国後の「違和感」
    - 話題 「社会にコミットする」とは？
3. 結論
4. 終わりに

## 1. テーマ設定理由：現在の私にとっての「東京」生活の意味は？

十年前、私は、アメリカで日本語を教える機会を得て日本を離れた。派遣プログラムに応募してのことであったため、行き先がアメリカであったことは、自分で積極的に選んだものではなく、むしろ私はアメリカについてよいイメージを抱いてはいなかった。

私が暮らした地域はいくつかの大学や研究機関がある他は極めて退屈な町であった。到着当初は、交通の不便さを呪い、南部訛りのわかりにくい英語を憎みさえした。アメリカに過大な期待を抱いていなかった私にとっても、その状況は予想以上に厳しいと思われ、途方に暮れた。しかしそうした否定的な気持ちは、ほんの数日で大きく変化していった。仕事である日本語を教えることに情熱が持てたのは言うまでもないが、生活上のひとつひとつを自分で考えてこなすことに、奇妙な程の充実感を感じたのであった。車の免許をとること、税金のしくみを知ること、アパートに問題が生じた時の交渉、そうしたうんざりするような雑事にさえ、大袈裟ではなく自分の力で生きている喜びを感じていた。

やがて私は七年間を過ごした後に帰国して、東京に住むようになった。東京に住むのは初めてであったが、東京も日本の一部であるし、私は何も心配していなかった。新しい環境に適應できるかどうか、意識にのぼったこともなかった。それまでも自分の生活を自分で築いてきたのだから、どこでも生活できるはずであったし、何より今回の「移動」は自分の育った環境に「戻る」ことに過ぎないはずであった。

ところが、日本へ帰国したとたん、それまでに経験したことの無いひどい違和感を覚えた。それは、それまで暮らしていたところへの郷愁に由来する現状への単純な否定（渡米当時の数日間の否定的な気持ちは、これにあたると思われる）を超えたものであった。自分にとって自明の言葉や社会に囲まれているはずであるのに、うまくコミュニケーションができなくて、自分の言動が誤解を招いて周囲にとがめられたり、他人の言動が理解できずに不愉快な思いをしたりした。

自分が生まれ育った「祖国」へ帰ることが、未知の、そしてあまり興味もなかった「外国」へ出ることよりもつらい経験となったのはなぜなのだろうか。私の内に今もなおくすぶって

いるこの拒否的な気持ちは、どういうところから出てきているのだろうか。現在私は、私が東京を自分にとって親しい場と誤認していた点に問題があったと考えはじめています。ここは日本の一部ではあるが、私にとっては、東京も「外国」なのである。家族やかつての友人はアメリカにいた時と同様に遠く離れたままであるし、職場には戻りようもない。言葉だって私が育ってきたところのものとはずいぶんちがう。つまり、自分が既知の世界と考えたものは、実は未知のものだったのだ。したがって、東京で暮らすことは「戻る」ことではなく、新しい生活を「始める」ことであったのだ。新しい場所では、自分の生活や人間関係を一から築いていくしか、そこに存在する充足感は得られないのであろう。しかし私は東京を、日本の一部であることを理由に、自分のかつていた(=既知の)場所だと思い込んでいたため、生活を「始める」ことを怠ったまま三年間を過ごしてきてしまった。そのため、アメリカに着いた当初よりも適応に時間がかかっているのだろう。

実はこの一年ほどの間、家の中に逃げ込むようにしていた生活から、大学院に通う生活に変わったことで、自分の気持ちにも少しずつ変化がある。それは、社会との関わりが多少なりとも持てているという実感がもてるようになってきたことである。私には毎日すべきことがあり、考えるべきことがある。また考えを共有する相手にも恵まれている。これまでの閉塞感を打破することは、この環境を生かしてさらに自分の外界と強く関わっていくことで叶えられるのではないだろうか。

つまり、私にとって、「東京」での生活は、しっかりと社会にコミットして生きていく訓練の場である。

## 2. ディスカッション：「コミットメント」って？

### 2-1. ディスカッション相手

私は、お二人の方にディスカッション相手をお願いした。お一人は、Jさんである。Jさんも海外での生活が長かった方なので、帰国後の違和感や、日本での生活の意味付けについて、私のものとどう違うかについて話したかったためである。もうお一人はUさんである。Uさんは、上記テーマとその設定理由についてのコメントで、私の引きずる違和感が長引くことなどに疑問を呈しておられたため、私とは異なった視点を持った方だと考えたからである。

実はこの時点での私は、ディスカッションの意義が充分認識できていなかった。私のテーマは極めて個人的な経験と感覚に基づいたものなので、ディスカッションを経ても、自分の考えは変わらないだろうと思っていたのだ。そのため、自分にとっての「東京という新しい場所に暮らすこと」の意味付けと、このテーマを選んだ理由をディスカッション相手に投げかけるのみで、あとはお相手の方の意見や感想を待つという、お相手になかば下駄を預けるような姿勢で私のディスカッションは始まった。

### 2-2 ディスカッション内容

(実際には、Jさんとのディスカッションの数日後 Uさんとのディスカッションが行われたのだが、論旨の展開上、時系列順にはなくトピックごとにその内容をまとめた。)

**話題 「帰属意識」について**

Uさんからは、「理由」のコメントにもあった、東京への適応に時間がかかりすぎていることについての疑問が出された。渡米時には違う場所へ行く「覚悟」ができていたが、東京に帰った時はそれがなかったためであるからだと私は答えたのだが、Uさんの疑問は、なぜ日本では社会とのかかわりを持とうとしないまま3年もたったのかという点におよんだ。それに対する私の答えとその後の展開を見る：

私：うん、いやんなっちゃったのもあるけど、一方で、自分が帰属する所があったほうがいいな、っていうあせりはあったんだけど（できなかった）。

Uさん：あー——っ！なるほど。（略）「帰属はிரらない、ிரらない」って言ったところで、やっぱり外国に行って生活している時ってのは、それがあから支えられてる部分もあるんだろうって…。で、今ちょっと思ったのは、帰属をアメリカにいた時は日本に持ってて、で日本に帰って見たら持ってたはずの日本が自分の考えてたものと違って、そこでちょっとやになっちゃった…。

私は、「帰属する所」という言葉を、国というレベルではなく、所属すべきなにか（社会的なコミュニティ）として使ったつもりであったのだが、Uさんは、それをアメリカ時代の私が日本に対して持っていた意識であり、さらに、私の感じた「違和感」は、実はその帰属すべき場所である日本が自分の思っていたものと異なったことへの「失望」であると指摘した。私は帰属意識をもっていることは自覚してはいなかったが、Uさんの指摘は、帰った場所が自分の帰属する場所とは思えなかったという私の実感と合致している。

では、私が日本にどのような帰属意識を抱いていたのだろうか。Uさんの質問に答える形で、断片的な形ではあるが、いくつかが明らかになった。それらをまとめると、次の通りである。

私にとって、日本へ帰国することは、アメリカの知人に理由を訊かれてもうまく答えられない程当然だと思っていた。それはいわば親が子どもを選べないようなものである。便宜上の理由で永住権や国籍をとってアメリカに住み続けたとしても、日本はいつか帰る場所だという自分の意識は変わらなかったように思う。

これらの発言から、アメリカを離れる当時の私にとっての日本は、帰属意識の拠り所であることに気付かされた。ただし、それらは確固とした理由に基づくものではなく、当然のものにとらえていたのであった。

## 話題 帰国後の「違和感」について

私は「テーマ設定とその理由」では「違和感」を感じた具体例を詳細に記述することを避けた。実は、ひとつひとつが当時の自分にとってはかなり痛切な体験であったので、それらもわたしにとっては「語りたこと」ではあったのだが、どれも自分の「立場」として他人に語るには表層的なものであると考えたからである。

しかし、ディスカッションでは、お二人から私が「違和感」を感じるにいたった具体的



なエピソードについて訊ねられた。そのエピソードの一例は、「電車で足を踏んでも謝らない/こちらが謝ると奇異の目で見られる」という程度のものなのだが、私の心に突き刺さり、私を憂鬱な気分させた。それらを不愉快に思う心情はJさんと一致したが、Jさんがそれらの場合を感じるであろう「違和感」を日本に帰国する前に予測していた点が、私とは異なっていた。一方私は、前述の通り、東京を自分にとって既知の場所ととらえていたため、そのような予測（心配）はするべくもなかった。

## 話題 「社会にコミットする」とは？

### 1) 「訓練の場」というとらえかたについて

上記の態度の違いは、私が新しい環境で暮らすことを「社会にコミットする訓練の場」ととらえることへの疑問としてJさんから提示された：

Jさん：だけどそこで私が感じた違和感は、千田さんみたいに、(略)相手の存在がどうだからじゃないんだよね。(略)そしたら千田さんは、(略)違和感感じたような社会に、慣れるということを訓練として感じてるんですか。

私：そうです。

Jさん：そこをなんか切り開くというか、たとえば、タバコ吸ってる人に対して「あんた、私の前でタバコ吸わないで」と言うとか。そう言う意味での訓練ではないのね。

私：相手を変えさせるというより、慣れていくしかしようがないと思っちゃうんです。

Jさん：(略)私はそれを訓練って言わないのね。訓練の場じゃないのね、千田さんが言うような。いわゆる適応していく？(略)そしたら訓練の場じゃなくて、“社会にコミットして、その生き方に自分をあわせる場”となるんじゃないですか？って言いたくなる。

Jさんの「訓練」は、相手も変えさせられるような努力を積み重ねる訓練であり、私の「訓練」は、自分が変わっていく訓練であるという指摘は、とても面白かった。私はJさんのような「訓練」のあり方があるとは考えたことがなかったからである。

### 2) 社会との関わり方

Jさんとのディスカッションの話題は、当然のことながら私が社会と関わることの必要性の有無へと発展した。私は、「理由」にも書いたように“充足感を得るために社会と関わる必要がある”と答えた。それに対してのJさんの指摘は次の通りであった。

Jさん：じゃあ、その(アメリカで感じた)充足感って言うのは？(略)「充実感」っていうのは、「関わり方」に関係してくるんですよね。

私：すごく深く深く全身全霊で関わっていたということはないんですよ。ほんとに生活上の雑事レベルのことで自分で考えながら(略)自分で一生懸命生活を切り拓いていった気がするんですよね。

Jさん：なんだろ、その充足感の中身って...

私：そうですね、それ書いてありませんね。

Jさん：書いてないって言うよりも、それはまだ千田さんの問題になってないのね。(略)その中身ね、「コミットする」その中身ね、コミットする仕方とか、(略)「充足感」を感じる生き方がまだ千田さんには具体的な形で表れてないから違和感を感じたのかなって思ってしまうね。

そして、「充実感」を感じる／感じないは、いかにしておもしろく生きるか、「コミットメント」の仕方次第だという指摘も受けた。この指摘には虚を突かれた思いがした。なぜ社会とのかかわりが必要なのか、「充足感」を感じるためにどういう社会とのかかわり方が必要かという点については、全く考えていなかったからである。

### 3) 仕事観について

さらに話題は、私が「社会へのコミットメント」の具体的な形のひとつと考えている、仕事を、どうとらえるかという点におよんだ。

Jさん：私はだれかから、「ああしなさい」とか課題とかね。自分が快適を求めるためにこれをしたっていうのがまずあるからね。そこが方向性が違う、千田さんとはね。(略)

私：私、ひとに何かしなさいって言ってほしいのかも知れない。(略)「役に立ってないんじゃないか」とか(心配になる)...

Jさん：だからやっぱり他人様にご奉仕するの好きなんだよね、きっと。それで充足感かんじるんだったらいいんじゃない、それで？

他人に何かをして「あげよう」という志向は、私にはないと自分では考えるのだが、私が自分のすべきことを「他人にはたらきかけること」に求める点が、Jさんにとっては、全く異質のものだったようだ。私のそうした気持ちはそれはそれでよいのだが、問題は、やはり具体的にどう進むかについて、主体的に考えていない点であるようである。

### 4) 社会と関わるのは、行動としてか意識としてか

私が社会との関わりをどのようなものととらえているかという問いは、Uさんから出された。この一連のディスカッションにおいて、私の「コミットメント」の姿勢が前項の段階よりも明確になってくる。

Uさん：もうひとつ訊きたいなと思ってたのが、「社会にコミットして生きていく」というのをどういうふうにとらえているかということ...。二つあって、表面的にたとえば“フリーターをしているか、仕事をしているか”っていう部分のものと、意識的に“一員ですっていうのと疎外感を感じて生きている”っていうのと....。

私：やっぱり、まずは表面的なところから入るしかないと思ってるんですよ。だから、目の前にあることをこなしながら表面的にでも関わっていけば、そしたら意識としてもついてくるんじゃないかなって思ってるんで。仕事でもボランティアでも、表面的に

こなすだけでは済まないでしょ？それなりに心を込めるよね。だから、そういう関係を築いていけば、気持ちってついてこないかな。

Uさん：でも、東京に帰ってきたという表面的なことがあっても気持ちがついてこなかったってふうに考えると...

私：帰ってきただけで、具体的な何か一つ一つの仕事と言うか作業と言うか、何も...

Uさん：でもそう考えると、何に（所属するか）ってというのが大事じゃなくて、してることで得られる自分の安定感...。そうすると何かに所属してるっていうのはいいことなのかな。

私：そう言われると反発したくなるけどね。本当に私が望ましいあり方っていうのは、すべてから自由なんだけど、ちゃんと仕事するっていうかちゃんと関わるっていうか、そういうあり方が一番いいと思う。

### 3. 結論：それでもやはりまず動くこと。

ディスカッションで話題になった、「帰属意識」の問題は、帰国後の「違和感」について、具体的な葛藤の有り様としてではなく、その原因を考える上で、重要な点であったと考える。私がアメリカで潜在的にもっていた「帰属意識」と帰国後もどこかでそれを求める気持ちが私を不自由にしていたのかもしれないと気付いた。

Jさんとのディスカッションの中で中心的な話題であった、充足感を感じることを可能にする社会参加の仕方が何であるかは、Jさんの指摘通り、具体的な答えが出ていない。しかし、後日行われたUさんとのディスカッションの話題（4）ではUさんの質問が私の基本的な姿勢の言語化を促してくれた。すなわち、私が大切だと思うことは、目の前のひとつひとつのことをできるだけ丁寧にこなしていくことである。それがきちんと果たされた時に小さいけれども確かな手ごたえ（充実感）を感じるし、それが私の社会とのかかわり方であると、今は言うことができる。

私が「東京」を訓練の場ととらえる考え方は、やはり変わらないが、ディスカッションを通じて新しい視点から光を当ててとらえ直したことでより明確になり、内容的にも少しではあるが具体的になった。私は、自分がいる「東京」という場所を新しいものと自覚した上で、まずは目の前の雑事を社会（他者）とのかかわりの中でこなしていくことにしたい。その経験が積み重なったところには、「東京」での生活は私にとってはや新しいものではなくなっていると思われる。

### 4. おわりに

私が「日本事情教育実践研究（以下PNJ）」を履修したのは、総合活動型日本語教育がいかに実現されていくかを「見る」ためであった。しかし、それは「見る」だけではおそらく十分に理解できないものだっただろう。私自身が、自分の内にあるものに意味付けを行い相対化する作業をしたことで、学習者がたどる過程が実感できたし、自分にとっても新鮮な経験であった。

しかし、実は、この活動中私はキツネにつままれた気分であったのだ。特に第一章をま

とめた段階で、自分の問題にある答えが出たと感じ、他人とディスカッションをすることの必要性やこのレポートの行方がわからなくなった。しかしその後でPNJのメンバー皆さん全員にいただいたコメントを整理したり、ディスカッションでJさんとUさんにゆさぶりをかけていただいたり、授業の中で細川先生に励ましていただいたりしながら、新たに様々な発見があった。レポートを書くために物理的に手を動かしたのは確かに自分であるが、私の考えを深めたのは自分ではないように思われ、やはりキツネにつままれた気分であるが、これこそが、コミュニケーションの面白味であると心から感じている。

このレポートの最終的な提出にあたり、ほぼ3ヶ月前にまとめた第一章を読むと、当時の「くすぶった」気分は、早くも既に懐かしいもののように感じられる。自分で自分の考えをまとめて問題点を整理したり、それを他人にぶつかけたりすることは、意外と思わぬ効果をもたらすものであるのかもしれない。

# er音楽で感じる達成感とはer

稲葉 美穂

## 構成

1. テーマ設定理由：私が音楽で感じる達成感とはどのようなものか？
2. ディスカッション
  - 2-1 達成感を感じる条件 「強制されない」と「好きなもの」
  - 2-2 達成感を感じる条件 「着実性」と「一人で」
  - 2-3 には、どうして「一人で着実に出来ること」が必要なのか？ 着実性の問題
3. 結論 達成感を感じる条件と「自分で自分をほめること」
4. 終わりに 総合の活動を振り返って

### 1. テーマ設定理由：私が音楽で感じる達成感とはどのようなものか？

私は音楽が大好きである。特に好きなのは楽器を演奏することだ。中学生の時、吹奏楽部に入部し、サクソに出会ってから、私は楽器を演奏することが好きで好きでたまらなくなかった。楽器に触っていただけることは、私にとって一番の楽しみであると言っても過言ではない。「どうして楽器を演奏することが好きなのか？楽しいのか？」と考えていたら、私は一つの言葉に行き着いた。それは「達成感を感じる」という言葉である。

私は、サクソを吹き始めてから、出ない音が出るようになったり、難しい指使いが出来るようになるのが楽しく、毎日毎日とにかく練習した。中・高校と6年間サクソを吹いたのだが、特に忘れられないのは、中学生生活最後のコンクールの曲である。その曲は指使いが難しく、しかもテンポが速い曲だった。私は、この曲の楽譜をもらった時「うわー難しそう。でもやるぞ！」と思い、毎日メトロノームの目盛りを最低一つ上げることを課題とし、練習した。同じサクソを吹いていた友達が「毎日よくやるね」というほど単調な練習だったが、次第に指が動くようになり、だんだんテンポの速さについていけるようになるのが自分で感じられ、私は楽しくて仕方がなかった。そして、とうとう楽譜通りに出来るようになった時、「やったー！やっと出来るようになった！私ってすごい！」と、まさしく自画自賛し、嬉しくてたまらなかったのを忘れることが出来ない。

このように、私は、一つの課題なり目標なりを決め、それに向かって毎日練習し、その結果、吹けなかった曲が吹けるようになったり、前よりいい音が出るようになったりすることが嬉しく、そして楽しくて仕方がなかったのだ。つまり、私は、自分で決めた目標に向かってコツコツと努力し、その目標が達成された瞬間、自分自身が「達成感」を感じられる瞬間が好きなのだと思う。

そして、この達成感は、学校のテストのように や×で決められたり、他の人より秀いでること、勝つことで感じる達成感ではない。例えば、学校のテストは一生懸命勉強しても、答えが「×」だったら達成感を感じる事ができない。つまり、自分が努力しても達

成感を感じることが出来ない場合もある。また、人より秀でることによって得られる達成感も、自分の結果より他の人の結果の方が良ければ達成感を感じることができず、しかも他の人を負かすことは、私にとってはとても後味が悪いことだ。そう、これらの達成感は、努力しても感じられるかどうか分からないものである。しかし、楽器を演奏することで私が感じる達成感、自分が決めた目標を達成できたかどうか、自分で決めることができる。時には他の人に「上手くなったね」とほめられることで達成感を感じることもある。しかし、他の人にほめられなくても、音楽の場合、私は「出来なかった事が出来るようになった。よく頑張った。」と自分で自分をほめることができ、それによって達成感を感じることができるのである。

つまり、私にとって、楽器を演奏することは達成感を感じる手段であり、その達成感、自分で自分のことをほめることで感じられるものである。

## 2. ディスカッション

ディスカッションのお相手は、山本冴里さんをお願いした。その理由は、以前「私の場合、楽器はすごく気持ちと共振している」というコメントをいただき、私とは違う形で音楽に接していると感じたことと、授業を通して、山本さんは私とはとても違った視点を持っている人だと感じ、だからこそ私と違う視点で達成感を捉えているのではないかと考えたからである。

### 2-1 達成感を感じる条件 「強制されない」と「好きなもの」

どうして学校の勉強やテストでは達成感が感じられず、楽器の演奏では感じられるのか、楽器を演奏すること以外で達成感を感じることはあるのか、という「どんな時に達成感を感じるのか」という疑問が山本さんから発せられた。「理由」にも書いた通り、学校の勉強は一生懸命勉強して努力しても点数が悪くて結果が出なかつたりする、つまり必ず「努力する 結果が出る」となるわけではないため、私にとって達成感を感じる対象ではないと考えていた。しかし、山本さんからの次の問いかけで、他の条件が浮かび上がってきた。

**山本：**じゃあ、例えば、出る問題が分かっている英単語の100問テストとかならいいんですか？  
予告されていて。

**稲葉：**そうですね。その時は「やったー」って思うんですけど・・・

ここで、「努力する 結果が出る」だけでは、私は達成感が感じられないということに気付いた。そして、次の山本さんの発話から、「努力する」前の段階のことが重要なのではないかと、つまり、「努力する」前の段階で何か条件があるのではないかと、ということに気付かされた。それでは、どのような条件なのか。それに関する答えは、話が進むうちに、徐々に明らかになっていった。

山本：私すごい、ピアノをやったってメールを出しましたけど、すごい苦手で、(中略)  
無理強いされたっていうのもあるだろうけど、それでもたぶん達成感って一度も感じたことないなーって思って。

稲葉：私も、小学校の時にピアノをやっているときは、親にやらされてるっていう意識の方が強くて、全然(達成感を)感じなかったんですよ。

何かを人に与えられて、つまり「強制されて」、それに対して努力して結果が出て、私は達成感を感じないのではないかと考えた。それに対し、山本さんから次のような指摘があった。

山本：それは(部活動で曲が吹けるように一生懸命練習したのは)、でもみんなとか、周りの雰囲気強制されたとかじゃなくて？

稲葉：最初はあったのかもしれない・・・それは自分では、その気持ちは覚えてなくて。でも、(中略)コンクールとか演奏会とかがあって、そこまでに吹けるようにならなきゃいけないみたいなものあって、じゃあ、練習しなきゃって思って。みんなに迷惑かけちゃうじゃないですか、自分が出来なかったら。(後略)

練習を始めた最初の理由は、「みんなに迷惑をかけてはいけない」という自発的な義務感だったのかもしれないが、そこから「努力 結果」が現れることが楽しくなり、義務感がなくなり、「練習 達成感」が楽しくなったと思う。

しかし、その後のディスカッションで「達成感を感じられるから音楽が好きになった」のか、それとも「音楽が好きだから、達成感を感じられるまで練習できるのか」という話が出てきたのだが、それを考えると、やはり「音楽が好きだから」となるのだと思う。なぜなら、私はスポーツが嫌い(苦手)なので、達成感を感じるまでスポーツをしたことがないからだ。自分でスポーツ嫌いをなくそうと思い、努力したこともあったが、結局は三日坊主に終わった。もしスポーツが好きだったら、スポーツで達成感を感じていたのではないかと思う。つまり、私は、「自分の好きなことに、強制ではなく自分で取り組もうとして努力し、そして結果が出たとき」、達成感を感じるのではないかと思った。

一方、山本さんが達成感を感じる時は、私とは明らかに異なっていた。

山本：いつ(達成感を)一番感じるかなって思ったら、それは一人旅だって思ったんですよ。

稲葉：それは何故ですか？

山本：次から次へと予期しないことが降りかかってくるんですよ。(中略)次に何が来るかわからないっていうところが大きくなって思って。それが、稲葉さんと全然違うところだなって。

稲葉：それって、未知のものに対して自分が働きかけて、クリアできた時っていうことなのか

な？

**山本：**というよりも、未知のものが勝手に押し寄せてきて、それをクリアできた時っていう感じ。

山本さんは「未知のもの」、自分が知らないものや、予想できないものをクリアできた時に達成感を感じるということだ。「何かをクリア」するという点は同じだが、私の場合は「自分が好きなことに、自分で取り組んでいく時」なのだが、山本さんの場合は「押し寄せてきた未知のものに対して、全力でぶつかる時」という部分が大きく違う。

## 2-2 達成感を感じる条件 「着実性」と「一人で」

私が達成感を感じる条件として、更に次のようなものが出てきた。

**山本：**じゃあ、わりと着実な見返りが欲しいっていう感じ？

**稲葉：**そう。自分が「これだけ努力しました、そしたら、これだけのものが絶対返ってきます」みたいなものがあると、努力して、頑張ったなって思えて、それで嬉しくなる。

**山本：**努力すれば確実に、結果が自分の手とか目に入ってくるっていう形で入ってくるのが好きなんですか？

**稲葉：**そうですね。それを自分で、すごく実感できる、感じられる。感じられないと努力できないから、着実に努力すれば（結果がでるものもいい）

つまり、私は、「努力に対する結果」だけではなく、「着実に結果がついてくる」ものでなくては努力できない、努力をする気になれないのだと分かった。そして、この「着実性」という点が、山本さんと私の「達成感」の中で大きく違う点だった。

**山本：**私は、全然、着実性ってものが、もともとあんまりないし、欲しいって感じもあんまりしないから。逆に、努力して返ってこないほうが面白かったり。意外なものが返ってきたほうが、面白かったりする。

**稲葉：**それはどうして？

**山本：**多分、あんまり前が予想できないって事が、楽しいんだと思います。私は。

山本さんは「意外性」が好きであり、私は「着実性」が好きで、その違いが、2人の感じる「達成感」の違いにも現れている。そして、「意外性」を楽しめない私だからこそ、「着実な達成感」が好きなのだと言える。

また、私の「達成感」には、更に「一人で出来ること」という条件がついているのではないかと思った。



山本：基本的に稲葉さん、一人でやれることが好き？

稲葉：あーそうですね。一人でやれることが好き。

みんなでやる達成感もある。(中略)でも、例えば、吹奏楽で練習しない人がある。で、へたくそ。で、ソロパートがあったりして。その人が失敗したりすると、チッと思っちゃったりして。なんでもっと練習してくれないのよ、とか思ってしまう自分も嫌で。

(略)

山本：自分もその人と一緒に評価が下がるっていうか？

稲葉：評価が下がるっていうか、せっかく自分が練習したのに、上手く出来ない。全体としてみたら、上手くないわけじゃないですか。それが嫌なんですよ。

山本：自分の練習が報われない？

稲葉：そうそうそう。それが嫌で、なんだよって思っちゃうんだけど、でも、そう思う自分も嫌で。(中略)で、そういう嫌さと、今度逆に、自分が失敗した時に、他の人に迷惑かけちゃうのも嫌なんですよ。だから、一人で着実に出来ることが好きかもしれない。うん、そのほうが気が楽。

つまり、私は、「努力 結果」が着実に出来ないダメで、いけないと思いつつも、人に対してもそれを求めてしまう。また、自分が結果を出せなかった時に「人に迷惑をかけているんじゃないか」と考えてしまい、苦しくなる。だから、「一人で努力して、一人で結果を出せるもの」という条件が、「達成感」についてくるのではないかと思う。つまり、私が感じる達成感には、「努力すれば着実に結果が出て、しかも一人で取り組めるもの」という条件があるのだと言える。

また、「一人で出来ること」は、自分のペースで物事を進めていけることでもある。つまり、着実に物事を進めていけるということであり、この「一人で出来ること」という条件も、「着実性」ということと結びついていると言えるのである。

### 2-3 私には、どうして「一人で着実に出来ること」が必要なのか？ 着実性の問題

ここで、どうして「一人で着実に出来ること」に私がこだわるのか、必要としているのか、という疑問が、私の中に出てきた。

稲葉：しかも、なんか社会人になると、仕事って頑張っても成果が見えなかったりするんで、余計ピアノで頑張って、「あ、この曲弾けるようになった」とかって、それが楽しくて。自分のペースメーカーになるっていうか・・・。

山本：ああ、メトロノームみたいに？

稲葉：そうそう、まさしく。(中略)仕事って、頑張っても、勉強よりも更に成果が現れなかったりするんで。

**山本：相手がありますもんね。**

**稲葉：そうそう。まさしく。(後略)**

ディスカッションの時点では、「仕事は頑張っても成果が現れない、結果が出ないことが多い。だから、達成感を感じたい私にとっては、それだけでは満足できない。それを、楽器を演奏することで満たしていた」という意味で話していたが、その後のディスカッションの中で、山本さんの言った「相手がありますもんね」ということが、私にとって、大きなポイントなのではないかと感じた。私は、山本さんのように「意外性」を楽しめない。しかし、相手があることは、自分が分からないこと、自分のペースで「着実に」出来ないことがたくさんある。つまり、「意外性」だらけの世界だと言える。だから、私は、そこで居心地の悪さを感じたり、苦しんだり、疲れたりする。このことは、次の会話にも表れている。

**稲葉：恋愛以外は、それこそ、恋愛以外は、常に進んでいないと気がすまないかもしれない。恋愛は、他人がいるから、他人と自分だから。**

**山本：深いですね。その関係が。**

**稲葉：そう。だから、こう、半分、半ばあきらめ。でも、ふと気付くんですよ。自分のペースに相手を入れたいなって思う自分があるって。分かるんですけど、でも、あの人は別の人なんだからしょうがないって思うようにしてる。言い聞かせるようにしてる。その違いを楽しまなきゃいけないよって言い聞かせてる部分は多分にあるんだけど。**

**山本：ああ、楽しいって言うよりも、そこは楽しむべきものだって感じなんですか？**

**稲葉：そうそうそう。だから、根本的に私が楽しさを感じるのは、こっちの「自分が」っていう方に、楽しさを感じるタイプなんだと思う・・・。**

つまり、「意外性」だらけである他の人との関わり合いの中では、私は着実に自分のペースで物事を進めることが出来ないため、楽しもうと思っても、なかなか心から楽しむことが出来ない。楽しむことが出来ないだけでなく、苦しんだり疲れたりといった、言わばマイナスの感情を感じやすいのではないかと思う。だから、「一人で着実に出来ること」で確実に達成感を感じ、自分のペースを掴み、人との関わり合いの部分で上手くいかない部分とのバランスをとっているのではないか、と思う。

### **3 . 結論 達成感を感じる条件と「自分で自分をほめること」**

山本さんとのディスカッションを通して、私が感じる達成感の条件がよりはっきりした。私は、「強制されたものではない」しかも「好きなもの」に対して、「自分」で目標を決めて取り組み、「一人で」努力を重ねることによって、「着実に」結果が出た時、達成感を感じる。もちろんこの場合のみではないが、この条件が揃った時、最も達成感を感じやすい

のである。そして、その条件を満たせるものが、私にとっては「楽器を演奏すること」だったと言える。

そして、ディスカッション 2-2 で出てきた「着実に」「一人で」ということが、「自分で自分をほめること」に結びついてくるのではないかと思う。達成感を着実に感じるには、人と関わることよりも一人で出来ることのほうが、私にとっては必要である。なぜなら、人と関わることは自分のペースで物事を進めることが出来ないからである。そして、一人で出来ることでも、評価の基準が自分ではなく他にある（学校のテストや他の人の評価など）場合、やはり着実に達成感を感じられない。努力してもその結果が間違っていたり他の人に認められないものだったら達成感を感じられないからである。更に、これも自分と違う何かとの関わり合いという点では一人で出来ないこと、一人で達成感を感じられないことと言えるだろう。だから、「自分で自分をほめる」ということは、私にとって、「一人で着実に達成感を感じる」ための方法なのである。

更に、私が感じるプラスの感情の根底には「着実性」というものが横たわっているということが、ディスカッションを通して明らかになった。私は「着実性」が好きだからこそ、「意外性」が常に存在すると言える人との関わりのなかで、なかなか満足できない。だから私の中の「着実性」という要素を満たしてくれる、「一人で取り組み、更に自分でほめることで感じられる達成感」が必要なのである。それが、私にとっては音楽という存在だったのである。

結局、私にとっての音楽で感じる達成感とは、自分で自分をほめることであるということに変わりはないが、それは、「着実性」が好きで「意外性」が苦手な私にとって、「着実性」という要素を満たすために必要なことなのである。

#### 4. 終わりに 総合の活動を終えて

この活動を通して、私は「自分の考えていることを、相手に分かるように伝える」ということの難しさを痛感した。まず、相手に伝える前に、自分が何を考えているのか、自分の頭の中でさえ上手く捉えることが出来ず、何度も「取り敢えず書いてみよう」と書き出し、それを読んで「意味不明」と思って書きなおすという作業を繰り返した。正直に言って、自分の母語である日本語で、こんなに自分の考えを表現するのが難しいとは思わなかった。今までの自分を振り返ってみると、終始情報伝達のような段階でコミュニケーションをし、自分の意見、考えを相手に分かるように伝えるというコミュニケーションは殆どしてこなかったのではないかと思う。

しかし、難しさだけを感じたのではない。「テーマ設定の理由」を固める時にクラスのみんなからコメントをもらったことや、ディスカッションで山本さんと話をしたことで、自分で考えていただけでは分からなかったことが「これだ」とはっきりしてくる感じは、とてもおもしろかった。まさしく他者の視点を知ること、自分の視点をはっきりしてくる

ということを体験でき、そしてコミュニケーションのおもしろさを感じることが出来た。とは言うものの、やはり大変だったという気持ちは大きい。学習者にとっては、もっと大変だろうと思うと、実践の総合クラスでの支援者（リーダー、サポーター、実習生）の役割というものを考えさせられる。その意味でも、この体験学習としてのレポート作成は、私にとってとても意味深いものであった。

最後に、いろいろなコメントをくださったみなさん、朝からディスカッションの相手をしてくださった山本さん、そして細川先生に、この場を借りてお礼を述べたいと思います。「本当にありがとうございました。」

# しあわせの四つ葉のクローバー

橋本弘美

<構成>

1. はじめに・テーマ設定理由
2. ディスカッション
3. 結論
4. おわりに・活動を振り返って

## はじめに・テーマ設定理由

「特技は何ですか?」と問われれば、私は「歩きながらでも四つ葉のクローバーを見つけること」と答えるだろう。そのくらい「四つ葉」は私の生活の中によく登場する。特に目を凝らして探さなくても、四つ葉ならすぐわかる、と自分でも信じているところがある。多分四つ葉に関してインスピレーションが働くのであろう。この夏も地元札幌の円山公園という場所を自転車で通ったとき、何かピピピッと感じるものがあった。自転車をおりて、来た道を少し戻ってみるとそこには「四つ葉」が咲いていた。見つけたときは、「やっぱり!」と納得できた。自転車に乗りながら見つけたのは初めてだったので、ますます自分と四つ葉の関係を特別に感じて嬉しくなった。そして、こうして見つけられることで「自分の今の状態はいいのだな」と思ったりした。

大学院に入るために上京した今年(2002)の9月、授業が始まるまでは院への期待と不安、また慣れない都会暮らしに、ひとりで何となく落ち着かない日々を過ごしていた。「どこかに気分転換しに行こう」と決め、上野方面に出かけてみた。上野の美術館に続く長い道を歩きながら、私は、何か感じるものがあり、立ち止まった。そしてそのとき、道の横に咲いていた「四つ葉」を見つけたのだ。その瞬間何か湧き上がる気持ちがあった。思わず「あ」と声が出そうになった。東京に来て初めて見つけた四つ葉である。ここでも咲いていることに親近感を覚え、東京が突然身近に感じられたように思えた。それだけではない。そのとき、これからはじまる新しい日々のことを、「うん、大丈夫だ!」と思えたのだ。東京でも四つ葉に応援されたような感じがして、私の心の中にあったモヤモヤとした不安はしだいに消えていくような気がした。

そんなことがあったからだろうか。最近は、本物の「四つ葉」だけでなく、野に咲かない「四つ葉」を見かけても「あ!」と反応してしまう。例えば誰かのTシャツのプリント、偶然めくった雑誌の中、お店のフロア・の模様、何かポスターの一部などの「絵としての四つ葉」を見つけても、私は何か「よし!」という気分になるのである。

「四つ葉」について考えていくうちに、私はそれを、単なるラッキーな迷信や一般的なジンクスの類としては捉えていないということに気がついた。私の中では、ある特別なも

のとなっているようである。

私は「四つ葉のクローバー」を見つけることで、そのときの自分の調子を前向きに捉えて、自らを「大丈夫だ」と言い聞かせているのである。そして同時に、先の見えないこれからのことに対しても、「がんばれ！」と自分自身に言い聞かせているのである。つまり、四つ葉を見つけることで、自分の今やこれからの自分を肯定したいのだろう。そうであるなら、「四つ葉のクローバー」は私にとって、自分が前向きにがんばれるようにと、自分で考え出した「しあわせ」の形といえるかもしれない。

## ディスカッション

ディスカッションの相手はMさんである。彼女はPNJのメーリングリストに流れた私のレポート「はじめに」を見て、『四つ葉本人(?)は、自分が四つ葉であることが橋本さんをしあわせにしているかどうかなんてことを知らないだろうし・・・』というコメントをメールで返してくれ、「認識の部分」にも話が及んだ。私はこのMさんの意見に大変興味を覚え、更にもっと詳しく話をしてみたいと、彼女にディスカッションをお願いした。

### 根拠はどこにあるのか

Mさん：「四つ葉をみて幸せだ」というのは誰がそんな風に教えただですかね？私たちに。みんな知っていますよね。

橋本：そうですね。何ででしょうね。例えば四つ葉を見つけると不幸になるというジンクスがもし広まったら、今そうになっていたかもしれないんですよね。

『四つ葉を見つけると幸せ』というジンクスがある。なぜそのように言われているのか、誰がそんなことを言ったのか、そして、どうしてそれを私たちは信じているのだろうか。そんな話題からディスカッションはスタートした。そして「実は根拠がないのに、普通に信じているものがある」と話は広がった。なぜそういう「根拠の無いもの」が世間では受け入れられ、それがあたかも常識のように扱われるのだろうか。しかし、その常識も「私」がどう認識するか、で変わってくるのかもしれない。そのように話は「認識」へと広がっていった。

### どの角度から認識するか

Mさん：例えば理科の先生が「クローバーはただの葉っぱだ」と認識したら、特にラッキーとは思わないわけですよね。

橋本：そうですね、そう認識すると四つ葉もどこにでもあるただのフツウのものになりますね。

Mさん：そういう人にとっては、レアものと言われている、なかなか無い希少価値の高い植物を見つけたほうが、よっぽどラッキーと思うかもしれないですよね。それは違うところですよね。

確かにそうである。捉え方というのは多面的であり、一つのものに対して様々な角度から認識することが可能である。そしてそれをどの角度から認識するかによって、そこに込める感情ももちろん変わるということになる。

Mさん：そのもの自体が大事と言うより、そこに何を感じるかということが重要。そのものが何かであるより、そこに何を感じるかで、「もの」というのは決定しているのかな、っていうのが「認識」の話。

このMさんのことばは、私にはっと気づかせるものがあった。私は四つ葉を見てそこに何を感じるのか。まさにそのことが私にとって、四つ葉を特別なものに行っているからである。

### 信念のスパイラル効果

「四つ葉のクローバー」というトピックから、話は「ついていない」「運がいい」ということにも広がっていった。Mさん自身も、自分の名前を出すと懸賞等によく当たるし、別に根拠は無いが自分のことを「ついていない人間」と思っている、と言っていた。そして自分は「晴れ女」だというエピソードも話してくれた。

Mさん：別に私が晴らしているのではないけれど、私から見ると晴れるんですよ。晴れている日に自分を結び付けるんでしょうね。雨降った日は自分じゃない人が降らせたと思うんでしょうね。  
(笑)

私はこの話がとても興味深かった。特にこの「私から見ると晴れるんですよ」という発言には大変共感できた。なぜなら、実は私自身もかなりの確率で抽選や懸賞等に当選し、そのため「自分は運がいい」と感じているところがあるからである。いや、実は私の場合は抽選や懸賞をする前から、勝手に「自分は運がいいのだ。だから当たるのだ！」と、何とも都合のいい、無茶苦茶なことを思っていた。そしてそのように思い始めてから、実際に当たる確率が高くなったような気がするのである。ここでポイントになることは、Mさんも私も「自分で」(勝手に)自らの運を信じており、その信念と現実とを結び付けているところであろう。

Mさん：だから逆に(別に懸賞に限らず)「自分がついてない」って思う人はどこまでもついてないって言いますよね。自分がそういうふうになっていくんでしょうね。

例えばこうですよ。

『ついてないからどうせダメなんだ 努力しなくなる エネルギー落ちる 結果悪い やっぱりついてないんだ 努力しなくなる …』**悪のスパイラル効果**ですね。(笑)

それに対抗するのは前向きなエネルギーがあるかどうかですよ。そしてそれを創り出せるかどうかかな？

このように考えると自分の強い信念や想いなどが未来を創る部分がある、という部分は否定できないし、実際そのような部分が多いのだろうと思う。自らがそのような前向きな姿勢を創り出せるかどうかでその後の状況は変わるだろうし、それもまたスパイラル的に続いていくのではないだろうか。つまり、ものを見るとき、自分の姿勢や態度にあわせて、そのものに対する認識を選んでいえることができるのではないだろうか。それゆえ M さんの言う、

M さん：(略)自分が選んだものが全部大事と思っている。「自分がついている」という変な自信があるわけですから、全部正しい、と。「ここが一番ベスト」と思う。

ということばには、私も同意見である。自分で選んだものを「ベスト」と思えることは素晴らしい。たとえそれがその本人の「勝手な解釈」であるにしても何にしても、自分で選んだのだから、そのときの本人の「正解」だと言えるであろう。そして、そのように思うことは、M さんの言及した悪のそれとは逆に、プラスのスパイラルにつながっていくと考える。つまり、客観的な認識による正解ではなく、「これが正解である」という本人の主観的な認識がその人の行動を決めていく、と言えるのではないかということである。

### コップの水の議論「これしかない」「こんなにある」

このようなことから、「ものへの見方」という方へ話は進んでいった。コップの中に水が入っている状態をみて、それをどう捉えるのかという有名な話と似ている、ということになった。

M さん：(コップに入った水を見て)「これしか無いじゃないか」「いや、私はこんなにあると思っています」ということですね。結局、全てのものをどっちで見ているかって言うのは大きいですね。四つ葉もここ(水の方)に入っているし、四つ葉に会ったからこういういいことがあった、という循環が全部つながっているのかもしれないね。

橋本：本当だ！こっちの(水ある)方で見ているとそうですね。「いいこと いいこと」ですね。面白いですね。満たされているときの循環。

M さんはこのコップ自体を「人生の総体」と考えるとすれば、いいこと(水のある側)も悪いこと(水の無い側)もちょうど半々くらいなのではないか、と話していた。

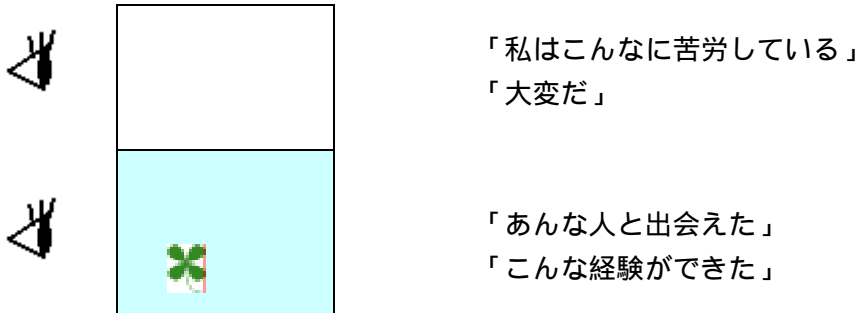
M さん：私たちが、おそらくこれを人生の「総体」と考えれば、半々くらいだと思うんですね。いいことも悪いこともあるしね、いいものも悪いものもあるし。「こんなにある」「こんなにない」というときに、こっち(水ある)側で見れるかどうかですね。

橋本：ああ！本当だ！「私はこんなに苦労している」と考えるとこっち(水ない)側で見ているというわけですね。



この話はとても刺激的だった。このコップを「人生の総体」と捉えたときに、「自分はどちらの立場でものを見るか」によって、変わってくるということだ。

### <人生の総体としてのコップ>



この話を M さんとしながら、私は出来ることなら、「水の入っている側」を見る目を常に持っていたいと思った。自分に起こる様々なことは、他ならぬ自分が引き寄せ、また選んだものである、と考え、そういった出来事や物事を「プラスの方面」で受けとめ、大切に見ていきたいと感じたのである。そしてそのような姿勢が、プラスのスパイラルを創り出して行くものと今は信じている。

### 結論

私にとっての「四つ葉のクローバー」は、コップの水の議論でいう「水の部分で見ることが出来る象徴の一つ」になっているのだろう。「四つ葉」を見つけることで、私は、自らプラスのスパイラルを創っていると言えるからだ。それは私が勝手に考え出した一種のきっかけであり、いわばおまじないのようなもの、とすることができるかもしれない。M さんのメールにあったように、「四つ葉」そのものが、私にしあわせをもたらしているのは無く、私が勝手にそれをしあわせに結び付けているのである。

これまでの話の中で、私は「四つ葉」を見つけることで、自分で「プラスの見方」を創り出しているのだ、ということが確認できた。

そして、もう一步突っ込んだことを自らに問えば、私はそんな自分の感じ方が好きなのではないか、と思えた。つまり、『(対象としての)四つ葉を見つけて嬉しく感じる』だけではなく、『そんな自分自身をも私は嬉しく感じている』ということを発見したのである。簡単に述べれば、「四つ葉」という取るに足らないものにも見つけると喜びを感じ、プラスのスパイラルを巻き起こすことのできる自分に対しても、嬉しく感じているのである。

最初のテーマ設定理由で、私にとっての「四つ葉のクローバー」は、『自分が前向きにが

んばれるようにと、自分で考え出した「しあわせ」の形』である、と述べた。しかし、ディスカッションを終えて今感じていることは、四つ葉の意味付けはそれだけではなかったということである。ディスカッションをする前は、「四つ葉」を見つけられるのは自分の状態が良いからであり、そんな自分の状態を確認することでますます力を得ていた。だから「しあわせの形」であると述べた。しかし、今はそれに加え、そのように思えること自体が、自分にとって嬉しいことである、ということを見出したのである。言い換えれば、私は「四つ葉」を見つけると同時に、自分のものに対する姿勢もそこに見ており、勝手にスパイラルを創り出してしまおうような、楽観的な自分を肯定しているのである。そして私にとって「四つ葉のクローバー」はそんな自分の姿をも教えてくれるものなのである。

### おわりに・この活動を振り返って

この活動を通して私は、「自らの頭の中(思考)に“手”を入れて、言いたいことを探り出していく」という経験をした。そして「これだ!」と思い、ギュッと掴んだものをすぐさま書き出す。しかし、時間がたって読み返すと、そのとき「掴んだ」と思ったものは、幻であったかのように「あれ?何か違う」、「本当に言いたいことはこれではない」という肩透かしも食らった。悔しくてまた掴みに入る。書き出す。…授業では、メンバーからフィードバックをもらって考え、再び頭の中に手を入れていく。また「これだ!」と掴む、書き出す、肩透かし…。

この一連の作業を繰り返しているうちに、この行為に夢中になっている自分に気がついた。「つらい」…でも「面白い!」。なぜなら、この活動を繰り返すうちに、いつしか、頭の中に入っていく私の“手”に「目」がついてきたのではないかと、思える瞬間があったからである。つまり、はじめはやみくもに頭の中を探していた“手”が、だんだん「目」を持って、狙いを定めて自分の中に掴みに入っていきような感覚を得られたのである。そして、「目」をもった“手”が、「これだ!」と掴んだものは、はじめに書いたものとは比べるとだんだん変わっているのを、私は自分でも感じ取ることができた。そんな自分自身の変化を見ることがとても楽しかったのである。「ああ、前と変わった!」と自らも確認でき、それを納得できれば、もう以前の頭の状態には戻れない。いや、戻りたくないのである。

私にとってこの日本事情実践教育研究(以下PNJ)の活動は、「考えて」「書き出し」(自分の成長を)「確認できる」ことで私を夢中にさせる、とても奥深いものであった。そして同時に「元の世界に戻ることを拒ませるもの」であった。この場合「元の世界」とはすなわち「考えず」「書き出さず」「確認できない」世界である。そのようなことをこの活動は私に教えてくれた。

私の「四つ葉クローバ」についてディスカッションして下さったMさん、たくさんフィードバックして下さったPNJのメンバーのみなさん、そしてこの授業の設計をして下さった細川先生、どうもありがとうございました。



# 酒を飲むことについて

牛窪 隆太

・目次

- 1 . はじめに テーマ設定の理由
- 2 . ディスカッション
  - 2-1 . ディスカッション一回目
    - 2-1-1 . ディスカッションの相手と理由
    - 2-1-2 . ディスカッション内容
  - 2-2 . ディスカッション二回目
- 3 . 結論
- 4 . おわりに

## 1 . テーマ設定の理由

私は酒が好きである。

酒豪かと聞かれればそうではないが、かなりよく飲む。私は昔からの友達や、これから親しくなりたい人とは必ず一緒に酒を飲みに行く。

酒を飲み、同じ時間を共有することで連帯感を得るといふことが言われると、そうではなく、私にとっては「人を見る」という意味のほうが大きい。昔からの友達とはその人をより深く知るために飲みに行くし、これから親しくなりたい人とはその人を知るために飲みに行く。私は一緒に酒を飲みその人がどういう人かを知ること、その人との接し方を決めている。

人と酒を飲みに行くようになったのは大学のときである。

大学に入って酒を飲む機会が増え、毎日のように飲みにいった。そこでは、仲間と時間を共有しているという充実感を得られた。終電間際まで居酒屋にいたり、記憶がなくなるまで飲むことも多かった。酒の場でどれだけ騒いで、人より自分がどれだけ量を多く飲むかということが大事であり、それによって優越感を感じたりもしていた。しかし、終電で家に帰り、隣の人とその日何を話していたのかを考えると、思い出せないことも多くてむなしい気分になったりもした。

大学 3 年のときに一人でも飲むようになって、酒を飲むためだけにわざわざ人と出かける必要がなくなり、改めて人と酒を飲むことの意味を考えはじめた。それまで、人と酒を飲むことは自分にとってただの表面的な楽しみであり、その後でなにか残るものではなかった。人と飲むときに自分がもどめる楽しみが、酒を飲んで騒ぐという表面的なことから、

その人がどういう人なのかに検討をつけ、その人を知るといって自分にとってより深いものに変わっていったのである。

酒を飲みに行くことで、私は無条件にその人の深い部分を知ることができると考えている。酒を飲むとその人の隠れた本音が出てくるし、また、酒を飲んで酔っているときに自己をつくらうことは難しいからである。

私は親しくなりたい人と酒を飲みに行くことでその人の深い部分を知り、その上で自分の接し方を考えているのである。そして自分がその人と親しくなれそうかを判断し、その後その人と親しくするかどうかを決めているのである。

私にとって酒を飲むことは人を知るための方策である。

## 2. ディスカッション

### 2-1. ディスカッション一回目

#### 2-1-1. ディスカッションの相手と理由

ディスカッションは星野さんをお願いした。以前私のレポートに対し、彼女から「自分はそういう意味づけは持っていない」という趣旨のコメントをもらった。そのことから、違った立場を持つ彼女とディスカッションすれば有意義なものになるのではないかと考えたためである。ディスカッションの席には橋本さんにも同席してもらった。

#### 2-1-2. ディスカッション内容

「人をみるのに酒がいる」

はじめに、私が動機部分に書いた「人をみるのに酒がいる」とはということかについて星野さんから疑問が出された。

星野：なんかあれを読んで、なんで人を見るのに酒がいるの？友達っていうとき、酒を飲んだ人しか友達いないとか言ってたじゃん？なんで？

酒を飲むと人は本音で語るっていう仮説っていうか前提みたいなものがあるの？

牛窪：・・・なんか、パターンみたいなものかもしれないけど。どっちが先なのかって自分の中ではわからなくて…。でも一番最初に友達になるために酒を飲みに行ったときから、友達になろう、酒を飲みに行こうってなったのか、それとも、そういうサイクルで何回も新しい人と知り合っ、知り合いになって、友達になってっていう段階で、それを何回もやってるわけじゃん？いろんな人と。それを繰り返しているうちに、なんだ、共通項、酒、みたいな。なんかどっちかわかんないけど…。一番手っ取り早いっていうか簡単・・・？当たり前だからか…。

橋本：酒じゃなきゃやっぱりだめなの？テニスとかさ？(笑)

牛窪：無理。

「酒を飲まないと親しくなれない」といった本文の前提を聞かれているにも関わらず、答えになっていない答えを述べている。それは「手っ取り早い」「簡単」「当たり前」という言葉に表れている通り、まだ頭の中でははっきりとした形のものではなく、当然のこととしてとらえられているためである。この後、その前提をめぐるやり取りの中で少しずつではあるが自分の考えが見えてきているのが観察される。

星野：あそこに書いてあった「人を見る」というのは…？

牛窪：あー、人を見るっていうのは、たとえば授業であらうようなぐらいの知り合いレベルの人と…結局、そこでの場っていうのがあって、同じ授業取ってる人同士って役割で、普段は接しているでしょ？そこで見えているものっていうのは当たり障りのないもの…別に自分が見なくてもいいもの…。

星野：でもね、私この間言ったけど、私は酒を飲んでいても自分を出さないときは出さないの。だから教室場面でも、酒の場面でも多分相手にとってまったく同じ私だったりするの。(中略)飲んでも飲んでなくても同じだと思う。だからなんで酒が必要かなと思って。

私が酒の場面での前提を述べるのに「たとえば授業では当たり障りのないもの、別に自分が見なくてもいいものしか見えない」という例を引いていることから、私は酒の場面では、「当たり障りのないものではなく、自分がみたいもの」が見えるという考え方をしていることがわかる。つまり、私にとって「人を見る」ということは、授業場面でのその人や自分が見なくてもいいその人の部分を「みる」ことではなく、それ以外の自分が見たいと思う部分を「みる」ということなのである。そして、私はそれを酒の場面で達成することができると考えているのである。

このような私の前提に対して、星野さんは「教室の場でも酒の場と同じように自分にとって必要であれば自分を出せるし、必要がなければ出さない」という。

#### 場面認識として酒の場

前の項で「酒の場面は(たとえば)教室場面とは異なる」と発言したことから、話は両者の場面の違いへと話が進み、私と星野さんとの考えの違いがはっきりとしてくる。

橋本：酒を飲むところっていうのが人を知るのに教室場面とかよりも広くとらえてるってこと？

牛窪：教室場面でそういうのができないっていうのは、(牛窪が)教室をそういう場じゃない(そういう場ではないの意)ってとらえているのがあるのかもしれない。

星野：場面認識として「酒を飲む場っていうのは自分を出す場だ」みたいな。そういう風に認識してるのね？

牛窪・橋本：ふーん。

星野：だって私、同じだもん。ハーチャン(橋本さん)とここで話してようが、コーヒー飲みながら

話してようが、酒飲みながら話してようが、ハーチャンと私っていうこの、何？相手がハーチャンだったら同じだもん、私ずっと。

ここで星野さんから「場面認識」という言葉が出された。この言葉は私の人付き合いでの「酒を飲む場以外での場面」と「酒を飲む場面」という二項対立的な場面認識についている。星野さんに指摘されたことで自分の中でもややもやしていた部分が解消されたと感じた。私が「そういう場だ」「そういう場じゃない」と場面を分けて語っていることからこの指摘は理にかなっているといえる。そして、私が他者の認識するときに、その出会いの場面を「酒の場面」と「その他の場面」と分け、その場面の中で他者を認識しているのに対し、星野さんは場面によらず他者そのものを認識している。ここに「酒がなぜ必要か」という問いの起点があるように思われる。

## 2-2 . ディスカッション二回目

一回目のディスカッションでは、星野さんからの問いを通して、自分の思考を深めることができ、結果としてテーマを設定した当初には思いもよらなかった自分の酒に対する意味づけに気がつくことができた。しかしながら、ディスカッションをまとめた段階で、ディスカッションのもうひとつの目的である相手の立場の理解にいまひとつ踏み込むことができなかった。そこでもう一回ディスカッションをお願いすることにした。

二回目のディスカッションは「そもそも人を知るとはなにか」というところから始まった。

### 人を知るとはなにか

星野：じゃあ、そこで相手は重要じゃないんだ？相手が自分を出しているかは重要じゃないの？

牛窪：うん…相手が自分を出していると自分が考えていることが大事。

星野：うん、そしたら、酒の場があったらすぐその人を知ったっていうことになる？

酒の場のその人を見たらその人を知ったっていうことになる、で…

牛窪：知ったっていうのは、友達のきっかけとして。親しくなる前提としての話だから、飲まなかった人は全然知りませんってことじゃなくて。

(中略)

星野：知るっていうのは友達としての第一歩を踏み出すかっていうことでしょ？

牛窪：うん。

ここで再び「酒の場で自分を出していない人もいる」という話になった。星野さんのように場面で区切らずに他者そのものを認識している人がいることを考えると、必ずしも「酒の場では自分を出している」と言い切れないのではないかという反論が出された。それに

対して私は「自分が出していると考えていることが大事」と述べている。つまり、現実的には相手が自分を出しているかいないかということは分かるものではない。そこで私は、相手は自分を出していると私が考える場面を設定し、その場面で親しくなる第一歩を認識している。そして最後の星野さんの発言の通り、私にとって新しい人を「知る」ということは「親しくなる第一歩を踏み出す」ということなのである。これは前にも述べた通り、その人を知っていると考えるための場面を共有するということであり、ある人についての私の知っていることがその人自身であるということではない。

#### 親しくなる人としてのベクトル

星野：境界線がひかれてるじゃん？私はそんないつから親しくなったとか覚えていないから。顔と名前を知ったところから友達の第一歩とか区切りがないから、だからいつからっていうのわかんない。

牛窪：でも、たとえば、他の人と授業終わったあと飲みに行ったりすると、少し変わるでしょ？次の日に。飲みに行かなくてもいいんだけど、喫茶店でもなんでも行ったら。そうすると行く前とは変わるわけでしょ？

星野：うん。でもそれって毎回違うことじゃん？たとえば、廊下で話してもここでちょっと長く話したのでも、次の日は長く話したのと話してないのだから、違うじゃない？やっぱり。でも、それが酒の場ってきっかり切られてるわけで、たとえば、授業の後に課題とか一緒にやったとしてもそれが第一歩とは考えてないんでしょう？

牛窪：それは考えてない。きっと。廊下で話したとか、一緒に帰ったとかでも一歩ずつといえれば一歩ずつなんだろうけど、でも、そのときはベクトルが親しくなる人っていう方向には向いていないときもあるし、向いていたとしても、多分、飲みに行ったらにそのメモリをおいているんだと思う。

星野：じゃあ、その下のことは切り捨ててるんだ。

私が「酒を飲みに行くことで親しくなるための第一歩を認識している」のに対して星野さんは「そんなに境界線がはっきりと引けるものなのか」という疑問を呈する。星野さんは人と親しくなることを「酒の場」というような場面で認識することがないために、「いつから」ということを意識していない。そしてその理由を、廊下で話すことであったり、授業後に課題を共にやることだったりとその時々でちがうためであると説明した。確かに私も「廊下で話した」「課題を一緒にやった」などを親しくなる一歩として認識していないわけではない。しかし、話にも出たとおり、酒を飲む場面に親しくなる人としてのベクトルという意味づけをし、メモリをその場面を共有する回数に置くことで、結果的に、酒を飲みに行く前というそのメモリの下の段階は、星野さんが指摘する通り切り捨てていることになる。それは、定規にあるメモリをつけた段階でそのメモリを使って物事を測るようになるのに似ていると思う。

場面でないとならばなにか？

星野さんは「場面で認識することはない」という。しかし、私は誰にでも上記の「定規のメモリ」に当たる部分はあるのではないかと考えた。

牛窪：じゃ、どこで認識してる？理解できない。

星野：場所じゃなくて人（だ）

牛窪：それがわかんない。

星野：個人的に約束して、遊びにいったりすればそれだけその人の情報も増えるじゃん。

その人と接してる時間も長いわけじゃん？その時間が多くなったら親しみが感じられてくると思うの。

牛窪：じゃ、どこで判断する？

星野：やっぱりベクトルが向かなかつたらかな。長くいてもベクトルが向かない人っているじゃん？

別に知らなくてもいいみたいな。それで、あ、この人って思ったら酒じゃないけどもっと話す機会多くなったりとか。話したいから話に行く。

ここで再び「ベクトル」という言葉が出てくる。これは先程とは違い、相手に向かう「気持ちのベクトル」である。星野さんは「自分のベクトルと相手のベクトルが向き合ったときに第一歩と考えているのかもしれない」という話をしてくれた。そしてその後、そのベクトルが成立していることを確かめるための「メモリ」としてはなにも持っていないという話になった。前述したとおり、私はそのメモリとして酒を飲むことを位置づけている。

### 3 . 結論

私は自分が好きな酒を相手と飲みに行くことで、お互いの方向にベクトルが向いていると解釈し、親しくなる第一歩としている。そしてその後もそのベクトルが成立していることを確認するために飲みに行き続けると考えることができる。

当初のテーマ設定で、私は「酒を飲みに行くことでその人の深い部分を知り、その上で自分の接し方を考えているのである」と考え「酒を飲むことは人を知るための方策である」と書いた。しかしながら、ディスカッションの内容からも分かるとおり、これは正確に私の意味づけを表していない。なぜならば、星野さんの指摘にもあったとおり、酒を飲みに行くという段階ですでに「気持ちのベクトル」が向いているからである。星野さんの言葉を借りるならば「お互いの方向に気持ちのベクトルが向いていることの確認作業をする唯一の場」といえるかもしれない。

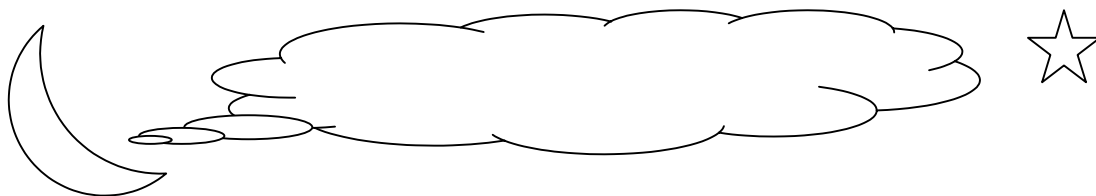
また、星野さんとの相違点はその「ベクトルの確認」を固定された酒の場で行うか行わないかということにあるが、これは「ベクトルが双方向であることを認識・確認し続ける」



という、私と星野さんの共通項からすると大した差ではないようにも思える。私はその作業を「一緒に酒を飲むこと」で行い、星野さんは時々によって異なる場面で行う。

#### **4 . おわりに**

「興味のあるものに対して自分の立場を立てて人にぶつける」という作業がこんなにも骨の折れるものだとは思わなかった。自分が出した自分についてのテーマに自分で取りかかり、時には自分で手を抜き、自分で自分の首を絞めることになり、結局はまた再び自分で取りかかるという、いわば自分だけの活動だったように思えるが、ひとつだけ、授業での他の受講生の皆さんの存在は大きかったように思う。共に悩み、不満をぶちまけさせてくれ、時には酒を飲みながらも酒についてのレポートにコメントをくれた方々、ディスカッション相手になってくれた橋本さん、星野さんに感謝します。



星野 百合子

1. はじめに
2. ディスカッション
3. 結論
4. 終わりに

## 1. はじめに 「大気のおいをかぐこと」は私にとってなに？

私は大気のおいをかぐことが好きだ。

好きな大気のおいを吸い込んで、そのにおいを感じていると、とてもあわせなかんじがして気分が明るくなる。特に、落ち込んで否定的な考え方が頭から離れなくて気分が暗いとき、好きな大気のおいをかぐことによって明るい気分になってポジティブになれる自分がある。

例えばある日友人の家で食事をし、後片付けをしているときマグカップを2つ続けて割ってしまった。頭の中でその友人が以前言っていたことを思い出す。「私はどんな“もの”も大切に思っている。一本のなんでもないペンでも出会ったものはないがしるにしない」といったようなことだった。

申し訳なくて何回もあやまった。「この人にとってこのカップは唯一のものかも、自分が買って返してもだめかも。」という考えが頭の中で回っていて、どこで手に入れたカップかとか買ったのかもらったのかを聞きながら何度も無駄にあやまった。その友人は10回くらい大丈夫を繰り返し、ついに「もうわかったからいいかげんにしろ、忘れる」というようなことを立腹ぎみに言った。

落ち込んだ。「なんておっちょこちよいなんだ、でもそれよりやっちゃたことに対して何回もあやまったって無駄なのに、なんてあほなんだ…」などとぐるぐる考えていた。そんな時一方で「過ぎたことを考えていても無駄！すてきなマグカップを見つけよう、気に入ってくれるかも…」という考えも頭に浮かぶが、やはり否定的なほうは頭から離れなくて気分はどんより暗い。

帰り道、外を歩いていて私の好きな大気のおいに出会った。夜の少し冷たくて湿っぽい、雨のおいがした。力いっぱいその大気を吸い込むと頭の中が真っ白になった。あとはもうかぎ続けることしかない。そしてその行為に没頭している間はまさに無我夢中であり、思考が止まっている。からだいっぱいにしあわせなかんじが充満して気分が明るくなった。

そうすると、「あ、そうだ。生きているだけでしあわせだった。愛してくれる家族もいるし、毎日ごはんも食べられるしすごくしあわせだ。こんなことで落ち込むなんてばかばかしい。カップを割ったからって死ぬわけじゃない。友だちも新しいカップを気に入らないかもしれないけど気に入るかもしれないし。」とポジティブになれる。いいにおいが頭の中のごちゃごちゃとした考えとどんよりとした気持ちを一扫してくれるのかもしれない。

私にとって「大気のおいをかぐこと」は、ポジティブでいるために必要な行為である。

## 2. ディスカッション

### 2 - 1. 私とディスカッションをしてくれた人

ディスカッションは前回この授業をとっていた大学院3期生のSさんと、同じく3期生のWさん、今回NSP(総合活動型日本語教育)の実践に参加している、別科生のUさんをお願いした。Sさんはなんとなく私の感覚的なことを理解しつつも違った意見をもっていそうな人だと思ってお願いした。Uさんは運命についてのレポートを書いていて、私の「ポジティブでいたい」という部分に何か関係することを考えている人も...と思ってお願いした。Wさんは、私とSさんがディスカッションに行く際道でばったりあって、これに参加してくれたすばらしい人である。

## 2-2. ディスカッション内容

### SさんとWさんのディスカッション

まず私の「はじめに」を読んでふたりが言ったことは、「落ち込んだときに大気のおいをかいていて大丈夫か、ほしの、だった。ふたりとも私のことを心配？してくれたらしい。そこから話は私が好きな大気のおいをかいて感じる「しあわせ感」についてになった。

#### 私の「しあわせ感」って何？

W: これを読んで思ったんだけど、落ち込んだときに大気のおいをかいてほしの大丈夫かってちょっと心配になったよね。おい他に手段ないのってどうかさ。(S: そうそうそう)(笑)

星野: あー、これは実はこれが全てではなくって、他にも似たような感じが得られてポジティブになれるようなものがあるんですよ。例えば、空をみるとか、花をみるとか、きれいな女の人をみるとか...全部頭で考えてなくて、感覚的になんかしあわせ感みたいな感じを得られるってどうか。例えば、お風呂に入って「きもちいい」って感じる時、頭で「この温度は適温で..」とかって考えないでただ気持ちいいって感じるじゃないですか。

W: あ、じゃあ、お風呂はさ、温度がよければ気持ちいいじゃん、でも熱かったりぬるかったりしたらいやじゃん、そういうのでたとえば空気のおいで馬場(高田馬場)の地下鉄のところのおいでもいいの？

星野: あ、だめだめ。好きなおいじゃないとだめなんですよ。

・ Wさんに聞かれて再認識したことは、私にしあわせ感を与えるものは、私にとって快いものでなければならぬということである。感じるということをも2種類に分けるとしたら快・不快に分けられて、いろんな快があって、気持ちいいとかおいしいとか心地よいとか、それぞれいろいろな言葉で表現できるが、おいをかいたときに私が感じる快さを表す適当な言葉が思い浮かばなかったののでしあわせ感とした。

そして私が快いと感じることは実はたくさんあって、ではなぜその中の「大気のおいをかぐこと」なのかを渡辺さんのしあわせ感と比較して考えた。渡辺さんにとってのしあわせ感は、例えば近所の公園で金木犀のおいのする頃のことや、カレーのおいがして、どこからか子どもの声が聞こえるほんわかした状況で感じる空気感だということだった。それらはコントロールできなくて、勝手に押し寄せてきてしまうものだそう。

それと比べて気づいたことは、私のこのしあわせ感は求めなくても外の空気を吸っている限り押し寄せてくるものではあるが、それだけではなくて求めている時に得られることも多いということだ。

また、自分がおいしいと感じるものを食べているときや大好きな音楽を聴いている時も快く、しあわせ感を感じられるが、それらは日々忙しかったり、何か考えなくてはいけないことがたくさんあると思考が止まらなくて没頭できずに感覚に注意が払われない状態になって、おいしさを感じず味わわず終わってしまったり、大好きな音楽も没頭できずに(もしくは音楽に長々と没頭してしまってやる事が終わらなくなって後悔する羽目になったりして)結局しあわせ感をかみしめずに終わってしまったりすることから大気のおいをかぐことほどしあわせ感に直結しないんだと思った。大気のおいをかぐことでは、毎日外の空気を吸っている限りかなりの確率で好きなおいに出会って、そうすると確実に没頭できて体中にいいおいが充満するようで快い、しあわせ感が押し寄せる。しかも家の中に入ってしまうと自動的に終わってしまうので後から時間を無駄にってしまった、やらなければならないことが山盛りなのになど

と後悔することもない。だからいつも家の中に入るとき後ろ髪惹かれるような、もっと吸っていたい気になるが私は家の前にきたら家に入るように体が動いてしまうので問題ない。様々な要素が絡み合って大気のおいをかぐことは、私に知らぬ間に、そして欲しているときにもほぼ確実に、しあわせ感を与えてくれるものなんだという気がしてきた。

しかし二人ともその私の感じるしあわせ感はわかったし、自分たちにも何らかのそういった感じを得る手段はあるが、そこからポジティブにはならないという意見だった。そこでSさんから質問される。

S: そういうの(しあわせ感)はあるけど、そこから私はそれでポジティブにはならない。星野さんにとって幸せってこういう風に感じられることなんですか。

### 私にとって幸せって何? - PART 1

ここで「しあわせ感」= 幸せ なのかという質問がSさんからなされる。そこで幸せは考え方によるということについて話が及んだ。

星野: 私は「これこれこうだったらしあわせなはず」みたいのがあるんですね。頭で考えてるんですけど。それって考え方とか、捉え方、認識論じゃないですか。例えば今だったら、愛してくれる両親がいて、姉がいて姉の家族がいて、友達がいて、好きなことやれて、毎日ご飯が食べられて、いろんな要素があって、だからしあわせみたい。でもたぶんそれが全部なくなっても、いつかまたしあわせて私は思えるだろうなっていうか... 究極的には生きてるだけでしあわせて言えるんじゃないかなって。

S: それがポジティブってことだよな。

・ ここで、ポジティブでいること = 幸せだって認識すること = 肯定的に今を捉えること、そしてやっぱり私はポジティブでいたいんだということが明らかになった。そこでポジティブでいたいということについて聞いてみた。

### ポジティブでいたいということについて

W: なんか一所懸命にポジティブであろうとすることのある種のネガティブさとかさ、健康であることの不健康さっていうか、自然であろうとすることの不自然さとか。なんか私はしあわせていわれるといいんだけど、ポジティブでいたいっていわれるとなんか胡散臭いって思っちゃうんだよね。本当に幸せな人は幸せについて考えない。

・ 確かに私は性格的にもともとネガティブ思考が優勢だ。だからこそポジティブでいたいと思うのだろう。「はじめに」でも書いたように、ポジティブな考え方も頭にありつつ、ネガティブな考え方を切り捨てられない。そうすると気分が暗くなってしまう。人生短いのもったいないと思っている自分がいる。そういうとき、好きなにおいをかぐと気分が明るくなるんだよなと考えていた。ここでSさんにどうして大気のおいをかぎたいのか質問された。私は「生理的欲求? 無性にかぎたくなるときがある。」とはじめは答えながらも、再びなぜ求めるのかと問われると「動物的に感覚で自分は幸せだって確認したいのかなって...」と意味付けをしている。しかしそれは考えすぎて無理やり見出した意味付けであって、本当はそうではないと後に気づく。

### 幸せって何? PART - 2

私の「幸せだって確認したいからにおいをかぐのかな」という意味付けから、幸せとは何かが問題だということになる。

星野: そう、でもそうするとさっきいったみたいに、認識論になっちゃうんですね。

W:違うよな、でも、幸せってそもそも感覚じゃん！

星野:そうですか？

W:じゃあ例えば家族もいなくてみんなから見捨てられて、食うのもままならない人は幸せっていいっちゃいけないのか。

星野:でもだからそれって捉え方じゃないですか。そこで生きてるだけで幸せって思えばそれでその人は幸せじゃないですか。私だったらいろんな幸せって思える要素があって、でもそれだけだと捉え方によっては、幸せじゃないってのもありえるからにおいで確認してるっていうか。

W:そうじゃなくってにおいをかぐこと自体がしあわせなんじゃないの？しあわせってそもそも感覚じゃん。理屈かぁ？

星野:だから渡辺さんの意見としてはそれだけでいいんじゃないんってことですよね？

W:食うや食わずで、みんなから捨てられ、家族も失い、でも夜の公園で金木犀のにおいをかげたらそれだけでしあわせて...

星野:においをかいで得られる感覚それこそがしあわせなんじゃんってことですよね。

S:そうするとことここは別に結びつかなくてもいいってことね。(しあわせ感とポジティブでいること)

W:だって生きてるだけでっていうけど、もっといえば死ぬ瞬間だってそのにおいがかげたら幸せかもしれない。例えば、おれがもう爺になって管とかいっばいつこまれてても、じゃあちょっと窓開けてくれていってそのときに秋だね、おれは季節でいえば秋が一番好きなんだけど、すごい天気とかよくてさ、それこそ天国まで見えそうなくらい晴れてて、そこから風によって金木犀の香りが流れてきたらそれはそれで幸せかもしれない。

S:しあわせだと思う。

ここで W さんにとって幸せは感覚であり、私のいう「しあわせ感」そのものが幸せの正体なのではないかという意見が出される。私もそうかもしれない...と思いつつ、やはりなにかひっかかるものがあった。もししあわせ感が幸せの正体だとすると、私は好きな大気のおいをかげればそれだけで幸せだということになる。それは違うと思いつつこの段階ではなぜどう違うのかがよくわからなかった。

### 本当に幸せってしあわせ感をえるってことだけ？ 幸せって何 - PART3

やはり、W さんのいうように、幸せは感覚だとすると、常にある状態が幸せでもそれを感覚として常に感じるわけではないから、感情が沸き起こるわけではないから、それを感じたくて、感じて確認するために私は大気においをかいでるのだろうか...と思った。それを言ってみると W さんは違うんじゃないかという意見をくれた。

W:ポジティブでいなければならぬからポジティブでいようと思ってにおいをかいでるわけじゃなくって、においをかいだらポジティブになるんじゃないの？でもそれって順番が逆なんじゃないの？

確かにそうだ。好きな大気のおいをかぐと、しあわせ感が押し寄せてきて、気分が明るくなる。でもこのディスカッションのときは気づかなかったが、それだと自分から好きなにおいをかぎにしていることはどう説明できるのだろうか。経験的に無意識的に、好きな大気のおいをかぐと明るい気分になってそこからポジティブにもなれるということを私は知っているから大気のおいをかぐことが好きなんだろうか。そんな気がしてきた。でも全く落ち込んでいなくて今日は人生最良の日だなどと思っていても好きな大気のおいはかぎたいし、かげたらうれしい。やっぱりただ快いからかぎたいだけなんだと思った。でもそこから快い感じを得て気分が明るくなるからそしてそれによってポジティブになれるからこの行為が私にとって大きな意味を持つんだと思った。

### やっぱりしあわせ感だけで幸せ？ 幸せって何？ PART4

ここで「しあわせ感=幸せ」つまり、しあわせ感をえられればそれだけで幸せなのかという疑問がまた湧きあがる。やっぱり「だけ」が引っかかる。そこで W さんの意見を仮説として本当に「しあわせ感=私の幸せ」なのか考えながら話した。

星野:でもそれだとただの何にもしない好きな大気のおいさをかいで空を見ているだけの少女になっちゃうから。そして学校やめてご飯さえ食べられたら空見てればいい、幸せなんだろうってことになりますよね。

W:それはちがうだろ。なんで違うかっていうと、えーと、そしたら幸せがすべてなのかっていうことだろ。

S・星野:ああああああ！すごい、すごい。びっくりした。

・この W さんの言葉で、幸せなら人はいいのかという問題に話題が移っていく。私も S さんもかなりここで衝撃を受けた。今まで幸せってなに？ということに捕われていて、それが私の欲していることかどうかは考えてなかった。当然幸せであるほうがいいと思っていたからだ。

### 私は幸せならいいの？

W:おれの認識論だけど、幸せだとか楽しいからとかが自分の生きる道を決める決定打にはならない。幸せじゃないと思いがらもそっちにいくっていうのは、それはありうと思う。自分の選択として。例えば、このまま仕事続けてればまあ一応楽だよなと思ってもやめるとかさ。

S:でもやめたほうが幸せだとおもったんでしょ。(星野:うんうん。)

W:そっかあ、でも俺は別にそうは思わなかったんだけど。

星野:ほんとうに？でもこれで仕事をやめて不幸になるとは思わなかったんでしょ。

W:なるうとは思わないけど、なるかもしれない。

S:でもぜったいなるまいと思ってるから、うん。

星野:なるかもしれない、だめだ～っておもったら行かない気がする。

S:絶対不幸だって思わないようにする。

星野:そう、どんな状態でも思わないようにするんですね。(私も S さんも)

・楽しいからというのは確かに私にとっても自分の道を決める決定打にはならない。でも私も S さんも絶対にダメだと思ったら新しいことに向かわないという意見だった。大変でもつらくても、それは何らかの満足感などを自分に与えてくれる、つまりその状態をポジティブに捉えて幸せと思えるという可能性を信じるから新しいことに向かっていくのだということだ。そこでもちろん先のことは未知だから、思い描いていたようにはならず、それを失敗と考えるかもしれない。でもそれはそうなる 100%思っていてそうなのではないだろう。ではなぜ今の状態で幸せだと思えるのに、変わろうとするのだろうか。やっぱり 100%の幸せはないからだろうか。またなぜポジティブに捉えようとするのか。だめだと思ってそこで立ち止まっていたら前に進めないからどんな状態でもポジティブに考えようと思うのだろうか。

### 人間の本質？

星野:人間ってしあわせ感をえるだけじゃ幸せじゃないのかってことですよね。

S:だからたまに転んだほうが、もう一回しあわせを求めようとするから、幸せ。あ、私はそう思ってるんだ！(一同)気づいちゃった。(笑)うん、わたしだったら飽きて...あ、そうそう成長成長！

星野:成長への欲求みたいのがあるのか...人間の本質ってこと？

S:ここが終わりじゃないって言えば、準備だよな、いつも。(K 先生の言葉で、人生は常に準備だという意味だそう。何のためかといえば“死”への？と自問自答されていたそう。)

星野:たぶんそれで成長への欲求のほうへ認識は繋がっていくのかもしれないな。

S: そうかもね。だってずっと幸せだと思ってたら、幸せが普通になったら、やっぱり成長しないでしょう？で、成長のきっかけってネガティブなこととか頭にくたとか、コンプレックスがあって、逆にコンプレックスを乗り越えるためにがんばれるとか、そういうのもあるんじゃないかな。

星野: そうですよね、ポジティブでずっといればいいのかって問題。ネガティブであることも必要なんじゃないかって話してましたよね、さっき歩きながら。

W: ネガティブを意識しなければ、ポジティブはない。

星野: そうですよね。

・自分はこれでいいと 100%満足しないから、だめだとおもうから、つまり完全に幸せでないから成長する。確かに渡辺さんが前にいったように、完全に幸せな人は幸せについて考えたりしないだろう。ではどうしてそこでポジティブでいたいのか。ダメだダメだと思っていても前に進む力が生まれず、成長できないからではないか。人間は本質的に欲求、欲望があるから成長するのだと思う。私はダメだと思ったらダメじゃない自分になりたいのだ。完全に今の状態に満足していたら変わろうとしない、何も変わらないのではないだろうか。今ある状態を肯定的に捉えるということは、それによって、自分が変わりたかったら変われる、したかったらできると信じていることだと思う。

・最後に W さんに空気感以外に幸せだなんて思うことがあるかどうか再度聞いてみた。

星野: W さんの私のにあっていう空気感の他にありますか。それないと渡辺さん幸せじゃないってことになっちゃうじゃないですか。

W: 要所要所にはあるんだよね。自分の選んできたところで間違ってたって言うか。それを実感できたって言うか。

星野: でもそれって認識ですよね。

W: そうなんだけど。

・ここで言語化できないもの、圧倒的情報量でしあわせと認識されるものは、「しあわせ感」になるのではないかという意見が渡辺さんから出される。つまり幸せであるという認識と感覚としてのしあわせ感切り離せないのではないかということだ。そうかもしれない。SさんとWさんは温泉について話していて、「しあわせだった～」と叫んでいた。その感覚は私の「しあわせ感」と同じところに位置付けられると思う。でもその実感は幸せの一部なのではないだろうか。何か達成できたときの喜びは、例えば試験に合格したから嬉しいなどと言語化できるものもあるが、その湧き上がってくる感情はしあわせ感と通じると思う。今の私の幸せの要素(例: 家族がいるなど)について、頭ではありがたいとか恵まれているとか幸せだとか考えていても、それが常に実感としてしあわせ感をもたらすわけではない。

・この後 W さんから「will be 俺」と「being 私」ということばがでた。ここでいう「will be 俺」は不幸せでもかまわないかもしれないという W さんを表していて、未自分という意味だそう。まだ自分は変わる、前に進めるといことらしい。S さんの立場は「being 私」に分類されるそう。今ある「私」の状態を肯定的に捉えていて、幸せだとするということである。S さんは、幸せに常に理由付けをしているといい、幸せは認識論という立場で終わった。私は、なんとなく私にとって好きな大気のおいをかかすことは、ポジティブでいたい、幸せだということにどう関係するのかがより見えてきたような気がしていたが、まだはっきりわからなかった。その状態で次に U さんとディスカッションすることになった。

### **U さんとのディスカッション**

U さんにとって「しあわせ感」は、お酒を飲むことと好きな音楽を聴くことによって得られるそう。そこでなぜ「しあわせ感」を得たいのか聞いてみた。

U:気分がよくなるからじゃない? 楽になる?

星野:じゃあ気分がよくなると幸せ?

U:うん。でもそれは一時的でしょう? ずっとじゃないじゃない?

- ・ そのとおりだと思った。やっぱりずっと幸せを実感しつづけることはできないのだ。それに私は好きな音楽をずっと聴いていたらそれだけで幸せだと思えないし、また聴いていたいと思わない。そこで今度はUさんにとって幸せとは何か聞いてみた。

U:今幸せじゃないといえない。でも幸せだってもいえない。

星野:どうして?

U:他の人とかと比べて、自分もっているものよりもっともつことができるって望むじゃない?

星野:欲望ってこと?

U:そう、でもゆりちん(私)がいうみたいに、今の状態で幸せってもいえるけど。

・ここで「望む」というUさんの言葉によって、もやもやしていたものがはっきりしてきた感じがした。やっぱり欲望があるから、完璧な幸せっていうものはないんだと思った。そして欲望があるから、考えるから私は「しあわせ感」だけでは幸せではいられないんだという考えにいたった。その瞬間のしあわせ感や気持ちよさ、快さ、楽しさがあれば私はよくなって、それだけを欲していて、それだけで満足するのかといわれるとそうではない。だからしあわせ感=幸せではないんだと思う。

ではその「しあわせ感」を得られる「大気のおいをかぐ」という行為は結局私にとってなんなんだろう。ウネさんも落ち込んでいるときとか気分が暗いとき音楽を聴いたり、お酒を飲んだりして「しあわせ感」をえて、気分が明るくなる、それを知っているから音楽を聴いたりお酒を飲んだりするといった。私もやっぱり同じように好きな大気のおいをかぐことはネガティブな思考が拭い去れないことによって暗い気分になっているのを、明るくしてくれるもので欲求が満たされたときの瞬間的快さを感じられるものでしかないと思った。

しかし私にとってその瞬間は大切に、好きな大気のおいをかいでいる瞬間も楽しんでいて、その個々の欲求が満たされている時を楽しみたいんだということが新たに見えてきた。

### 3. 結論

ディスカッションを通して、たくさんの方が見えてきた気がする。まず私にとって大気のおいをかぐことはしあわせ感を得ることであった。ではどうして「しあわせ感」を得たいのかということになると、気分が明るくなるからだ。そこまでははっきりした。しかしそこからポジティブになれる(幸せだと思える。)ということはどういうことなのか、どうしてポジティブでいたいのか、私にとって幸せというものは何なのかに話が及んだ。

それは欲求や欲望ということと切り離せないこのディスカッションを通して気づいた。今ある幸せの要素というのも結局は自分の欲求が満たされている状態だと思う。例えば家族がいて幸せというのも、愛されたいという欲求が家族によって満たされているからその状態が私にとって幸せになるのだと思う。そしてその今ある状態を肯定的に捉えたいというのは、それがあつことが当たり前でないから、今ある状態を大切にしたいのだということだと思う。

なぜ私が混乱していたかということ、幸せだなあと実感すること(大気のおいをかいでいるとき、おいしいものを食べているとき、大好きな音楽を聴いているとき、etc)と私にとって幸せの要素という部分が一致しないことがあると思ったからだ。私の今の幸せの要素といたら、家族がいる、好きな勉強ができる、ご飯が食べられるなどたくさんあるが、特に大気のおいについてはしあわせ感を得られるのに、別に幸せの要素でなくてはならないというほどでもない。だから混乱したのだと思う。反対に、好きな勉



強ができることはありがたく、幸せの要素になっているが、楽しいことばかりでないし、そのしあわせ感を実感することもそうあるわけではない。だからこの二つが結びつかなかったのだと思う。

しかしディスカッションを通して、この二つを欲望や欲求といった観点からみると説明がつくことが明らかになった。

しあわせ感のほうは日々繰り返される欲求で、比較的今の状況で簡単に満たせる。だから満たされるたびに頻繁に「しあわせだなあ」と実感できる。幸せの要素は欲求が満たされている状態、もしくは満たせる状態に常にあるということだ。例えば家族がいるとか、好きな勉強をしているとか、毎日ご飯が食べられるとかである。

でも、それは状態であるから常に頻繁にそこから「しあわせだなあ」と実感することは難しい。あって当たり前になっていたりする。家族がほしいと思っていて、それを手に入れた瞬間は「しあわせだなあ」と強く実感しても、それを毎日実感することはなくなっていく。頭ではそれがあつた状態が自分にあって大切で、それがあつたことによって幸せだとわかつていてもである。

ここまでは欲求欲望が満たされているほうに目をむけたが、実はまだ満たされていない欲求欲望もある。そして欲求欲望は私は死ぬまでなくならないと思う。なぜならもともと落ち込む性格で、自分はこれでいいと思えないからである。いつも変わりたい。それにいつの日か私はこれで最高と思つても、もしそれを維持したいと思つたらやっぱりそれも欲望である。そうすると常に満たしたい欲望欲求があつて、それを満たすために前に進みたい。満たせると信じていたい。でもその過程は楽しいことばかりでもないし、困難もある。そうすると、性格上ダメだと思つて前に進むエネルギーが足りなくなる。それは気分も暗くなるし、進みたいのに立ち止まっているのだから楽しくない。それは人生一回しかないのにもったいないと思う。だからまず気分を明るくすることがいい、気分が明るくなれば前に進むエネルギーが湧いてくる。そこで気分が明るくなるのに、好きな大気のおいさをかいで快さを、しあわせ感を味わうことが知らぬ間に役に立っていたのだ。

この前に進むエネルギーがあつた状態がポジティブであるということ、なぜポジティブでいたいのかという問いの答えが、満たしたい欲望欲求があつてその為の前に進みたいからということになる。かつ気づいたことが、私はそのどう考えても楽しいことばかりでない欲望欲求を満たす過程をもできれば楽しみたいのだということだ。1回しかない人生で、ずっと何かの過程にあつてその過程を楽しめなかつたらもったいないという感がある。きっと死ぬ間際にだけいい人生だったというのはいやなのだ。

それにこのレポートを書いていくうちに、私はそのしあわせ感を味わうこと、日々の欲求が満たされる瞬間を楽しみたい、大切にしたいと思つていることに気づいた。そして忙しさにかまけてもつとあるたくさんさんのしあわせ感をちゃんと味わっていないということにも気づいた。毎日の生活の中で、忙しかったりいろんなことに悩んだりしてその小さな欲求が満たされた時のしあわせ感を忘れがちであった。このレポートを書きながら、私のしあわせ感は何だろうと真剣に考えた。何か食べているときにちゃんと味わつたり、大好きな音楽を聴いてみたり、空をみたりしてみた。どれも快かつた。共通のしあわせ感があつた。もう一度瞬間を楽しむことを思い出した。今あること、例えば家族がいるとか友達がいるとかそんなことを毎日恵まれてるなしあわせだなとしみじみ実感しない。それが感情となつて押し寄せてきたりはしない。だからそれをなくした時にそれが自分にあって大切であつたのか、ないと欲しいものなのか、それがあつたことによってどんなに満たされていたのかに気づくのだろう。それをもう一度手に入れた時しみじみとそれがあつたことの幸せを実感するのだと思う。ところがもう一度手に入れられないものもたくさんある。だから今あるということ、それを大切にしたいという気持ちを忘れずに、それがあつて幸せといいたいのだと思う。

大きなすぐに手に入らないけど手に入りたい欲求を満たすために、落ち込んででも日々前に進もうとしながら、でも当たり前で気づきにくい今あるものを大切にしながら、満たそうと思えばすぐに満たせる小さな欲求を満たせることを楽しんで、(好きな大気のおいを吸い込んで)楽しむことによってまたエネルギーを得て前に進んでいきたいと思う。

#### 4. 終わりに

この活動を通じてどのくらい「考えた」だろう。頭の中が沸騰しそうになって、脳みそを取り出して冷たい水で何度洗ってあげたかなだろう。でも洗ってしまって今まで考えたことがすべて流れてしまうのはもったいやなので、きっと物理的に可能といわれてもやらなかったに違いない。これだと思える考えが見つけれなくて、何度も同じところをぐるぐる回っていた。「あ、これだ！」と思って口に出してみようとする。その考えにおける矛盾や何かが違うと思っている自分に気づいて口に出せなくなる。やっと出してみるとやっぱり何かがおかしくてディスカッション相手やこの授業に参加しているみんなにうまく説明できなかったり、できたと思ってもできていなかったりする。でもみんなが聞いてくれているんなフィードバックをくれたからこそ、少しでも見えてきたことは間違いない。

自分の中の少し見えてきたものをことばにして、よりよくみんなに伝わるようにしたい。(実は何度もレパシーで考えていることがすべて相手の脳に映し出されないかと念じようと思ったが。)

そのために今は「ことば」を使うしかない。私が生きている間はきっとこれからも使うしかないのだろう。でもきっと100%伝わらない。「ことば」を使うしかないからこそコミュニケーションは大変だけど楽しいに違いないんだと思う。コミュニケーションはちょっとゲームみたいだ。相手の意図を当てるゲーム、でも答えはそのまま示せない、ことばに変換したヒントしかだせない。わかりやすいヒントを出そうと思っても出せないことが多いけど、時々わざとわかりにくいヒントを出して楽しんだりもできる。

ひとつだけ確かなことは、ひとりではゲームはつまらない。相手がいてくれるからおもしろい。私の下手なヒントから一所懸命意図を汲み取ろうとしてくれたみなさん、もっと上手に表現できるようにアドバイスをくれて本当にありがとう。この活動に参加できたことをうれしく思う。

このテーマについてのレポートはまだ途中報告だ。いつかまたこれについて誰かと話せたらすてきだと思う。

# 私が書いた物語

山本冴里

## 目次

はじめに（理由）	p. 1
ディスカッション	p. 2
結論	p. 8
おわりに（そしてこれから）	p. 9

## はじめに（理由）

幼い頃からずっと、本を離せなかった。映画より歌より、本によって心が動かされてきた。私はお酒よりも本で酔う。本がないと枯れてしまうと思う。私も本を物語を書くという思いは早くから生まれ、いつか確信になっていた。

実際に書き始めたのは、小学三年生のときだ。中学生・高校生の間は中断したが、大学に入ってまた、創作を始めた。

物語を書くと、自分の内側から何かが出てくる。海の底にあるものを引き寄せ、水面に浮かびあがらせるように、私自身の内界をすなごるようなものだ。私の内側には、これまでのすべての経験・感情・記憶・本能・原的なものが、結びついたり離れたり、形を変えたりしながら沈んでいる。普段は意識することがない見えないそんな沈殿物が、物語を書くとぼんやり見える。書いているうちに、私の中の感知していなかった部分や忘れていた部分が、ことばをくれることがある。

いま温めている物語には、ネオという主人公がいる。14歳の、「鏡性」を持つ少女だ。「鏡性」というのはショーウィンドのような性質である。たとえばA氏がネオを見ると、ネオの上にぼやけて、二重映しのようにA氏自身が見える。

かつて美術展で〈訪問者〉という作品を見た。それが恐らく、「鏡性」の具体的なヒントになった。〈訪問者〉は単に「等身大の人物写真が貼られた鏡」であり、私は「人物写真」とともに鏡に映し出された自分の姿を眺めた。それだけのものだった。先ごろたまたまそのパンフレットを広げるまで、ずっと忘れていた。けれど新しい目で見てみると、ネオの「鏡性」と「人物写真と観客を一緒に映す鏡」とは、相当に似ていた。内面に沈んでいた〈訪問者〉という経験が、ネオの「鏡性」になって浮かんできたのだろう。

だが、そうしてみると実は私の物語と私の内面との関係が、ネオとネオを見る人との関係に重なることに気づく。これまでも漠然と、物語に自分が見えるということや、物語と内面がリンクしているということを感じていた。ネオが見る人の姿をだぶらせるように、私の物語は、ストーリーとともに私自身の内面を見せる。物語に書かれることによって、内面は浮上し、見えるようになる。もともと存在していた、この浮上と顕在化の感覚が<

訪問者>をヒントに形づくられたものが、ネオの「鏡性」だと考える。ネオは、私にとっての物語的要素「鏡性」を備えた存在だった。

どんな物語を書こうと、そこには何かしら内側から出てきた要素が含まれる。物語は私の中から何かを浮かびあがらせ、あるいは引きずりだして見せる。物語自体の筋書きに重ねて、うっすらと私自身の内面をも映すことになる。

私が書いた物語は、私にとって、内面を反映する鏡のような存在である。

## ディスカッション

ディスカッションの相手はHさんをお願いした。「理由」部分を書きあぐねていた時に、彼女と話すことで聞いてもらうことで、視界が開けたという経験があったからだ。彼女は話を聞く能力がとても高いのではないかと思う。ミヒヤエル・エンデの『モモ』的な要素を備えた不思議なひとである。

以下のディスカッション中で、冴里とは筆者(山本冴里)を指す。

### <物語によって、自分に気づく>

Hさん：物語を書くことで見えてくる自分って、新しい自分かなあ。

それとも、そうじゃなくて？

冴里：そうじゃないと思う。たぶん元々自分の中にあったもの。でも見えなかったもの。

見えなかったから、新しいなと感じることはある。言葉にしたことで気づく、自分があるのね。

Hさん：言葉にしたことで気づく自分？ たとえばどういうものがあるのかなあ？

冴里：う～ん。たとえば色づいたイチヨウの葉をもぎ取る触感と、紅葉をちぎる感触とは、全然違う。イチヨウの葉をもぎとる触感にぴったりくる擬態語を探し当てたときに、ああ私はイチヨウをこういう風に見てたのかあって思う。

Hさん：どんなの(笑)？

冴里：ふくにゆ(笑)。

Hさん：そっか、それは気づく自分だね。

言葉にしたことで、無意識の部分が意識化されたのだと思う。「ふくにゆ」という擬態語によって、自分はイチヨウをこういう風に見ていたという気づきがある。Hさんもそれを指して、「気づく自分」と言った。彼女は「気づく自分(冴里)」を探るために、私がよく使う言葉を見つげるところから骨折ってくれた。

### 具体的にはどんな言葉を

Hさん：イチヨウの他にも、何かないかな……どんなことばを使うの？

冴里：うん。惹かれる言葉っていうことでいいかな？ まだ物語の中で使ってはいないけれど最近すごく惹かれてる（使いたがっている）言葉は、境界人。

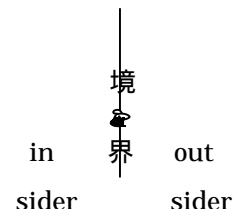
Hさん：境界人？

（私は右下のような図を描いて見せた）

冴里：アウトサイダーがいて、インサイダーがいるでしょう？

どっちでもなくて、境界に立つ人。境界人（マージナル・マン）。  
ずっと前に何かの論文で知った言葉なんだけど、すごく残ってる。

Hさん：そっか。旅人みたいだね。



冴里：……そうかもしれない。自分も旅好きだし。今まで書いた長いものの中にはたいてい、結構重要な役で、旅人が出てくるんだ。ああ、出てくるといえば、大きな水のたまりもそう。沼だとか湖だとか。今回のレポートの「理由」部分でも、「物語を書くことは、海の底にあるものを引き寄せ～」って、「海」が出てる。

Hさん：ほかには、どんなのがある？

冴里：あと動詞だけど、やたらと「ゆれる」とか「すける」とか「ずれる」を使いたがってる、私。「理由」で書いた「ネオ」もすけて、見る人を二重写しにするんだよね。

物語を書くときに私が使う（惹かれる）言葉として、「境界人・大きな水のたまり・ゆれる・すける・ずれる」が出てきた（上のディスカッションにおける下線部）。私はこれらの言葉をメモに書き「境界人」ののところをぐりぐりなぞっていた。するとHさんは……

Hさん：ねえ境界人の話に戻るけれど、それってスナフキンみたいな感じかなあと思った。

冴里：ごめん、スナフキンってどんなんだっけ？ 形態は思い浮かぶんだけど。

Hさん：どっちにも属したくない。世の中のことは関係なく、我が道を行く感じ。

冴里：ご隠居さん？ 竹林の七賢人？ う～ん、隠居ではない。それは、全然ない。我が道を行くって方は……あこがれる。でも私は出来てない（行けてない）と思う。

Hさん：そっか。そうだね、我が道を行くことと境界人って、なんだか矛盾するものね。

冴里：ああ、そう、そう。

「境界人」という言葉は、もともとは単に「惹かれる（物語で使いたい）言葉」として提示しただけだった。だが下線部では、当然のように「私自身」と「境界人」とを同一視して話している。「惹かれる（物語で使いたい）言葉」というだけだった「境界人」に、「私自身」も等号でむすびつけて話していた。何の不自然さも感じないまま。

### 境界人としての私

私はなぜ境界人でいるのか？ 境界に居つづけるのか？ Hさんはそれを追ってくれた。

Hさん：どっちにも行けないの？ どっちにも行きたくないの？

冴里：どっちにも行きたい。けど、どっちつかずなの。たぶん。

Hさん：どっちつかずなのは どうして？ 両方のいいところを選びたいから？ どっちかに  
行っちゃうのが怖いから？ それとも、どっちつかずでいたら楽だから？ そうい  
う自分を楽しんでいる？

冴里：いまHさんが言ったどれでもなくて……どちらにも受け入れてほしい。

どちらにも受け入れてほしいという気持ちに加え、どちらでもやっていきたいという気  
持ちもある……結局はふらふらと、どっちつかず。これが私の境界人だった。そうして私  
は、この状態をあまり肯定的に捉えてはいない。話はどんどん具体的になっていった。

冴里：日本語教師についても境界人なのかもしれない。

Hさん：日本と他の国の境界？

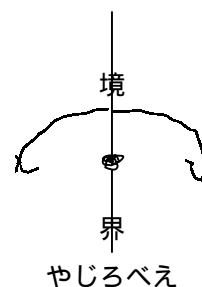
冴里：あ、違う違う。国境に立って、こっちが日本人、こっちが……っていうのじゃなく  
て、日本語教師がこっち側にあって、フリーターしながらショウセツカを目指すの  
が、あっち側にある。

Hさん：それで、ゆれてるんだ。

冴里：そう、また出ちゃった。ゆれてる。

前ページのディスカッション中にも出てきているように、「ゆれる」もやはり、文を書く  
ときに私がよく使いたがる言葉の一つだった。

Hさん：ねえ、こっち側ばかり欲しくなったり、  
あっち側ばかり欲しくなったり、どっ  
ちかだけにして我が道を行こうとするより、  
ココ（境界／黒点）に固定、というか、  
ココ（境界／黒点）にいるんだということを実感すれば？



冴里：ごめん、ちょっとよくわからない。

Hさん：やじろべえってあるじゃない。(といってHさんは私が描いた図に手を加え、上のよう  
なものにした。)こっち側にゆれたり、あっち側にゆれたり。でもまず立ってないと、  
ちゃんとゆれないでしょう？ 自分の立ち位置をわかって、わかった上で立つってい  
うこと。

冴里：境界的我が道を行くんだ！ ってことか……。開き直る？

Hさん：うん、そう。ゆれてるっていうことを、わかっておく。で、自分の気持ちをモニター  
するの。こっち側にいたいときはこっち側にいればいいし、あっち側にいきたいときは、  
あっち側にいけばいい。そこから両方に根を広げることだって、できるかも……。

冴里：立ち位置をわかっておく……。やじろべえ……。

どっちつかずでいることや、どちらかに限定できないでいることに、私は否定的な評価感情を持っている。Hさんが言うように、境界人であることをまず受け入れて、認めて、そこから始めるということは、想像の埒外だった。新鮮であっただけに、なんだかとても良く考えのような気がした。どうせ境界人なのだとしたら、「あちら側だけ or こちら側だけ」と全否定や全肯定を選ぼうと頑張ることはない。どうせ今のところは、選びきれぬ問題ではないのだ。無理押しして選んだって、ふらつくだけだろう……と思えた。それならば、境界人的我が道を深めていく方が建設的であるようだ。そっかあ、と開けてきた私に、Hさんが「鏡のことをどう思ってるの？」と訊いた。

### <鏡のこと>

#### 私の気持ち・ゆうれい・境界人

Hさん：鏡の話しよう。「理由」のまとめで、冴里は「私が書いた物語は、私にとって、内面を反映する鏡のような存在である」って書いているよね。他にも「鏡」っていっぱい出ているけど、「鏡」のことをどう思ってるの？

冴里：鏡？ 嫌い。

Hさん：嫌い（笑）？

冴里：あ……。うん、嫌いみたい（笑）。

このとき私はまだ、上の「境界人的我が道」のことを考えていた。Hさんが言った鏡のことには、ほとんど注意をはらっていなかった。だからこぼれた言葉は準備して出したものではなかったし、鏡のことが嫌いだ、とは特に意識したこともなかった。嫌い、と言ってしまってから驚いた。

Hさん：なんで嫌い？ 映されるのが怖いの？

冴里：う～ん。怖いっていうか……うん、少し。小さいころね、本気で信じていたお話があるの。鏡台（三面鏡）の開きをこう、小さくしてね、そこに顔を押しつけるでしょう。そうすると映るのは自分の顔だけ。自分の顔がどこまでも反射してる。そうして一番最後、一番奥に映った青白い顔が、自分のゆうれい……っていうお話。凄く恐ろしかった。

でも、すごく惹かれもする。私、ファーストキスが、鏡の中の自分なの。小学三年生のとき。工作だか美術だかの教科で、大きな手鏡を学校に持ってきて、それで顔をみながら粘土で自分の顔と頭をこしらえる授業だったの。鏡を見てるうちに、すごくキスしたくなって。我慢できなくて、目を閉じて、しちゃった（笑）。

Hさん：怖いけど惹かれるんだ（笑）。

冴里：そう。怖いけど見たい（笑）。じゃあ、「私が書いた物語は、私にとって、内面を反映す

る鏡のような存在である」っていうことは、「物語 = 鏡」だから………物語が怖い、自分を映すから。でも同時に、物語に惹かれる。それもやっぱり、自分を映すから。………ってことか。物語は自分を映すから見たいんだけど、映っているのが青白いゆうれいだったら怖い。あ～、そっか！

Hさん：何（笑）？ また何か気づいた？

冴里：うん。ゆうれいが怖い、ゆうれいが嫌なんだよね。境界人の話とつながる。自分がゆうれいみたいにあっち側にひよろひよろ、こっち側にひよろひよろとなってる状態を嫌がってる？ あるいは怖がってるんだ、きっと。じゃあ、ますます……

Hさん：コレ（やじろべえの黒点）。立ち位置を認識して、その上で立つ。

冴里：境界人なら境界人としての開き直りが要るんだ。というか、境界人であるということとをちゃんと自覚して、受け止めるべきなんだ。

ディスカッション中でも口にしているように、このあたりで話は急速につながりだしていた。私はまず、自分が「物語（鏡）に映る自分がゆうれいのようなこと」を怖れている。さらに正確にいうと、「ゆうれいみたいに、あっちに側にひよろひよろ、こっち側にひよろひよろ」という状態を嫌がっている、もしくは怖がっている。下線部とあわせてまとめると、私は自分が書いた物語を怖れている。同時に惹かれてもいる。怖い理由も惹かれる訳も、どちらも「物語には自分が映っているから」だ。ゆうれいのような自分が映っている（かもしれない）ことを怖れているが、でも映っているのが自分であれば、やはり見たいのだ。

そして、この「あっち側にひよろひよろ、こっち側にひよろひよろ」は、私が境界人として話していたことと同質でもあった。私が書いたものには、よく「ふわふわ感」「ふらふら感」が漂っていると言われる。私が自分の境界人的立場を自己確認し、その位置できちんとやっていこうとすれば、物語に映る自分も変化するはずだ。「ふわふわ感」「ふらふら感」にはそれなりに愛着もあって、だから消えてしまうのは少し惜しい。だが、消えたものに代わってどんなものが出てくるのか、期待のほう大きい。

### どのように映っているのか？

冴里：Hさんは、物語じゃなくても何か書くことはない？

Hさん：日記くらいだよ。でも鏡とか、そういう特別な意味はない。

冴里：自分を見つけることなら何か？

Hさん：人と話をする事かな。でも、自分を映すすべなんて、べつに探してない。私は私だから。

冴里：ああ、それは私だってそうだよ。映そうとして（自分を探そうとして）物語を書くわけじゃないもん、書いたら結果的に映ってるだけで。この活動（日本事情教育実践演習）



のレポートならどうかな。物語を書くことと、ちょっと似てない？ 対象と自分の関係を語ることから、自分について見えてくるものもあるんじゃない？

Hさん：でも鏡じゃないよ～。思考整理かな。……扉を開く。

冴里：でも四つ葉（Hさんのテーマ）について書かなかったら『四つ葉を見つけて嬉しく感じる私自身』をうれしく感じている」という自分（Hさん）に気づかなかったんじゃないかなあ。

上の「」内は、Hさんのレポートより引用した。なお、このあたりからUさんもディスカッションに参加してくれている。

Hさん：そうだね。でもやっぱり（物語を書くこととは）違う。

冴里：じゃあ、どこに違いがあるんだろう？

Hさん：（この活動は）鏡みたいに映る感じじゃないよ。扉を開く。それで、研ぎすませていく。深くなっていく。

冴里：意識的に手練りよせようとするのがこの活動で、結果的に手練りよせられているのが物語、でいいのかな……。物語を書くときは、（自分像を）研ぎすませていく感じはしないよ。映される、勝手に映っちゃう、出てくる。

Uさん：出てくるのは、出そうとして出してるからじゃない？ 自分を切り売りしてない？

冴里：ない、ない。もっと出せ（切り売りしてもいい）って言われるくらいだよ。少なくとも、切り売りをしようと意識してはいない。出ちゃうんだよ、あくまで。

「物語に自分を映したい」「映った自分を見たい」などの気持ちはない。下線部にもある通り、私にとってはあくまでも「結果的に映っている」のが「物語」なのである。

Hさん：冴里はきっと、物語はすごく正直だと思ってるんだね。鏡がそのまま映すって、信じてるんだ？

冴里：う～ん。「理由」部分で「引きずり出される」という言葉があったよね。出てくる時はわりと、自分の意思と関係なく来るから。そのまま、というか……私そのものではない。だけど、映っちゃうところは絶対あると思う。

Hさん：でも……鏡でしょ？ ……鏡ってすごく、クリアーに映すイメージがある。

クリアーに映しているわけではないよ、自分を主人公に書くこともないしね。というように私は答えた。それでディスカッションは終わり、「私が書いた物語は、私にとって、内面を反映する鏡のような存在である」という理由のまとめに、変化はなかった。しかしHさんの最後の質問については、ディスカッションから何日かが過ぎた後になって、追考の必要を感じるようになった。Uさんの「自分を切り売りしてない？」という質問も関連があるように思えてきた。おふたりとも「鏡」という言葉から、物語には私が「そのまんま映る」と考えたのだ。Hさんの「鏡ってすごくクリアーに映す」という言葉然り、Uさん

の「切り売り」然りである（私の姿がそのまま映っているのでなければ、切り売りとは言わないだろう）。

私自身は、「私が書いた物語には、私がそのまんま映っている」とは思っていない。ゆれもずれもぶれもあり、曇ったり霞んだりもしている。「鏡」という表現を取りさげ、練りなおすことを考える。

## 結論

「私が書いた物語は、私にとって、内面を反映する鏡のような存在である」という理由のまとめを再考する。物語が自分を映す（内面を反映する）ということ自体は、私はほぼ完全に信じている。だからこそ物語を怖くも感じ、惹かれてもいる。これがディスカッションから分かったことだ。しかし映すといっても一般的な鏡のように、クリアーに明晰な像を結ぶのではない。「理由」から、どのように映すかということについて書いてある部分を抜粋すると、以下のようになる。

- ・ ぼんやり見える
- ・ うっすらと私自身の内面をも映す
- ・ たとえばA氏がネオを見ると、ネオの上にぼやけて、二重映しのようにA氏自身が見える。（ネオの鏡性）

ネオの「鏡性」は、このほかに「『鏡性』というのはショーウインドのような性質である」とも説明されている。「鏡性」という言葉はわかりやすく説明するためだけに出したのだが、いっそのこと、そのまま「ショーウインド性」と言った方が適当だったようである。ショーウインドの前に立つと、中に陳列してあるモノに重なって、自分の姿がおぼろに見える。同じくネオの前に立つと、ネオに重ねてうっすらと自分が見える。ネオが自分を映しているのだ。同様に、私が書いた物語はストーリーに重ねて、私自身の内面をもぼんやりと映す。私の内面がおぼろげに見える。映そうと思って書くわけではない。結果的に映っているのだ。以上をふまえて、意味づけをより明確なものにしたい。

私が書いた物語は、私にとって、自分の内側から何かしらを浮かびがらせ、あるいは引きずりだして、それをさながらショーウインドのように、物語自体の流れに重ねておぼろげに映すものである

新しい意味づけは初めのものよりも、表現としては正確になった。しかし本質的には同質である。通底奏音としては、ずっと同じものが響きつづけた。私の場合、意味づけに関するディスカッションの意義は、裏打ちすることであったと考える。ディスカッション開始前に比べて、この意味づけを、より確かなものとして実感するようになったのである。

「境界人」がその一例であった。P3において、私は初めには「境界人」を「惹かれる言葉・物語で 使いたい言葉」として提示した。それなのに、すぐに自分と「境界人」とを同

一視していた。「使いたい言葉 = 境界人」だったはずが、いつのまにか「自分 = 境界人」として話していたのである。しかもディスカッション時には、その飛躍に気づいてさえいなかった。これは、私の内側が物語での言葉（例：境界人）につながるといこと、逆に言えば物語が私の内側につながる（内側を映す）ということであり、上の意味づけを例証することが出来るだろう。

### おわりに（そしてこれから）

「理由」部分を練っているときには、腐った柿にもぐりこもうとしている虫にでもなった気分だった。なかなかゴーサインが出なかったからだ。しかしディスカッションに入ってから後は、この活動の妙味を味わった。「理由」でいったん意味づけ（立脚点）をきちんと確立しておくことの重要性にも、納得するようになった。

結論を書き終えて、ある片をつけたと同時に、二つの新たな課題に向きあっている。一つは、「（自分を映すため、ではないのに）なぜ私は物語を書こうとするのか」であり、もう一つは、Hさんにいただいたアドバイス「境界人である自分の立ち位置をわかって、わかった上で立つ」を具体化していくための、実際的な生活上の問題である。

本授業設計者である細川先生、有益なフィードバックと励ましをくれた活動参加者の皆さん、ディスカッションの相手をしてくれたHさん、Uさん、どうもありがとうございました。

# 本を読むことについて

谷口和香子

## <目次>

1. テーマ設定理由
2. ディスカッション
  - 2.1 「もう一つの世界」という考え方
  - 2.2 なぜ本を読むのか？（本を読むことで「もう一つの世界」へ行く理由）
    - 2.2.1 Yさんが本を読む理由
    - 2.2.2 Tさんが本を読む理由
    - 2.2.3 私が本を読む理由
3. 結論
4. 終わりに

## 1. テーマ設定理由

私はよく本を読む。ほぼ毎日1度は本を手にはしている。本を読みはじめると時間が経つのを忘れてしまい、一日が小説を読むことだけで終わってしまう日も少なくない。読みはじめるとご飯を食べることさえ、寝ることさえ面倒になってしまう。「読む本が手元にない」ということは私をとて不安にさせる。どこかに出かける時も常に文庫本を持ち歩いている。そのため、電車の中や、友達との待ち合わせの時間など、すこしでも時間ができると本を開く。なぜ私は、寝食を忘れてまで、本に没頭するのだろうか。なぜ私はそんなに本を読むのだろうか。

私が読む本はもっぱら小説である。伝記や論説文は、昔からまったくというほど読まなかった。論説文は国語の授業で読み（読まされ）内容も難しいものが多いため、私の中では眠れないときの睡眠薬である。また、伝記についていうと、真剣に読むようになったのは、実は最近なのである。それまでは、「過去の人物のことなんか読んで、どうせ自分とこの人は違うんだから、人の人生を読んでも面白くも何とも無い」という思いが強く、見向きもしなかった。最近でも、伝記を読むのはその人についての知識を得ることを目的としている。

私にとって「本」といえば「小説」なのである。自分の及びもよらない世界へ没頭することができる小説は、とても魅力的だと感じる。本を読むことによって、私は本の中の世界へ旅をしている。私が生きている現実の世界から脱出し、本の世界へ入る。私が小説を読むとき、その小説を創った作家の存在は皆無になる。小説には作家の様々な思いが込められているのであろう。しかし、その作家が伝えているであろうメッセージは私には重要なものではない。感じないことさえある。作家のメッセージを感じるということよりも、自分がその世界に没頭することが重要なのである。小説の世界は、私にとって現実とは違

う「もう一つの世界」なのである。

これまでの人生の中で、本を読まなくなった時期がある。それは大学生のころである。その頃、私は本以外の「もう一つ世界」を持っていた。それは「弓道」、そして「弓道部(弓道場や部員、練習などすべてを含めたもの)」である。勉強で悩みを抱えたとき、私は「弓道」をすることで、「弓道部」の友達と一緒に練習することで、悩み事のある世界とは異なった別の世界へ行くことができた。別の世界へ行くことで、勉強での自分の思いつめた気持ちを解放することができた。

今の私にとって「本」は、大学時代の「弓道・弓道部」と同じ役割を持っているように思う。現実の世界で苦しくなった時や悩みを抱えた時に、本を読むことによって「もう一つの世界」に行き、苦しみや悩みから気持ちを解放させているのである。「もう一つの世界」へ行き、時間をおいてまた現実に戻って来ることで、始めに感じていた「苦しみ、悩み」が少し冷静に見えることもある。2つの世界を持つことで、自分の気持ちが逃げる場所ができ、心が参ってしまわないようにしていたのである。

私には、心の健康を保つために、2つの世界が必要である。その2つの世界を行ったり来たりすることで、物事を思いつめないようにコントロールしている。今の私にとって、「本」とは「もう一つの世界」であり、「本を読むこと」は「もう一つの世界」へ行く手段なのである。

## 2. ディスカッション

私はディスカッションの相手には、2人の方をお願いした。1人は留学生のYさん。彼は、私と同じようなテーマで今回のレポートを書くということで、共通のディスカッションができると思ったからである。そして、もう1人はTさんである。彼女は物事を冷静に見ることができる人で、私に持っていないものを持っている。また、時代小説を読むということを知り、私と読みたい本が似ているかもしれないと思ったからである。

私は、ディスカッションによって「なぜ本を読むのか」ということをよりはっきりと明らかにしたいと思った。

(ディスカッション中の記号、Wとは谷口を指す)

### 2.1. 「もう一つの世界」という考え方

Tさんとのディスカッションをする際、まず、「理由」で書いた「もう一つの世界」について説明をした。その時一つ大きな質問を受けた。

T: 和香ちゃん(谷口のこと。以下同様)は、「現実の世界」と「もう一つの世界」という「二つの世界」に区切って考えてるの? 和香ちゃんの中には、2つの世界があるの?

この質問を受けた時、私の中では前提として当たり前を考えていた「二つの世界」の考

え方が、他の人にとっては当たり前のものではないという、ごく初歩的なことに気づいた。そして、いつからこの考え方を持つようになったのかを思い出した。

私が自分の中に「2つの世界」という考えを持ちはじめたのは、大学時代に出会ったある女性教師の言葉からである。その先生は家庭を持ち、子育てをしながら、研究者として研究も熱心に行なっており、私の憧れの先生であった。ある時その先生と恋愛について話しをしていた際、こう言われたのである。

「谷口さん、将来もし研究者としてやっていくとしても、結婚はした方がいいですよ。研究という世界と家庭という世界の二つを持つことによって、研究で行き詰まった時に家庭という世界で救われることがあるし、その逆の時もあります。私は結婚して良かったと思っています。」

この一言がとても印象的で、それ以来、私は自分の生活を2つの世界に区切って考えるようになったのである。大学時代は「弓道・弓道部」と「学部」という二つの世界。そして、今は「本の世界」と「現実の世界」である。

T：じゃあ、今の和香ちゃんにとって「本」は「弓道・弓道部」と同じ役割を持つものなの？

W：うん。でも、「弓道の世界」が、「本の世界」と同じかって言ったらちょっと違うかもしれない。「弓道の世界」は現実だから、悩みがあるよね。でも、本の中には悩みはないし。あっ、でも、主人公と一緒に悩んでるかもしれない。

T：でも、それから逃げるために現実に戻るということはない。

W：ないない。だって終わっちゃうもんね、話が。

この時まで私の中では、大学時代の「弓道・弓道部」の世界が今の「本の世界」に対応し、大学時代の「学部」の世界が今の「現実の世界」に対応していると考えていた。そして、「弓道・弓道部」の世界と「本の世界」は、「学部」の世界「現実の世界」から逃げるために行くところというイメージが強かった。

しかし、大学時代における「弓道部の世界」と「学部生として生活している時の世界」は両方とも現実の世界である。「学部」の世界で悩みがある時は「弓道・弓道部」の世界へ行くが、「弓道・弓道部」も現実の世界であるため、「弓道・弓道部」の中でも解決できない苦しい悩みを抱えることがある。その時は「学部」の世界に行く。この場合はどちらの世界も対等の役割を持っている。しかし、「本の世界」は現実の世界ではないため、「現実の世界」と「本の世界」の関係は、「弓道・弓道部」と「学部」のように対等の関係ではないのである。「弓道・弓道部」の世界と「本の世界」が必ずしも同じ役割を持っているのではないのである。

しかし、私は本を読むことによって「もう一つの世界」へ行くという感覚をととても強く感じる。なぜ、私は本を読むのだろうか。本を読むことによって「もう一つの世界」へ行くのだろうか。

## 2.2. なぜ本を読むのか？（本を読むことで「もう一つの世界」へ行く理由）

この問題を解くために、まず、YさんとTさんに「本を読む理由」について質問した。

### 2.2.1. Yさんが本を読む理由

Yさんが本を読む理由はなんなのであろうか。Yさんは作家の考えを読み取るのが面白いという。

Y：作家は女、主人公は男の場合もある。それは作家の想像で作られる。そのプロセスが大事である。(作家の)想像力で事実を変えている。作家は自分の考え方や気持ちを(実際にいるかもしれない)モデルにいれて、自分にあった新しい人を作っていく。そうすることによって、未来を予言している(批判したり、評価したり)。そのことを読むのが好きである。

Yさんは、作家の考えを読むことが好きだという。Yさんと私の本を読む理由はまったく違う。私が小説を読む時(読み終わった時も)は、私の中に作家という存在はない。わたしにとっては作家の考えは重要なものではない。本を読んで、または読み終わって、作家の言いたいことを考えるということは国語の授業ではしたが、その当時から面白いこととは思わなかった。

また、Yさんには本を読む理由がもう一つある。

Y：いつも同じ生活であるが、その時本を読むと、その作家の目から見たものが見える。だから、そのつまらない日常的なものが違って見える。それが面白い。日常的な人生も面白く感じるようになる。現実の世界を作り直すことができる。新しい目で見えるようになるから、新しい世界になる。

面白い考え方であると思った。自分の視点に作家の視点がプラスされるのである。しかし、Yさんの「新しい世界」は私の言う「もう一つの世界」とは異なる。Yさんの「新しい世界」は「現実の世界」が元にある。「現実の世界」を作りなおしているのである。Yさんは「現実の世界」が軸にあって、本を読んでいるのだということを感じた。

### 2.2.2. Tさんが本を読む理由

では、Tさんはなぜ本を読むのだろうか。

T：自分の中で欲しいものを本に求めているんだ。たとえば、「がんばんなきゃ」という気分が欲しかったら、悲しい話は読まないで、冒険小説だとかちょっと攻撃的な本を選ぶと思うし、癒しが欲しい時は心が温まる本を選ぶ。で、それで、足りなかった気持ちを埋め込むんじゃないかな。

Tさんの「自分の中で欲しいものを本に求めてる」という感覚は、私が「どんな世界に行きたいか」ということを考えながら本を選ぶという感覚と共通しているのかもしれないと思った。しかし、この後が私とは異なる。Tさんは本を読むことで「足りなかった気持ちを埋める」という。この「足りなかった気持ち」は現実の世界での「気持ち」である。Tさんの「本を読む」という行為もYさんと同じように「現実」という世界が軸にあるという感じを受けた。本を読んだ時の気持ちを現実の世界まで持ってきている。しかし、私の場合は違う。本を読んでいるときは本を読んでいるとき、現実にも物事を考えているときは考えているときと二つは分かれているのである。

### 2.2.3. 私の本を読む理由

では、私はなぜ本を読むのだろうか。ディスカッションの中でこの答えに迫るようないくつかの質問を受けた。

Y: 谷口さんが行きたい世界は実際の世界と違うか同じか、どちらのほうがいいと思いますか？本を読むとき、自分と同じ状況を読んだら、いい気分になるかもしれない。ああ、自分だけじゃない、この人も同じ問題があるんだと思うかもしれない。

W: 現実の世界と違うほうがいい。私は、現実の世界で悩んでいる時、そこをもっと深く考えるために本を読むんじゃないかと、そこから、そこを考えないようにするために本を読むんです。

私はこの質問を受けて初めて、「自分が本を選ぶとき、今の現実に近い本を選んでいるのではなくて、なるべく離れた内容の本を選んで読んでいる」ということに気が付いた。その理由付けを自分なりに行っている。現実の世界を視野に入れて本を読むのではなく、そこから逃げるために本を読む。私が本を読む理由はもっと「精神安定剤」的なもののような気がした。

Y: その世界に行って帰るとき、その他の世界から何か手段をもって現在の問題を解決しようとするんですか？

W: あんまりしないかな？(悩みから)「脱出」するということが大事で、現実の世界が大事だから、現実の世界で考えていることを深めたりとか、深く理解するために本を読むんじゃないかと、ここの世界がしんどいから、この世界から逃げ出して本の世界に入る。(笑) そうしたら、本の中にいる間は、こっちのことを考えなくてもいい。

私は、本を読んでいるときはすごくその世界に入っている。自分が主人公になったような気持ちで、いろんなことを考える。同じように悩む。でも、そこから現実の世界に、意識的には何も持って帰ってこない。無意識として何かは残っているのかもしれないが、意識として、「～を学んだ」という感じは得ない。Yさんは、すべての本から何かを得られるわけではないが、得られる本もあると言っていた。しかし、私は「本から何かを得た」と



いう感じを受けた経験は少ない。

T：和香ちゃんの「もう一つの世界」って、別荘みたいな感じがするんだけど。

W：うん、私もそんな気がする。だって....

T：別荘なんだ。じゃあ、そこには楽しいことしかない？

W：居心地がいいの。

T：安心？

W：うーん。そうかな？安心？

別荘という言葉が私の心に残った。本を読んで行く「もう一つの世界」は別荘のようである。しかし、私が「もう一つの世界」へ行く時は、別荘へ行くいうように道中があるのではない。もっと、空間を飛び越えているという感じが私の中では強い。一瞬のうちに「もう一つの世界」に行くのである。その二つの世界の間には壁のようなものがあり、混じることはない。壁を飛び越えて私が「もう一つの世界」と「現実」とを行き来するというイメージが私の中には常にある。

T：和香ちゃんにとってもう一つの世界っていうのは、何か集中できるものがあるから安心できる場所なんじゃない？現実の世界にいとあれもこれも考えたりとか、考えなきゃいけないから考えるみたいなどころがあるじゃん。だけど、もう一つの世界っていうのは、それに集中することだけが目的じゃん。で、それはその本がおもしろければ、（自分が面白いと思ったものを選んでいれば面白いんだから）集中できるじゃん。普通に。自然に。しなきゃいけないわけじゃないでしょ。

W：ああ、そうかもしれない。目から鱗だ。

T：で、集中することが終わったら戻ってくればいいんですよ。

この会話の後、私の心の中のもやもやしていた霧が晴れたような気がした。ただ違うことに集中したくて本を読んでいただけかもしれない。

たしかに、どの本でも必ずその世界に行けるわけではなく、すごく行きやすい本と行きにくい本があるとは思っていた。それは何が違うのかということは心にあった。それは集中しやすいかしくいのかということなのかもしれない。

W：たしかに、そうだね。集中するためかも。でも、安心できるっていうのはわかんないな。安心かな？安心じゃないな。なんていうか....

T：安心じゃないんだ。安定？不安材料がない？不安でざわざわしない。

W：うん。うん。心の、考えないといけないことがいっぱいあって、でも考えても答えはすぐに出ないことが多いんだよね。で、その心が不安定になってるところを、本を読んで集中することによって、静められるのかもしれない、心の波を。

そうなのである。私は「本を読むことで集中し、集中することで不安でざわざわと波立った心を静めていた」のである。こう考えると、なぜかすべてがすっきりと説明できるよ

うな気がした。

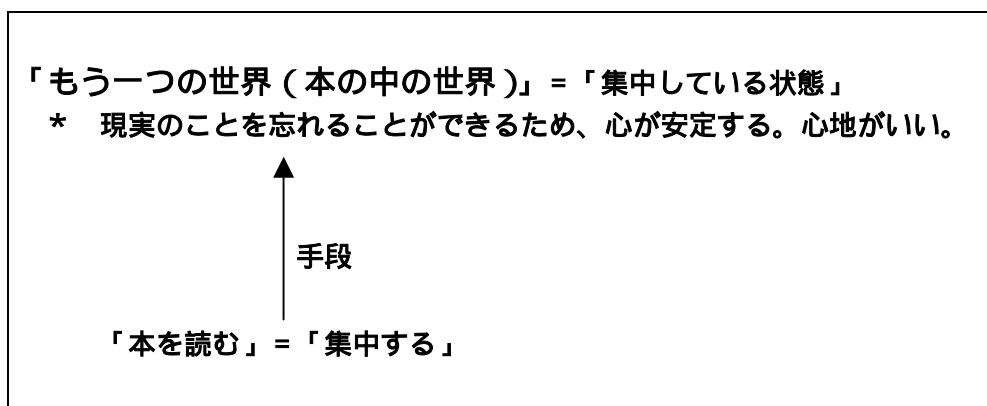
### 3 . 結論

ディスカッションを終えた直後、私の頭の中はスッキリしたように感じた。いままで自分が思っていなかった新しい発見がいろいろあり、私の「本を読むこと」「本」というものに関する考えが、ディスカッションをする前とは、まったく違ったものに変化してしまったと感じていた。

しかし、もう一度「理由」の部分やディスカッションを整理し考え直してみると、私の根本的な考えはまったく変化していないことがわかる。YさんやTさんは「本を読むこと」を「もう一つの世界」に行く手段としては考えていない。ましてや、「本を読むこと」の理由として、2人にとっては「もう一つの世界」という言葉自体も必要ではないのである。私はそれらを聞いた後でも「もう一つの世界」があるという認識を変えることはできなかった。ディスカッションをした後でも、ディスカッションをする前と同じように「本を読むこと」は、「もう一つの世界」へ行くこととして考えているのである。

では、ディスカッションをする前とした後では何が違うのか。スッキリしたと感じたのはなぜなのだろうか。それは、「本を読むこと」に対する意味付けが新たに加わったためである。ディスカッションの時に「集中する」という言葉が出てきた。私にとって「本を読むこと」は「集中すること」なのである。私は、「本を読むこと」、つまり、「集中すること」によって「もう一つの世界」へ行っているのである。

こう考えることによって、なぜ本を読むのかという謎に、新しい解釈をすることができるようになった。「もう一つの世界の中にいる」ということは、「集中している状態」にあるということである。「集中している状態」では、普通、他のことは考えない。集中して本を読み、本に没頭している時（「もう一つの世界」にいる時）は、現実で考えなければならぬさまざまなことを忘れることができる。私はその状態が好きなのである。その状態が心地よく、居心地が良いのである。だから私は本を読むのである。



#### 4 . 終わりに

この活動は、実は私にとって馴染み深いものであった。私は昔から、自分の考えていることを人に話し、それに対するその人の意見を聞くことによって、自分の考えを考え直すという「やりとり」が好きで、日常の会話などで機会があれば行なってきたように思う。その「やりとり」が、いろんなところで自分の考えを深めるきっかけになっていた。自分がこうだと思い込んでいることでも、他人の目が入ると異なる解釈が生まれる。また、自分で自分の考えていることが整理できていないことが、他人の意見によって明らかになる。それがとても面白い。この「やりとり」を行なった後、とても充実した気分になる。

今回は、いままでと違い、意識的にこの「やりとり」を行なった。そして、その考えの変化を記述する。そうすることによって、これまでは、あまり意識したことがなかったのだが、人は「なぜ言葉を話すのか」ということの本質を考えさせられた気がする。「言葉を話す」のは、自分の考えを相手にわかるように伝えるためであり、「話された言葉」は相手の考えをなるべく正しく理解するためにある。そして、この活動から、自分の考えを相手にわかるように伝えることがいかに難しいかということをつくづくと考えさせられた。

このような貴重な経験をする機会を与えてくださった細川先生、ディスカッション相手のYさんTさん、そして、一緒に検討しアドバイスをくださったPNJのみなさんに感謝します。ありがとうございました。

## 番好きな作家はどんな意味がありますか

内容：

1．番好きな作家はどんな意味がありますか

2．ディスカッション

3．まとめ

4． 終わり

## 1. 一番好きな作家はどんな意味がありますか

私は昔から日本作家の小説に関心を持っている。私の一番好きな作家は吉本ばななだ。吉本の小説が日本語で読めるために日本語の勉強をしていると言ってもいいと思う。

私は本当に吉本の考え方に共感が出来る。どうして日本語を勉強をするほどその小説がすきか、ここで教えてみる。

吉本の述べ方は本当に静かな様式である。僕は十七歳ごろにキッチンという小説を読んだ時に何に感動したかあまりわからなかった。その小説はクライマックスがないし、そして話は解明しないで突然終わってしまう。けれども、今まで大体全ての吉本の本を読んでいたので、どうして一体好きになったのははっきりわかってきた。

吉本の小説に共通に言えることは話のはじめに主人公の大切に好きな人が死んでしまったところだ。

それはもちろん辛いことだ。主人公は悲しみありこれからの人生に希望を見出すことができなくいく。

でも、友達のおかげでもう一度自分のことを受け入れて好き楽前向きになる。

話が終わる時、主人公は過去を忘れるのではなくて自分の気持ちが安らいで幸せになる。

吉本はその大切な考えは日常の言語の中に隠す。読者に色々な、一目見てあまり意味を持っていななくて大切なことを見せてくれる。それは彼女が簡単な表現で出来る。

僕はその考え方をとても共感が出来る。悪いことが起こっても諦めてはだめだと思う。もちろん人生のあいだで辛いこともあるはずだ。でも、そのことも受け入れたらもっと安定した生活ができると思う。

私はこれらの小説を読んだことで自分というものを考え直した。すると、主人公と同じ前向きの性質に気付けた。例えば私は絶対諦めない人である。この点は主人公が自分の人生を最後まで諦めない点と同じである。

共通点のために私は吉本の小説、そして考え方に魅せられる大好きなんだと思う。私にとって吉本は共感が感じられる作家であり、だから一番好きな作家だ。

そう言えば、他の人に一番好きな作家がいるか、そして、その作家の小説は読者にとってどんな意味を含んでいるかと聞きたいと思う。

## 2 . ディスカッション :

ディスカッション相手として谷口さんを選んだ。彼女と二回、ディスカッションした。

### 第一のディスカッション :

*私の一番好きな作家は吉本ばななだ。その作家の小説は僕にとってかなり印象を与えている。ディスカッションで谷口さんに一番好きな作家がいるか、そして作家はどんな意味があるかと聞いた。*

私：私は吉本の考え方と述べ方がとても好きだから彼女の小説が好きです。谷口さんは一番好きな作家がいますか。

谷口さん：たくさん本を読んでいます。好きなようなテーマによって小説を選んでいます。一番好きな作家というのはいないです。

私：一番好きな作家がいないんですね。それでは、どんな小説がすきですか。

谷口さん：この頃、徳川時代を舞台にした小説を読みます。特に生活についての描写が好きなのです。

私：読書は谷口さんにとって、どんな意味がありますか。私は本を読んだら本で表されている考えについて考え直したいです。いい本は私に色々なことを考えさせると思っています。

谷口さん：私は現実の世界の悩みを考えないようにするために本を読んでいます。ですからあまり本の中身を考えていません。私はむしろ他の世界に行って悩みを忘れたいと思っています。だから、あまり深くない本のほうがいいです。

私：でも、谷口さんは無意識に本に影響されたことがあるかもしれないですね。

谷口さん：本で影響されているかもしれないですね。ダービットさんは本当にいつも意識的に読みますか。

私：ずっと意識的に本を読んだら読書はつまらなくなりますね。私も時々いやなことを忘れられるようにゆっくり小説を読んでいます。その時に読んでいる物についてあまり深く考えたくないです。

でも、たくさん考えるかそんなに考えないのは本によって違います。よく、小説を読んでしまったあとでどうしてこの本に感動したかとかどうして好きだったかというのは省みます。吉本の場合はそうでしたね。

谷口さん、本当に影響された本は一冊もないですか。

谷口さん：いいえ、本当にないんです。

ダービットさん、吉本小説で自分の考え方は変わってきましたか。

私：変わってきませんでした。吉本の考え方は私のに似ているから凄く共感ができてきました。でも、僕に影響した本もありました。

例えば、ジョージ・オーウェルト との僕のカタロニアという本は私にとって大切な本です。その本はスペインの内戦についての小説です。スペイン内戦は初めのファシズム対する戦争でした。当時にみんなはスペイン共和国側は勝ち目のないとわかっていたのに多くの理想を持っている志願兵はその戦争で一所懸命戦っていました。その本で時々勝ち目がないことについて戦うべきだとわかってきました。それで私の考え方は本当にかわってきました。

谷口さん：その本を読んでみるかな。ダービットの立場はわかりました。私の意見（本について）ちょっとかわってきましたね。

**第一のディスカッションのまとめ：**谷口さんは一番好きな作家はいないからディスカッションのテーマは変わってきた。もとのテーマの代わりに私達は具体的に本の影響について話していた。谷口さんはあまり本の内容について考えたくなくて、寧ろ他の現実の世界と違う世界に行きたい。だから、彼女は本に影響されていないと思っている。

## 第二のディスカッション：

谷口さん：私は平安時代の詩が好きです。詩についてかなり考えています。きちんと仕上がりは少ないんですね。小説のように他の世界にいかないから読みながら詩人が表したいことについて考えています。

私：僕は詩に本当に全然興味がないです。

谷口さん：ないですか。どうして、

私：どうして、わかりません。古い諺に興味がありますけど。本当に理由がない...

谷口：何が無い？

私：理由...

谷口：理由がないですけど、興味がないですって

私：あの、多分誰からとても美しい詩を見せてもらったら興味ができるかもしれないです。一番好きな詩人がいますか。

谷口さん：えっと。。。。

私：一番好きな作家がいなかったね。

谷口：詩人もいないかな。よさの あきこの短歌が好きです。詩に入っている気持ちが凄くわかります。

私：僕は一年間、古典の授業を受けていました。つまらないと思いました。いつでも、恋人とか自然などについてという中身があるから。。

谷口さん：ああ、そうか。。面白いですよ。

私：大体、似てるから読んだら読むほどつまらなくなるんです。

谷口：ええ、読んだら読むほ私は凄く何か。。

私：平安時代の詩人は他の詩人からコピーしていました。一つの詩だけ読めば美しいけど。

谷口さん：でも、実はコピーだって、その方法で読者はもっと詩の気持ちがわかる。。私はそんな気がします。

私：かもしれないですね。

谷口：私は平安時代の人の感じ、絶対、自然か恋とか恋人のこについて感じの感覚が凄く好きなんです。今の人の持っていないものが多いですね。平安字時代にのんびり、のんびり生活していますよね。そうすると何か本当に、雨が降ってきても感動したり、朝の空気が良い匂いをして感動したり。。私はそんな詩に感動しています。

**第二のディスカッションのまと：** 驚いたことに詩の場合は谷口さんは内容についてよく考えたいらしい。詩は一般的に小説よりもっと抽象的だからかもしれない。

### 3 . まとめ

私のディスカッションの目的は他の人に一番好きな作家があるか、作家はどうして好きかと聞いて、そして教えた説明は私の一番好きな作家についての考えと比べるということだった。けれども、私のディスカッション相手は一番好きな作家がいなかったからディスカッションテーマは少し変わってきた。もとのテーマの代わりに、私たちにとって本はどんな意味があるかをディスカッションしていました。その新たなテーマによって谷口さんの立場をわかってきた。それに、谷口さんの立場で私はどうして好きな作家があるかということももっとはつきりわかってきた。

谷口さんは本で他の現実の世界と違う世界に行きたい。そして、本で現実の悩みを一時的に忘れて見ようとしている。そんなような機動があれば、一番好きな作家という考えはあまり意味がないかもしれないと思う。その場合があればただ楽しく読



める話しのほうがいいだろう。私も時々そんなような小説でよくリラックスしている。

けれども、私は本の中で共感ができる考えが捜している。その考えが見付けたら本を書いた作家が好きになってその作家に書かれているその本を読みたい気持ちが出てくる。だから、私は一番好きな作家がいると思う。

ディスカシヨンの間に、本当に面白い点が出てきた。谷口さんは詩を読んだら詩人の表したいことについて考えたいということだ。詩の場合は谷口さんの考え方は私の本について考え方と本当に似ている。

詩は本より観念的だから谷口さんは詩で本のような同じ他の世界に行けない。だから、詩人の気持ちや、表したい考などを頑張って考えている。

その立場は本当に面白い。私は詩より作家達が小説でもっと詳しく詩文の考えを読者に教えていると思う。逆に、谷口さんは本より大切な意味が含んでいると思っている。私は詩にあまり関心を持っていないが彼女の立場は良くわかった。谷口さんのおかげで少し興味が出てきた。そして、谷口さんは私の立場がわかってくれた。

#### 4 . 終わり

ディスカシヨンはとても面白かった。自分の考えは他の人に教えることは難しいがとても楽しい。総合授業のおかげで、自分の日本語能力について省みた。良く私の弱い点がわかってきた。

授業で先生に中断されなくて、訂正されない方法はいい点と悪い点があると思う。一方、その方法でもっと流暢に話している。他方、大変な文法の間違いのせいで、私の言いたいことは相手にわかられない時は先生から訂正して欲しい。あまり大変ではない間違いがあれば、中断しない方法は本当にいいと思う。けれども、私達は時々、その方法のせいで、ディスカシヨンの時間をむだにしまった。

## 「私と剣道」

シュルツェ・マルコ

1. はじめに
2. ディスカッション
3. 結論
4. 終わりに

## 1. はじめに

私はドイツのライプチヒという町の大学で日本学とスポーツ学を勉強しています。三年前から道場に住んでいます。それは少しおかしく聞こえるかもしれませんが。なぜ私がここに住んでいるかをこれから説明します。

私は旧東ベルリンで生まれ育ちました。東西ドイツが統一した時、新しい物がたくさん私の故郷に入ってきました。その事は私の生活を大きく変えました。そして短い間に将来の目標を失ってしまったのです。その頃私は一人の日本人男性と知り合いました。彼は剣道の先生でした。先生が剣道と人生の思想について話した時、私は大変感動し剣道を始めたいと思ったのです。それは十二年前のことでした。その時から先生が日本に帰るまでの間、先生は私に剣道を教えてくださいました。先生の帰国後私はライプチヒの道場にトレーナーとして剣道を教えながら住んでいるのです。

私は旧東ドイツで育ちました。学校の先生は私に「自分のためだけではなく、国のためにも生きなさい。」と教えてくれました。なぜなら、社会が私のために責任を負っているから私も国のために責任を持たないといけないからです。私にとって子供の頃社会が自分を必要としているという事がとても誇らしく思えました。そして東西統一は来ました。テレビで私の国は悪い国だっているいろいろな人間に対する罪を犯した事を見ました。私は先生が信用できなくなりました。その時、今までのいい事は悪い事になったのです。人々の生活目標は変わり、多くの人々がスピードの出る自動車を欲しがりました。その時から人間関係よりも新しいステレオやモダンなマンションの方が人々にとって大事なことになりました。みな自分のために暮らすようになりどうしたらたくさんのお金を稼ぐことができるか考えていました。しかしその時たくさんの人々が失業し、また借金も負いました。誰もが仕事を手離さないために必死でした。仕事でのいじめは日常的になりました。その混乱の時代に苅田先生と知り合ったのです。剣道を通して苅田先生は私にすでに失ってしまった理想に新しい視点から、気付かせてくれました。これが私の人生を大きく変えたことです。

幸せは買うことも無理やり取ることもできません。幸せとは、例えば喜びや悲しみをお互いに分け合うことができる友達を持つことです。それで私は次の話を思い出します。この話は当時苅田先生が私に話してくれましたが、内容を全て正しく覚えているかは確かではありません。

「ある一人の画家が海岸で散歩をしている時とてもきれいな朝日が見えました。その美しさに感動して絵を描き始めました。朝日の絵を描きながら彼の絵を描く技術はだんだん上手になりました。最後には画家の絵は本物のようになりました。しかし、その後その画家

は自分の幸せの気持ちを他の人と分け合いたいと思いました。彼の絵を見た人のびっくりした、感動した顔を見ることによって初めて画家の喜びは最高になるでしょう。何のほうに幸せですか、他の人を幸せにするために？

剣道では始めに技術を勉強しなければなりません。そして出来るだけ速くきれいな技をするようにします。しかし早い技だけで相手に勝とうとすることは十分ではなくなります。相手の心に触れたいと思うようになります。その時から本当の剣道が始まります。」

剣道は日本の伝統的な武道です。剣道は日本の歴史から生まれました。昔、侍という武士は戦争の時に刀を使ったものです。戦いの練習で刀を使うことはあぶないですから、刀が竹刀に変わったのです。竹刀は4本に割った竹を刀のように作ったものです。刀のように二手で使えます。竹刀で目の前の相手を打ちます。剣道をやる時、体を守るために防具を言う道具を身に着けます。

剣道を通して先生から学んだ私にとって重要なことは三つあります。これら全ては剣道だけではなく、私の人生においても言えることです。一つ目は、一度しかない人生を大切に過ごさなければいけないということです。自分が手に入れたチャンスを無駄にしてはいけません。剣道でもチャンスはとても大切です。しかしチャンスはいつもあるとは限りません。相手を打つ時、速すぎても遅すぎてもいけません。ちょうどいいタイミングを見つける必要があります。その時が来たら、迷ったり、怖がったりしないですぐに相手を打ちます。そのためにはいつも集中することが大事です。

二つ目に重要なことは、自分の気持ちと相手の心を理解することです。剣道は一人ではできません。相手が必要です。そして相手は心をもっています。力だけ、あるいは動きが早いや、またトリックだけで勝つ人は剣道を理解することが出来ないと思います。剣道をする時自分の気持ちを相手の気持ちが分かり合えます。もし自分の気持ちが分かると相手のすきを見つけることができるのです。例えば、もし私が何か相手からもらいたいと思った時、まず先に何かいい物を相手にあげます。なぜなら、自分が誰かから何かもらえば、私もその人にお返ししやすいということを分かっているからです。しかし、あげる後相手から私が欲しい物をもらえなくても気分を悪くするのははいけません。相手は機械ではないです。何か物をあげたら自動的にもらうとは限りません。始めから、相手からもらえるかもしれないと希望してはいけません。相手はどうやったら分かるのでしょうか。なぜ最初顔色いいの友達が急に顔色が悪く変わったか。

三つ目に大切なことは、危険があっても勇気でまっすぐ進むことです。もし、トラの赤ちゃんが欲しいならトラの穴に入らなければなりません。人生はいつも変わるので安全が100%ではありません。幸せになるために時々危険のところにも行かなければならないのです。剣道でも勝つために危険を冒さないといけない時があります。その時に勇気が必要です。

苅田先生を通して、私がもし自分のためだけに生きていたら私は幸せになれないということを学びました。そして剣道のおかげで人生にはいつも何か目的が必要でその目的に向かって努力するべきだということに気がきました。

## 2. ディスカッション

剣道をやっている人から剣道についての考え方や体験を聞いてみたいと思いました。ファンさんと私は留学生として一緒に早稲田大学の剣道部に入り頑張っています。

私：いつから剣道をしていますか。

ファンさん（以下フ）：私は8年前から韓国で剣道をやっています。

私：どうして剣道を始めましたか。ファンさんも剣道を通じて作文に書いたような体験をしましたか。

フ：特別な理由はありませんでした。剣道を始める前私は毎日ジョギングや他のスポーツをしていました。ある日友達は私に剣道の練習に一緒に行かないかを聞きました。剣道以外のスポーツでも別によかったのですが、私は友達と何かをして一緒に過ごしたかったので剣道を始めことにしたのです。

私：ファンさんにとって剣道は何ですか。何か特別な意味はありますか。

フ：私にとって剣道はあまり特別な意味はありません。剣道は他のスポーツと同じようなものです。他のスポーツが健康にいいのと一緒に剣道もそうです。私は剣道を通して今まで人生の目標について考えたことはありません。毎日剣道を一生懸命やっただけで自動的にいい人になれないと思います。人生の為にいい点を学ぶためにはいい先生が必要です。何かのスポーツをするかは関係ありません。

私：それは正しいと思います。でもファンさんにとってけんどうをする目的はファンさんの健康や友達と一緒に楽しい時を過ごすことですか。

フ：はい、そうです。私にとって剣道はひまな時にするスポーツです。スポーツすることで毎日のストレスとのバランスがとれるはずで。剣道の練習は、始めと終わりに黙想をし、きびしい練習と強い気合によって全ての不安を忘れることができるのです。その時他の世界に入るような気持ちになります。

私：しかし剣道はいつも楽しいと思いますか。例えば寒稽古（1月の1週間毎日朝6時から7時からする練習の事）や、かかり稽古はどうですか。

フ：そうですね、えーっと、かかり稽古をする時と寒稽古の時はきびしい時です。かかり稽古によって技とコンディションがよくなるだけではなく、我慢する心も強くなります。かかり稽古をする時は、いつももと立ちという相手に強い気合で休憩無しで打ち続けなければなりません。その時先輩のもと立ちは私達にとっても大変でいじめのような稽古をさせます。

私：先輩は後輩に体当たりをして転ばせて、竹刀で打ったりもします。先輩は鬼のような人だと思うこともあります。後輩はきっと地獄の中にいるような気持ちになっているでしょうね。

フ：その通り。でもそれを通して私の心が強くなると思う。しかし、剣道をする時、打つためのいい機会を見つける方が、人生の中でチャンスを見つけるより簡単でしょ。人生は長いのでチャンスもたくさんある。どれがいいチャンスかをみわけるのは難しいです。

私：人生の中にたくさんあるチャンスを見分けるのは難しいですが、剣道を通してチャン

スは逃してはいけないということを私は学びました。どんなに小さなチャンスでも人生の為に大切です。例えば、旅行をする時バスの窓から突然本当に美しい景色が見えたのに、すぐに写真を撮らなければ後で友達にこのきれいな景色を見せられません。それは残念ですね。

フ：でも、でも…。 （つづく）

### 3 . 結論

私にとって剣道は特別な意味を持っています。でももちろん剣道をやっている人たちはそれぞれ、剣道を通して自分の目標を探しそしていろいろな体験をし、剣道についての思想を持っています。ファンさんの考え方が分かります。私もそう思います。しかし私にとって剣道は単なるスポーツではないのです。日本に来てから私はいろいろな所で剣道をしました。今は周期的に早稲田大学の剣道部の学生と一緒に剣道をしています。剣道部の学生はとても親切です。剣道の練習は面白いですが、同時にきびしいです。もし私がドイツに帰国したら日本の剣道の教え方についてドイツで伝えたいです。そしてそして私の体験をどいつで剣道のトレーナーとして教え続けていきたいです。

### 4 . 終わりに

今回この作文を書くために私は剣道についてもう一度よく考えることができました。私にとってとてもいい機会でした。ディスカッションに協力してくれたファンさんと、私の作文を手伝ってくれた同じグループの人たちにとっても感謝しています。ありがとうございました。



# 旅行と私

韓 惠 貞(ハン ヘ ジョン)

1. 動機
2. ディスカッション
  - 2.1 旅行から達成感を感じられるのか
  - 2.2 旅行は小さい幸せ
3. 結論
4. 終わりに

## 1. 動機

私にとって旅行は特別な意味がある。それは旅行のお陰で私の性格が変化するとともに私の生活にも大きな変化があったからだ。

私は小さい都市で生まれ、ずっとそこで育てた。私が生まれたところは少数の人口が住んでいる地方の小都市だ。それで成長しながら私が見たのはその小さい町で見たのが全部だとしても言い過ぎではない。

私は20才まで一人ではどこへも行ったことがほとんどなかった。素直に言えば一人では行けなかった。それほど子供ごろ私の性格は内気な子だった。内気な性格だった私が日本に来る前に6年間旅行会社で働いたことがある。

大学の卒業を目前にして旅行会社で1ヶ月間アルバイトをする機会が与えられた。私は引込み思案だが学生時代には旅行に興味があるから社会人になればぜひ、観光に関係がある仕事をしたいと思っていた。それで私にとってはいい経験になると思った。

1ヶ月間いろんな業務を学びながら私はだんだんその仕事に魅力を感じて卒業した後も旅行会社で仕事を続けることにした。私の性格の欠点を克服できる機会になるかもしれないと思ったからだ。

旅行会社の社員になった1ヶ月後、初めに一人ではなく添乗人として10名の団体を連れて海外出張する機会が与えられた。しかしそれはまったく不可能ことだと思った。

初めて出張する予定地は香港だった。出張する何日前、不安のせいか夢の中で人々とともに香港の空港であちこちに迷っていたことだ。あるいは過ちでもするのではないかと心配になった。しかし実際には思ったように事故は起こらなかったし、ミスもなかった。むしろどんなこともなくて無事に帰られた。思いよりあまり大変な仕事ではなかった。それからますます出張の機会が増しながら自信がもてるようになった。

二つ目の出張地はタイだった。タイに到着する時、柔らかい雰囲気はなかった。なぜかというタイもその時までは見知らぬところだったからだ。初めて行ったところだったからだ。空港に到着すると、現地ガイドさんという人が私たちを待っている。それから私たちをホテルまで案内する。私とともにホテル手続きを済んだあと、ガイドさんは家に帰る。

その日、バンコクに着く時間が遅れてツアーは明日に延ばすことにして、まっすぐホテルに行って荷物を部屋に置いた。私も部屋に入ってホットして横になったとたん電話のベルが鳴った。お客さんの電話だった。「ハンさん、バンコクに行ってみてもよいところがあったら一緒に行きませんか」と言ったことだ。私は添乗人だから断ることはできなかった。私はおろおろしていた。しかし仕方がなかった。私たちはホテルのロビーに集まってあてもなく出かけた。

私はタイ語も全然分からない状況だったが何日前から簡単な挨拶ことばとか数字などは勉強しておいた。とりあえずタクシーに乗って運転手さんに一番にぎやかなところへ案内してくれるのをお願いした。それから私たちはある露天カフェでビールのいっぱいずつ飲んでホテルに無事に帰った。大変なことではないからそんなに心配する必要もなかった。

今は空港とか街で迷う夢も過ちをするような心配もないで新しい所を行っても「今度はどんなところかな」と心がわくわくする。

そうしながら6年間のそんな仕事を通じて経験したのが私の性格をちょっと変化させてくれると思う。さまざまな国を歩き回りながら、いろいろな人たちと会いながら経験したのが気弱な私の性格を変化させるきっかけになった。ひょっとすると私が現在日本にいることもそんな理由かもしれない。

もちろん私の場合は旅行だけじゃなくて仕事の一部として旅行をしたけれども一人で旅行するより添乗人として役割は私の以外の人の安全まで責任を負わなければならないから私の性格が強くなったことにしたきっかけになったと言える。

子供の時、一人ではどこでも行けなかった私、今は趣味が旅行になって暇があったら一人でも行く。去年12月一人でバンコクに行けるようになった。ただ二日間の一人の旅行だったが、私にとって生涯に忘れられない思い出になるかもしれない。

だから私にとって旅行というのは私の内気な性格だけでなく、今は一人でどこへも行けるようになるほど、私の生活にも大きな変化を与えてくれたことである。

## 2. ディスカッション

### 2.1 旅行から達成感を感じられるのか

初めのディスカッションの相手は他のグループの冴里さんだった。冴里さんは私よりも旅行の経験も多かったし、私が全然経験できなかったこと、私はまだ一人では怖くって行けないところを行ったことがある人だったくらい、旅行にたくさん興味がある人で、私が感じたことを理解できて、お互いに共感するディスカッションだったからおもしろかった時間だった。

冴里さん：このテーマについて書いた理由は？

私：ええと、私は日本に来る前、旅行会社で添乗人として働きながら、内気だった私の性格が旅行のおかげで変化したからです。

冴里さん：具体的に旅行がハンさんの何を変えたのですか。

私：動機に書いたとおり、子どもごろ私は引っ込み思案だったから、一人ではどこへも行けなかったんです。しかし、今は一人で旅行するほど、自信を持ちになったからです。

冴里さんも旅行したことあるでしょう？では、冴里さんは旅行する時、何か感じたところがないですか。

冴里さん：はい、もちろん、あります。私も旅行大好きです。私は一人で中国を一ヶ月間旅行したことがあります。初めには友達と一緒に行了きましたが、途中、友達と離れてあまり期間は一人で旅行しました。食中毒で苦しかったんだけどおもしろかった旅行でした。

私：一人で？危ないじゃないですか。

冴里さん：うん、もちろん危ないですよ。その時、私のカバンからカメラを取り出して行っちゃった人もいましたから……でも、私の場合は他の人々があんまり行かないところを旅行するのが好きです。それでウズベキスタンも一人で一ヶ月間旅行したことがあります。そんな所を旅行した後の気持ちは私が何かを達成したという気持ちです。

私：うん、そうです。私も旅行をしながら、冴里さんも同じにそんな達成感を感じました。それが自信を持ちになってきた理由です。

冴里さん：そうだとすれば、ハンさんは旅行の以外の、他のことについてはそんな感じ、達成感を感じた経験はないですか。

私：達成感というのはもちろん、旅行するだけで感じられることはないと思います。スポーツとか勉強とかしながらも感じられるからです。例えば、私が水泳を習った時、四ヶ月間水泳を習いながら、初めには水面に浮かぶことさえできませんでしたが、四ヶ月後、休まないで、ずっと500メートルをぐるぐるすることができた時もそんな達成感を感じられました。しかし、旅行によって感じた達成感はスポーツを通じて感じたことはちょっと違うと思います。なぜかというと、スポーツは私、自分との戦いの反面、旅行とは私の以外にも自分で克服すべきことが多いからです。水泳の場合はプールという小さい空間です。スポーツで特別に何か起こられることはない、起こられることを予想できると思いますが、旅行の場合は、次は何が起こるかは全然わからないからです。例えば、冴里さんのみたいに誰かがカバンからカメラを取り出して行っちゃうことも起こられるし、道に迷うこともあるかもしれないから。特に私の場合は自分ではなく、添乗人としてお客さんたちまで責任しなきゃいけないから、そんな問題が発生する時、私が解決しなきゃいけないから、旅行を通じて感じた達成感がもっと大きいじゃないかと思っています。私の場合は一人です。水泳をより旅行にもっと達成感を感じられました。

冴里さん：では、ハンさんが旅行で持ちになってきた自信感は旅行だけでなく他の部分でも何でもできる自信感、新しい環境を作り出せる力で表現してもいいでしょうか。

私：そうです。旅行を通じて自身を持ちになってきて、今は何でも心配しなくていいです。だから、旅行は私にとって特別な意味があると言えます。

冴里さんとのディスカッションを通じて私が旅行のために得たことを一つの言葉で表れた。それは達成感である。冴里さんの質問したこと、旅行とその以外ことがどのように違うかということについて私は旅行とはスポーツとか勉強とかは明らかに違うところがあったということをつかんだ。



それはスポーツ（ここでは一人でするスポーツを言う）との違って、旅行は自分ではなく、予想できないことも起こられるから、旅行の方が感じられる達成感ももっと大きいと思う。特に、私の場合は添乗人として他の部分、お客さんの安全まで責任を負わなくてはいけないから、私が旅行によって感じられる達成感ということはもっと大きく感じられる。

## 2.2 旅行は小さい幸せ

私の二つ目のディスカッションの相手は同じグループの星野さんだった。私の総合の授業を始めからずっと見てきたから誰よりも私のテーマについて十分に理解できる相手だと思うから私が特別にお願いした。

星野さん：ハンさんがこのテーマについて言いたいことは何ですか。

私：簡単に言えば、いろいろ経験できる旅行によって、私の気弱な性格が変わったから、今は新しい環境でも、何でもできるという自信を持ちになってきたということです。私の場合は旅行によって達成感を感じましたが、星野さんは旅行を通して何を感じましたか。もちろん旅行したことあるでしょう？

星野さん：そうです。私も旅行を大好きです。私はポルトガルとスペインを一人で旅行したことがあります。一ヶ月くらい、一週間は友たちの家で泊まりながら、三週間は一人であちこち見回しました。私が旅行する一番大きい理由を一つの言葉で表すと好奇心からです。具体的に言えば、知らないことを知りたい、新しいことを見たい、旅行のパンフレットを見て、それを目で見たいということです。また、いろんな人とか知らなかったことを接することが楽しいから旅行をします。

私：そうです。星野さんが言ったことの中で、私はいろんな人を接することが楽しいからということについて共感します。私の場合は仕事で旅行をしましたけど、その仕事をしながら会うお客さんたち、またいろんな国を歩き回りながら会う人々を接するが楽しかったですよ。

では、旅行をしながら、また旅行をした後は何を感じることはないですか。

星野さん：旅行を通じて小さい幸せを感じられます。私がスペインに行った時、何かを買うために店に行きましたけど、私はスペイン語を全然知らなかったからガイドブックを見ながら言いました。でも、お店さんが笑ってくれたとか、私が道に迷っているのに過ぎて行った人が親切に道を教えたとき、私は本当にうれしかったです。そんなことについて私は小さいけど幸せを感じました。だからと言ってそんなうれしさだけあるのではないでしょう。旅行をしながら、いやなこと、大変なことあるでしょう。でも旅行を終わって家に帰えた後、振り返って見ると、大変なことが10個あって、うれしいことは3個がある場合、どんなに大変なことが多くても、3個のうれしさがすごく大きく感じられます。

私：そうです。旅行を経験した人なら誰でも、星野さんのように幸せを感じたことがあると思います。旅行をしながら日常生活では感じられない小さい幸せを経験したことが多かったです。私もそんな経験を全部言えませんが、例えて私が動機の部分で私の出張の経験を言ったように、私がタイに行ったときタイ語を

全然分からなくてもお客さんたちを連れてあちこち見回った後で感じたうれしさ、私がやったという満足感が、星野さんが感じた幸せがないかと思えますけど。その幸せが、私が旅行によって、何かを達成したとき感じた幸せだと言ってもよいか分かりません。

星野さん：うん、全然関係がないとは言えません。関係があるでしょう。新しい環境で自分が初めて接する状況についてそれをやったとき感じられる達成感、満足感が幸せだと言えるから。

星野さんとディスカッションをしながら私が気づいたことは旅行を通じて感じた達成感、その達成感というのは小さい幸せから来たと言ってもいいだろうと思った。私の場合は仕事だから星野さんの場合のように好奇心から旅行したことはないですが、旅行をしながら発するいろんなこと（自分との戦いではなく、私の意志だけでは仕方がなかったこと）を解決しながら感じたことから星野さんが言ったように小さい幸せを感じたとしてもいいだろう。私はそれを達成感という言葉で表れたが、星野さんとディスカッションを終わった現在はそれを小さい幸せから感じた達成感と言いたい。

### 3 . 結論

私にとって旅行は私の性格が変化するとともに生活にも大きな変化があったから特別な意味があることだ。それがディスカッションをする前、私が旅行から得たものだと考えた。しかし、ディスカッションをしながら私が考えたことの以外にも私が感じられなかったことを私の相手を通じて分かった。それは、一つ目は旅行から得た、自信がもてるようになってきた達成感である。達成感というのは旅行の以外のことから感じられることだ。しかし、旅行から得た達成感と他の事から感じた達成感はどのように違うのか。それは同じ達成感でも旅行の場合は予想できなかったことも起こられるし、危ないことが多いから、旅行から感じた達成感はずっと大きく感じられることだ。また、二つ目は旅行を通じて日常生活からは感じられなかったところ、それは小さい幸せである。もともと旅行というのは人が自分の日常生活を脱け出して新しい環境で新しい経験することだと思う。だから旅行しながらささやかな経験、例えば、店で買い物こと、道で迷うこととか、その時、自分が何をやった時、感じる気持ち、それがささやかな部分かもしれないけど、小さい幸せを感じられることだ。私の場合は旅行を通じて大きく得たと考えられたことは私の性格や生活の変化だと思われませんが、人々は自分の経験によって自分にもっと大きく感じられる部分が違いだと思った。

### 4 . 終わりに

私は日本語は言うまでもなく母国語でも作文をするのが下手なので、この授業は私に苦しい時間になるだろうと思った。しかし、授業が繰り返しながら、私のグループの皆さんからもらったアドバイスは私がレポートを書くことに多く影響をくれた。だから、このレポートは私が一人で書いたものではなく、【ものがたり】グループの皆さん、今井さん、星野さん、チャンさん、ファンさん、ヒメナさん、ダグさん、ヤシャーさん、オレーナさんのおかげでできたものである。皆さん、ありがとうございます。また、このレポートを書くことは、私の仕事、それで私の生活だった旅行について、広い意味で私の人生を振り返るきっかけになった。

# 私と料理

アルベル デェルリ

1. 動機
2. ディスカッション
  - 2.1 あなたにとって料理は何ですか？
  - 2.2 他の人に作っているか？
  - 2.3 作っている時の気持ち
  - 2.4 “料理は心の鏡である”について
3. 結論
4. おわりに

## 1. 動機

初めて料理を作ったときは、今から6年前、大学1年生のころだった。そのとき、それまでいつも母の料理を食べて育った私、料理について何も知らなかった。料理はどこでもある、誰でも作れる簡単な物だった。しかし大学に入って、一人暮らしになってから、私の料理についての考え方が変わった。入学した大学は実家から遠かったので、あそこで会った友達と家を借りた。最初のころは外で食べたけど、お金が足りなくて自分たちで作るように決めた。そこで一生懸命がんばって、作ったのは、今まで食べた食品の中で一番不味かったのだった。“この料理は人間が食べられる物じゃない”と思った。そこで私の料理について考え方が変わった。”生きるためにもっと美味しい物を作らないと”と思った。

最初の一ヶ月、味が相変わらず最低だったが、その後だんだん美味しくなってきた、自分が作っている料理を他の人たちにも食べさせたいと言う気持ちが強くなってきた。ある日10人ぐらいの同級生がうちへ食べに来た。“これはチャンスだ、彼らに今まで食べたことがないぐらい旨い料理を作るぞ”と思った。ある材料を自分の気持ちと混ぜ、自分でもびっくりして“これ旨いなー”と言うぐらいの美味しい物を作った。皆帰ったら、頭で残ったのは、友達が一口食べた後の表情だった。それはどんな表情だと聞かれても、ちゃんと説明できないと思う。それからずっと、今でも周りの人が料理を食べている、最初の一口の印象を見るのは癖になった。あの5秒ぐらい短い時間の印象を見るのは、私にとって凄く大切なことだ。

ところで、大学を卒業して、日本に来た。日本語を勉強していた時、経済的に“アルバイトしないと”と思って、あるイタリアンレストランに入った。大学生の時は趣味としていろいろなレストランでアルバイトをしたことがあったけれど、日本の場合はどうか、知らなかったから、ちょっと緊張した。働いた時何でも上手くいったのだがあの表情を見られなかった。料理は全部もう決められた物だったから自分の気持ちを料理と合わせる事はできなかった。“どうしよう、もう面白くない”と思い始めた二週間後でトルコレストランに引き

抜かれた。そこでは自分のアイデアを生かして、自由に料理を作る事ができた。料理を通して、いろいろな事を表現する事ができるようになり、それを食べる人の表情を見る事によって、心と心が通じ合い、無言の会話をしているようにさえ、感じられる。

ですから、私にとって料理は心の鏡である。

## 2. ディスカッション

ディスカッションの相手には同じ日本語別格生であるエレナさん、ミヤさんとイワンさんをお願いした。エレナさんは“外国人の私について”というレポートを書いている。自分はロシアのエレナじゃなく、エレナだけで呼ばれてほしい。ミヤさんは“建築と私”というレポートを書き、料理に興味がある。イワンさんは、“趣味について”というレポートを書いている。彼とも面白い話をし、趣味と興味の違いについて、ディスカッションをした。

### 2.1 あなたにとって料理は何ですか？

アルペル：自分で料理を作ってるんですか？

イワン：自分で作ってるのはカップラーメンぐらいです。私料理できない。面倒くさいし、作っても不味いし。

アルペル：じゃ、どうするんですか？

イワン：外食。ヨシノヤとか安くて美味しい。

アルペル：え？ヨシノヤ美味しい？

イワン：はい。他のレストランであまり食べない。知らない料理はあまり良くない。だいたいヨシノヤみたい所で食べてる。

アルペル：料理はイワンさんにとって何ですか？

イワン：生きるためのもの。

アルペル：エレナさんはよく料理を作りますか？

エレナ：一週間に3回ぐらい外食ですけど、あまり外食するとおなかも財布も壊れちゃう。自分の料理を食べないと落ち着けない。ほとんど自分で作ってる。上手じゃないけど、食べたら大丈夫な感じがする。

アルペル：料理はエレナさんにとって何ですか？

エレナ：ロシアに諺がある。食べるために生きていくじゃなく、生きていくために食べる。でも私逆に食べるために生きてる。(笑い)本当に料理が好き。特別に食べるのが。食べ物がないとやだ！

アルペル：料理を作れますか？

ミヤ　　：はい、料理作るのが大好き。上手かどうか分からないけど。だいたい簡単な料理を作ってる。

アルペル：作るのはいつ始まったんですか？

ミヤ　　：大学に入って、友達と家を借りたとき。でも日本に来てからもっと上手になった。食品は高いからかも。

アルペル：料理はあなたにとって何ですか？

ミヤ　　：楽しいこと。

イワンさんと話、私にとって料理は生きるためのものだけじゃないと感じた。みんな料理を作るわけじゃないのは分かるけど、ミヤさんのように料理は一言で楽しいことと私も思う。ロシアの諺まで入った料理について、エレナさんも面白いことを言った。“私は食べるために生きている！”

実はトルコでも料理について諺がある。“空腹で物見遊山するよりも、食べ過ぎて死んで方がまし！”

私、よく理解できなかつたのはイワンさんの“知らない料理はあまりよくない”という言葉である。反対に今まで食べたことがない料理を食べるのはいいと思う。

そしてミヤさんは私と一緒に、大学へ入り、友達と家をかり、その頃から料理を作り始めたのはよく似ていると思った。

ちなみに、エレナさんに言いたいことは、私も食べ物がないとやだ！

## 2.2 他の人に作っているか？

アルペル：自分が作って食べるか、友達に食べさせるか、どっちが好き？

ミヤ　　：自分で作って、自分で食べるの好き。

アルペル：もし作ってる料理は不味かったらどうしますか？

ミヤ　　：他の人のためだったら悲しい。自分のためだったら、それいっぱいあるな。(笑い)でも不味くても俺食べる。もったいない。ぜったい捨てない。やだ。店はよく捨ててる。それを見るとやだと思う。持ち帰ればいい。今までもレストランで料理を残したことはない。アルペルさんは？

アルペル：一回だけある。その時料理は不味くて、入ってる肉はまだ生だった。それを何も言わず、そのまま残して帰った。

アルペル：友達によく作ってるんですか？

エレナ：ロシアにいた時、ほとんど毎日友達がうちに来た。彼らは自分で料理できない学生たち。私の作ったものを好きだった彼ら。

アルペル：友達が食べていた時、何か美味しいかどうかと気にしたんですか？

エレナ：そうですね。でもおなかが空いたら何でも食べるんじゃない？美味しいかどうか分からなくなっちゃうから。ただ食べ物なら...私ちゃんとした料理を作れない、簡単な料理だけ。でも、一回日本で100人に作ったことがあります。そしてロシアにある材料と、日本にある材料が違うけど、その時食べたロシア人は“美味しい、懐かしい、こんな料理は何年ぶり食べたことない”と言われた。すごく嬉しかった。

エレナさんの友達とミヤさんの似ているところは、美味しくても、不味くても食べることである。私もなかなか残せず何でも食べちゃうタイプだが、初めて作った料理みたいのを食べられないと思う。

私は“料理は心の鏡”だと思っているのでミヤさんと反対に他の人に作るのが好き。料理は相手の気持ちと自分の気持ちが出会うところだと思う。エレナさんの例にあるように食べている人の懐かしい気持ちと、エレナさんの作っている瞬間の気持ちが料理で出会い、結果はみんな嬉しい。

### 2.3 作っている時の気持ち

アルペル：友達に料理を作ってる時どんな気持ち？味は機嫌がいい時と悪い時、どう違う？

ミヤ：もちろん違う。機嫌がいい時もっと美味しく作れる。

アルペル：料理を作ってる時の気持ちが大切ですか？

エレナ：料理を作る時喧嘩しちゃぜったいだめ！喧嘩するとぜったい不味くなる。たとえば、母はケーキを作っていた時私と喧嘩したことが何回もある。その時ぜったいケーキが上がらない。ウーと上がってもプーになっちゃう。(笑い)

アルペル：なるほど、何か作ってる時気持ちが大事だね。

エレナ：そうですね。たとえば、家族で一番料理が上手だったのはおじいさんでいつも歌いながら料理を作ってた。いつも美味しかった。

ミヤさんもエレナさんも、私と同じように、料理を作る時気持ちが大切だと思っている。同じ材料を使って、同じように作っても味はぜんぜん違うのは間違いない。機嫌が悪かったらエレナさんのお母さんが喧嘩しながら作っていたように、ケーキがウーと上がって、プーと下がっちゃう。

エレナ：トルコで男ってよく料理を作る？

アルペル：一人暮らしだったらしょうがない。

エレナ：結婚したら？

アルペル：一緒に作ってもいいんじゃない？

エレナ：一緒に作る（？\_？）私だったら一緒に作るのなんか、“あんたじゃまだ、出て行け”（大笑い）私料理を作ると自分で決めないと。何が入れるとか、どうやって作るとか。それじゃないと“じゃ、任せます”。

エレナさんはどのように強く言っても、私は一緒に作るのもっと楽しいだと思ふ。

#### 2.4 “料理は心の鏡である”について

アルペル：作ったら表情を見ますか？

ミヤ：表情を見てないけど、美味しいかどうかと心配してるいつも気にして、それを大事にしてる。美味しくなかったら悲しい。でもアルペルさんは見てるんだよね？面白い。見て相手は何も言わなくても分かるよね。料理は心の鏡というのはこれだよね？それはすごくいいことと思う。

アルペル：料理は心の鏡であるについてどう思いますか？

イワン：今までそれを考えたことはなかった。あまり料理できないからその気持ちをよく分からない。でも、すごく面白い！

アルペル：無言の会話について？

エレナ：料理を出して、それで食べてる人の顔を見てるんですか？こわーい（笑い）。もし私食べに行ったら顔を隠すよ。でも、料理は心の鏡と言うのは面白い。自分の気持ちと相手の気持ちが料理で一緒になる。うらやましい。それは技術的で、一般の人はできないと思う。

### 3. 結論

私はなぜ料理について書きたかったかというと、何よりも一番嬉しい時は美味しいものを食べている時である。料理はただの食べ物ではなく、人間関係についてとても大切なことだと思う。例えば私は家族と一緒にいた頃、みんなで集まり、話をした時は晩御飯を食べた時であった。今でも久しぶりに友達と会う時、必ず行く所はレストランである。料理は人を合わせる力も持っていると感じている。

ディスカッションし、その後“たぶん私は考え過ぎ”だと思ったこともある。料理は、ただの生きるためのものと考えている人が多いと分かってきた。しかし、深く考えるとそれほどシンプルなものではないと思う。ディスカッション相手は最初、料理は一方向のようなものと考えていると気がした。私は言いたかったのは料理を作っている人の気持ちと、食べている人の気持ちと、ミヤさんが言ったとおり、料理で一緒になり、無言の会話ができる。それをお互いの表情を見ると分かる。両方側の気持ちが料理で会う。

ついにみんなは、私と同じように考えていないのを分かってきた。しかし、まだ私には料理は生きるためのものだけでなく、心の鏡である。

#### 4. おわりに

みんなで初めて会った時“趣味は何ですか？”と聞かれ、“料理を作ること”と即ち答えた。その時、料理について“どうやって、何を書けばいいかな”と思った。最初の頃とても難しいと思ったが、あっという間に終わってしまった。

さて、今まで私にいろいろ意見を下さった“むらさき”の皆さん、そして私とディスカッションをして下さったイワンさん、ミヤさん、エレナさん、本当にありがとうございました。とても楽しかった。